

大館市文化財調査報告書 第5集

大館野遺跡発掘調査報告書

2012・3

秋田県大館市教育委員会

大館市文化財調査報告書 第5集

大館野遺跡発掘調査報告書

2012・3

秋田県大館市教育委員会

序

大館野遺跡は、大館市立矢立小学校・同中学校及び矢立保育所の建設事業に伴い、昭和62年～平成元年度に大館市教育委員会が発掘調査を行いました。その結果、縄文時代から中世までの複合遺跡であることが分かりました。特に平安時代では、竪穴住居跡が60軒も見つかっており、市内でも屈指の大集落跡です。また、製鉄炉跡が3基調査され、古代の鉄生産を明らかにする上で貴重な資料となっています。調査時の写真パネル及び出土品は平安時代の大館地方を代表するものとして、大館郷土博物館に展示しております。しかし、発掘調査報告書は未刊となっており、調査や資料全体の詳細については、誠に遺憾ながらこれまで公表されていませんでした。

このたび平成23年度の秋田県緊急雇用創出臨時対策基金事業を活用して、図面と出土品の再整理事業を行い、報告書を刊行するはこびとなりました。本報告書を、文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

刊行にあたり、調査・整理作業に御指導いただきました関係各位に感謝申し上げますとともに、今後とも埋蔵文化財の保護につきまして、御理解賜わりますようお願い申し上げます。

平成24年3月

大館市教育委員会

教育長 高橋善之

例 言

- 1 本書は秋田県大館市白沢に所在する大館野遺跡^{おおだての}の発掘調査報告書である。調査は大館市立矢立小学校・同中学校及び矢立保育所の建設工事に伴い、大館市教育委員会が実施したものである。
- 2 発掘調査は昭和62年度から平成元年度の三ヶ年にわたって実施した。調査体制は第Ⅰ章に記したとおりである。
- 3 本書の作成に係る遺物の整理と図面の作成は平成2年度まで大館市教育委員会社会教育課文化係職員があたった。遺物の再整理及び未了となっていた図面の作成等は平成23年度秋田県緊急雇用創出臨時対策基金事業を活用して、大館市教育委員会大館郷土博物館文化財保護係職員が実施した。
- 4 当遺跡出土須恵器の産地同定については、秋田県埋蔵文化財センターを通じて、三辻利一先生（奈良教育大学・当時）にお願ひし、その分析結果について玉稿をいただいた。分析結果は、本書の「第Ⅴ章 自然科学の分析・調査」に掲載している。また、出土した須恵器は、藤原弘明氏（五所川原教育委員会）に実見していただき、御教示いただいた。
- 5 鉄製品及び鉄関連遺物の整理にあたっては、穴澤義功氏（たたら研究会委員）に御指導いただいた。
- 6 本書の作成は時間の関係上、遺跡・遺物全般についての十分な検討と調整がなされてはならず、全体をとおして一貫した記述になっていない部分もあるが、御寛恕願ひたい。本書は、板橋範芳（元大館郷土博物館長）、嶋影壮憲（大館郷土博物館文化財保護係主任主事）、内藤寿志子（同臨時職員）が執筆し、嶋影が編集した。執筆分担はⅠ 1、Ⅱ 1、Ⅲ（3(2)を除く）、Ⅳ 3(1)、Ⅵ 1(1)が板橋、Ⅰ 2、Ⅱ 2、Ⅲ 3(2)、Ⅳ 2(2)が板橋・嶋影、Ⅳ 3(2)が板橋・嶋影・内藤、Ⅵ 3が内藤、他が嶋影である。
- 7 出土遺物並びに作成した記録類は、大館市教育委員会大館郷土博物館で保管している。
- 8 既製の地形図を使用したものについては原図の出典を記した。原図は国土地理院発行200,000分の1地勢図（平成17年発行「弘前」）と、秋田県教育委員会発行遺跡地図、大館市発行2,500分の1都市計画図（昭和47・55年空撮・現地調査、昭和62年修正）である。
- 9 発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の諸機関・各氏から御指導・御協力をいただいた。厚く御礼申し上げる（敬称略 五十音順）。

青森市教育委員会、秋田県教育庁文化課（現生涯学習課）、秋田県埋蔵文化財センター、
秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所、横手市教育委員会
穴澤義功、五十嵐一治、伊藤博幸、井上雅孝、宇田川浩一、大野憲司、木村淳一、熊谷太郎、
小林 克、桜田 隆、佐藤嘉広、島田祐悦、信太正樹、鈴木弘太、高橋昭悦、高橋 学、
富樫泰時、藤原弘明、三辻利一、八重樫忠郎

凡 例

- 1 遺構番号は調査現場で付したが、報告書作成にあたって番号を統一するため、基本的に西側（Ⅰ区）から中央部（Ⅱ区）そして東側（Ⅲ区）と新たに番号を付した。そのため、遺構番号が調査年次の順とはなっていない。
- 2 本書遺構図における各基準は、下記のとおりである。なおその都度スケール、方位、凡例等を示す。
 - (1) 略記号・縮尺

竪穴住居跡・竪穴建物跡	S I	1 : 40・1 : 50・1 : 60・1 : 80
掘立柱建物跡	S B	1 : 40・1 : 50・1 : 60・1 : 80
土坑	S K	1 : 20・1 : 30・1 : 40
落とし穴	S K T	1 : 40
井戸	S E	1 : 40
製鉄炉跡・製炭窯跡・その他	S X	1 : 30・1 : 40
溝	S D	1 : 50・1 : 60
 - (2) 図の方位
本書で示す方位はすべて磁北である。
 - (3) 遺構図等の標高
遺構平面図・断面図等の標高値は海拔高度による。単位はメートル。
- 3 遺物の記号及び実測図・写真図版の縮尺は、下記を原則としたが、すべて統一されていない。
 - (1) 礫の略号はSとした。
 - (2) 縮尺

土器・石器・石製品・鉄関連遺物実測図	1 : 3（一部1 : 4）
鉄製品実測図	1 : 2（一部1 : 3）
剥片石器・石製品・鉄製品写真	約1 : 2
土器破片・礫石器・鉄関連遺物写真	約1 : 3（一部約1 : 2）
完形・復元土器写真	任意
- 4 一覧表における遺構の規模のうち、確認面の項については長径×短径で表した。
- 5 本書における遺物の分類基準は、大館市文化財調査報告書第3・4集に準拠する。
- 6 挿図収録の土器実測図は挿図毎に通し番号を付した。また土器実測図の断面は須恵器（黒ぬり）、縄文土器・弥生土器・土師器・陶磁器（白抜き）によって区別した。
- 7 建物跡の方位測定は、東西棟建物は梁（短軸）の方位、南北棟建物は桁（長辺）の方位を基準とした。溝の方位測定は東西溝に限り、溝と直交する方位を規準とした。
- 8 鉄関連遺物の用語等は『堂の下遺跡Ⅱ 中世篇』（秋田県埋蔵文化財センター編2004）に拠った。
- 9 製鉄関連遺物実測図にはスクリーントーンを用いた。スクリーントーンの種別は下記のとおりである。

錆	■	溶解	■	被熱	■	摩耗部	///	木炭付着面	■
土砂・礫	□	粘土質	■	作業面	■	流出方向	→		

土色大別、土色・土質細別表

	土 色 大 別	土 色 細 別	土 質 細 別
I	耕作土	A 赤色系	a 粘質
I'	漸移層	B 明色系	b 砂質
II	黒色土系	C 黄色系	c サラサラしている
III	褐色土系	D 暗色系	d ボサボサしている
IV	黄色土系	E 黒色系	e 黄色ロームブロック (3cm以上) 混入
IV'	地山ローム	F 灰色系	f 黄色ロームブロック (1~3cm) 混入
V	白色土系	G 白色系	g 黄色ローム粒 (1cm以下) 混入
VI	灰色土系	H 青灰色系	h 褐色ロームブロック混入
VII	砂	J 暗灰色系	i 黄白色ロームブロック混入
VIII	粘土	K 褐色系	j 軽石粒 (5mm以下) 混入
IX	焼土	L 茶色系	k 軽石 (5mm以上) 混入
X	軽石質火山礫 (軽石層)	M 黄白色系	l 砂礫 (5mm以下) 混入
XI	攪乱層	N 橙色	m 火熱を受けている
			n 炭化材混入
			o 炭化物混入
			p 焼土塊・焼土粒混入
			q 礫状土
			r 地山壁崩落土
			s 石
			t 灰
			u つき固めている (三和土)
			v ブロック状

} 地山土

土層図の各土層の明細表

I	耕作土	III E gk	黄色ローム粒・軽石粒混入黒褐色土
I'	漸移層	III E k	軽石粒混入黒褐色土
		III E o	炭化粒混入黒褐色土
II	黒色土	III E op	焼土・炭化粒混入黒褐色土
II a	粘質黒色土	III E p	焼土混入黒褐色土
II b	砂質黒色土	III E C a	粘質の黄黒褐色土
II d	ボサボサの黒色土		
II f	黄色土ロームブロック混入黒色土	III L	茶褐色土
II g	黄色土ロームブロック混入黒色土	III L a	粘質茶褐色土
II h	褐色ロームブロック混入黒色土	III L b	砂質茶褐色土
II no	炭化物・炭化粒混入黒色土	III L op	焼土・炭化粒混入茶褐色土
II Cfg	黄色ロームブロック・黄色ローム粒混入黄黒色土		
		IV b	砂質黄色土
III B e	黄色ロームブロック混入明褐色土	IV p	焼土混入黄色土
III B g	黄色ローム粒 混入明褐色土		
III B k	軽石粒混入明褐色土	IV f	黄色ロームブロック
III B op	焼土粒・炭化粒混入明褐色土	IV gk	軽石粒混入の黄色土粒層
		IV eu	黄色ロームブロックのつき固め
III C	黄褐色土		
III C d	ボサボサした黄褐色土	VI F op	焼土・炭化粒混入の灰白色土
III C k	黄色ローム粒混入黄褐色土		
III C op	焼土粒・炭化粒混入黄褐色土	VIII M	黄白色粘土
III C D	暗黄褐色土	VIII u	粘土三和土
		VIII m	火熱を受けた粘土
III D	暗褐色土	VIII B K p	焼土粒混入明褐色粘土
III D a	粘質暗褐色土		
III D d	ボサボサの暗褐色土	IX	焼土
III D e	黄色ロームブロック混入暗褐色土	IX N p	焼土粒混入橙色焼土
III D g	黄色ローム粒混入暗褐色土	IX o	炭化粒混入焼土
III D k	軽石粒混入暗褐色土		
III D gk	黄色ローム粒・軽石粒混入暗褐色土	X	軽石質火山礫層（十和田 a 火山灰）
III D g VIII C G	白色黄色粘土塊と黄色ローム粒を多量に含む暗褐色土		
III D o	炭化粒混入暗褐色土	t	灰
III D r	地山壁崩落土混入暗褐色土		
III E	黒褐色土		
III E a	粘質黒褐色土	XI	攪乱層
III E e	黄色ロームブロック混入黒褐色土		
III E e k	黄色ロームブロック・軽石粒混入黒褐色土	Mav	ブロック状粘質黄白色土層
III E g	黄色ローム粒混入黒褐色土		

目 次

序	i
例言	ii
凡例	iii
目次	vi
I はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査と整理	1
(1)発掘作業	1
(2)整理作業と報告書の作成	2
II 遺跡の位置と環境	3
1. 位置と地理的環境	3
2. 大館地方の古代・中世遺跡	7
III 調査の概要	10
1. 範囲確認調査	10
2. 調査の方法	10
3. 調査の経過	11
(1)昭和62年度	11
(2)昭和63年度	11
(3)平成元年度	12
IV 調査の記録	13
1. 層序	13
2. 概観	13
(1)縄文・弥生時代	13
(2)平安時代	13
(3)中世	14
3. 検出遺構と出土遺物	22
(1)縄文・弥生時代	22
(2)平安時代	25
(3)中世以降	183
V 自然科学の分析・調査	197
VI 総括	199
1. 遺構の構成と変遷	199
(1)平安時代	199
(2)中世以降	205
2. 大館野遺跡における平安時代の土器	205
(1)I期からIII期の区分と暦年代	208
(2)諸段階の設定とその様相	208
(3)若干の問題点	209
3. 大館野遺跡出土の鉄関連遺物について	210
(1)遺構出土鉄関連遺物の重量	210
(2)製鉄関連遺物について	210
(3)鍛冶関連遺構・遺物について	211
4. 結 語	219
引用参考文献	220
写真図版	

挿 図 目 次

第 1 図 大館野遺跡の位置 …………… 4	第 40 図 S X 1 出土遺物 …………… 62
第 2 図 大館野遺跡周辺の地形図 …………… 5	第 41 図 S X 3 …………… 63
第 3 図 調査区と周辺の地形 …………… 6	第 42 図 S I 13・S B 6・S D 13・13´ …………… 64
第 4 図 大館盆地の歴史遺跡分布 …………… 9	第 43 図 S I 14・15・S K 4 …………… 66
第 5 図 確認調査試掘坑配置略図 …………… 10	第 44 図 S I 16 …………… 67
第 6 図 調査区全体図 …………… 15	第 45 図 S I 13~16出土遺物 …………… 68
第 7 図 I 区遺構配置図 …………… 17	第 46 図 S I 17 …………… 69
第 8 図 II 区北東部遺構配置図 …………… 18	第 47 図 S I 17新カマド …………… 70
第 9 図 II 区南西部遺構配置図 …………… 19	第 48 図 S I 17出土土器 …………… 71
第 10 図 III 区北東部遺構配置図 …………… 20	第 49 図 S I 19 …………… 72
第 11 図 III 区南西部遺構配置図 …………… 21	第 50 図 S I 19出土遺物(1) …………… 73
第 12 図 S K T 1・2 …………… 23	第 51 図 S I 19出土遺物(2) …………… 74
第 13 図 S K T 3・S K 9とS K 9出土土器 …… 24	第 52 図 S I 20 …………… 76
第 14 図 縄文・弥生時代の遺物 …………… 26	第 53 図 S I 20カマドとS I 20出土遺物(1) …… 77
第 15 図 S I 1・3・7 …………… 28	第 54 図 S I 20出土遺物(2) …………… 78
第 16 図 S I 1・3 …………… 29	第 55 図 S I 21 …………… 79
第 17 図 S I 2・S B 2 …………… 31	第 56 図 S I 21出土遺物 …………… 80
第 18 図 S I 1・2 出土土器 …………… 32	第 57 図 S I 22と出土遺物 …………… 81
第 19 図 S I 2・3 出土遺物 …………… 33	第 58 図 S I 23と出土土器 …………… 83
第 20 図 S I 4と出土遺物 …………… 35	第 59 図 S I 24 …………… 84
第 21 図 S I 5・8・S K 1~3 …………… 36	第 60 図 S I 24出土遺物 …………… 85
第 22 図 S I 5カマド・6カマドと S I 5・6 出土遺物 …………… 38	第 61 図 S I 25・26 …………… 86
第 23 図 S I 6・S B 4 …………… 39	第 62 図 S I 27・28 …………… 87
第 24 図 S I 7 …………… 41	第 63 図 S I 27・28出土遺物 …………… 88
第 25 図 S I 7 出土遺物 …………… 42	第 64 図 S I 29・30 …………… 90
第 26 図 S I 9 …………… 43	第 65 図 S I 30カマド …………… 91
第 27 図 S I 9カマドとS I 9出土土器 …………… 44	第 66 図 S I 29・30出土遺物(1) …………… 92
第 28 図 S I 10カマド …………… 46	第 67 図 S I 29・30出土遺物(2) …………… 93
第 29 図 S I 10・S B 5 …………… 47	第 68 図 S I 31と出土土器 …………… 94
第 30 図 S I 10出土土器 …………… 49	第 69 図 S I 32 …………… 95
第 31 図 S I 10・S B 5 出土遺物 …………… 50	第 70 図 S I 32出土遺物 …………… 96
第 32 図 S I 11 …………… 51	第 71 図 S I 33~37 …………… 99
第 33 図 S I 11カマドとS I 11出土遺物 …………… 52	第 72 図 S I 33出土土器(1) …………… 101
第 34 図 S I 11出土土器 …………… 54	第 73 図 S I 33出土土器(2) …………… 102
第 35 図 S I 12 …………… 55	第 74 図 S I 33出土土器(3) …………… 103
第 36 図 S I 12出土土器 …………… 56	第 75 図 S I 33出土遺物・34出土土器(1) …… 104
第 37 図 S B 3・S D 4 …………… 57	第 76 図 S I 34出土土器(2) …………… 105
第 38 図 S X 2と出土遺物 …………… 59	第 77 図 S I 34出土遺物 …………… 106
第 39 図 S X 1 出土土器 …………… 61	第 78 図 S I 35出土遺物 …………… 107
	第 79 図 S I 38 …………… 108

第80図	S I 38カマドとS I 38出土遺物(1)	109	第122図	S I 59	164
第81図	S I 38出土遺物(2)	110	第123図	S I 60	165
第82図	S I 41~43	112	第124図	S I 61	167
第83図	S I 41・43・44出土遺物	113	第125図	S I 59・61出土遺物	168
第84図	S I 45	114	第126図	S I 62・S B 18	169
第85図	S I 45カマドとS I 45出土土器(1)	115	第127図	S I 63・S E 2と出土土器	170
第86図	S I 45出土土器(2)	116	第128図	S I 64	172
第87図	S I 45出土遺物	117	第129図	S I 64出土遺物	173
第88図	S I 46	118	第130図	S I 65と出土土器	175
第89図	S I 47	120	第131図	S I 66と出土土器	177
第90図	S I 47出土遺物(1)	121	第132図	S K 10・S X 15出土遺物	178
第91図	S I 47出土遺物(2)	122	第133図	確認調査出土土器	179
第92図	S I 48	123	第134図	確認調査・I・II区包含層出土土器	180
第93図	S I 49・50	124	第135図	II・III区包含層ほか出土土器	181
第94図	S I 49カマドとS I 49出土土器	125	第136図	包含層出土鉄製品	182
第95図	S I 49出土遺物	127	第137図	S I 39・40	184
第96図	S I 50出土土器	128	第138図	S I 58炭化材・炭化物検出状況	186
第97図	S I 51と出土土器	129	第139図	S I 58	187
第98図	S I 52・53	130	第140図	S I 58出土遺物	189
第99図	S I 52・53出土土器	131	第141図	S I 67	190
第100図	S B 7・8	133	第142図	S B 17・S B 群と出土土器	191
第101図	S B 9	134	第143図	S X 9と出土遺物	194
第102図	S B 10・14・15・21・22・ S D 9・10・14	135	第144図	S E 1と出土遺物	196
第103図	S B 13	137	第145図	大館野遺跡竪穴住居跡 出土須恵器のR b - S r分布図	198
第104図	S B 16・S D 8・12	139	第146図	大館野遺跡竪穴住居跡 出土須恵器のK量	198
第105図	S K 5・6	141	第147図	大館野遺跡竪穴住居跡 出土須恵器のC a量	198
第106図	II区S K・S D出土土器	142	第148図	大館野遺跡竪穴住居跡 出土須恵器のF e量	198
第107図	S X 4と出土遺物(1)	144	第149図	建物群の遺構配置	200
第108図	S X 4出土遺物(2)	145	第150図	大館野遺跡検出遺構相関図	204
第109図	S X 5と出土遺物	146	第151図	大館野遺跡における平安時代の土器	206
第110図	S X 6と出土遺物	148	第152図	柏田遺跡出土土器	209
第111図	S X 7と出土遺物	149	第153図	大館野遺跡鉄生産対応図	212
第112図	S X 8と出土遺物	150	第154図	鉄関連遺物構成図(1)	213
第113図	S X 10と出土遺物	151	第155図	鉄関連遺物構成図(2)	214
第114図	S X 12と出土遺物	152	第156図	鉄関連遺物構成図(3)	215
第115図	S X 14と出土遺物	153	第157図	鉄関連遺物構成図(4)	216
第116図	III区土層柱状図	155	第158図	鉄関連遺物構成図(5)	217
第117図	S I 54と出土土器	156	第159図	鉄関連遺物構成図(6)	218
第118図	S I 55・56・S B 19	157	第160図	大館野遺跡の動態	219
第119図	S I 55・56出土土器	160			
第120図	S I 57・S B 20・S D 20	161			
第121図	S I 57カマドとS I 57出土遺物	163			

表 目 次

第 1 表 大館野遺跡出土須恵器分析試料 …… 198	第 3 表 主要遺構一覧 …… 222
第 2 表 大館野遺跡検出建物跡の方向 …… 201	第 4 表 遺物観察表 …… 225

図 版 目 次

1 遺跡近景 昭和62年度調査 (I区)	31 II区の調査 (15)
2 昭和63年度調査 (II区) 製鉄炉 (S X 5)	32 II区の調査 (16)
3 I区南西部 I区北部 I区南東部	33 II区の調査 (17)
4 II区東半部調査前 II区東半部作業状況	34 II区の調査 (18)
5 II区西半部	35 II区の調査 (19)
6 III区東部 III区西部	36 II区の調査 (20)
7 縄文・弥生時代の遺構	37 II区の調査 (21)
8 I区の調査 (1)	38 II区の調査 (22)
9 I区の調査 (2)	39 II区の調査 (23)
10 I区の調査 (3)	40 II区の調査 (24)
11 I区の調査 (4)	41 II区の調査 (25)
12 I区の調査 (5)	42 III区の調査 (1)
13 I区の調査 (6)	43 III区の調査 (2)
14 I区の調査 (7)	44 III区の調査 (3)
15 I区の調査 (8)	45 III区の調査 (4)
16 I区の調査 (9)	46 III区の調査 (5)
17 II区の調査 (1)	47 III区の調査 (6)
18 II区の調査 (2)	48 III区の調査 (7)
19 II区の調査 (3)	49 III区の調査 (8)
20 II区の調査 (4)	50 中世の遺構 (1)
21 II区の調査 (5)	51 中世の遺構 (2)
22 II区の調査 (6)	52 井戸
23 II区の調査 (7)	53 縄文・弥生時代の遺物
24 II区の調査 (8)	54 S I 1 出土遺物
25 II区の調査 (9)	55 S I 2・3 出土遺物
26 II区の調査 (10)	56 S I 4～9 出土遺物
27 II区の調査 (11)	57 S I 10 出土遺物
28 II区の調査 (12)	58 S I 11 出土遺物
29 II区の調査 (13)	59 S I 12・S X 2 出土遺物
30 II区の調査 (14)	60 S X 1 出土遺物 (1)

- 61 S X 1 ・ S I 14～17出土遺物
- 62 S I 19出土遺物 (1)
- 63 S I 19出土遺物 (2)
- 64 S I 19・20出土遺物
- 65 S I 20～22出土遺物
- 66 S I 23～25・26出土遺物
- 67 S I 27・28出土遺物
- 68 S I 29・30出土遺物
- 69 S I 29・30～32出土遺物
- 70 S I 33出土遺物 (1)
- 71 S I 33出土遺物 (2)
- 72 S I 33出土遺物 (3)
- 73 S I 33・34出土遺物
- 74 S I 34出土遺物 (2)
- 75 S I 34出土遺物 (3)
- 76 S I 35出土遺物
- 77 S I 35・38出土遺物
- 78 S I 41・45出土遺物
- 79 S I 45出土遺物 (2)
- 80 S I 45・47出土遺物
- 81 S I 47・49出土遺物
- 82 S I 49～51出土遺物
- 83 S I 52・53・S K 4・5 出土遺物
- 84 S K 6・S D 10・12・14 S X 4 出土遺物
- 85 S X 4 出土遺物 (2)
- 86 S X 5・6 出土遺物
- 87 S X 7・8・10出土遺物
- 88 S X 12・14出土遺物
- 89 S I 53～55出土遺物
- 90 S I 56・57・59・61出土遺物
- 91 S I 61・63～65出土遺物
- 92 S I 66・S X 15出土遺物
- 93 確認調査の遺物
- 94 包含層出土遺物
- 95 S I 58出土遺物
- 96 S B 17・S X 9・S E 1・2 出土遺物

I はじめに

1. 調査に至る経緯

昭和61年、大館市教育委員会は、老朽化が著しいため危険校舎、危険屋内運動場の指定を受けていた大館市立矢立小学校、同矢立中学校を、昭和62・63年の2ヶ年にわたって、校舎位置を変えて全面新改築を実施することとした。また、小・中学校新改築に伴い、中学校の北側にある矢立保育所の移転新改築も実施することとなった。

矢立小・中学校の位置する大館市白沢字大台地区一帯は、登録遺跡「大館野遺跡」(秋田県登録番号987・988・1002(当時))に隣接し、校地周辺の畑には土師器片、須恵器片、鉄滓などが散在していた。このため大館市教育委員会社会教育課(当時。以下、社会教育課という)は、改築担当課である大館市教育委員会総務課(当時。以下、教委総務課という)と協議し、昭和62年4月13日～同年4月29日までの12日間にわたって、改築予定地内で遺跡範囲の確認調査を実施することとした。

範囲確認調査の結果、新改築予定地は全域が古代集落遺跡であることを確認、社会教育課は教委総務課に対し、事業実施前に発掘調査が必要であることを通告した。

これによって、教委総務課と社会教育課は、新改築工事工程と発掘調査工程の調整をとるべく、数次にわたって協議、検討を重ねた。発掘調査は次項で述べる日程で実施することを最終的に確認した。

2. 調査と整理

(1) 発掘作業

遺跡名称	大館野遺跡		
調査地	大館市白沢字白沢1149ほか(小字名大台)		
調査期間	予備調査	昭和62年(1987)	4月13日～同年4月29日
	第1次調査	昭和62年(1987)	6月29日～同年10月31日
	第2次調査	昭和63年(1988)	5月9日～同年9月30日
	第3次調査	平成元年(1989)	4月10日～同年7月8日
調査面積	総面積	7,790㎡	
	第1次調査	2,913㎡(保育所 1,188㎡中学校体育館 1,725㎡)	
	第2次調査	3,212㎡(中学校校舎 1,403㎡小学校体育館 1,809㎡)	
	第3次調査	1,665㎡(小学校校舎)	
調査主体者	大館市教育委員会 教育長 浜田 章		
調査担当者	大館市教育委員会社会教育課文化係 板橋範芳		
調査事務局	大館市教育委員会社会教育課文化係		
調査協力	大館市教育委員会総務課 大館市土木課		
調査補助員	荒谷由季子、工藤 誠、関 公彦、畠山義伴、奈良和人、兜森 大、安部由美子、三沢正敏、明石 理、太田智章、岩沢トシ子、富樫照幸		
調査作業員	阿部清治、阿部 勉、福士トク、福士キクエ、小林トモ、小林秋江、小林アイ子、		

福士りつ、佐藤ノブ、福士房子、阿部トミエ、阿部キミエ、福士栄子、山下そめ子、
貝森チヤ（以上、大館市松原町内）

後藤ハツエ、笹島ウメ、成田キサ、阿部フミ、小林サヨ、佐々木ミチエ、成田良子、
佐々木キミ、佐々木キエ（以上、大館市白沢町内）

佐藤ヒデ、阿部ひろ子、佐々木ハツヨ、佐々木アヤ子、佐々木初栄、成田イサヲ（以上、
大館市粕田町内）

鳴海ヤエ子（調査事務所事務、大館市内）

(2) 整理作業と報告書の作成

昭和62年度から平成元年度までは、それぞれの年度毎の出土遺物の洗浄・注記・接合・復元と図面の整理を行い、遺物の実測を含めた本格的な作業は、ほとんど平成元年度と同2年度に実施した。平成2年度までの段階で遺構のトレースまでは完了していたが、遺物の実測・トレース及び報告書の原稿については半分弱が未了となっており、報告書も刊行されないままとなっていた。

平成22・23年度に秋田県の緊急雇用創出臨時対策基金を活用して、大館市内の埋蔵文化財発掘調査による図面及び出土遺物の再整理事業を実施する計画を立案した。この事業ではおもに未報告となっている大館野遺跡と扇田道下遺跡の再整理を行うことを目的とした。しかし、平成23年度の6月から9月には担当職員が川口十三森遺跡等の現場作業のため不在となり、さらに調査が11月まで延長となったため、10月に実施するはずであった試掘確認調査が11月末まで続くこととなった。担当職員が本格的に着手したのは12月中旬であり、それから2月までの短い期間内に、未了となっていた図面類の作成と原稿執筆、写真撮影などの多くの作業を消化せざるをえなかった。校正の時間も限られていたために、誤植も多いかと思われる。本書は、板橋範芳が執筆していたものに、嶋影壮憲、内藤寿志子が補筆した。編集は板橋の指導のもと嶋影が行った。

なお、11月12日に五所川原市教育委員会 藤原弘明氏に須恵器の鑑定、12月3日及び1月7～9日に穴澤義功氏に鉄製品及び鉄関連遺物の鑑定・分類をしていただいた。

整理作業体制（平成23年度）

作業期間 平成23年6月23日～平成24年3月31日

事業主体者 大館市教育委員会

整理体制 大館郷土博物館 館長 松田 誠 行
文化財保護係 係長 岸 匡 也
主査 鳥 潟 幸 男（庶務担当）
主任 滝 内 亨
主任主事 嶋 影 壮 憲（整理担当）

整理作業員 田村恭子（8月まで）
相馬佳津子、田中節子（9月まで）
木村聡子（11月まで）
奈良久美子（9月より）
五十嵐香織、内藤寿志子（10月より）
小林千紘（12月より）

II 遺跡の位置と環境

1. 位置と地理的環境（第1～3図）

大館市は秋田県の北東部に位置し、東縁は鹿角郡小坂町と鹿角市、西縁は山本郡藤里町と北秋田市、南縁は北秋田市に接し、北縁は青森県との県境となっている。大館市域の極東は東経140度44分52秒、極西は東経140度20分10秒、極南は北緯40度02分44秒、極北は北緯40度29分03秒である。

地形的にみると、市域は奥羽脊梁山脈の西縁に形成された、断層運動による陥没で生じた大館盆地と、それをとりまく200～1,000m級の山地からなる。山地の最高峰は市域北西部にそびえる田代岳（標高1177.8m）で、田代岳の西に雷岳（1128.0m）、烏帽子岳（1133.0m）、茶臼岳（1085.9m）が連なり、青森県境には西から尻高山（976.9m）、堂九郎坊森（857.0m）、長慶森（942.8m）、三ツ森（949.4m）、孫左衛門山（890.7m）、大日影山（820.0m）、甚吉森（800.3m）などの山々が連なって、これらは白神山地の東端を形成している。

西縁には200～800m級の山々が南北に連なり、南縁には竜ヶ森（1049.8m）を最高峰に300～800m級の山々が東西に連なり、東縁には早稲山（811.2m）を最高峰に300～600m級の山々が南北に連なり市境となっている。

大館盆地中央を、東から西へ米代川が流れ市域を南北に二分している。市域北部には西から早口川、岩瀬川、山田川、花岡川、粕田川、下内川、長木川の諸川が青森県境の山々に源を発し、南流して米代川に合流する。市域南部には西から引欠川、犀川、別所川が市域南縁の山々に源を発し、北流して米代川に合流する。これら河川はその流域で幾多の沢川を集めている。また、流域には河岸段丘が発達し、縄文時代以降、生活の拠点である集落が営まれている。

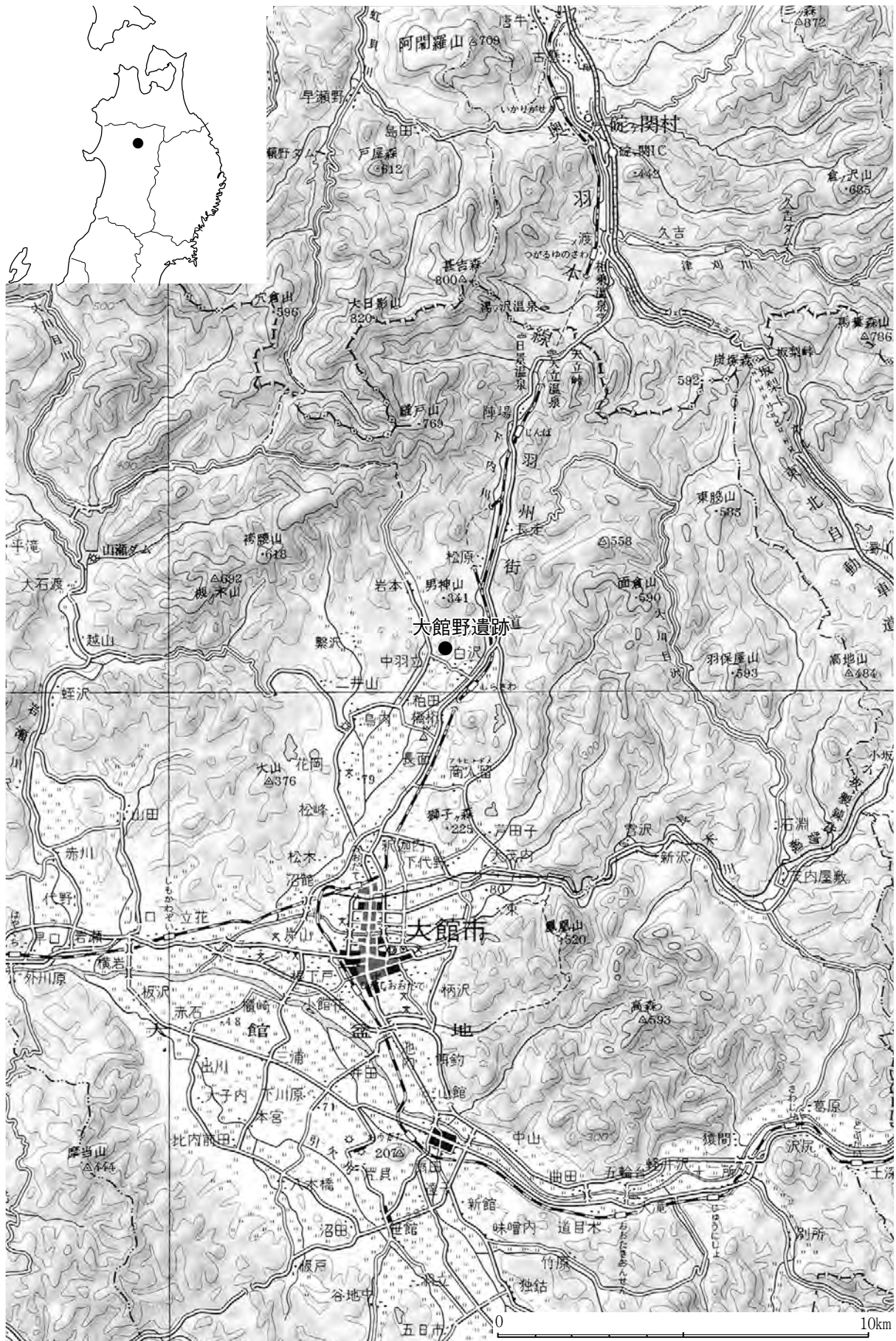
大館野遺跡は、大館市白沢地内の字大石・字上ハ野・字大館野・字塚ノ台に所在し、縄文時代前期から中世までの集落跡が、断絶期は認められるものの、ほぼ継続して営まれた遺跡である。今次調査の地点は大館市白沢字白沢1149地内（小字大台）にあって、東経140度35分26秒、北緯40度20分27秒にあたる。

遺跡の東側を南流する下内川は、遺跡の北方約8.5km、大日影山（標高820m）南麓と縫戸山（標高769m）北麓間に刻み込んだ下内沢に源を発し、約4km東流して南に直角に折れ、そこから一気に70mの標高差を8km南流し、遺跡の東方で大館盆地沖積地へ貫入する。また、遺跡の西方を南流する粕田川は5.5km北方の縫戸山南麓に源を発し、これまた一気に標高差100mを南流し、遺跡西方の中羽立集落西方で大館盆地沖積地に貫入する。

大館野台地は、北東方の九僧堂山（くそどうやま、標高240m）と、北西方の山（名称なし、標高154.8m）の南側に、下内川、粕田川によって形成された段丘台地で、大館盆地北端に突出した東西300～500m、南北1,300～1,500mの広大な台地である。台地基部の九僧堂山南麓で標高118.5m、遺跡付近で標高105m、盆地沖積地を望む台地南端部で標高101mを測る。九僧堂山の北方に円錐形の女神山（標高282m）、その西方に同じ円錐形の男神山（標高340.7m）が特異な姿でたたずむ。台地東側の低位面（標高96.9m）には白沢集落、西側低位面（標高94.9m）には中羽立集落、南側低位面（標高84.9m）には粕田集落が営まれている。

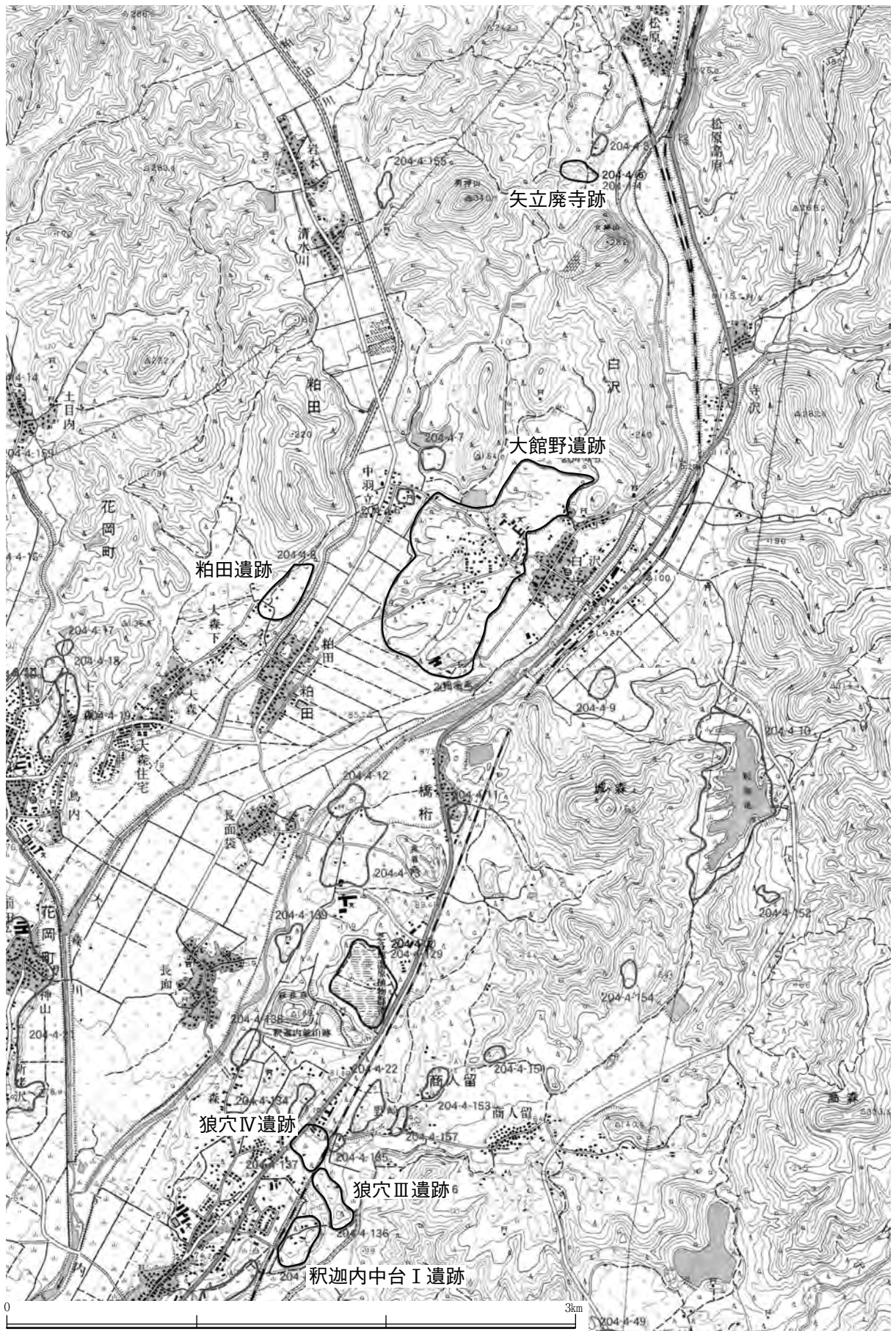
大館野台地には幾多の小沢が刻み込まれている。それらの中で最大の沢が、男神山と女神山を結ぶ鞍部に源を発する細越沢で、沢幅100～180m、南へ1,300mほど流下し、今次調査地点西側で直角に西

II 遺跡の位置と環境



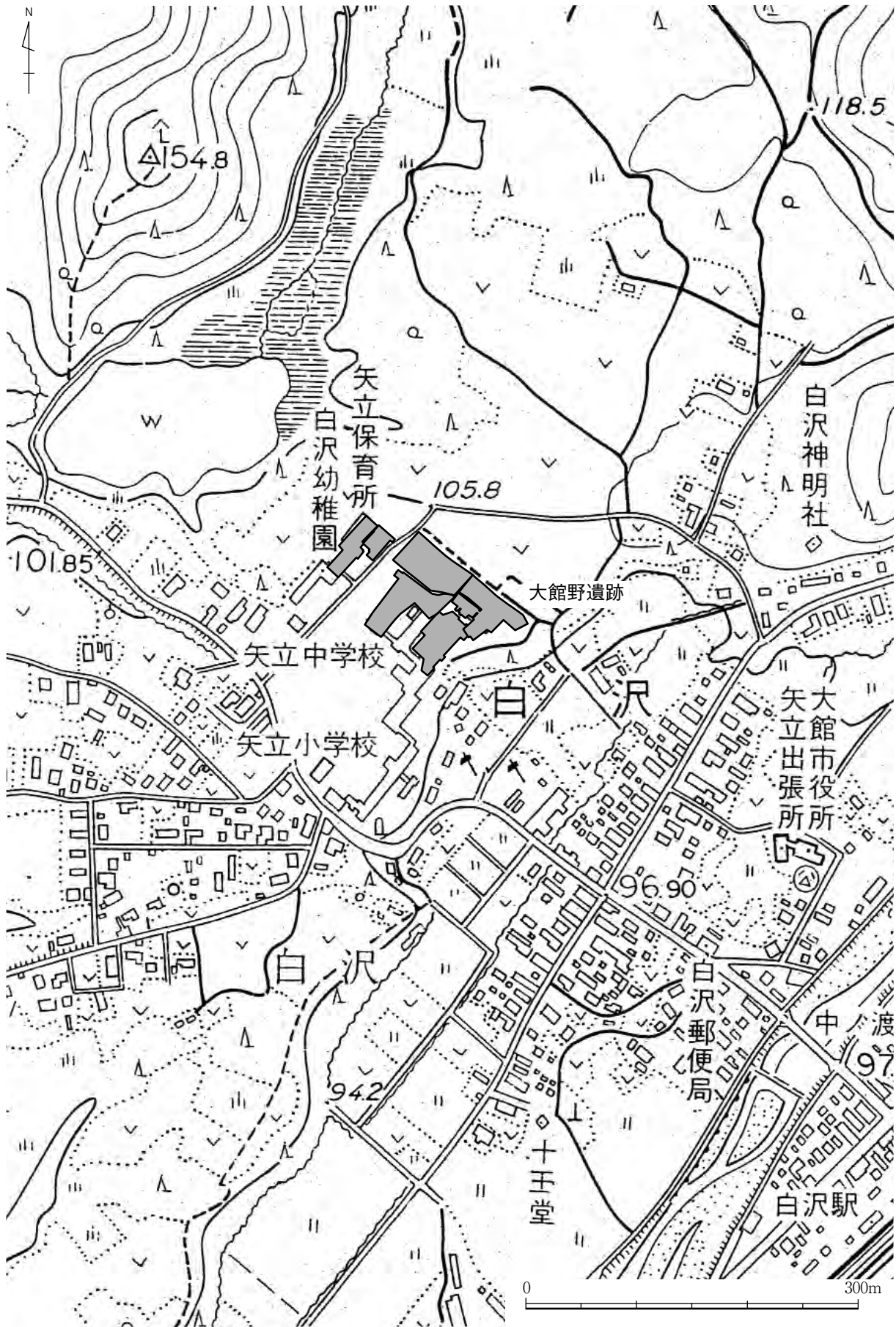
第1図 大館野遺跡の位置

国土地理院1/20000地勢図
弘前 平成6年編集平成16年修正



第2図 大館野遺跡周辺の地形図

秋田県教育委員会発行
秋田県遺跡地図 2006.3



第3図 調査区と周辺の地形

大館市都市計画図 (昭和47・55年空撮・現地調査)
1/2,500 → 1/5,000

に折れ、中羽立地区の低位面に出る。この細越沢沿いに男神山と女神山の鞍部を越えて、北方の松原集落と結ぶ古道が通っている。現在は細越沢が中羽立低位面に出るところに、堤を築いて用水溜池がつくられている。他の小沢は台地の西側と南側にみられ、東側は下内川の側面浸食をうけて急崖となっている。台地南東端には筑紫森（標高130m）がこんもりと孤立している。

2. 大館地方の古代・中世遺跡（第4図）

大館盆地北縁に存在する大館野遺跡は、その北方の山並みを越えて津軽地方と結ぶ、連絡路の玄関口に位置する。大館地方を含む米代川流域は縄文時代以降、文化的には北方との結びつきが強いことが、これまでの調査、研究によって明らかである。

古代史において米代川流域と津軽地方は、中央政権の圏外の地であった。元慶2年（878）の蝦夷十二ヶ村の秋田城襲撃の際には、「火内」（ひない、のちに比内、肥内と表記される）と呼ばれていた米代川中流域の住民が、秋田城以北の住民とともに襲撃に加わり、その北方の津軽地方の去就について中央政府は危惧している。

10世紀に入っても政治的には中央政権外の地であった。やがて在地の有力者が郡司や税長などの地方行政官となって、行政機構の中に深く入り込み、地方における支配権を確立し、11世紀に入るとこれら有力者の中から、安倍、清原、藤原と続く有力一族が、東北地方に政権組織機構を確立するようになる。このころ大館地方も「比内郡」として、その組織機構の中に組み込まれていったと考えられる。

大館野遺跡は、以上述べた古代・中世史上のある時期に存在した集落遺跡である。以下、大館地方における古代・中世遺跡の発掘調査成果を概観してみる。

大館盆地北部の古代・中世遺跡の分布は第4図の如くである。遺跡については秋田県教育委員会が昭和44・45年度に行った遺跡分布調査や大館市教育委員会が平成元年度以来実施している遺跡詳細分布調査をはじめ、近年の県教育委員会や市教育委員会による分布調査や発掘調査などによって明確になってきている。ここで図示したものが大館地方の古代・中世遺跡のすべてではなく、まだ相当数のものが地中深く埋没していると思われる。この中の遺跡のうち、各種開発事業に伴って、発掘調査が実施されたものが多く、大館の古代・中世を考えるうえで貴重な資料を提供するものが多い。

古墳時代の遺跡は遺物包蔵地がある。古墳時代の遺物包蔵地は県内でも数が多くなく、市内では4ヶ所を数えるのみである。古墳時代の大館地方を含む東北地方北部は古墳文化の圏外にあり、北海道の続縄文文化圏に属していた。市内では本遺跡や片山館コ遺跡（大館市史編さん委員会1973a）、川口十三森遺跡で続縄文土器の後北C2・D式土器が出土している。おそらく、大館盆地には古墳時代の遺跡がまだ埋没している可能性が多分にあり、今後の調査・研究に期待したい。

奈良・平安時代の遺跡は種別から集落跡がある。該期の遺跡は縄文時代の遺跡の分布にほぼ一致している。河川や沢（跡）付近の丘陵上に数多く分布している。現集落内の屋敷内及び周辺の畑地から遺物が採集されるケースが多い。

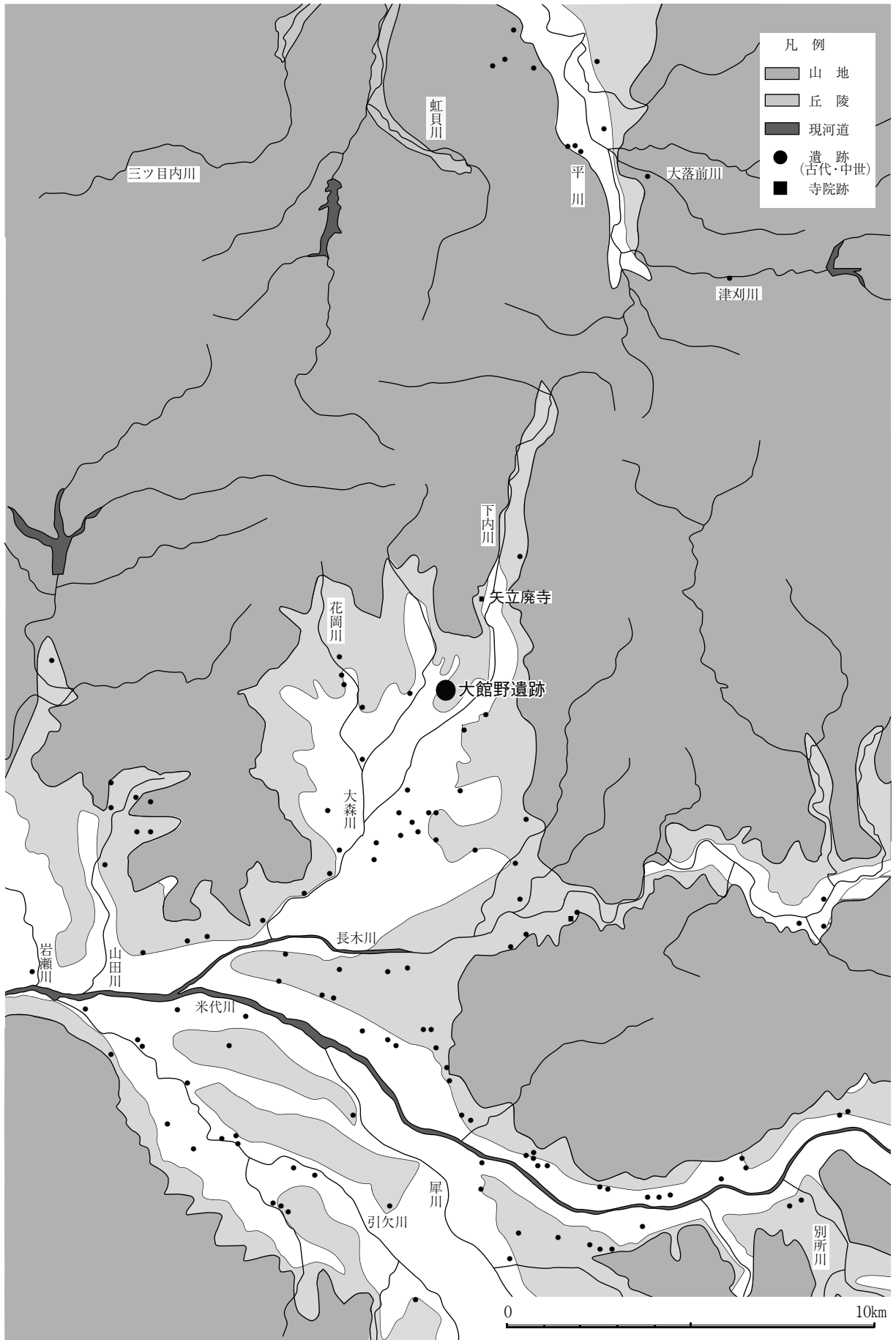
いま、これらの遺跡の分布を見てみると、米代川とその支流である犀川、長木川、下内川などの河川に面した標高60m以上の丘陵や台地上に分布しているのが多い。大館盆地を含む米代川流域は、915年頃に噴火したとされる十和田火山の泥流により、多くの集落が飲み込まれてしまったと考えられる。市内唯一の奈良時代の遺跡として川口十三森遺跡がある。その標高は48mであり、大館市教育委員会が平成23年に実施した発掘調査では一部で厚さ約1.6mもある二次堆積層が検出されている。このことから、ほかにも数多くの遺跡がさらに標高の低い自然堤防上などに埋没しているものと推測される。

平安時代の遺跡は、9世紀後半以降の集落跡が確認されている。特に、上記噴火の後の10世紀中葉以降、遺跡数が飛躍的に増加している。米代川水系では段丘に立地する道目木遺跡（板橋2000）からは、上記の泥流により形成された埋没家屋が発見され、池内遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編1997）・上野遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編1992）などには集落跡があり、上野遺跡からは擦文土器が出土している。このほか、犀川流域では真館跡（比内町教育委員会1973）や大日堂前遺跡（比内町教育委員会1982）など、引欠川流域では細越遺跡（比内町教育委員会1976）や谷地中館跡（大館市史編さん委員会1973b）、長木川流域では、鍛冶屋敷遺跡（大館郷土博物館編2011）や諏訪台遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編1990）などで発掘調査が実施され、市内各地で集落跡の存在が確認されている。

大館野遺跡周辺で発掘された遺跡には、粕田遺跡（大館市教育委員会1974）・狼穴Ⅳ遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編2005）・狼穴Ⅲ遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編2008b）などがある。そこからは、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柵列・土坑・溝・ピットが検出され、当時の集落の様子が確認できる。これらの遺跡は地点により時期差があるものの10世紀の遺跡である。出土遺物では、粕田遺跡で確認された墨書土器や、狼穴Ⅲ遺跡の鉄製鈴が注目される。さらに、本遺跡と同様の製鉄遺跡である釈迦内中台Ⅰ遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編2008a）では、墨書土器や鞘金具が出土していることから、ある程度有力者の存在を推定することができる。これらの集落跡に須恵器を供給したと考えられる窯跡は青森県五所川原市に存在し、前田野目窯で焼いたと見られるものが市内で多数出土している。

中世になると古代に引き続き、丘陵や台地に城館跡をはじめ、寺跡などが分布している。これらはいずれも有機的関連をもった遺跡と考えられる。廃寺跡は矢立廃寺跡（白沢・県史跡）、玉林寺跡（茂内）がある。矢立廃寺は菅江真澄や大館市出身の随筆家二階堂道形など江戸後期の文献に記述があり、秋田市に所在する松原補陀寺は矢立廃寺を遷し建てたものと伝えられ、かつて矢立村松原補陀寺跡とも呼ばれていた。矢立廃寺跡は昭和39年より7回にわたって実施された発掘調査の結果、12世紀後半の遺跡であることが明らかにされている（大館市教育委員会1987ほか）。寺院に関わる遺物は出土していないが、当地方では異質の礎石建物跡5棟をはじめ、掘立柱建物跡2棟やトイレ遺構が検出されている。玉林寺は曹洞宗の寺院で、現在は大館市の中心部にあるが、浅利則頼が市内東部にそびえる鳳凰山の麓に建立したとされる（大館市史編さん委員会1974）。玉林寺跡は一部発掘されており、伽藍・建物は確認されなかったものの、組石土坑が検出され、青磁碗と頭部を欠いた仏像が出土している（大館市教育委員会1986）。報告書によれば、鎌倉時代以降に整備された天下道（鎌倉街道）は、玉林寺跡が所在する茂内地区から獅子ヶ森の東縁を廻り、商人留を通り山間を抜けて白沢に出、やがて矢立の峠を越えて津軽地方へ結んでいたとされる。このルート上に大館野遺跡が所在しているのである。本遺跡の北西部に位置する両堤遺跡の西隣は、旧小字名が「大道東、大道西」と呼ばれていた。このことから古道の存在がうかがえる。また、本遺跡の西部でかつて鉾山のための大規模な土取りがなされたが、その際に大きな空堀の存在が確認されている。中世には本遺跡の一部は中世城館「大館」として機能しており、矢立廃寺へつながるルートの要所であったと考えられる。

このほかの城館も大館盆地より外へ通じる街道の要所に築かれている。比内より津軽地方へ通じる北面を守るために、花岡城（花岡町）、大館城（桂城）などが、南部地方への道沿いには十二所城（十二所）・葛原館（葛原）などが、八幡平への道沿いには独鉆城（比内町）・中野城（比内町）などが、秋田への羽州街道沿いには川口館（川口）・土飛山館（豊町）がある。十二所城を除き、いずれもさほど大きくない平城（館）で、独鉆城や長岡城（比内町）を中心に分布している。いずれにせよ、中世においては、独鉆城や長岡城を中心にして、文化が栄えたことがうかがえる。



第4図 大館盆地の歴史遺跡分布

地形分類典拠：『土地分類図（青森県）』（経済企画庁総合開発局 1970）
『土地分類図（秋田県）』（経済企画庁総合開発局 1972）

Ⅲ 調査の概要

1. 範囲確認調査

昭和62年4月13日～同月29日までの12日間にわたって、矢立小・中学校と保育所の建設予定地で確認調査を実施した。建設予定地内に3×3mの試掘坑を10m間隔に、南北にNo.1～16、東西に6列(a～f)設定した。その結果、3b～d・4a・7a・8a・8b・11d・12d・14b・14c・15c・15e・16cの各試掘坑で堅穴遺構を、1dから柱列遺構を、10dから井戸跡を、7bから製鉄炉跡を確認、平安時代の集落遺構が建設予定地全域に広がっていることを確認した。

なお、グランド北西部にG1・G2・G3・G4・G5・G6のグリッドを設定し確認調査したところ、G4区に堅穴住居跡カマドを確認した。また、11d区を8×8mに拡張し、堅穴住居跡北隅に、完形鉢形土器（鍋）2個体が伏せた状態で出土、ほかに堅穴内から炭化粉、鉄製紡錘車、須恵器破片、炭化材検出。11d区の略実測をした。北西部は、調査日数が足りず確認できなかったが、当該地まで遺跡は広がっていると判断した。

これらのことから、昭和62年に保育所と中学校体育館、昭和63年に中学校校舎と小学校体育館、平成元年に小学校校舎と小・中学校給食棟の建設予定地の発掘調査を実施し、調査後に建設作業に入るとい、3ヶ年にわたる発掘調査と建設工程を組んで実施した。

2. 調査の方法

調査区北側では、遺構はすべて黒褐色土中位面から掘り込まれていることが確認でき、そのため調査はすべて手掘りで行い、耕作土を排土し、黒褐色土層上位面を薄く剥土して、遺構掘り込み面を確認して行った。南側でもできるだけ黒褐色土層で遺構を確認するよう努めた。



第5図 確認調査試掘坑配置略図

調査グリッドの設定は、調査区を北西から南東に貫く任意の線を基準線とし、4 m四方を一単位に東から西へ a～z、北から南へ No.1～No.43の記号・番号を付し、北東隅の組み合わせ番号をグリッド番号とした。座標の原点 (a-0) は調査区の北東方向にあり、任意の基準線は約36度西偏する。

なお、No.1～No.10列が保育所予定地でこれをⅠ区、No.11～No.27列が小学校予定地でこれをⅡ区、No.28～No.43列が中学校予定地でこれをⅢ区とした。

3. 調査の経過

(1) 昭和62年度

6月29日機材運搬、基地設営作業。翌日よりⅠ区（保育所建設予定地）の表土除去作業に入る。7月6日までに暗褐色土層の遺構確認面の精査を終え、竪穴住居跡、溝跡、掘立柱建物跡、土坑などを確認、それぞれの遺構の精査に入る。16日に S X 1 が竪穴住居跡に廃棄された鉄滓・焼石の捨て場であることを確認、18日に S X 2（製鉄炉跡）→S I 3→S I 1の切り合いを確認。土坑の多くは風倒木痕であることが判明。20日からⅠ区の全体を地山面まで掘り下げる。27日、S I 7の側面を合わせる二枚の炭化床板材に、柱を挟み締めるための半円状の孔がそれぞれに穿たれているのを確認（図版10）。28・29・30日にⅠ区各遺構の写真撮影。

8月1日からⅢ区北東部（中学校体育館建設予定地）の表土除去作業に入る。12日に遺構確認面の精査を終え、竪穴住居跡、溝跡、掘立柱建物跡、有溝掘立柱建物跡を確認、各遺構の精査作業に入る。10日にⅠ区実測作業終了。13日～16日まで盆休み。20日に体育館の建設位置が南東にずれることになり、調査区南東部畑地の拡張調査に入る。本日より保育所の建設工事が始まる。25日、南東部拡張区に大型竪穴住居跡（S I 58）を検出、全容確認のため更に南東部へ拡張、12m方形の浅い竪穴住居跡になるもよう。29日に現中学校の音楽室・家庭科実習室の取り壊し作業が終了。翌31日より取り壊し跡地の調査に入るも、校舎基礎コンクリートと玉石のため作業は困難をきわめる。

9月1日、昨夜から未明の台風12号の風雨で調査区全体が荒れ、作業道具収納テントが吹き飛ばされ破壊、19-1区の井戸跡（S E 1：校舎解体工事の防壁設置のため、確認調査で判明していた10d区部分の調査を先行した）の土層観察壁が崩落する。7日より調査区北端から地山面まで掘り下げ作業開始。16日、体育館建設工事関係者との話し合いで、工事着手を10月1日からとする。29日までにⅢ区の写真撮影、実測作業を終えるが、体育館と校舎の取り付け部の位置変更により、10月6日から取り付け部の調査に入ることになり、さらに保育所前にコンクリート基礎の遊具施設を設置することになり、その場所を追加調査することになる。

10月1日～5日まで稲刈りのため作業員休み。6日から取り付け部の調査に入り、掘立柱建物（S B 18）と竪穴住居跡（S I 62）を確認、精査作業に入る。8日Ⅰ区遊戯設置場の調査に入り、13日に竪穴住居跡（S I 10～12）、溝跡（S D 5）、土坑を確認、精査に入る。中学校取り付け部の調査終了。21日より遊戯設置場調査区を地山面まで掘り下げ作業に入る。28日、板橋が中学校生徒にスライドを使って、本年度調査の概要を説明。31日をもって掘り下げ作業を終える。機材整理を行い搬出。遺構実測作業は11月6日に終了。

(2) 昭和63年度

Ⅲ 調査の概要

本年度の対象は前年度に東側半分を着手していたⅢ区（中学校校舎建設予定地）と未着手のⅡ区のうち北東部（小学校体育館建設予定地）、計約3,200㎡である。Ⅲ区は前年度着手していたので、まずこれから作業を開始し、次にⅡ区という順番を予定した。調査は5月9日に本格作業を開始し、9月末日にはすべての作業を終了することとした。延べ日数は120日で、作業員を1日19人、調査補助員4人専従を予定した。

5月9日作業員を投入し、本格的作業を開始した。表土除去作業に入るも、解体した中学校校舎の基礎コンクリートと玉石の除去作業に難渋する。17日から遺構確認面での精査作業に入るも、調査区全体に攪乱が激しく、遺構確認が困難であるため地山面で遺構を確認し、発掘した。6月10日確認した竪穴住居跡6棟、Tピット1基、柱穴の精査作業に入る。18日、竪穴住居跡（S I 63）を切り込み掘られた井戸跡（S E 2）を検出。23日、Ⅱ区（小学校体育館建設予定地）表土除去作業開始。

7月5日、Ⅱ区遺構確認面精査、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡を検出。7日、製鉄炉跡2基確認。8日から各遺構の精査作業に入る。13日、Ⅱ区中央部を南北に走る溝跡（S D 10）の西側に沿って、並行する小ピット列を確認、S D 10に沿う突き込み垣根痕と判断した。15日、Ⅱ区北側の竪穴住居跡（S I 19）は焼失家屋であることが判明。22日から調査区の東側に検出された、もっとも新しい時期の35個ほどの柱穴遺構（S B 17）の半截精査開始。8月1日、Ⅱ区北端から確認面掘り下げ開始。3日、S I 19から木製台付皿破片、櫛などの炭化木製品出土。11日、製鉄炉跡調査のため穴澤義功氏来跡。20日、製鉄炉跡調査のため熊谷太郎氏来跡。22日、4棟の2×2間総柱の、雨落ち溝をもつ掘立柱建物跡（S B 9・14～16）の精査作業に入る。31日、北側竪穴住居跡（S I 19）から須恵器壺出土。東側の柱穴遺構の実測作業終了。9月1日から竪穴住居跡床面の精査作業開始。9日、実測のため残っていた東側の柱穴遺構周囲を掘り下げ。21日、実測のため掘り残していた竪穴住居跡周囲や掘立柱建物跡の確認面下の掘り下げ作業開始。その都度、写真撮影、実測の手直しを実施。30日、事務所・調査機材整理、搬出作業終了。

(3) 平成元年度

平成元年4月10日、Ⅱ区南西部（小学校校舎建設予定地及び小・中学校給食棟）の調査に入る。旧中学校校舎や体育館の、取り壊し後の廃材や基礎コンクリートを重機で除去。11日、西側から粗掘り作業開始。26日、粗掘り作業終了。校舎基礎コンクリートの残滓や玉石の除去に難儀する。遺構確認面の精査作業に入る。

5月1日校舎基礎の下部玉石の除去作業に入る。竪穴住居跡11棟確認。10日、20・21-t・u区の竪穴住居跡（S I 46）は焼失家屋で、炭化板壁材に手斧痕が明瞭に残る。本日より竪穴住居跡の精査作業に入る。17日、17・18・19-1・m区に4～5棟の重複する竪穴住居跡を確認、そのもっとも北西寄りの竪穴住居跡は、確認調査時の11dグリッドで確認された竪穴住居跡に該当。31日、17・18・19-1・m区の重複竪穴住居跡の先後関係が、S I 37→S I 36→S I 33→S I 35→S I 34の順であることが判明、S I 35をS E 1（井戸跡）が切り込んでいることも確認できた。

6月1日、調査区の確認面下を地山面まで掘り下げ作業開始。3日、本日をもって松原、粕田の作業員は終了、5日から始まる県埋蔵文化財センターの片山館コ発掘調査に従事するため。12日より、実測済みの竪穴住居跡から順に、カマド断ち割りと床面の精査作業に入る。

7月1日、本日で白沢地区の作業員は終了。調査補助員により精査作業と実測・写真撮影作業を続行。8日、発掘機材撤収。10日、現場を引き渡して、この元年度の調査で現場作業は完了した。

IV 調査の記録

1. 層序

今回、発掘した範囲は台地上の南北約150m、東西約180mの範囲であり、ほとんど平坦な地形を呈している。標高は現地表面で106m前後である。微視的に見れば、台地上にも若干の起伏が見られる。調査区東側の畑地はやや高い。調査区内の起伏を地山レベルで見ると、Ⅲ区南東辺が最も高く106mをこえる。Ⅱ区の中央部から東辺にかけてはほとんど水平であり、Ⅲ区に入ると傾斜がやや急になり上がる。Ⅲ区では南北約40mで約30cmの比高がある。東西方向ではⅡ区東辺から西辺にかけては東から西へ傾斜する。Ⅲ区中央の東西約90mの間では約40cmの比高差がある。その他の地区でもおおむねこの傾向がある。

土層は単純である。基本的には表土・包含層・漸移層・地山となる。表土は地区で異なるが、厚さは20～30cmである。畑であったところはⅠ区とⅡ区の北東半部に限られ、ほかには旧校舎などが建っていた。旧校舎のところはかなり攪乱を受け、畑のところは耕作されたにもかかわらず、包含層は一部をのぞいてほとんど削平を受けていない。包含層は黒褐色土で、粘性を帯び、10～20cm前後の厚さである。包含層は平安時代の土器を中心に、縄文土器・中世遺物も含む。ただし、中世遺物の出土位置は出土量がごく微量であり不分明である。包含層からの遺物出土量は遺構の分布を明瞭に反映する。したがって、掘立柱建物にともなう遺物は一般にごく少ないが、建物部分の遺物がおおよそ共伴関係を示すと考えられる。なお、平安時代の竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑などの遺構は、確認しえた少数例ではいずれも掘り込み面が包含層の中である。地山は黄褐色粘質土であり、部分的に砂質となる。

2. 概観

遺構のあり方は分布密度・種別・時期など、場所によって多様であるものの、調査区内の全域に見られる。しかし、限られた調査範囲内では、遺跡全体の実態は不分明なところが多い。

遺構の時期は縄文・弥生時代、平安時代、中世の三つに大別される。このうち、当遺跡の主体をなすのは平安時代であり、とくに注目される成果が得られた。以下、時期毎に概観する。

(1) 縄文・弥生時代

縄文・弥生土器の時期であるが、出土量はごく少なく、遺構は土坑が数基検出されているにすぎない。土器の出土はⅡ区・Ⅲ区に若干みられる程度である。土器の出土層位は平安時代と同じ包含層である。

(2) 平安時代

遺構がもっとも多く、分布範囲も広い。時期は平安時代中期頃（10世紀）にあたり、遺構のあり方からすると、さらに前半と後半に区別される。前半期と後半期での遺構のあり方の変化は大きくなく、

遺跡の性格そのものが変容したわけではないものと推測される。また、両者の間には時間差はないと考えられる。

遺構は竪穴住居跡・建物跡64棟、竪穴掘立柱建物跡3棟、掘立柱建物跡14棟、製鉄炉跡3基、製炭窯跡1基、側溝をもつ道路跡1条、溝跡10条、垣根跡1列などである。溝は規模・形状が多様であり、それぞれの性格づけはむずかしいものもあるが、柵の布掘り溝か道路の側溝と考えられる溝が広い範囲に分布する。掘立柱建物跡は最大で桁行き3間であり、ほとんどは2間の建物である。また、倉庫様の束柱をもつ総柱建物は8棟であり、廂をもつ建物は少ない。

各遺構の分布は、Ⅰ区北東側とⅡ区北東側に遺構密度が濃く、そこから距離が離れるほど密度が薄くなっている。しかし、密度が薄い所に大型竪穴住居跡が存在していることも事実である。また、平安時代の「大館野ムラ」の限界が、密度の薄い外周付近であると見ることができないことは、Ⅱ区の西側約50m離れた学校グラウンド脇での確認調査時に、G3区で竪穴住居跡を検出していることからいえる。すなわち「大館野ムラ」は調査区外の四方に広がっていると見るべきであろう。

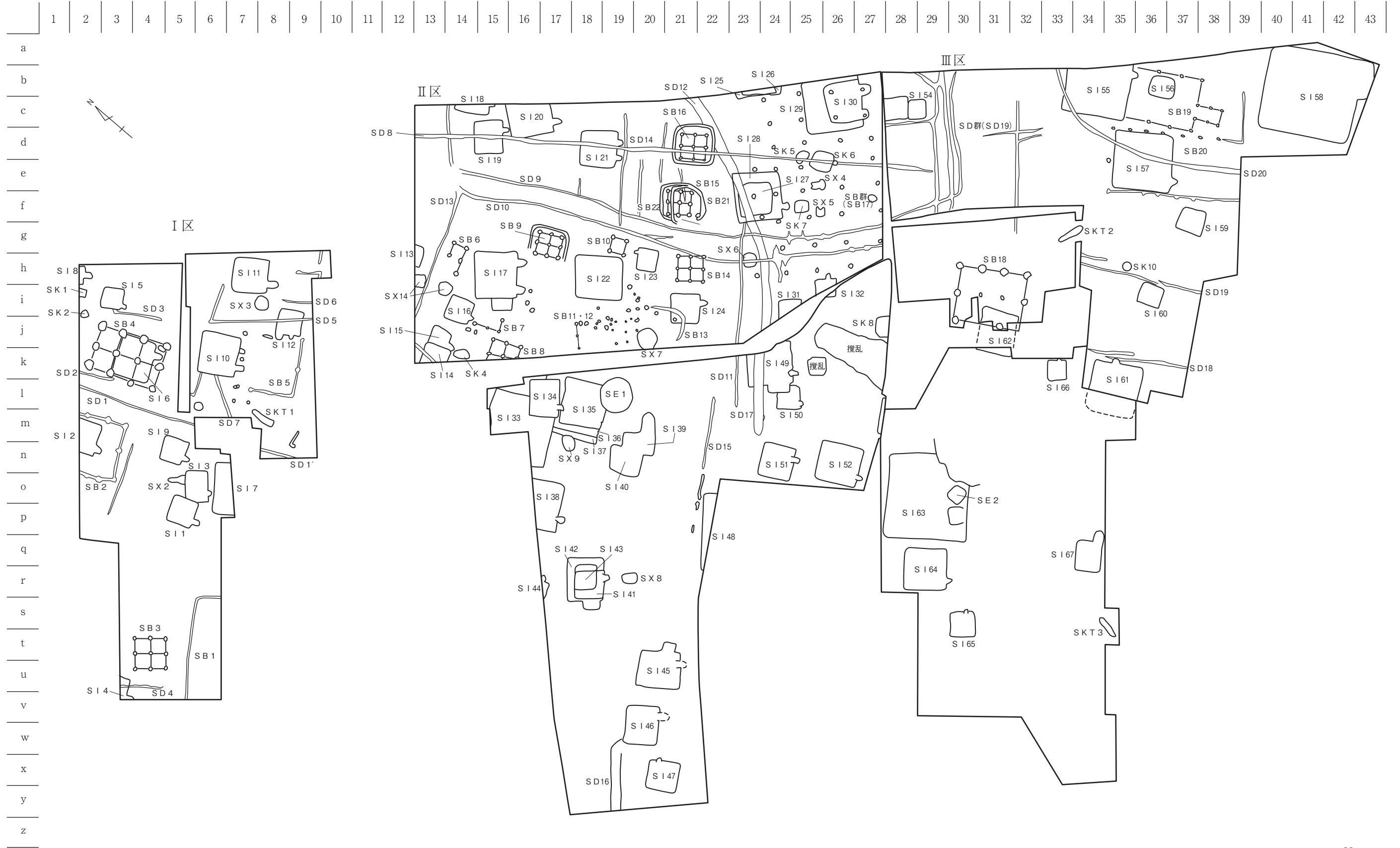
当期の前半は平安時代中期の時期であり、実年代は10世紀前半頃にあたる。Ⅰ区の北半部（Ⅰ建物群）とⅡ区の中央部（Ⅱ建物群）、Ⅲ区の東部（Ⅲ建物群）に、大型の掘立柱建物跡を含んだ建物群が形成される。Ⅲ区建物群は建物総数が少ないが、Ⅱ区建物群とⅠ区建物群はそれぞれ10棟前後の建物で構成される。Ⅰ・Ⅱの建物群は建物の方向のちがいをなどから、さらに時期的に細分される。10世紀前半から中葉には建物群が形成される。このうちⅡ建物群では東西・南北に建物群を画す溝が検出されており、Ⅲ建物群でも東西・南北溝が区画をなしているものと見られる。Ⅰ建物群でも1条の南北溝がひとつの区画をなしており、南北30～40mの範囲に建物が群在する。これらの建物群では建物の配置や方向性も一定の規則性がある程度看取される。

一方、当期の後半にはいると、こうした区画が崩れ、これらの建物群が廃絶したのち、新しく溝（SD11・SD14など）が掘削され、小型の掘立柱建物が多くなる。そして、建物の数も若干減少する。竪穴住居跡4軒はこの時期である。建物の分布はⅠ区西辺からⅢ区まで広がり、建物相互は一定の規則的な配置をとり、前半期と同様の様相を呈する。時期は10世紀後半頃にあたる。

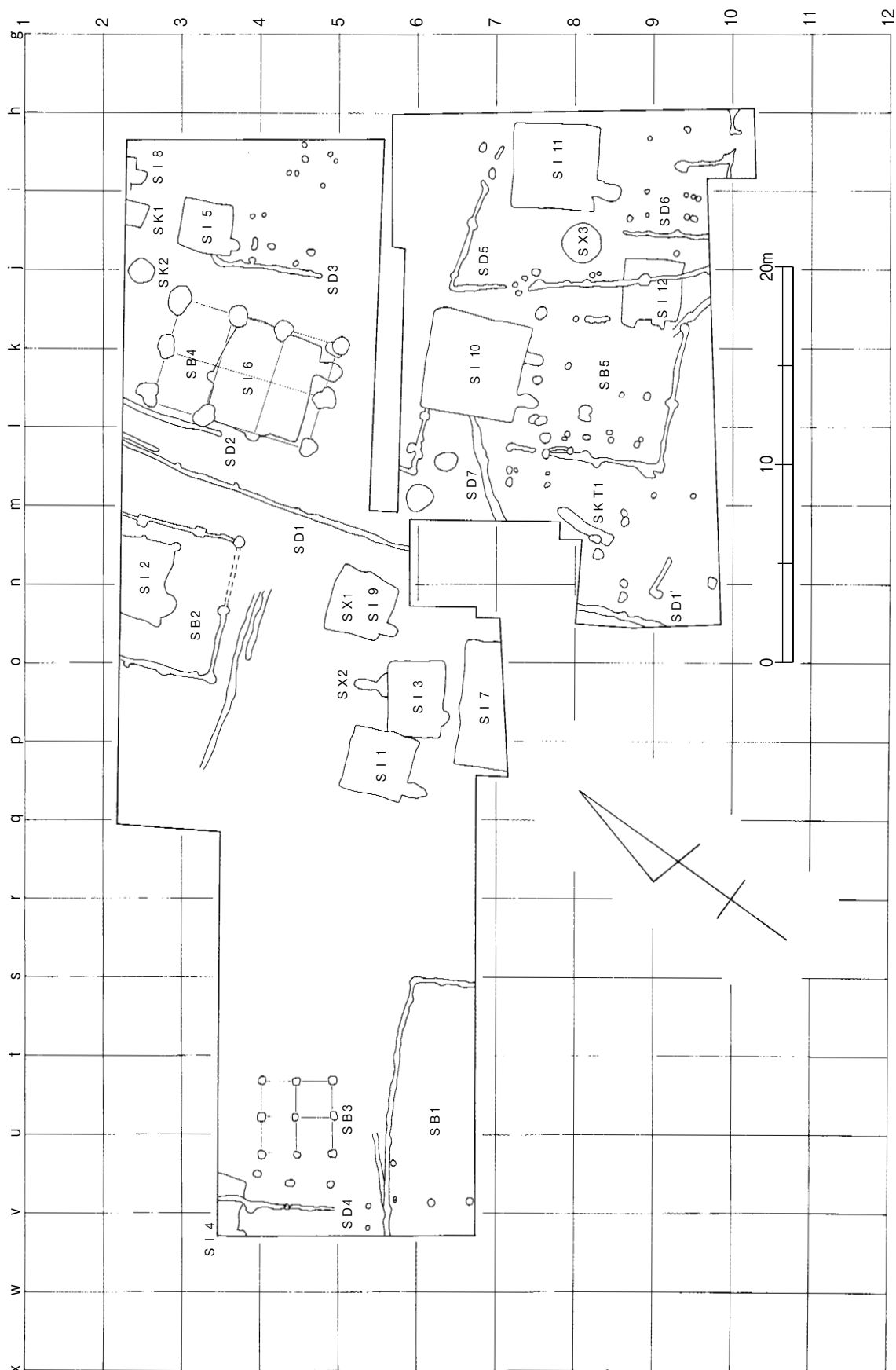
製鉄炉は集落内の需用をまかなうためのもので、他地域への供給を目的としたものではない。しかし、調査区から南へ500mほど離れた畑地に散布する鉄滓塊や、西へ500mほど離れた両堤遺跡一面に散布する鉄滓塊は、他地域への供給を目的とした製鉄遺跡の存在をうかがわせる。

(3) 中世

当期の遺構は竪穴建物跡が主体をなし、掘立柱建物跡が伴うと考えられるが、明確に中世と断定できるものはない。遺構の分布はⅡ区とⅢ区に限られる。建物は全体の分布からすると、ほぼ3地点に分かれる。井戸は2基あり、円形ないし隅丸方形の掘り方で、井戸枠が検出された。遺構の年代はほとんどが鎌倉時代から室町時代に至るものと考えられる。



第6図 調査区全体図



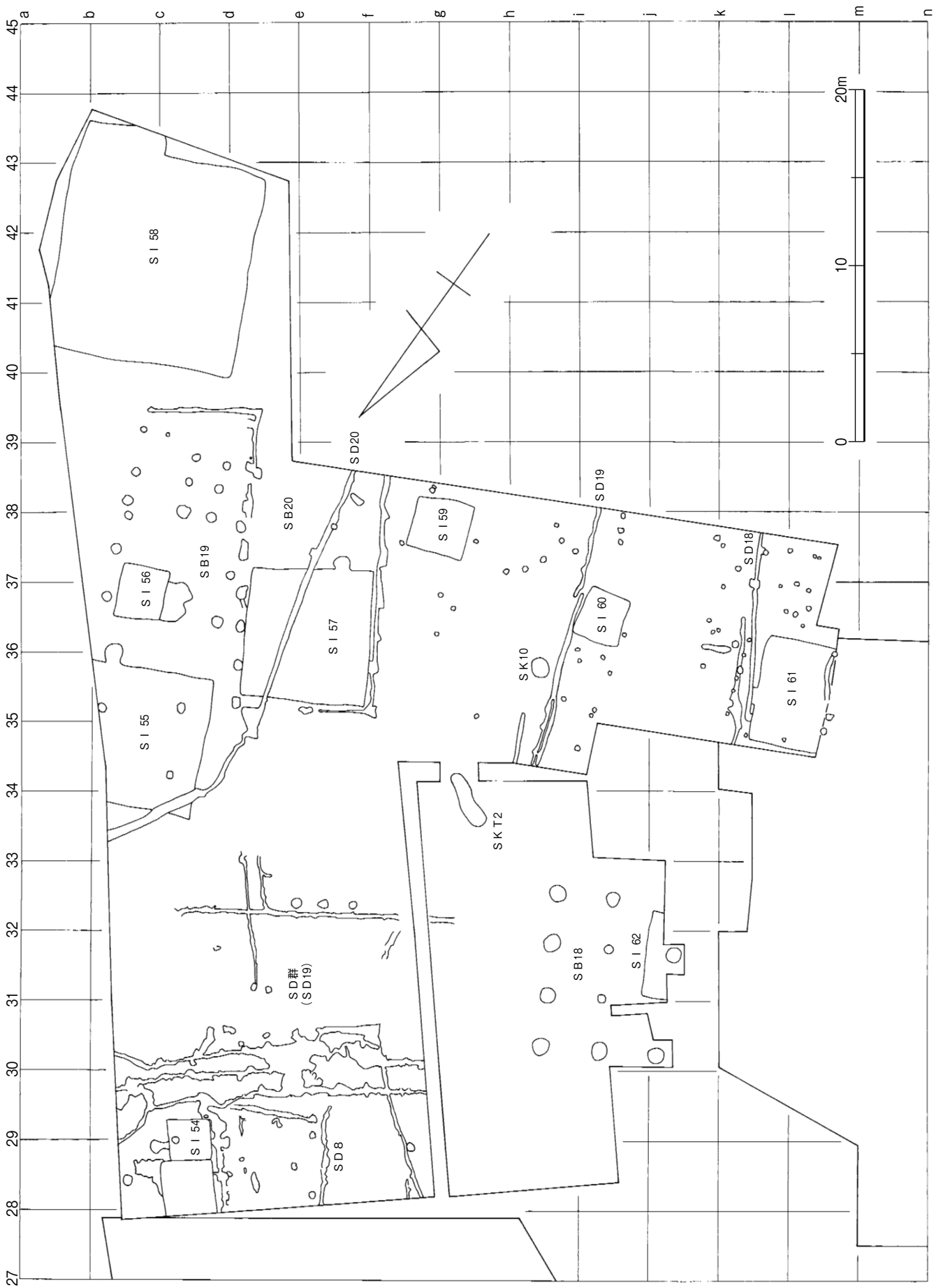
第7図 I区遺構配置図



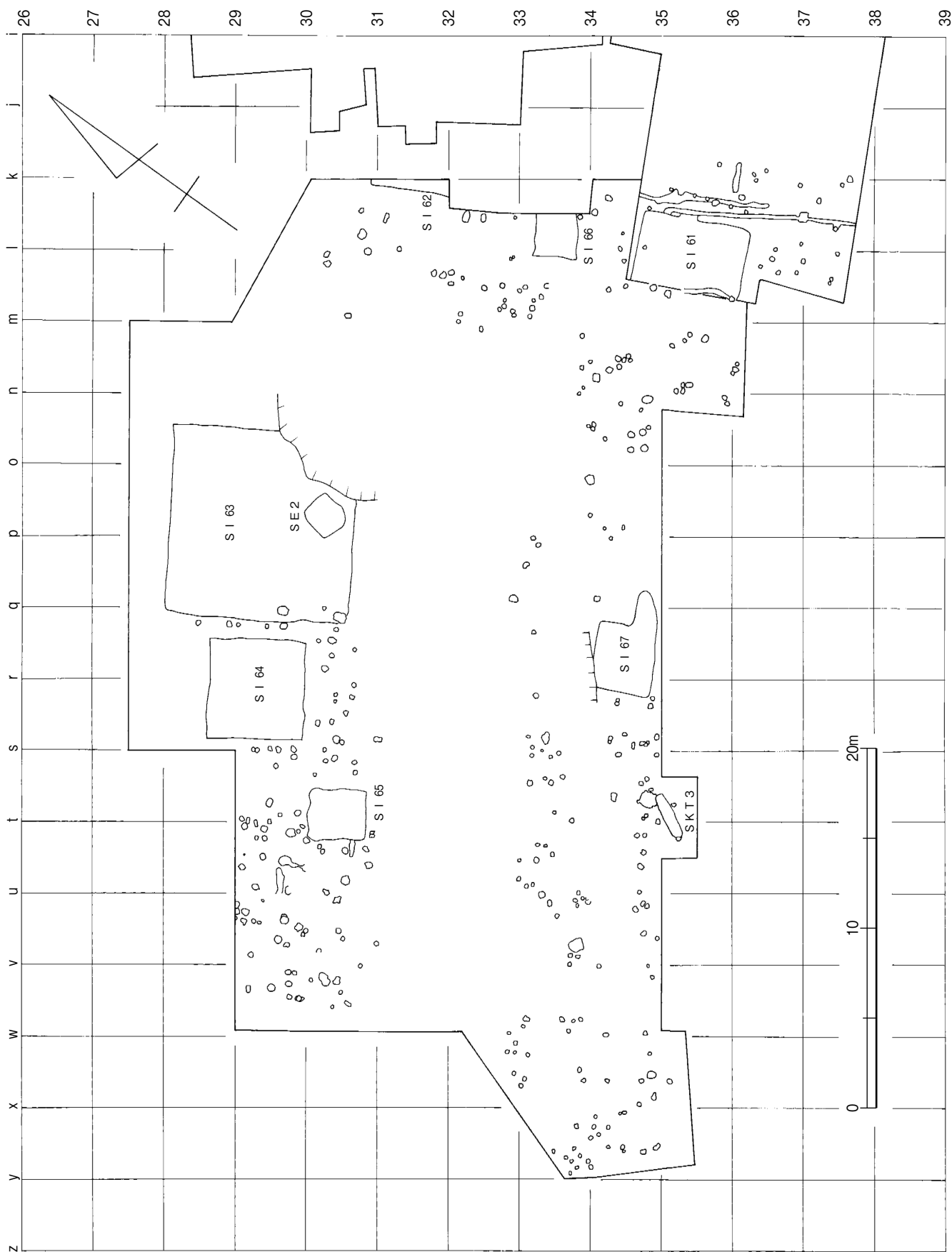
第8図 II区北東部遺構配置図



第9図 II区南西部遺構配置図



第10図 Ⅲ区北東部遺構配置図



第11図 Ⅲ区南西部遺構配置図

3. 検出遺構と出土遺物

大館野遺跡の遺構は時期的に多様であるうえ、調査範囲が広大であることから、縄文・弥生時代、平安時代、中世以降の三つにまず分け、平安時代についてはⅠ・Ⅱ・Ⅲ区毎にさらに分けて記述する。

(1) 縄文・弥生時代

3ヶ年にわたる約7,800㎡の発掘調査によって、縄文時代と考えられる3基の落とし穴（SKT1・2・3）と、若干の縄文土器小片及び石器、弥生時代の土坑（SK9）と深鉢形土器、若干の弥生土器小片を検出した。なお、35-m区から多量の円筒下層式土器片が出土したが、これはかつて矢立中学校に勤務していた教師が、大館野台地を含む矢立地区内で採集したもので、その教師が転任後に穴を掘って埋めたものである。

1) 遺構

SKT1（第12図）

位置 Ⅰ区7・8-m区検出。漸移層面で確認。

遺構 開口部長さ310cm、開口部幅50～66cm、壁傾斜変換点部幅18～24cm、底部長さ295cm、底部幅6～10cm、傾斜変換点上部の深さ18～24cm、傾斜変換点下部の深さ45～55cm、全体の深さ70～80cmを測り、長軸はほぼ磁北方向を向く。西壁南側に平安期の柱穴と考えられるピットが切り込んでいる。SKT1内から遺物の出土はなかった。

SKT2（第12図）

位置 Ⅲ区33・34-g区検出。

遺構 開口部長さ340cm、開口部幅80～90cm、壁傾斜変換点部幅30～64cm、底部長さ368cm、底部幅10～30cm、傾斜変換点上部の深さ42～80cm、傾斜変換点下部の深さ70～90cm、全体の深さ140～156cmを測り、長軸はN-64°20'-Wを向く。長軸両端壁は袋状を呈する。耕作土下18～24cmの暗褐色土層からの掘り込みを確認。全体に幅広で規模の大きな落とし穴であるといえる。SKT2内から遺物の出土はなかった。

SKT3（第13図）

位置 Ⅴ区34・35-s・t区検出。

遺構 開口部長さ260cm、開口部幅46～72cm、明瞭な傾斜変換点をもたないタイプである。底部長さ244cm、底部幅6～12cm、地山面からの深さ70～84cmを測り、長軸はN-26°40'-Eを向く。南端に平安期の柱穴と考えられるピットが切り込んでいる。SKT3内から遺物の出土はなかった。

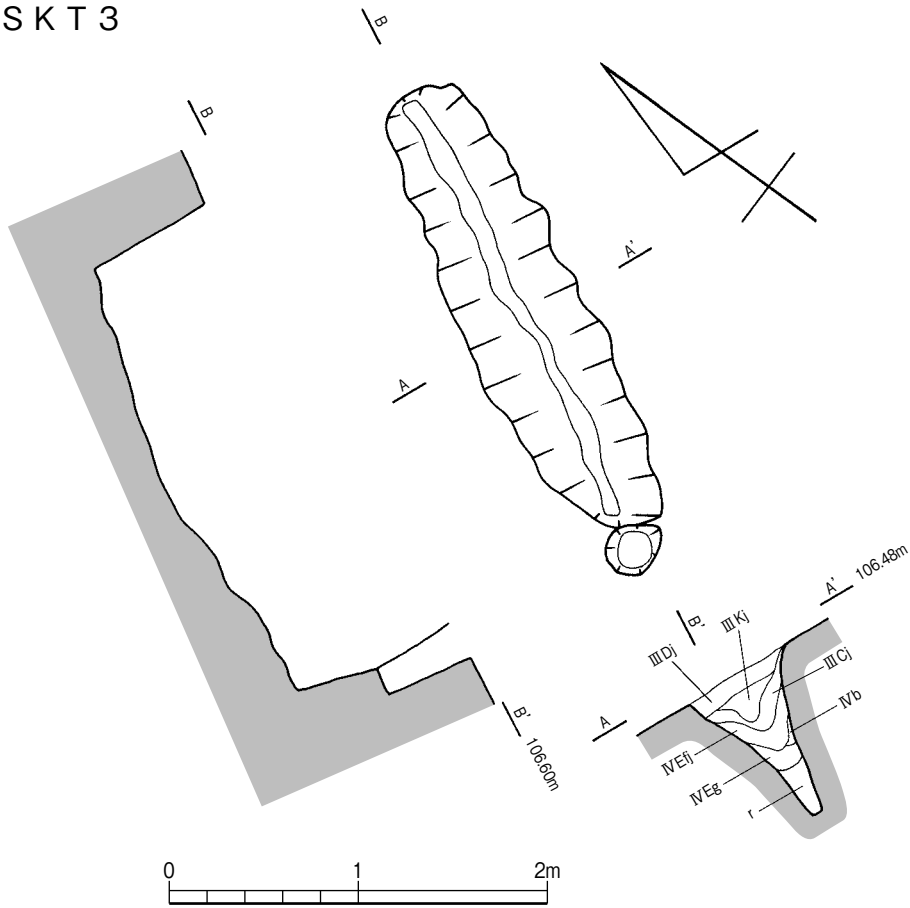
SK9（第13図）

位置 Ⅲ区33-g区検出。土坑の西側は確認調査時の4bグリッドにより掘り込んでしまっている。

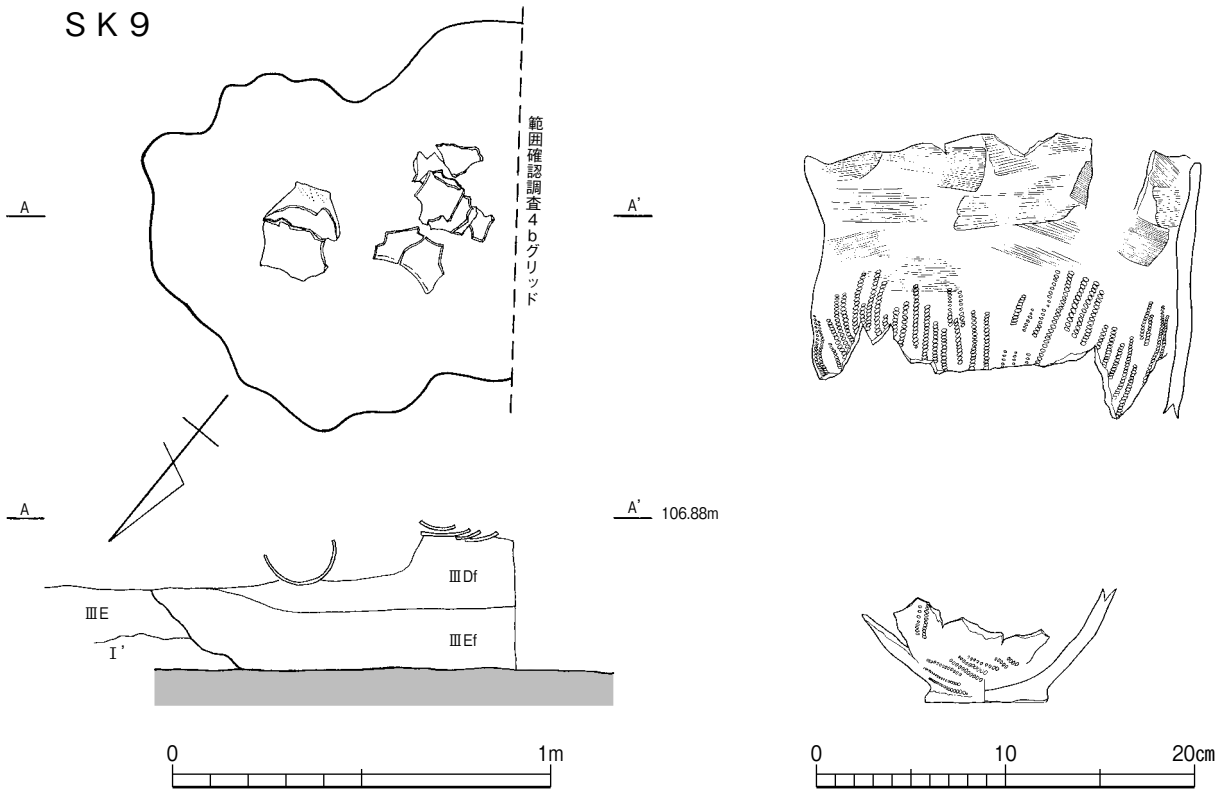
遺構 暗褐色土層中の確認面での開口部径は南北が80～90cm、東西が95cm+a、深さ35cmを測るが、土坑基底は地山面上で止っていて、地山面を掘り込んではいない。

土坑内には、基底にローム粒混入黒褐色土（ⅢE f）が15cmほど、その上にローム粒混入暗褐色土（ⅢD f）が、土器確認面まで現厚で40cm埋積していて、土坑の深さは55cmを超えるものと考えら

SKT3



SK9



第13図 SKT3・SK9とSK9出土土器

れる。ⅢD f 層から第13図の土器が出土したが、S K 9の構築時(埋め戻し時)と時を一にするものか、時間差があるのかは判然としない。

遺物 出土土器は深鉢形土器で上半部と底部を図示してあるが、体下部の小破片の接合によって相互が一個体であることがわかる。口径21cm、底径6.7cm、器高30cm、器厚0.7~0.9cmを測る。底は底縁が張り出し、底面は凹凸のあるヘラナデ調整の平底である。体部から底部まで条間の広い4条を単位とする縦位の縄文が施され、底立ち上がり部ではそれが右下がりに行われている。口縁部はやや外反し、器表面は幅4cmほどのヘラ状工具による横位ナデ調整が行われている。

時期等 本土坑は、出土遺物や埋積土の埋積状態から、弥生期の墓の可能性のある土坑である。

2) 包含層出土遺物(第14図)

1・2は円筒上層式土器。3~11は弥生土器。3は口縁部を内側に折り返し、器表口縁部に条節の密な縄文を、体部に4条を単位とする縄文を間隔を広くあけて施文している。4は口唇部を肥厚させ、4~5条を単位とする斜縄文を密に施文、体部は横位にヘラナデして斜縄文を磨り消している。5は条間の広い細かな縄文を地文とし、その後に器表全体を横位にナデしている。6は体下部で4条単位の細かな縄文を重複させながら密に施文している。7は出土土器中もっとも細やかな4~5条単位の縄文を、重複させながら密に施文している。8は細かな縄文の上から磨り消しを行い、さらに細いが深い沈線を二条一対で描く。ただし、沈線は並行しているものの一本一本が乱雑である。9は壺形土器の肩部と思われる。10は底部で6・7同様に4~5条単位の細かな縄文を重複させながら密に施文している。11は浅鉢底部と思われ、底縁に幅広の深い沈線を廻らし、体部には細かな縄文を密に施文している。

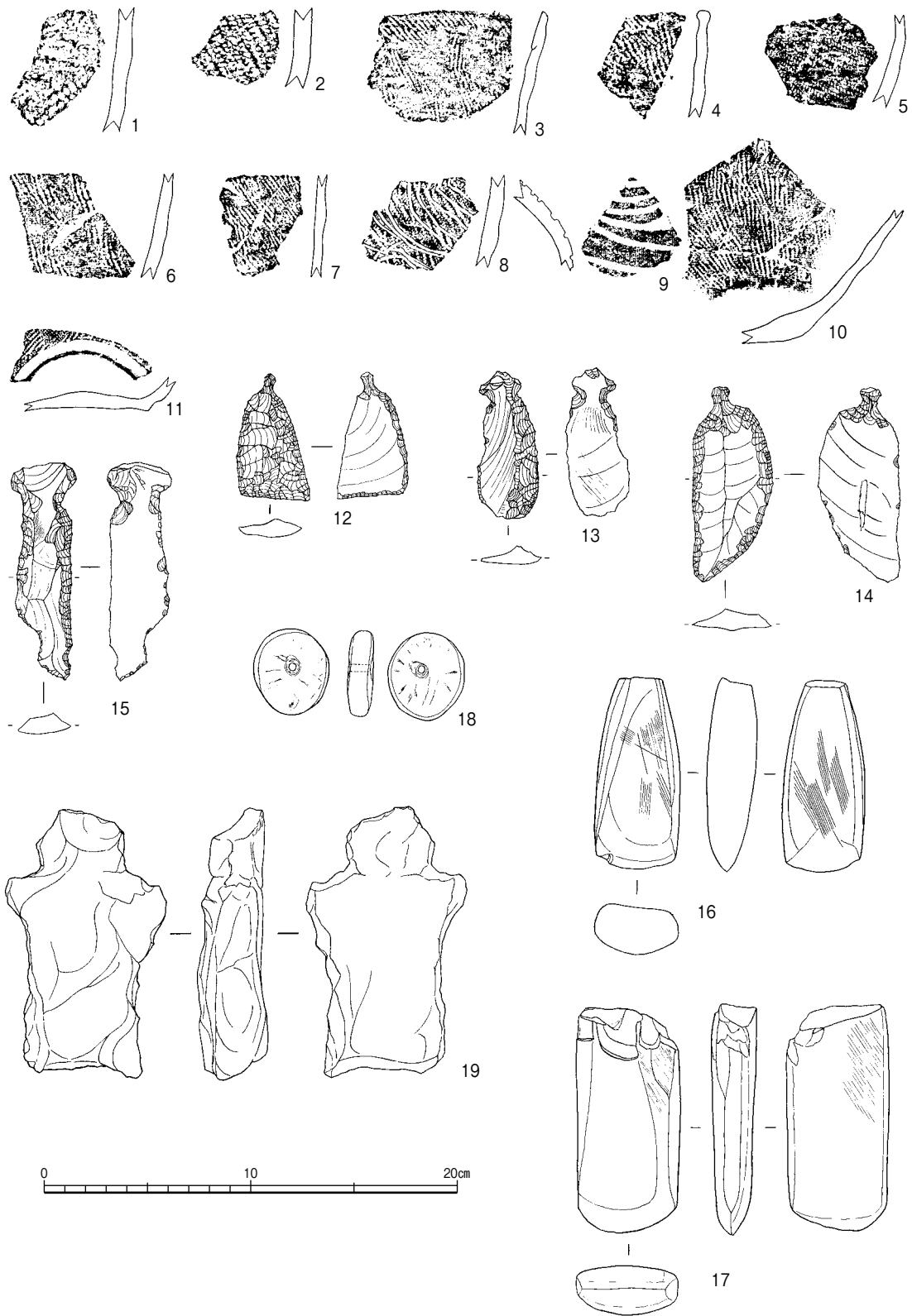
12~15は石小刀で材質は珪質頁岩。12は31-c区出土で重さ19g。13は8-m区のS K T 1東側出土で重さ20g。14は30-f区遺構確認面出土で重さは34g。15は7-l区遺構確認面出土で重さは31g。16・17は磨製石斧。16は4-j区暗褐色土層中出土で重さは148g。両面に擦痕が顕著。17は26-h区漸移層上位出土で重さは235g。

18は17-h遺構確認面出土の凝灰岩製有孔円盤状石製品で重さは28g。孔は両側穿孔。19は凝灰岩製の岩偶様石製品。重さ219g、頭部を打ち欠きによって作り出し、両腕(肩)と胴体のすぼまりも同様に作り出ししている。打ち欠いたままで二次調整は行っていない。

(2) 平安時代

遺構については前述したとおりである。遺物はその大部分が堅穴住居内からの出土であり、ほかに溝跡、土坑、焼土遺構、包含層出土のものがある。おもな遺物は土器が大多数で、ほかに鉄製品、炭化した木器、鉄関連遺物などである。大館野遺跡で出土した平安時代の土器は遺構と包含層を含めて、全体でコンテナ約100箱である。したがってすべての土器を網羅して報告することは不可能であり、ここでは出土量の多い遺構の出土土器に重点をおき、そのほかの遺構と包含層出土の土器は特徴のあるものに限って図化した。大館野遺跡では良好な一括土器と考えられる資料がいくつかあり、平安時代の10世紀の土器様相がほぼ把握しうるものと考えられる。大館地方を含めて、出羽の当期の土器様相が明らかになりつつある現状においても、こうした一括土器の分析が要請され、かつ大館野遺跡の遺構の変遷の把握にも不可欠の作業である。

大館野遺跡出土の土器は実年代で10世紀のものが大半で、10世紀内におさまるものと考えられる。土器は須恵器・土師器で、陶磁器は含まれない。



第14図 縄文・弥生時代の遺物

須恵器 胎土・色調や手法の特徴により、いくつかの生産地から供給されていることが推察される。これらの須恵器のおもな生産地は現在知られている津軽平野の五所川原窯跡群であると判断される。この須恵器窯跡は近年、継続して分布・発掘調査が行われ、窯跡全体の様相がほぼ把握された（五所川原市教育委員会2003・2005）。このほか五所川原産須恵器とは色調・手法が異なる別の窯跡で焼かれたと考えられる須恵器が一部出土している。器種は貯蔵形態のみで、長頸瓶（壺）・短頸壺・甕などがある。これらはいずれも器種・出土量ともに少ない。

土師器 煮沸形態と供膳形態がある。供膳形態は塀がある。¹⁾ 煮沸形態は甕と鍋があり、甑はほとんどみられない。土師器は奈良時代以来の製作技法を踏襲するものと、ロクロを使用する須恵器の製作技法と共通するもの2者が存在する。前者は煮沸形態に見られ、後者は塀のみに限られる。前者の胎土は3～4mm大の小礫を多く含み、後者の胎土は小礫が散見されるものの、相対的に前者より精良である。色調はいずれも大差はないが、塀は内面のみ黒色処理されるものが多い。

以下、地区毎に説明を加える。

1) I区

I区は今回の調査区内で北辺部にあたり、南東側は道路に接している。遺構は比較的単純なあり方を示す。住居・建物跡は一部検出されたものも含めて計17棟を数えるが、そのうち15棟は中央～北東辺部に集中し、南西辺部は建物跡が少なく、西側に溝跡が数条交錯して存在する。北東辺の建物群（I建物群）の中心は平安時代中期のものであり、南西辺側の2棟もこの時期のものと思われる。溝跡も当期のものと思われ南北方向の溝は、II区北辺へつながっていたと考えられる。以下、番号順を基本として説明を加える。なお、時期を示す「I期」・「II期」などは土器編年（205頁）における時期を意味する。

S I 1（第15・16・18図）

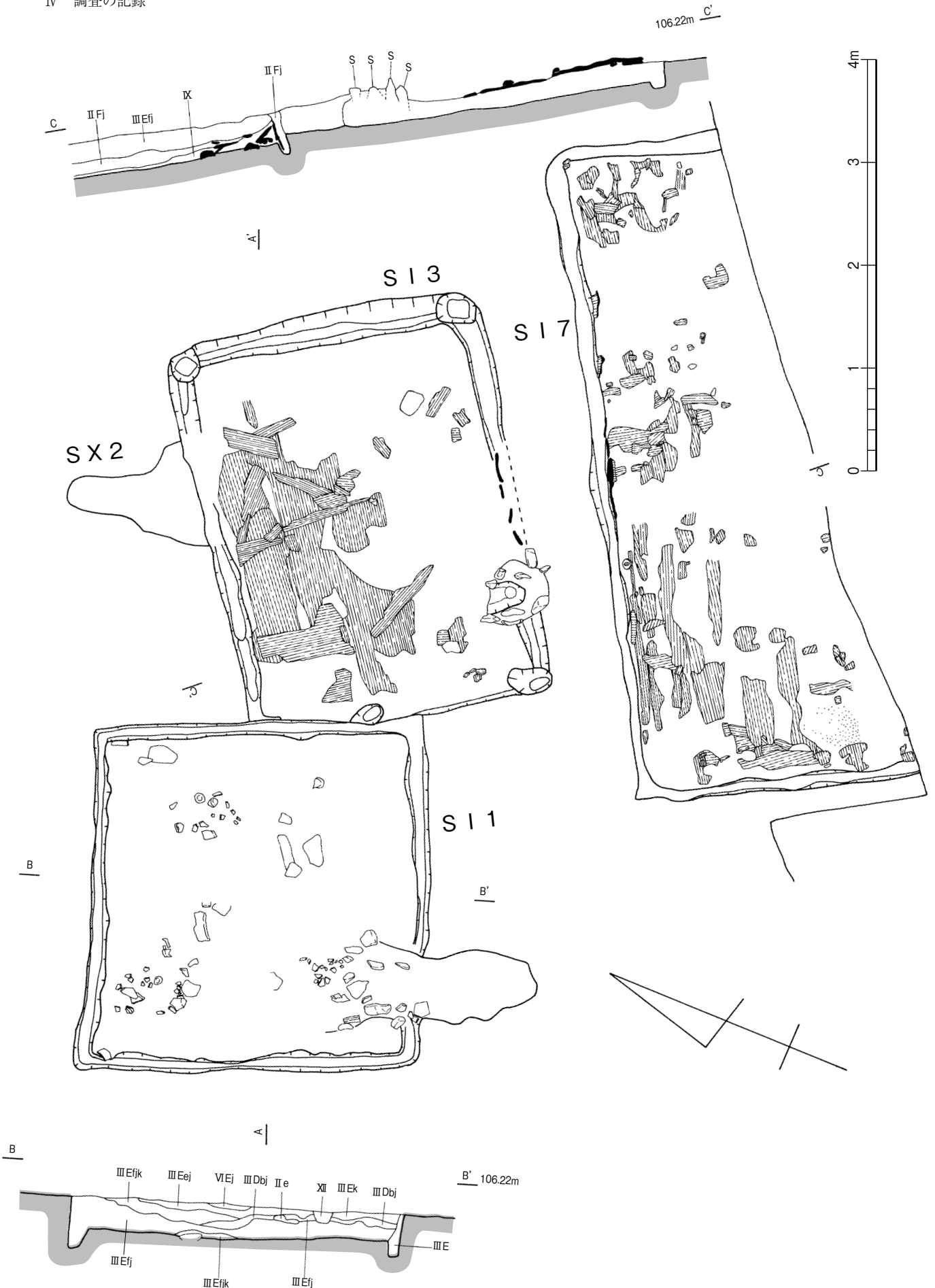
位置 5・6-o・p区に検出。S I 3を切り込んで構築している。

遺構 竪穴埋積土は軽石粒を全体に含んでいる。カマドは軽石粒を含む暗褐色土（ⅢD j）と、軽石粒とロームブロックを含む黒褐色土（ⅢE g j）を基盤に、その上に粘土を貼ってカマド床としている。柱穴は床面に明瞭に検出できなかったことから、壁溝内に立てられていたものと考えられる。

遺物 竪穴内から土師器甕、小型甕、鍋と羽口の破片が出土した。羽口はガラス状に熱変した先端部小破片である（第154図）。

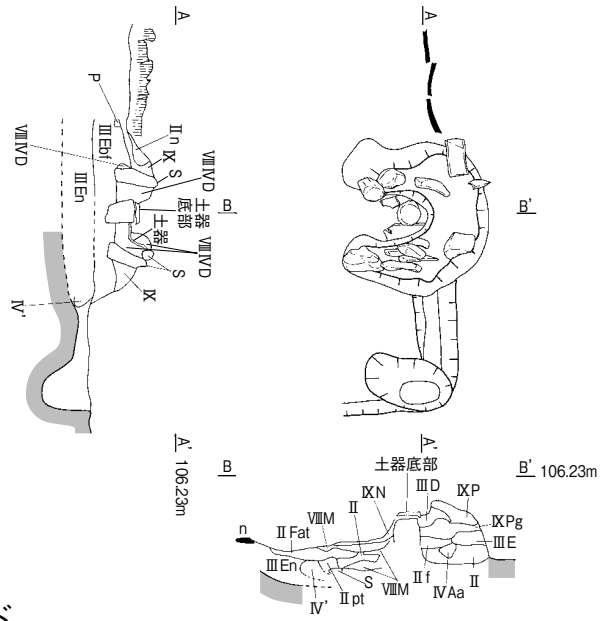
第18図1～3はカマド前庭部床面上出土。1は復原口径23.6cm、器高27.5cm、底径8.5cm、器厚0.5cm前後を測る。口縁は横ナデ、体部は2～2.5cm幅に下方から上方へ左上りのヘラケズリ、底縁は0.7～1cm幅の右下がりのヘラケズリ調整が行われている。内面は幅1.5cm内外のハケ調整が横位に丁寧に行われている。底外周に粗砂粒が密に付着し、剥落痕も多く見られる。体部破片の割れ方から積み上げ成形が読み取れる。2は復原口径8.7cm、器高7.8cm、底径6.7cm、器厚5cm前後を測る小型甕。体部は0.8～1cm幅の左上りのヘラケズリ、底縁には右下がりのヘラケズリが行われている。底外面全体に粗砂粒付着。3は復原口径13.1cm、器高12.5cm、復原底径6.6cmを測る小型甕。口頸部がわずかにくびれ、体部がややふくらむ。口縁部は横ナデ、体部は密にヘラケズリが行われている。内面には薄い褐色の化粧粘土が貼られ、ハケ調整が行われている。体上部には幅3～5cmの巻上げ痕が見られる。底外面に粗砂粒が密に付着している。

1) 一般的には坏とされることが多いが、塀と呼称するのが適当である（坂井1994）。本書では塀として報告する。

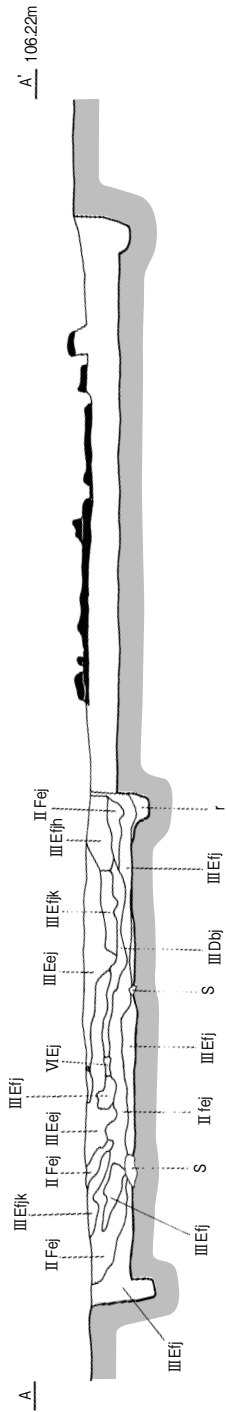
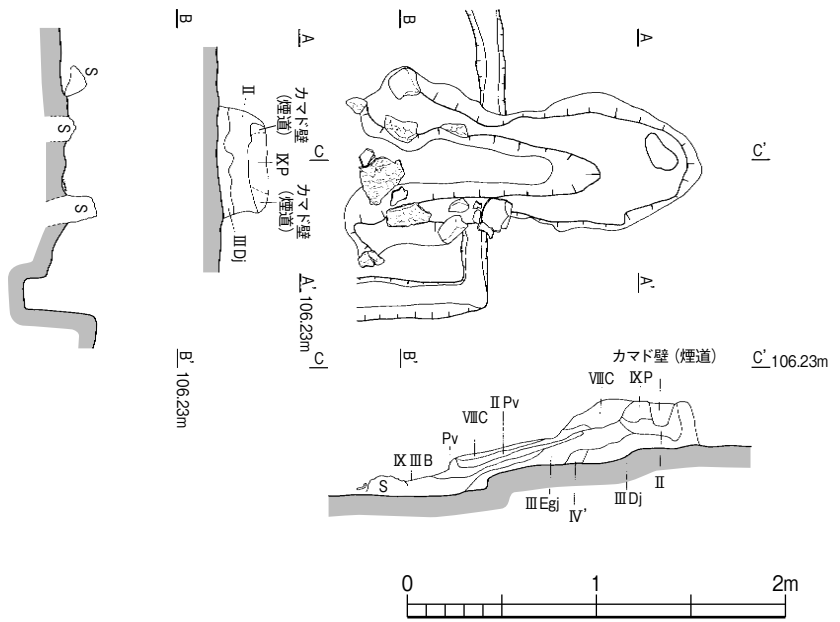


第15図 S11・3・7

S I 3カマド



S I 1カマド



第16図 S I 1・3

4・5はカマド構築材として利用された甕破片。4は復原口径15.7cm、現高12.6cm、器厚0.5cm、左上りのヘラケズリが行われ、口縁部にはその際の残留胎土が寄せ集められている。内面は全体にハケ調整が密に行われている。破片の割れ方から3～5cm幅の積み上げ成形と思われる。5は底径8.5～9cmで、底縁の一部は張り出す。立ち上がり部は下方から上方へ0.8～1cm幅のヘラケズリ、内面には密にハケ調整が行われている。底外面に外周に密に粗砂粒が付着している。6は小型の土師器甕である。平底であり、内面にはナデが施される。器表面は縦位のケズリである。胎土に小礫を多く含む。

時期等 本竪穴はカマドが確認されたことから住居跡と判断した。時期はカマド前から出土した土器から、10世紀前葉～中葉と見られる。

SB2・S12 (第17～19図)

位置 2・3-m・n・o区に検出。ともに南側だけの検出で北側は調査範囲外。

遺構 SB2は有溝掘立柱建物跡の範疇に加えたが、より北側に竪穴住居跡があつて、それに付属する竪穴掘立柱建物の掘立柱建物である可能性もある。東西2間(yⁱ-yⁱⁱ-yⁱⁱⁱ)、南北3間(xⁱ-xⁱⁱ-xⁱⁱⁱ)以上の建物で、柱間に溝をもつが東南部のxⁱyⁱ-xⁱyⁱⁱ間には溝がない。建物東西はxⁱyⁱ-xⁱyⁱⁱ間が3.6m、xⁱyⁱⁱ-xⁱyⁱⁱⁱ間が3.6mと等間で計7.2mとなる。南北はyⁱ列がxⁱyⁱ-xⁱⁱyⁱ間が2.2m、xⁱⁱyⁱ-xⁱⁱⁱyⁱ間が3mを測り、yⁱⁱⁱ列はxⁱyⁱⁱⁱ-xⁱⁱyⁱⁱⁱ間が2.4m、xⁱⁱyⁱⁱⁱ-xⁱⁱⁱyⁱⁱⁱ間が1.8mと柱間がまちまちである。

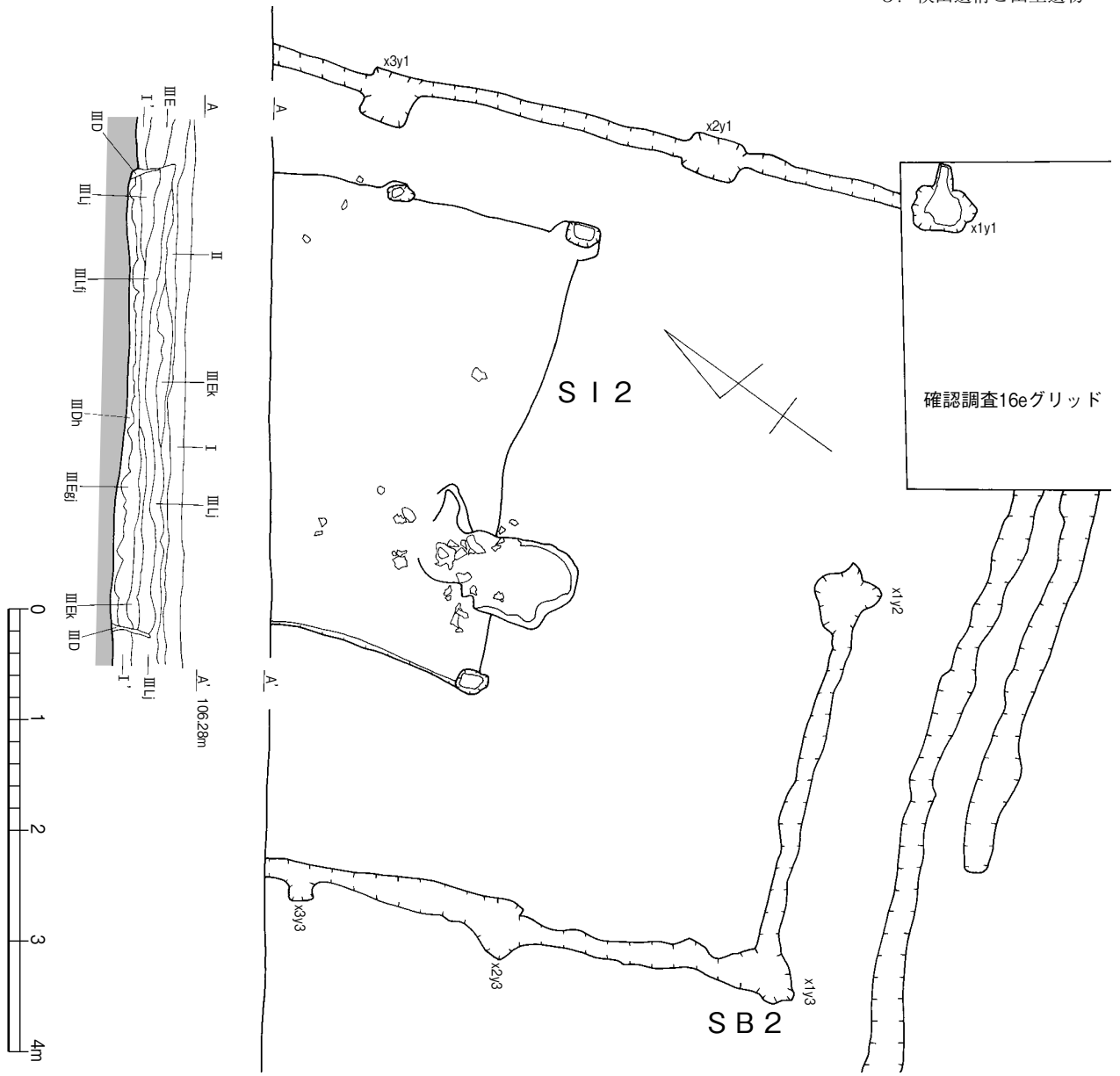
S12は耕土下の黒色土層(Ⅱ)中位面から掘り込まれていて、竪穴の深さ40cmほどを測るが、地山面の掘り込みは浅く5～10cmほどしかない。埋積土は軽石粒を全体に含んでいる。焼失家屋で竪穴中央部床面に炭化材の小片が散在しているが、建材として現位置を確認することはできなかった。

カマドは地山面まで掘り込んで、軽石粒・ローム小ブロックを含む暗褐色土(ⅢDg^j)と軽石粒を含む黒褐色土(ⅢE^j)を、奥部に厚く、前庭部に薄く敷いて緩やかなスロープをつくり、その上に粘土を貼ってカマド床を構築している。

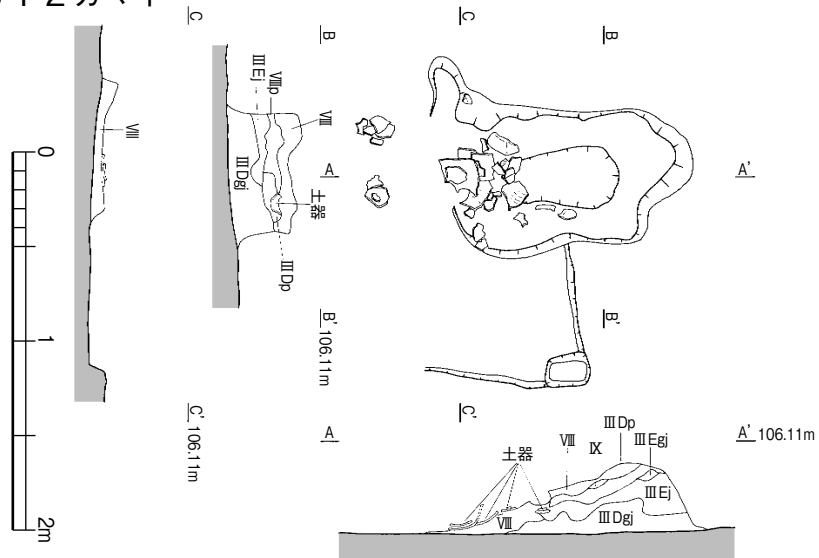
遺物 竪穴内からは土師器甕、小型甕、鍋、埴、鉄製品が出土した。

第18図7はカマド内出土の埴で、復原口径12cm、器高5.2cm、底径5.7cm、ロクロによる成・整形で底部は回転糸切り無調整、内黒であるが二次焼成を受けて内黒がとんでいる破片が多い。8は小型甕口縁部で、復原口径13.4cm、巻上げ痕が明瞭で、体部はヘラケズリ、内面はハケ調整、口縁に指で押し広げた片口をつくりだしている。9はカマド構築材に利用された甕で、復原口径16.3cm、口縁端部は玉縁状を呈す。巻上げ痕が明瞭で、器表をヘラケズリしているが、わずかに削っただけの簡略なものである。全体が二次焼成を受けて赤褐色に硬く焼き締まっている。第19図1はカマド前庭部床面上出土で、復原口径21cm、器表をヘラケズリしているものの、一部に巻上げ痕を明瞭に残す。内面は禾本科植物を束ねたハケ状工具でナデている。2はカマド燃焼部出土の土師器甕。口径20～21cm、底径8～8.7cm、器高30～35cmで、最大径が体上部にある。二次焼成を受けて焼き締まっていて、器表一部は赤褐色を呈す。器表は丁寧なヘラケズリが行われている。内面は全体にハケ目が施されていたと思われるが、現況ではその一部の痕跡が残っている。内底部には器体接合の際の指頭による押え付けが見られる。3は手鎌、長さ14cm、幅1.8～2cm、峰厚3cmを測り、両端の穿孔は角形で、片側の孔には木質が残っているが目釘かどうかは不明。

時期等 本竪穴はカマドが確認されたことから住居跡と判断した。時期はカマド前から出土した土器から、10世紀前葉～中葉と見られる。掘立柱建物跡は出土遺物などなく、時期は不明である。

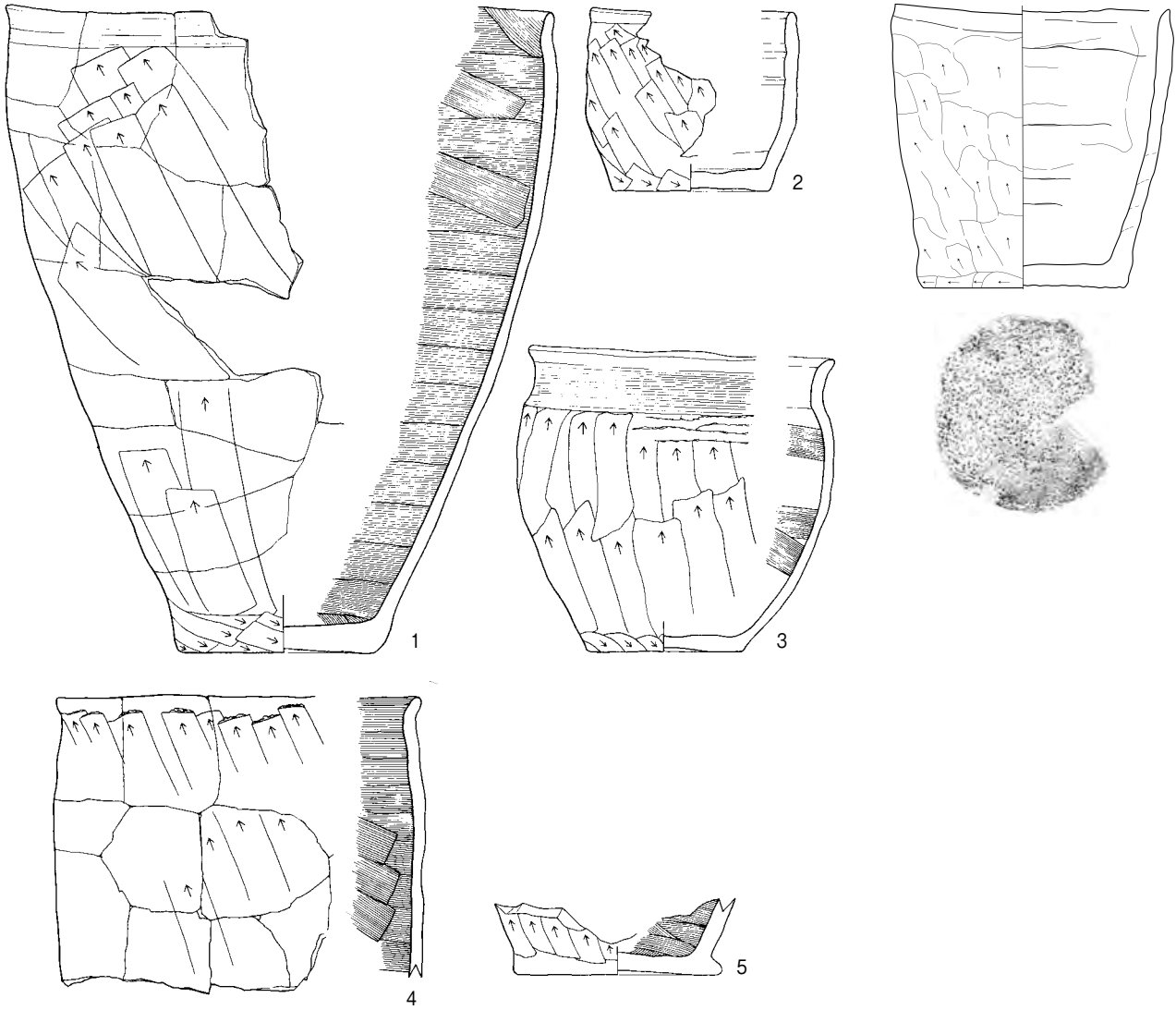


S12カマド

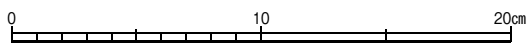
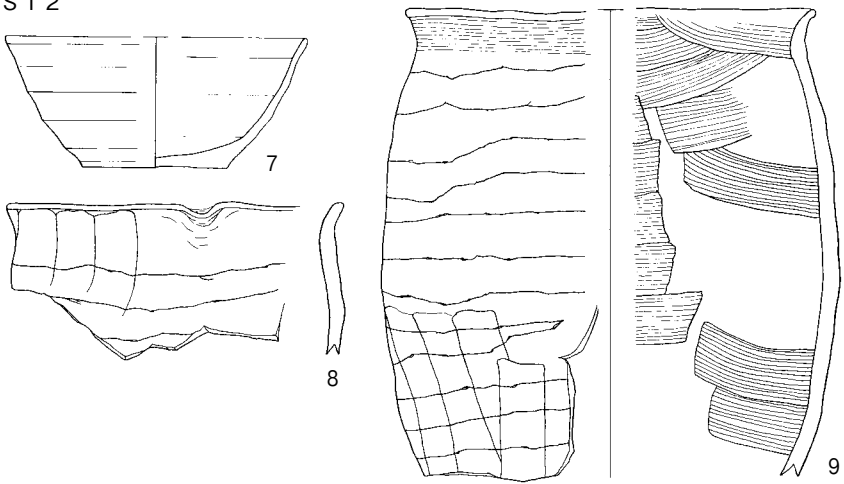


第17図 S12・SB2

S 1 1

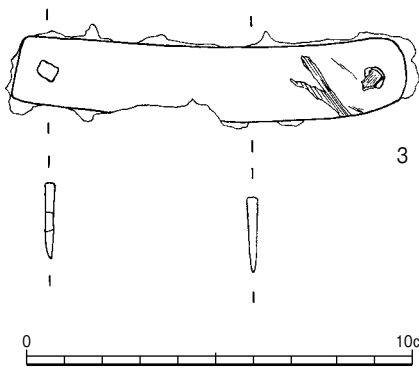
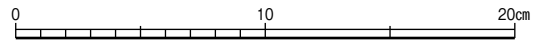
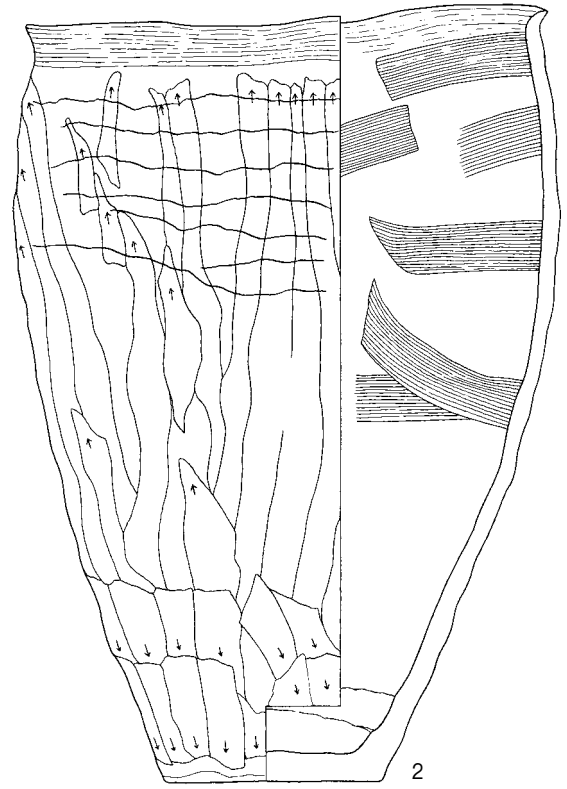
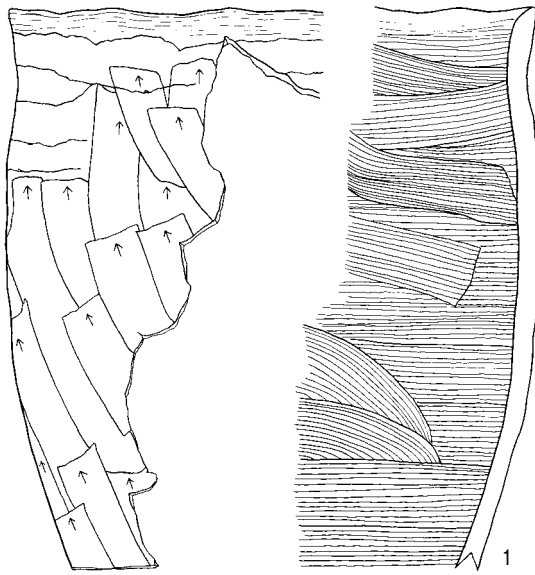


S 1 2

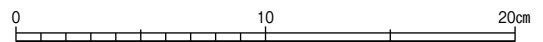
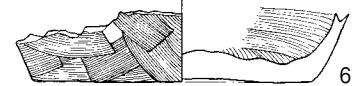
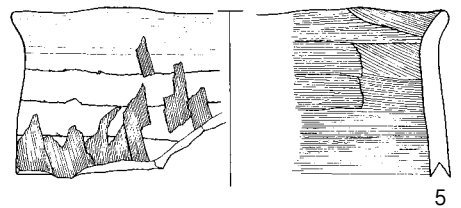
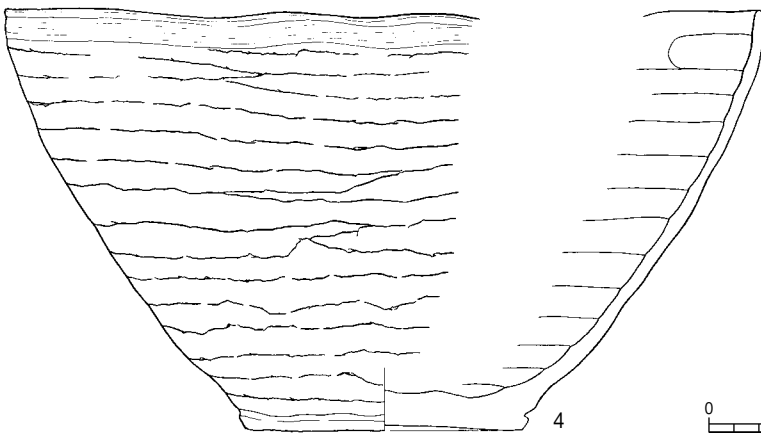


第18図 S 1 1・2出土土器

S 1 2



S 1 3



第19図 S 1 2・3出土遺物

S I 3 (第15・16・19図)

位置 5・6-o区に検出。S X 2前庭部を切り込んで構築。

遺構 カマド東側に幅15~30cmの炭化壁板材基部を矢板状に検出した。竪穴北側半分に炭化材を検出したが、その状態は、幅40~60cm、現長200~250cmの大割板が、竪穴長軸に並行して敷詰められ、その上に直行して壁板材が重なっている。

カマドは石芯構築で、支脚には長方体の石を立て、その上に甕底部を逆さまにかぶせている。

遺物 第19図4・5はカマド前庭部床面上出土。4は復原口径30~33cm、器高16cm、底径10.5~13cm、器厚0.5cm前後を測る。口縁部は横ナデ、体部には幅0.8~1.2cmの巻上げ痕が内外面に明瞭に残る。内面は指頭でナデ調整をしていて凹凸が横位に走る。その上からヘラナデしているものの雑で凹凸を消しきれていない。底外面全体に粗砂粒が付着している。5は復原口径17.5cm、現高6.5cm、器厚0.6cm前後を測る。口縁部横ナデ、体部にはヘラナデが雑に行われている。内面はハケ調整が密に行われている。体部には幅1.3~1.6cmの巻上げ痕が明瞭に残る。6はカマド支脚の石の上にかぶせていた甕底部で、底径は11.2cm、外面はヘラナデ調整を多方向に幾度も重ねて行い、内面はハケ調整を横位に行っている。底外面は丁寧なヘラナデを行って平滑である。

時期等 本竪穴はカマドが確認されたことから住居跡と判断した。時期は床面から出土した土器から、10世紀前葉~中葉と考えられる。

S I 4 (第20図)

位置 3-u・v区検出。耕土下の砂礫混入黒褐色土層(ⅢE1)中位面より竪穴を掘り込んでいる。

遺構 埋積土中位面には軽石粒塊(X)、軽石粒を多量に含む黄黒色土(ⅡCj)が見られ、軽石粒堆積以前の廃屋と考えられる。

カマドは床面から竪穴外へ、漸移層(I')、黒色土層(Ⅱ)を内傾斜するように削り下げ、その上に粘土(Ⅷ)を貼って構築している。

遺物 竪穴内から土師器甕、須恵器甕の小破片、鉄製品及び鍛冶関連遺物が出土した。第19図1は環状の鉄製品である。錆化が激しく詳細は不明であるが、鞘金具の可能性はある。2~4は椀形鍛冶滓である。表面に気泡を有し、気泡内部は錆化している。2は撥形で、底面は弧状でなだらかである。側縁の三方が破損している。3は不整楕円形で、底面は不整な弧状でなだらかである。表面に木炭を多数含む。4は不整形な立方体で、底面は弧状でなだらかである。

時期等 本竪穴はカマドが確認されたことから住居跡と判断した。時期は出土した土器から、10世紀代と考えられる。

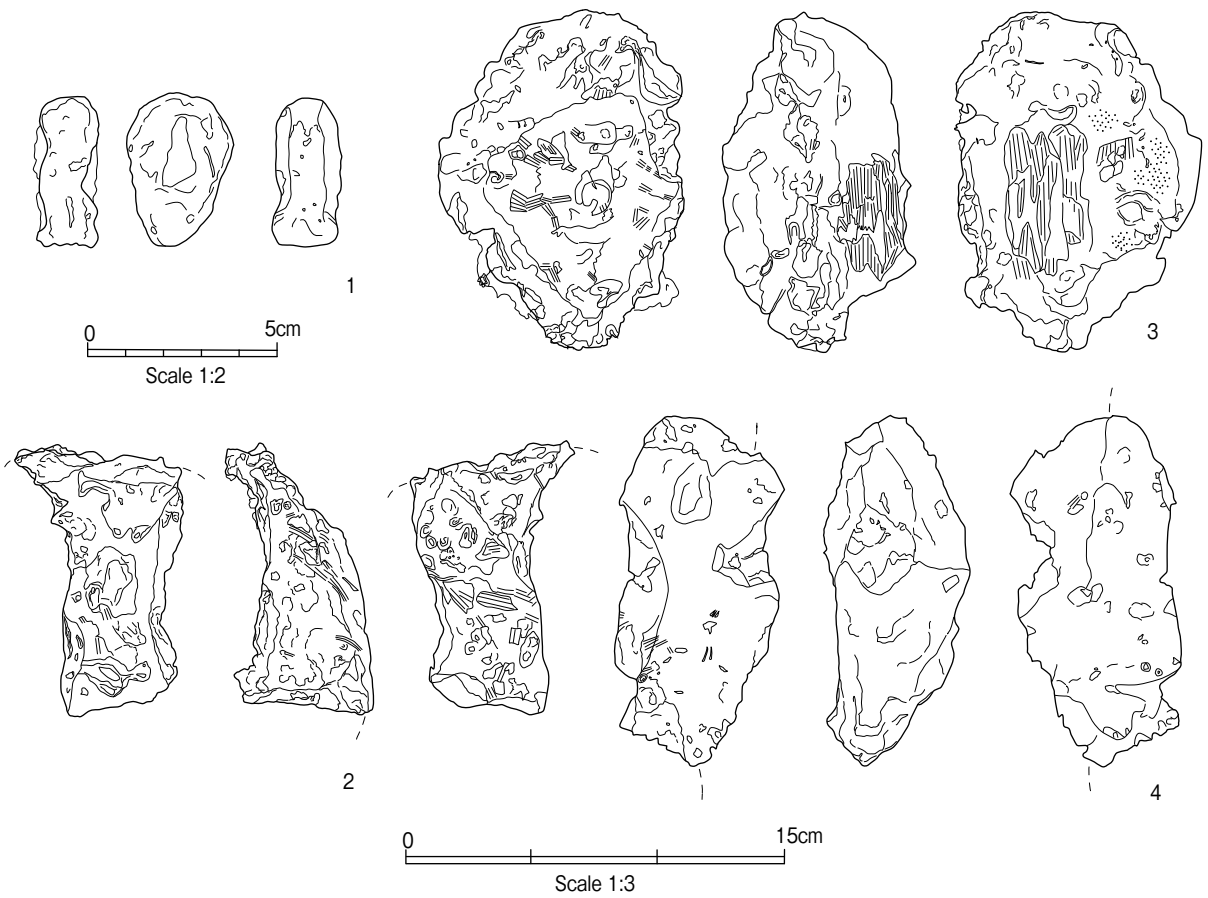
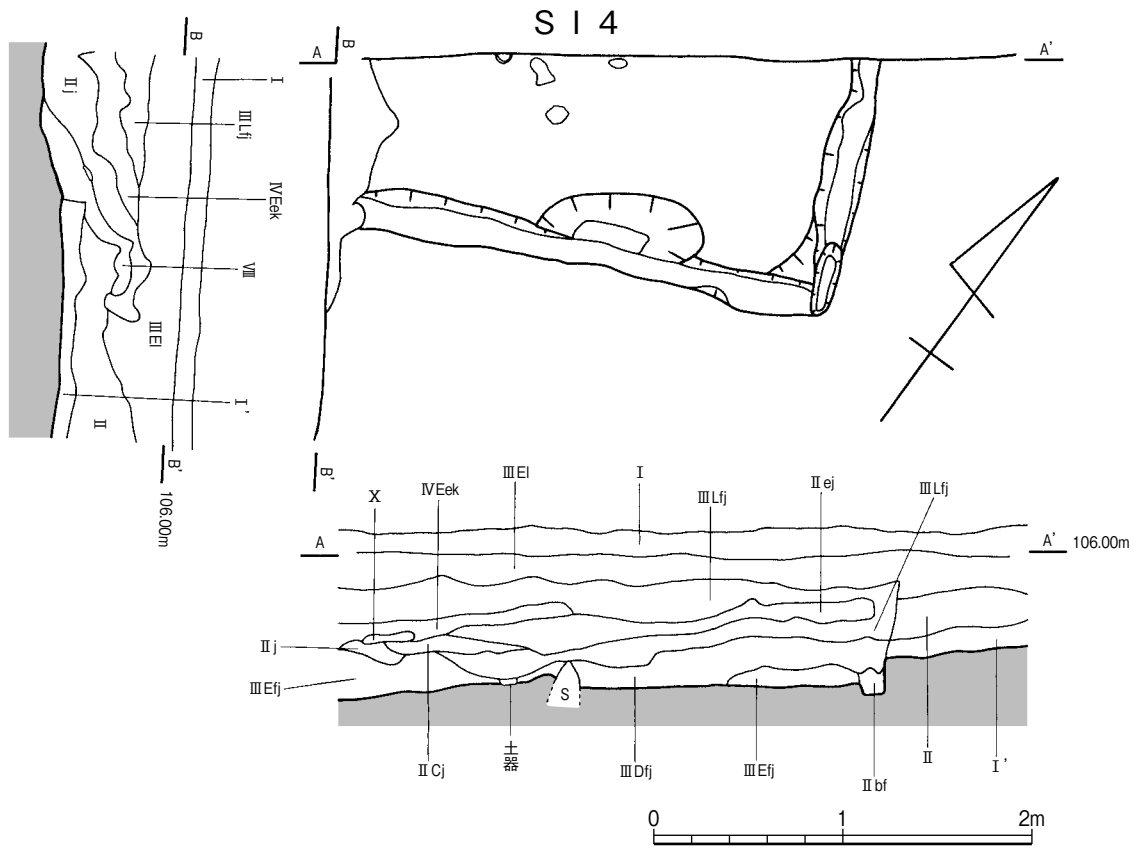
S I 5 (第21・22図)

位置 S I 5は3-i区に検出。S D 3に切り込まれ、さらにS D 3の北端部をS K 3が切り込んでいることから、S I 5→S D 3→S K 3の先後関係となる。

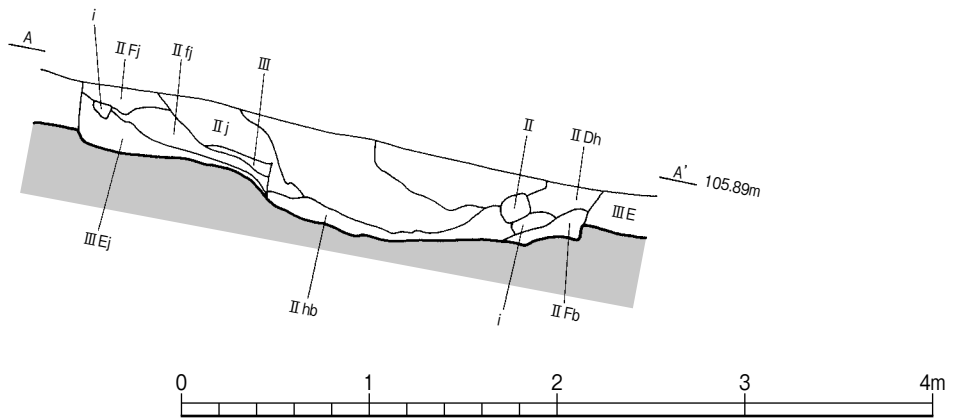
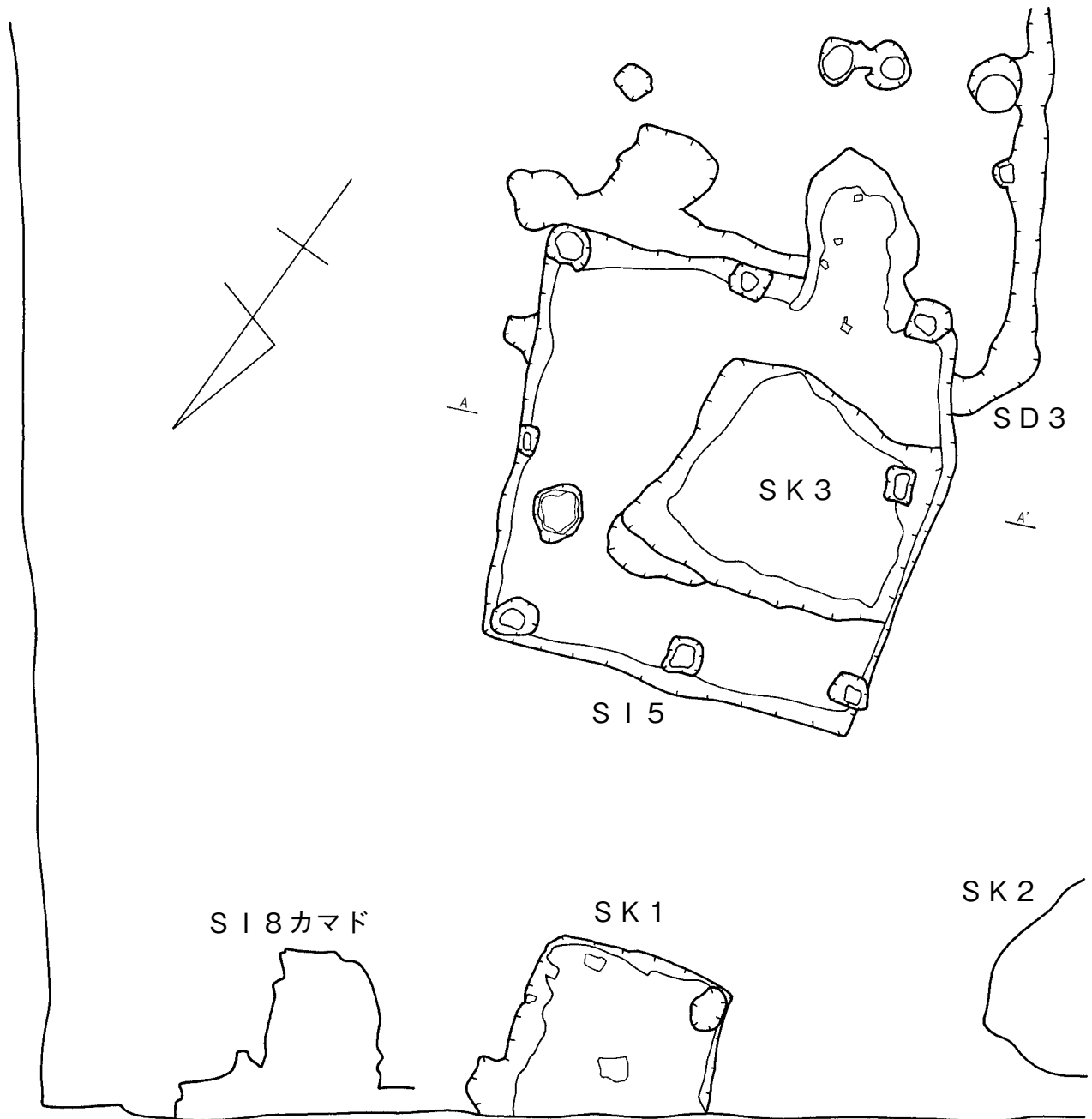
遺構 竪穴は小規模であるが、四隅と壁中央部に計8本の柱を持つ。竪穴埋積土全体に軽石粒を含む。カマドは床の焼成面をかすかに確認できただけである。

遺物 竪穴内から土師器甕と羽口の破片が出土した。第22図1は現長約10cm、直径約8cmの羽口の端部である。端部にはガラス質の溶解物が付着している。中央部には直径約5cmの孔が貫通している。全体に高熱を受けているために内面は黒色~橙褐色を呈している。カマド袖出土。

時期等 本竪穴はカマドが確認されたことから住居跡と判断した。時期は出土した土器から、10世紀



第20図 S 1 4 と出土遺物



第21図 S15・8・SK1~3

代と考えられる。

S I 6 (第22・23図)

遺構 S I 6は耕土下の黒褐色土層(ⅢE)から掘り込まれ、堅穴の深さ0.4mほどで、地山面での掘り込みは10cm内外である。埋積土には全体に軽石粒を含むが、最下層である軽石粒混入黒色土(Ⅱj)上に、軽石粒だけの単純塊(X)を所々に見ることができる。壁際には黒色土が縦位に顕著であり、壁板材の基部痕である。

カマド(第22図)は基底を舟底型に、堅穴外から堅穴内へ緩傾斜させ、ロームブロック混入暗褐色土(ⅢDf)と軽石粒混入黒褐色土(ⅢEj)を叩きしめ、その上に粘土を貼ってカマド底(Ⅸp)をつくり、その上に粘土(ⅧQ)で本体を構築している。

遺物 堅穴内からは土師器甕、小型甕、壺の破片と、羽口小破片が出土した。

第22図2は壺で口縁部を欠く。精選された胎土で色調は淡黄色、底部は回転糸切り。3・4は小型甕口縁部である。3は器表に5～7cm幅の縦位のヘラケズリが丁寧に行われ、内面は横位のハケ調整が丁寧に行われている。4は、口縁が直上する。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成時の割れ目が見られる。器表はヘラケズリ、内面はハケ調整。5は甕体上部で、器表は口縁部横ナデ、体部はヘラケズリ、内面は木口状工具によるナデ調整。6は羽口の破片である。胎土に砂を微量含む。破損面は摩滅している。**時期等** 本堅穴はカマドが確認されたことから住居跡と判断した。時期は出土した土器から、10世紀代と考えられる。

S I 7 (第15・24・25図)

位置 6・7-n・o・p区に検出。S I 3カマド構築粘土が、本堅穴埋積土上に流れ込んでいることから本堅穴が先行する。堅穴北側1/3ほどの検出である。

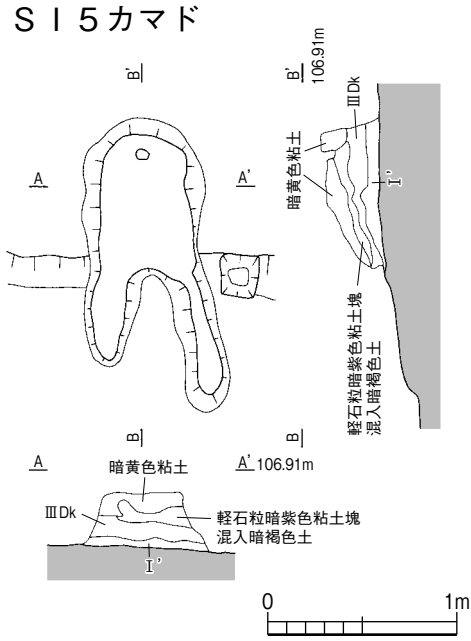
遺構 焼失堅穴で、床面上に炭化床板材を、その上位に炭化壁板材を検出した。床板材は北壁側では東西方向に、西壁側では南北方向に据えられている。西側の二枚の床板材合せ目となるそれぞれの側面には、柱を包みこむためと考えられる半円状の抉りが穿たれている(図版10)。また、北壁ほぼ中央と東・西壁の一部に、矢板状の炭化壁板材が残存していた(図版10)。

遺物 堅穴内からは土師器甕・小型甕・鍋の小破片が20片と須恵器甕の小破片が2片出土したが、それぞれが図示できる大きさ、特徴はない。鉄製品が4個と、西壁寄りから穂付きの炭化粉束(図版10)が出土した。

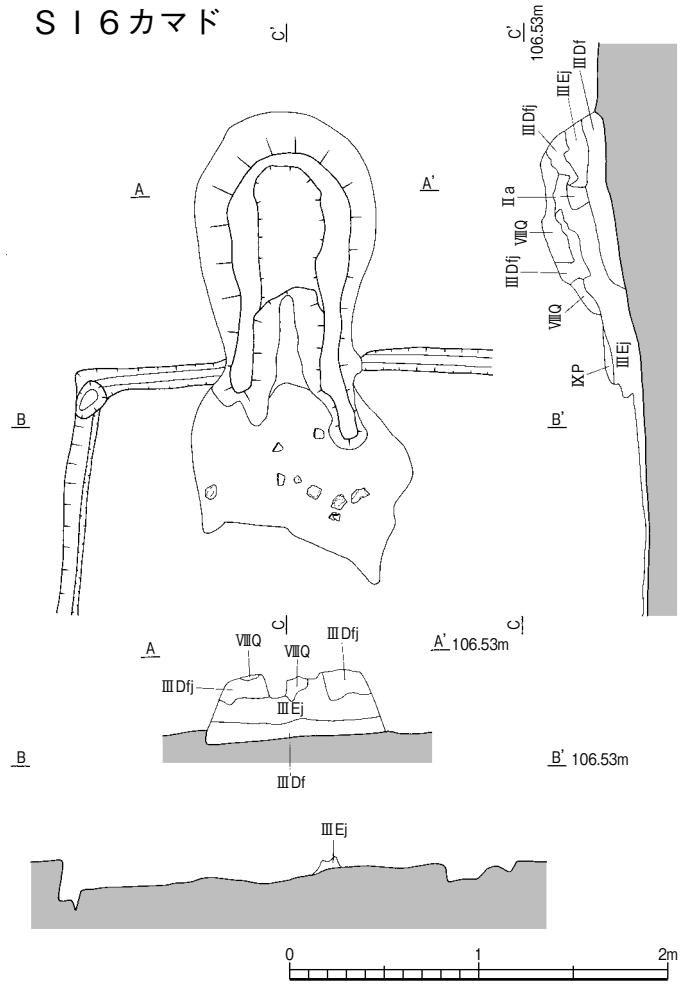
第25図は本堅穴内出土の鉄製品である。1は北東部の床面上から出土したものであるが、鉄塊系遺物で重さ231g。2は逆刺をもつヤスで現長8.9cm、身軸と逆刺の角度は40°で0.8cm飛び出している。先端から3.5cm、身軸に細かな撚糸が巻かれ、身軸基部には反対方向に撚糸が巻かれている。撚糸は錆化して残存している。3は一端が「J」字状に曲っているが品名、用途は不明。4も3同様の鉄製品と思われる。2・3・4とも重なった炭化材中からの出土で、3・4には炭化材が錆化して付着している。

時期等 本堅穴は床板をもつことから住居跡と考えられる。時期は出土した土器から、10世紀代と考えられる。

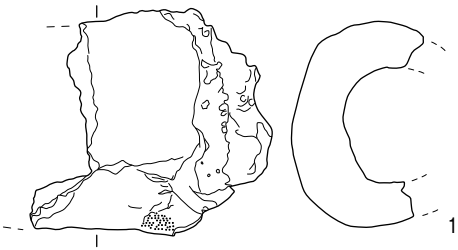
S I 5カマド



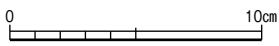
S I 6カマド



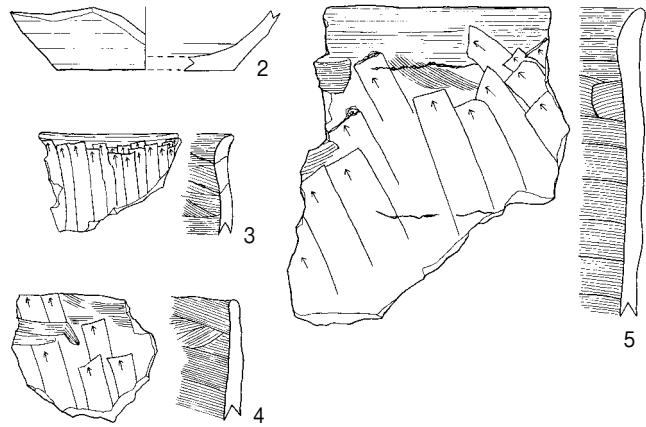
S I 5



鍔

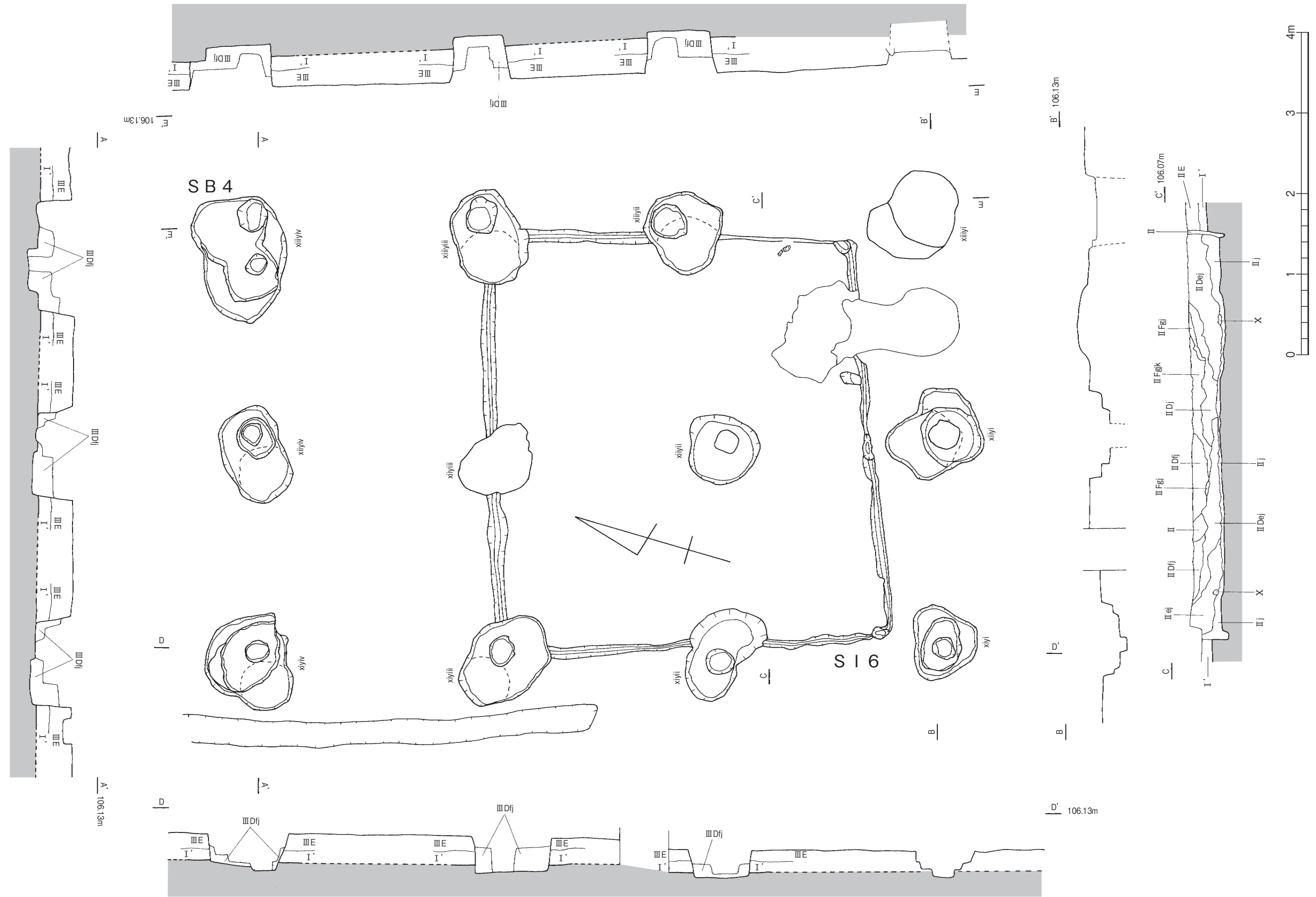


S I 6

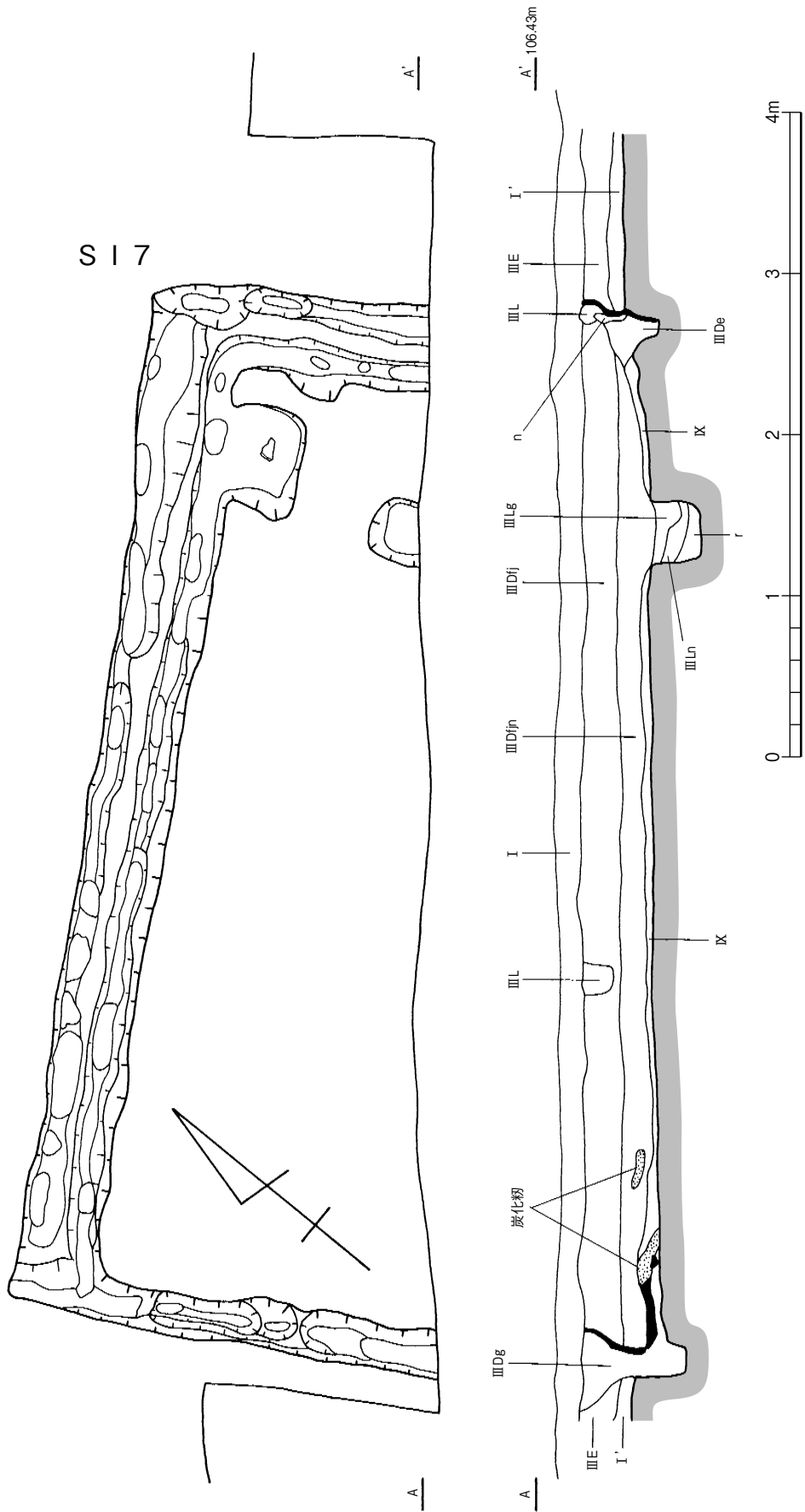


6

第22図 S I 5カマド・6カマドとS I 5・6出土遺物



第23図 S16・SB4



第24図 S17

S I 8 (第21図)

位置 S I 8は2-h区に検出。

遺構 竪穴外に延びたカマドを確認しただけで、竪穴の規模、構造はまったく不明で、遺物の出土もなかった。

S I 9 (第26・27図)

位置 4・5-m・n区に検出。

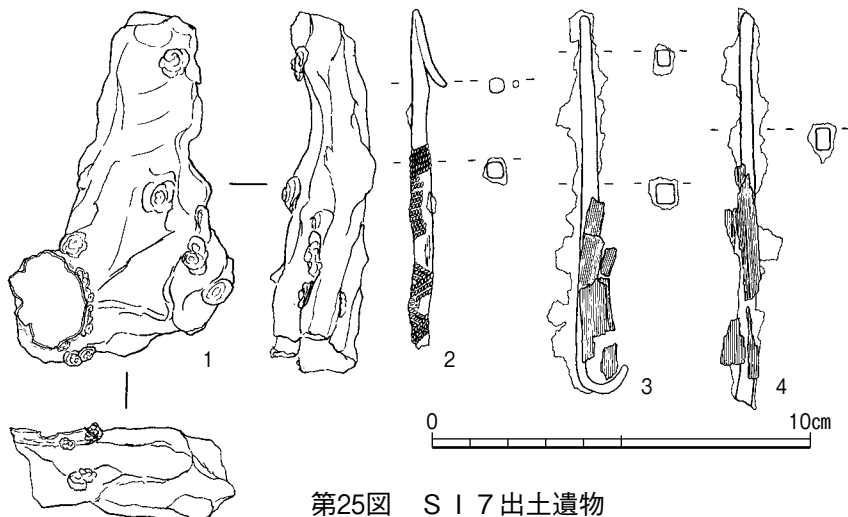
遺構 S I 9は四隅に柱を配する竪穴住居跡であるが、北西隅は後世の攪乱を受けている。

カマド(第27図)は基底を舟底型に、竪穴外から竪穴内へ緩傾斜させ、地山を掘りこんだカマド尻部に軽石粒混入暗褐色土(ⅢD j)を堅く叩き締めて盛土している。ⅢD j層中には軽石粒の純層(X)があるが、これはカマド構築中に軽石の降下があったのではなく、人工的に軽石純層を敷き固めたことを物語っている。すなわちカマド構築時に降下軽石が、生活行為や雨風によって散乱されずに、敷き詰めた量を確保できたことを示していて、カマド構築は軽石降下直後であったと見ていいだろう。盛土のⅢD j層上に粘土(Ⅷp)を貼ってカマド床としている。煙道の空洞は廃屋後も長期間残存していたようで、煙道壁材である暗紫色粘土塊を混入する黒色土(ⅡⅧp)が空洞に埋積している。その上位にはカマド構築材である焼成粘土塊(Ⅷp)が、煙道部を覆うように残存していて、カマドの旧態を良く止めている。

遺物 竪穴内出土遺物は土師器甕、小型甕である。

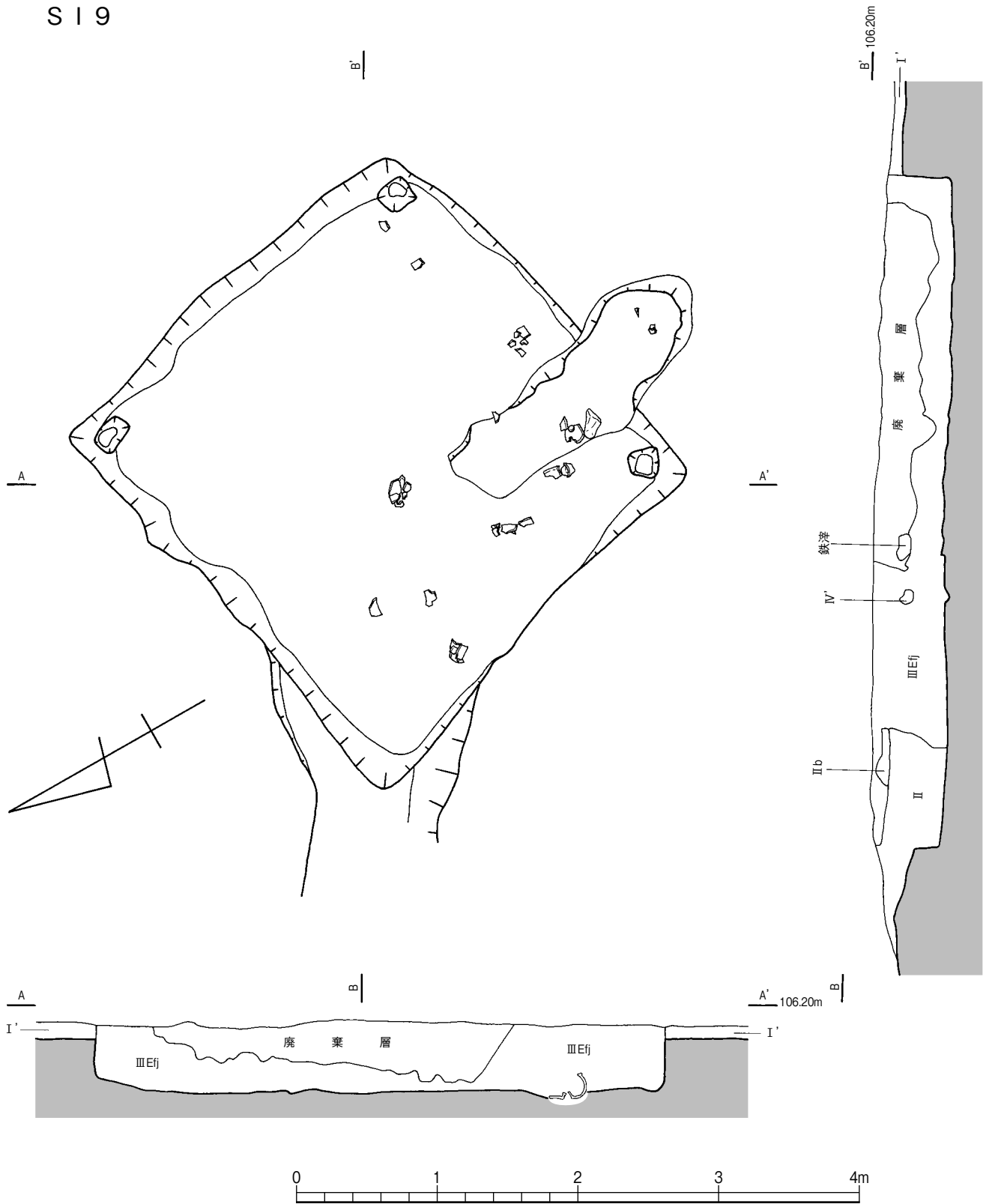
第27図1はカマド前庭部床面上出土の小型甕で、口径13.2cm、器高12.5cm、底径7.4cm、口縁部を横ナデ、器表は0.7~1cm幅のヘラケズリが、体下部から上方へ行われ、底立ち上がり部は横位に行われている。1.5cm前後幅の8段の巻上げ(積み上げカ)成形痕が明瞭に残る。内面は木口状工具によるナデ調整。底外面には粗砂粒付着。2・3は甕体上部である。2は口縁部が「く」の字に外反し、器表は9段の巻上げ痕が明瞭で、一部に木口状工具によるナデ痕が見られる。内面は巻上げ痕を丁寧にツブシて消した上から、木口状工具による横位のナデ調整が行われている。3は推定口径24cm、現器高13cm、器表に1~1.5cm幅の10段の巻上げ痕が明瞭で、内面は木口状工具によるナデ調整。4は甕底部で底径7cm、現器高12.2cm、器表は1~1.5cm幅に上方から下方へのヘラケズリ、内面は木口状工具によるナデ調整、底外面は細砂粒付着。

時期等 本竪穴はカマドをもつことから住居跡と判断した。時期は出土した土器から、10世紀前葉~中葉と考えられる。



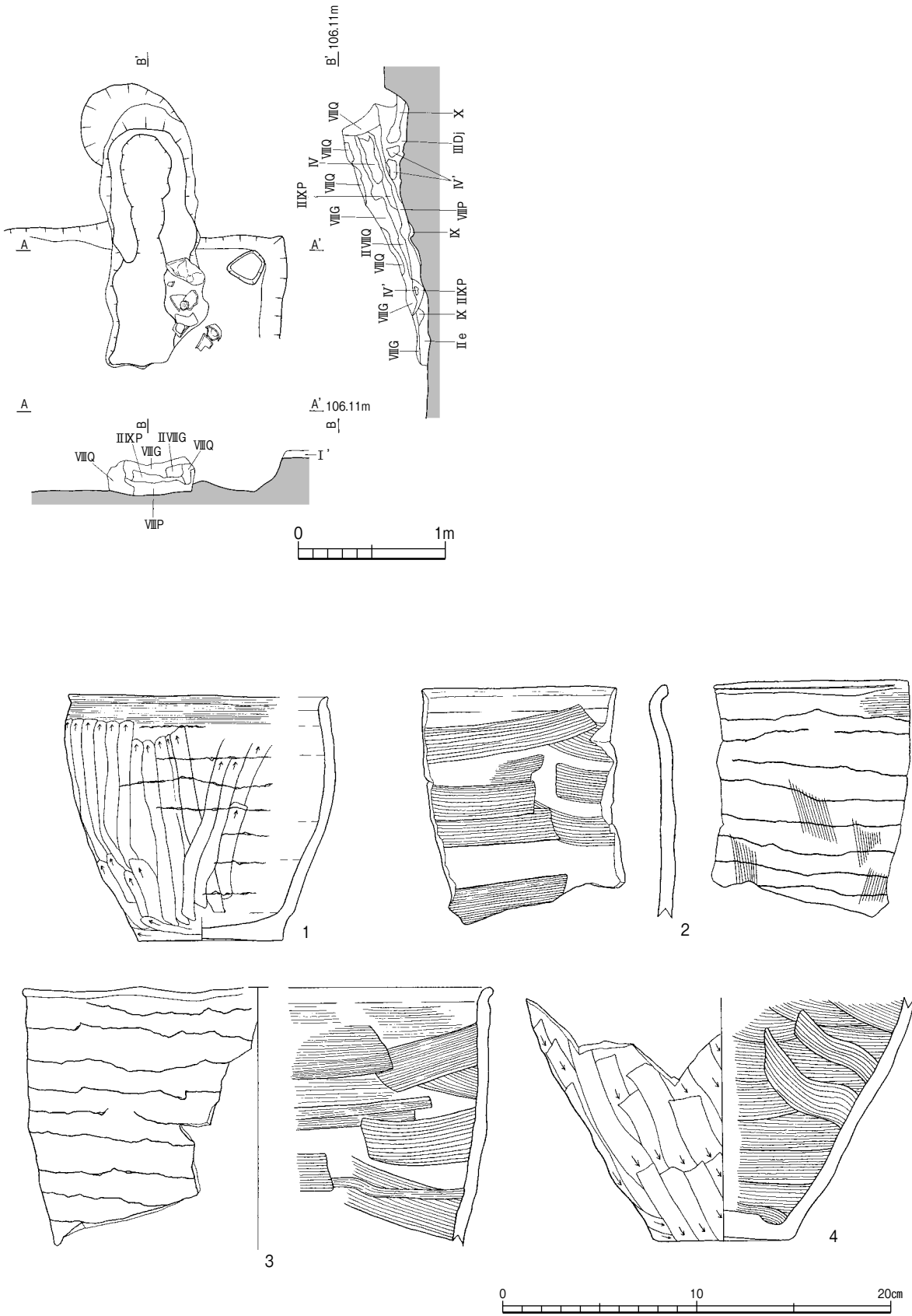
第25図 S I 7出土遺物

S 19



第26図 S 19

S19カマド



第27図 S19カマドとS19出土土器

S I 10 付SB5 (第28~31図)

位置 6・7・8・9-j・k・l区に検出。

遺構 堅穴住居(S I 10)に掘立柱建物(S B 5)が取り付く形態である。S I 10堅穴内には軽石粒を混入する埋積土が堆積している。南壁1/3東第1分割点に旧カマド、南壁1/4西第1分割点に新カマドが構築され、旧カマドの堅穴内部分は新カマド期の生活のために完全に削平されている。新カマドは石芯構築で、堅穴外から内に向かって緩やかな舟底型に浅く掘り、粘土(VIII m)を貼って構築している。カマド前床面には径1~1.3mの浅い楕円形掘り込みがあり、それがカマド前での作業範囲、すなわちカマド前庭部の範囲であろう。

東壁中央部床面に、南北1.4m、東西0.7m、深さ0.5mの長方形プランの貯蔵穴があり、貯蔵穴南壁直下床面から木製柄付刀子が出土した(第31図2、図版12)。貯蔵穴の埋積土最上位には、旧カマドの青灰色灰層(H t)が覆っていて、貯蔵穴は旧カマド使用時のもので、新カマド使用時には埋め戻されていたと考えられる。

S B 5掘立柱建物は、堅穴住居の南側、すなわちカマド設置壁側に構築されている。梁間は東西に2間(x i-x ii-x iii)で柱間は2.6mで、全長は7.8mで堅穴幅より東・西に1.1mほど幅広である。桁行は南北に3間(y i-y ii-y iii-y iv)で柱間は3.3mで、全長は8mを測る。柱穴を結んで壁溝が見られることから、矢板状の壁板材が立てられていたものと考えられる。柱穴及び壁溝には、軽石粒混入の暗褐色土(III D j)が埋積している。

遺物 堅穴内からは土師器の小型甕、甕、鍋の破片や、須恵器の小片、鉄製品破片が出土した。

第30図1はカマド出土の小型甕で、復原口径13.2cm、現高15cm、最大径が体中央部にあつて15.5cm。口縁部を横ナデした後、器表に0.7~1.5cm幅の下方から上方へのヘラケズリを密に行い、内面は頸部から体部に横位の木口状工具によるナデが密に行われている。

2・3は床面および貯蔵穴内出土破片から復原できた小型甕である。2は復原口径13.8cm、最大径が肩部にあつて16.3cm、巻上げ痕が明瞭に残る。3は復原口径9.6cm、器高13.4cm、底径7.8cm、最大径が体中央部にあつて13.5cmを測る。底外面に粗砂粒が付着し、巻上げ痕が明瞭に残る。2の器形は3と同じであろう。

4はカマド焚口部出土の甕で、口径21.4cm、最大径が体中央部にあり23.3cm、現高25.2cm。胎土全体に粗砂粒を含み、器表は口縁を横ナデした後、丁寧なヘラケズリが下方から上方へ行われているが、体中央部にはそれが明瞭に残されていない。あるいは体中央部には施工しなかったのかもしれない。内面は化粧粘土が貼られていて平滑である。

5はカマド内出土で、全体が二次焼成を受けて赤褐色に焼き締まっている。口径24.8cm、現高26cm、口縁を横ナデ、器表に雑なヘラケズリを行い、巻上げ痕が明瞭に残る。

6はカマド出土の甕底部で径7.3cm、器表は上方から下方へ丁寧なヘラケズリ、内面には底部と体部の接合のための、指頭による押え付け痕が明瞭で、底外面には粗砂粒が密に付着している。

7は床面及び貯蔵穴内出土破片で復原できた甕底部で径5.4~6.4cmを測る。器表は雑なヘラケズリ、内面は木口状工具で丸底状にナデ整形されている。底外面には粗砂粒が密に付着している。

8~10はカマド出土。8は甕下半部で、体中央部径25cm、底径10cm。体部器表は雑なヘラケズリが下方から上方へ、底立ち上がり部はやや丁寧に上方から下方へ行われている。体部には巻上げ痕が明瞭に残り、底外面には粗砂粒が付着している。9・10は鍋である。9は復原口径30cm、現高16cmを測る。器表は雑なヘラケズリを体上位、体中位の二段に分けて行っている。内面は横位に細かな目の木口状工具によるナデ調整。口縁部が外反する。全体に粗砂粒が混入。10は復原口径40cm、器高18cm前後、

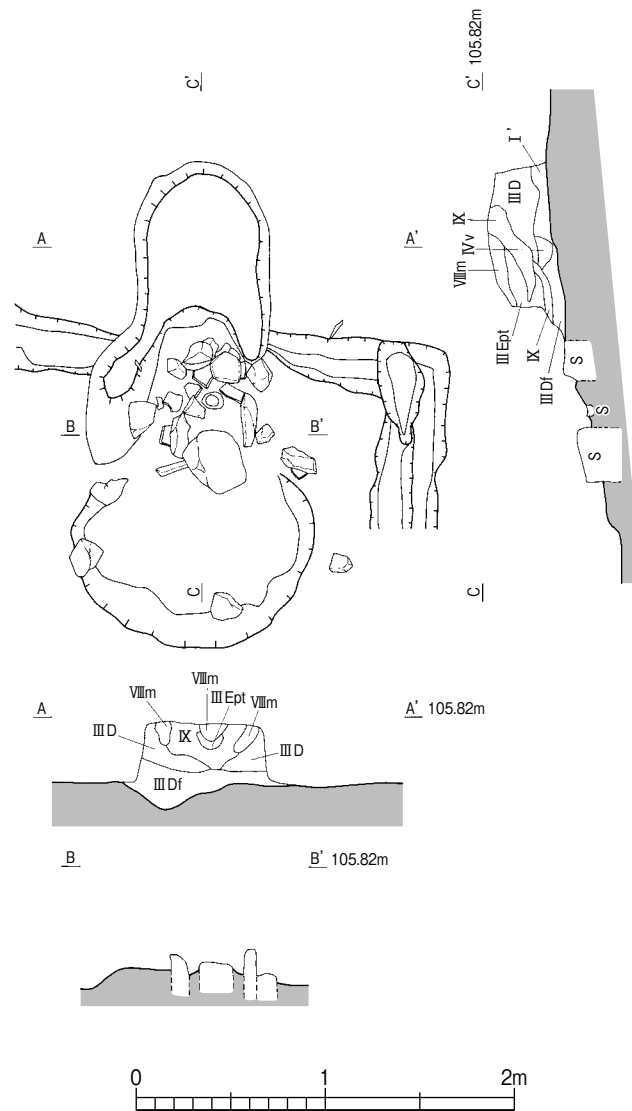
IV 調査の記録

底径7.8cmを測り、底部から直線的に開く鉢形を呈す。体部器表は下方から上方へ1～1.5cm幅のヘラケズリ、底立ち上がり部は上方から下方へ1cm幅のヘラケズリを丁寧に行っている。内面は木口状工具によるやや深みをもつナデ調整。底立ち上がり部に接合のための指頭による押え付け痕が明瞭に残る。器表全体に煤付着。底外面全体に粗砂粒が密に付着。

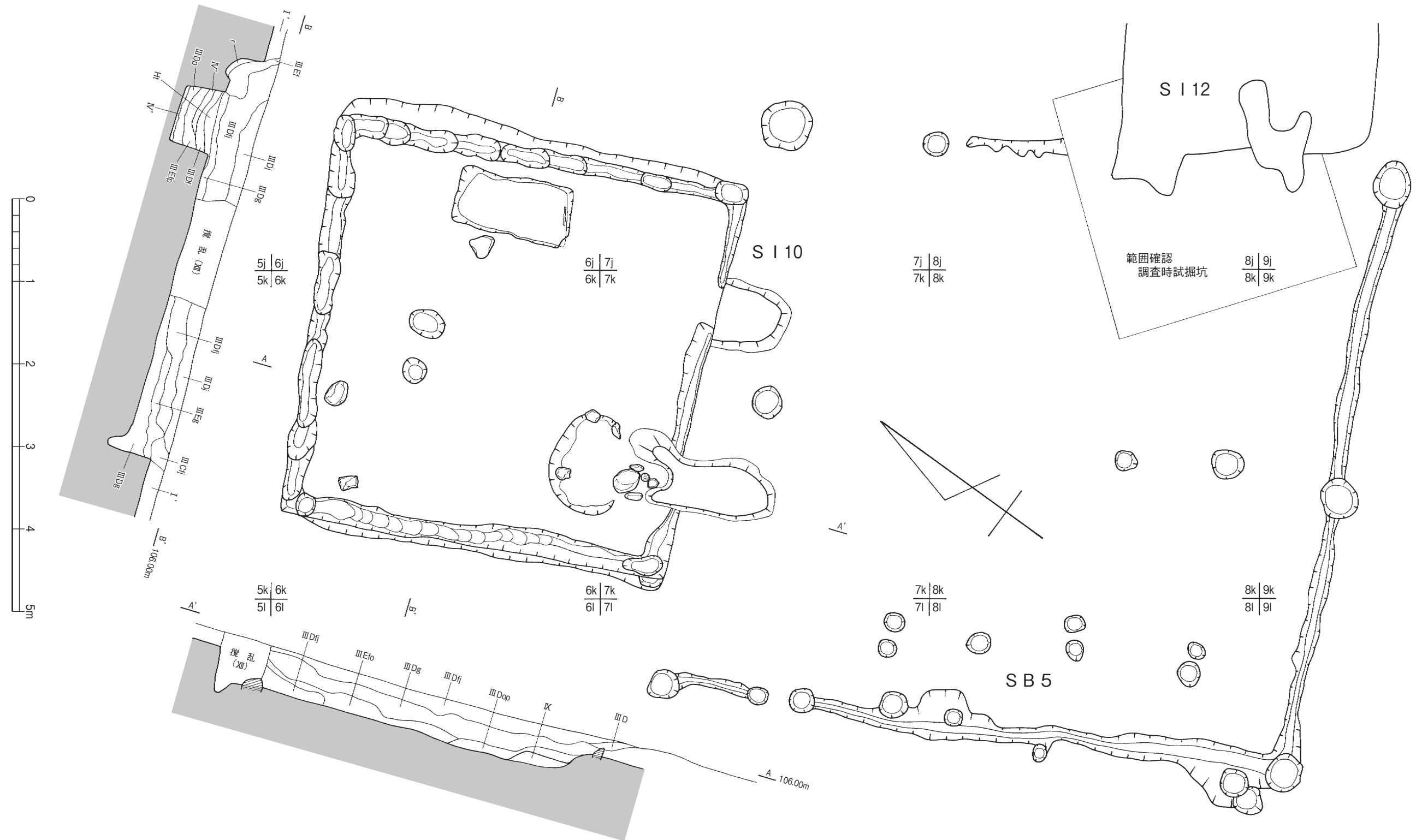
第31図1はカマド右袖部出土の柄付刀子で、全長13.5cm、刀身7.1cm、柄部は木の柄に幅3～5mmの樹皮を巻き付けている。2は貯蔵穴南壁直下床面上出土、現長17cm、刀身6.3cm、柄部は木の柄で、一部に握り使用による摩滅がみられる。3は刀子または手鎌の身部の破片で、断面は逆二等辺三角形をしている。2と同一個体の可能性もある。4は金属鉄を内在する椀形鍛冶滓で、メタル度は錆化(△)である。

5はS B 5出土の土師器甕底部で、内面に指ナデ、器表面に斜位のヘラケズリ、底面は不調整である。胎土に3mmほどの小礫を含む。

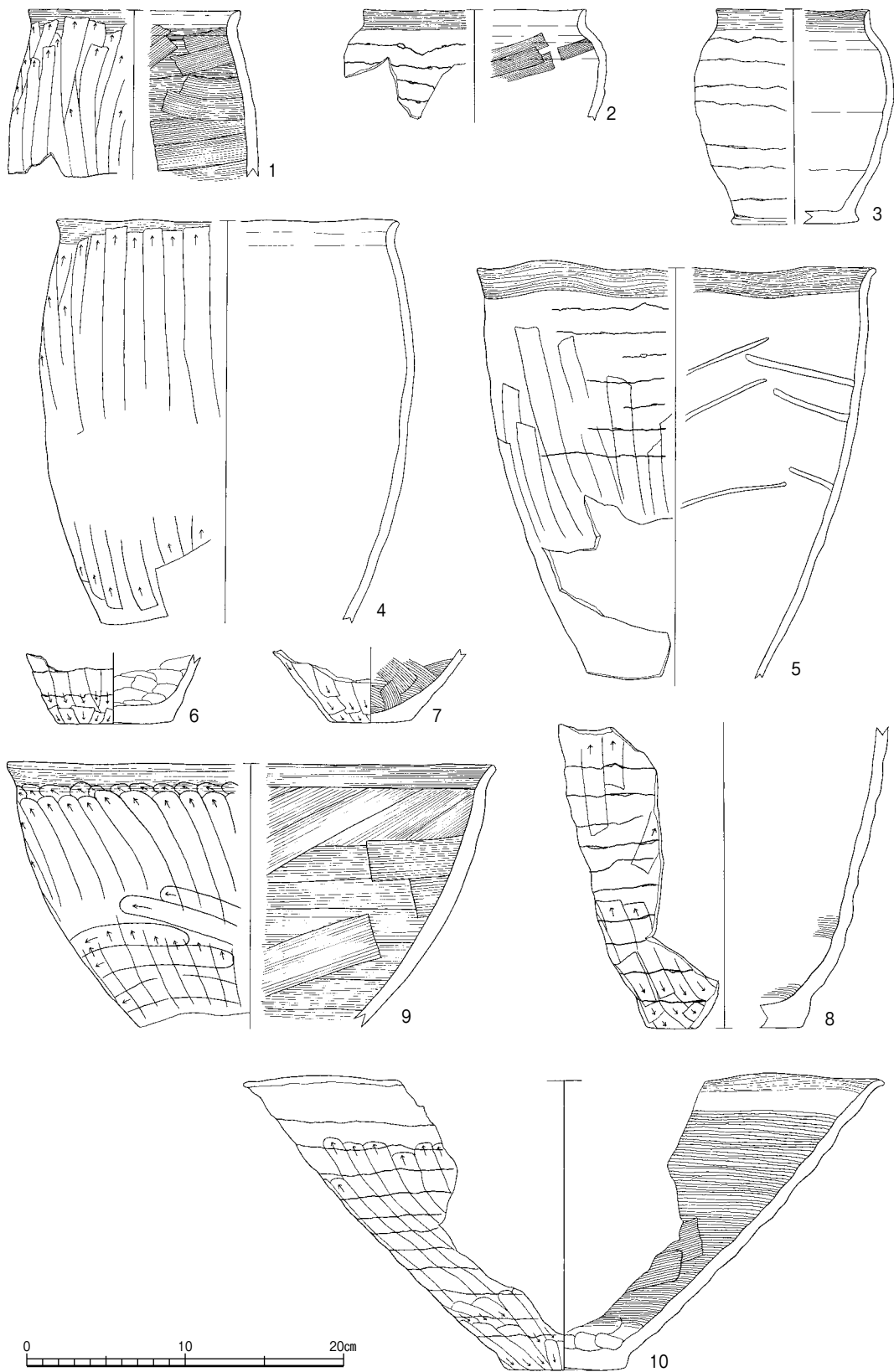
時期等 本竪穴はカマドをもつことから住居跡と判断した。時期は、床面から出土した土器がⅡ・Ⅲ期であることから、10世紀前半頃に構築され、10世紀後半には放棄されたものと考えられる。



第28図 S I 10カマド



第29図 S I 10・S B 5



第30図 S I 10出土土器

S I 11 (第32~34図)

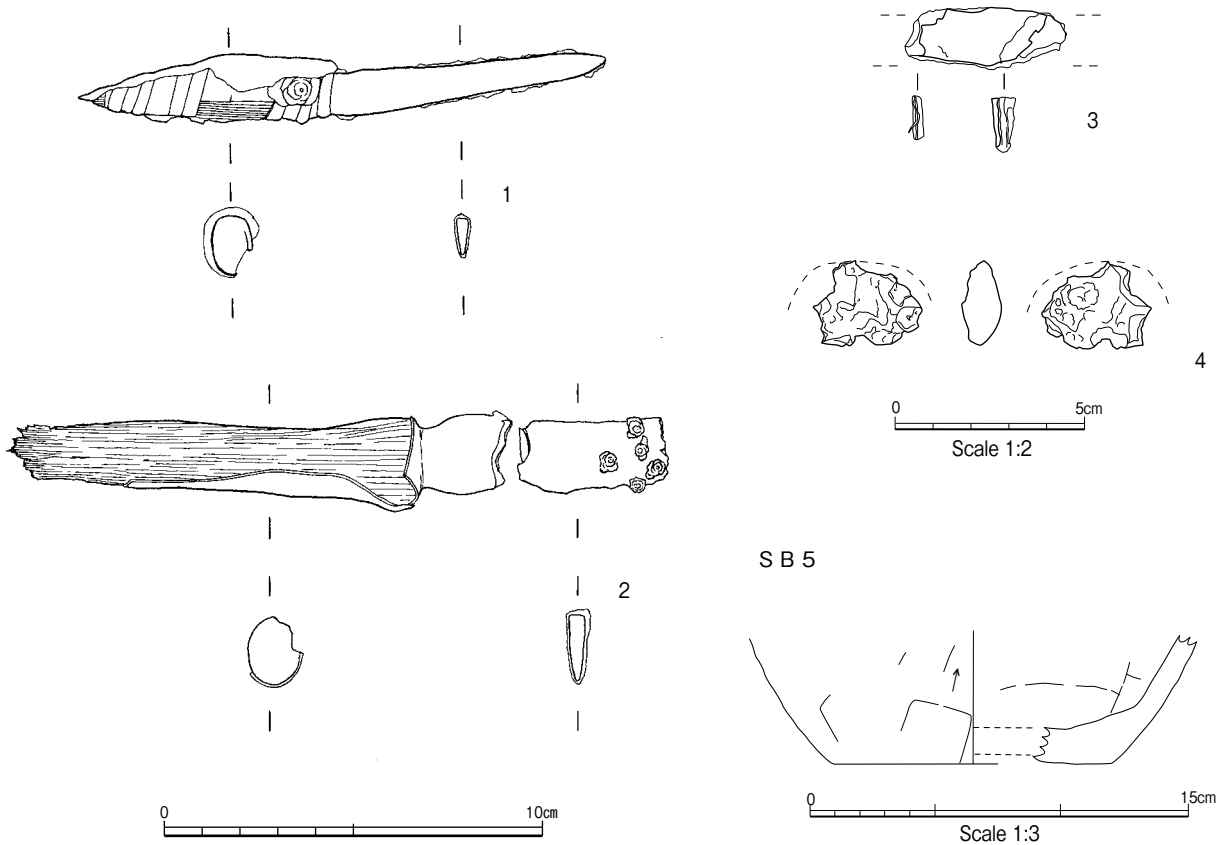
位置 S I 11は7・8-h・i区に検出。

遺構 焼失家屋で建材炭化物を多く検出した。竪穴西壁南側1/4の地点に、幅60cm、長さ80cm大の一枚板の壁板材を、竪穴内に倒れ込んだ斜め状態で検出した。北壁中央部には壁板材の上位に、直交する長さ130cm、幅20~25cmの板材を検出したが、これは壁板材より上方に組まれていた上屋材の一部であろう。

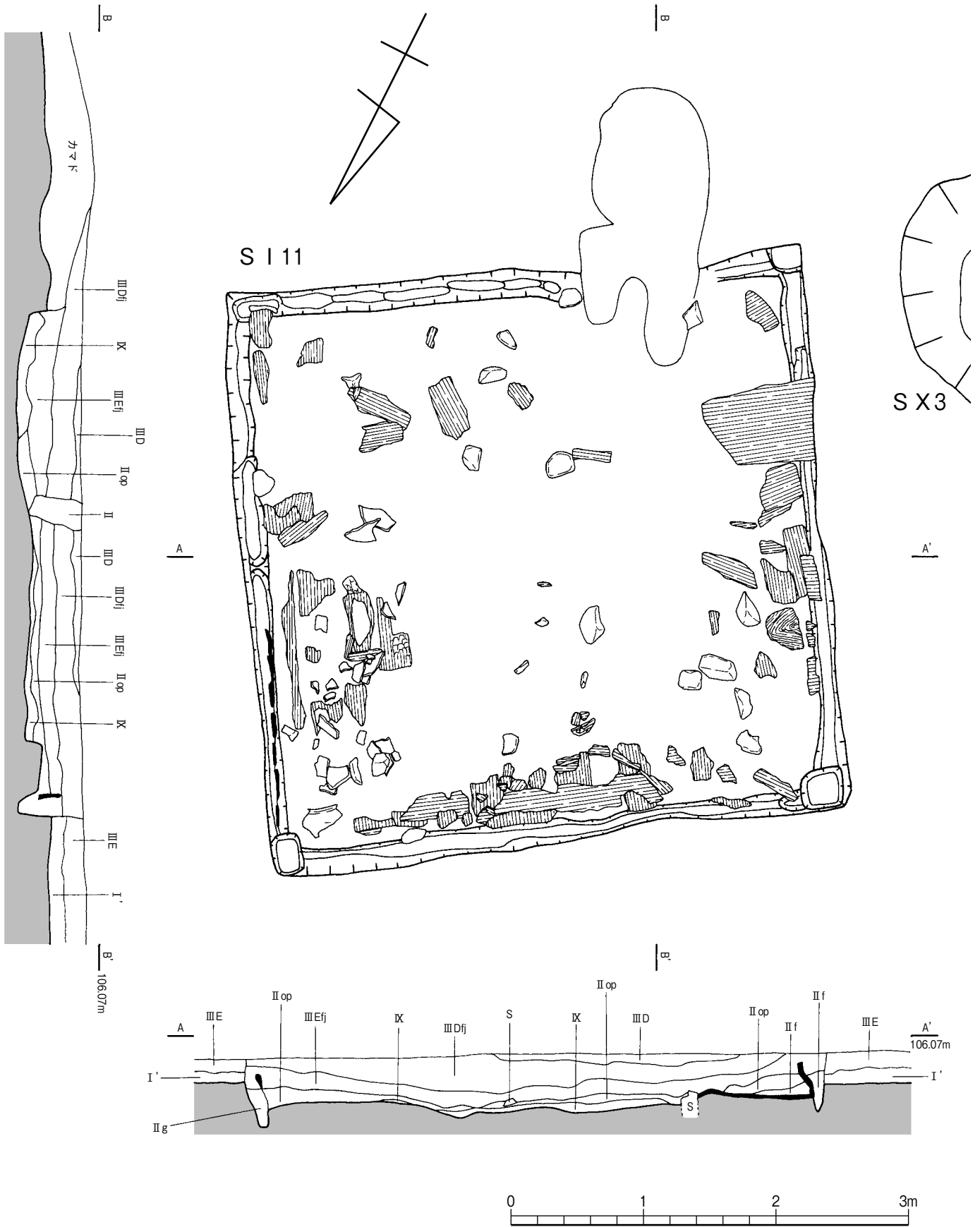
東壁下北側半分には、幅20cm前後の矢板状の壁板材が、壁溝に埋まったままで7枚検出した。また、東壁中央部やや北寄りの床面に、南北方向に長軸をそろえる床板材を4枚ほど検出したが、この部分にだけ床板材が残存していることは、人の踏み締めなどが影響した出入り口部であることを示しているのかもしれない。

カマドは焚口・燃烧部が石芯構築で、カマド尻部は漸移層まで浅く掘り込んで粘土を貼って床部を構築している。カマド支脚には粘土を円筒形に、羽口様に成形した道具を作って使用していて、土器底部を再利用している他の例とは異なる。支脚は胎土に介在物を混じえない粘土だけで作られていて、取り上げようとするとき細粒状に碎けてしまった。

S I 10

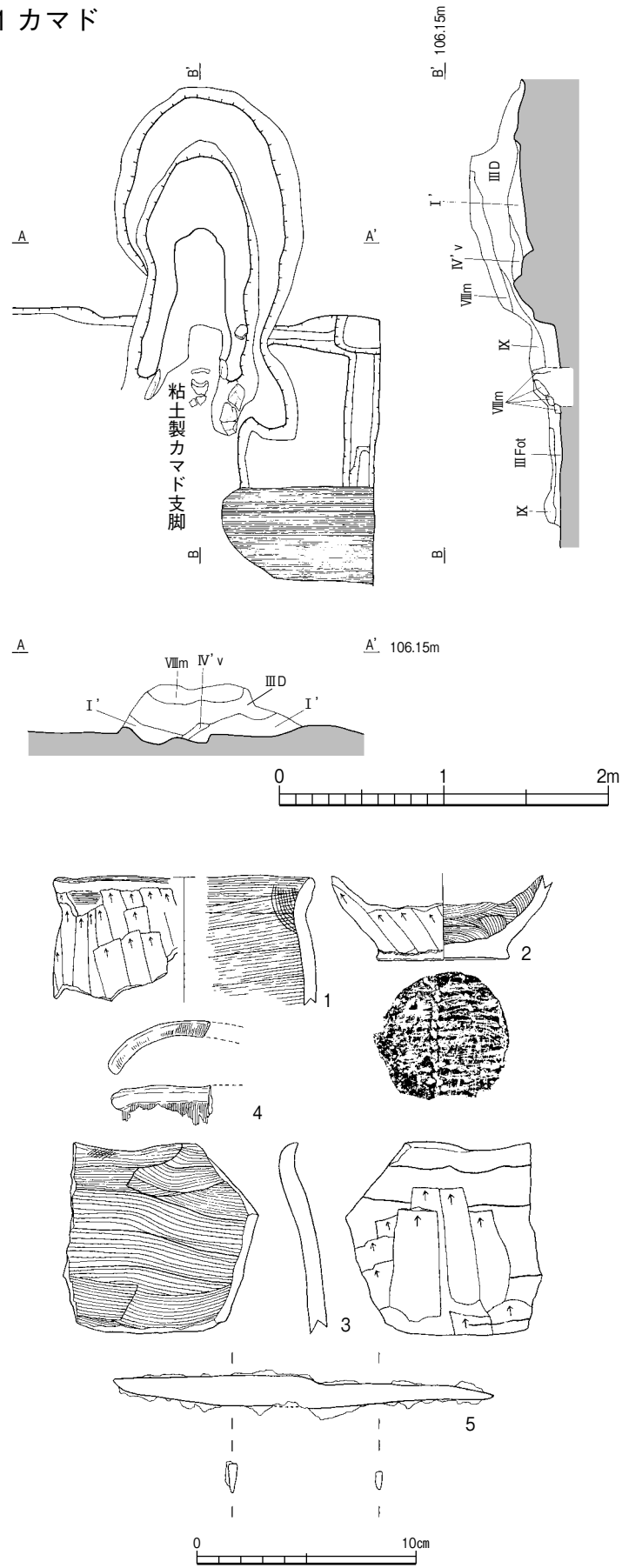


第31図 S I 10・S B 5 出土遺物



第32図 S I 11

S I 11 カマド



第33図 S I 11カマドとS I 11出土遺物

遺物 竪穴内から土師器の小型甕、甕、鍋の破片や鉄製品、炭化木器が出土した。

第33図1は小型甕で、復原口径12cm、胎土に微砂粒を含み、焼成は良好で丁寧なつくりである。器表は下方から上方への1cm～1.5cm幅のヘラケズリ、内面は木口状工具による丁寧なナデ調整が行われている。2は、カマド出土の小型甕底部で、二次焼成を受けて硬く焼き締まっている。器表は底部立ち上がり部から上方への1cm幅のヘラケズリ、内面は幅1cmほどの木口状工具による丁寧なナデ調整が行われ、底外面に禾本科植物を編んだ編み物痕が押圧されている。3は、甕口縁部破片で、胎土に細砂粒を含む。口縁部はツマミアゲにより端部は鋭角に外反する。器表は粗いヘラケズリが下方から上方へ行われ、内面は幅広の木口状工具によるナデ調整が横位に行われている。

4は、住居跡内炭化材中より検出した櫛破片の身部で、取り上げの際に歯は細片に碎けてしまい、切り込みによる歯の基部が残存している。

5は、カマド構築粘土中出土の鉄製刀子で、長さ17.3cm、刀身8.7cm、身の最大幅1.3cmを測る。

第34図1・2は須恵器甕。1は体部破片である。内面の当て具痕は不明瞭で、外面平行タタキ目である。2は口径19cmで、口頸部は短く開き、端面をもつ。体部内面の当て具痕は不明瞭である。外面は平行タタキ目で、口縁部はロクロナデである。肩部に「十」のヘラ書き記号をもつ。

時期等 本竪穴はカマドをもつことから住居跡と判断した。遺物の時期はいずれもⅢ期を主体とする。

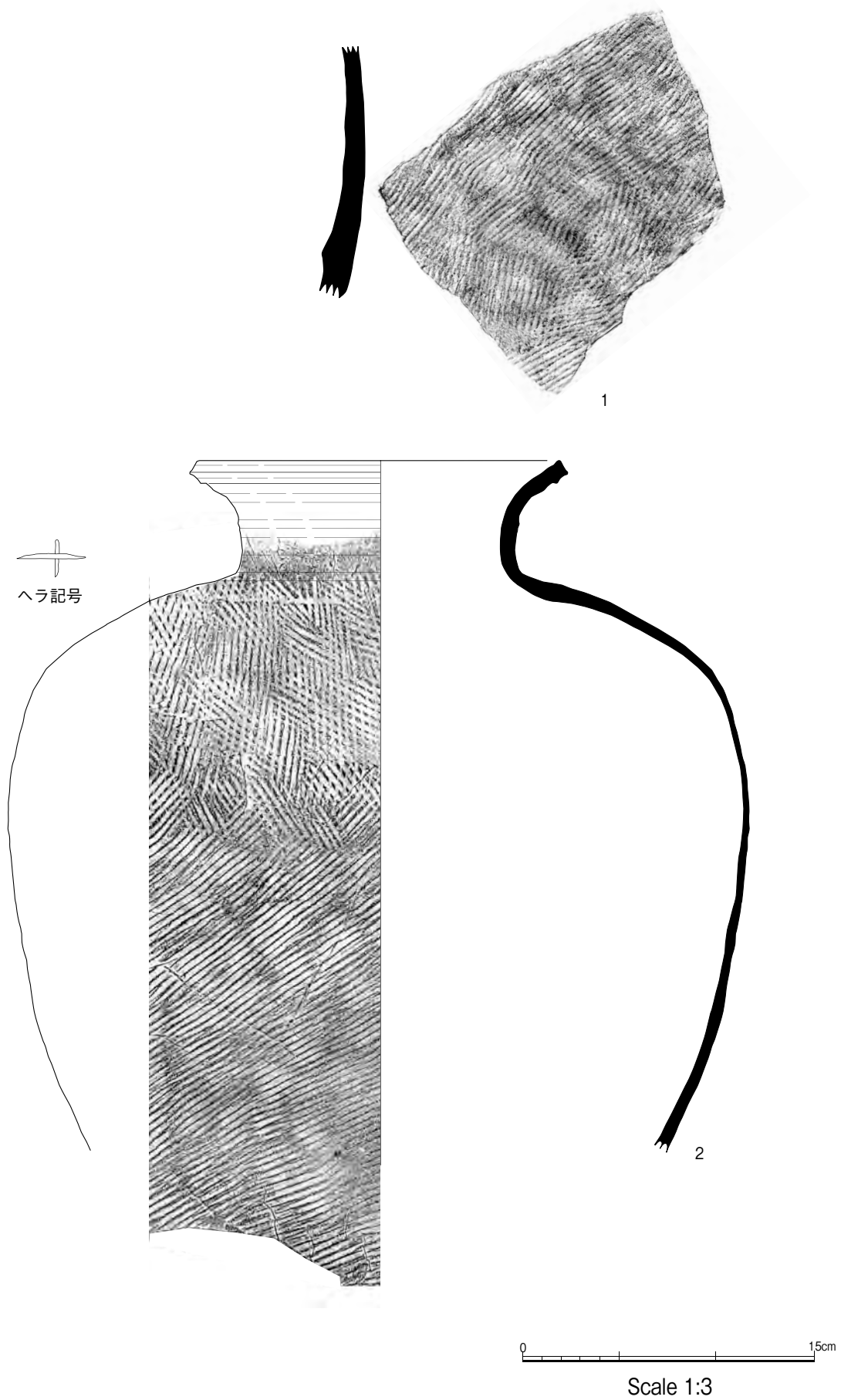
S I 12 (第35・36図)

位置 8・9-i・j区に検出。S I 12埋積土を掘り込んだSD5を6・7・8・9-h・i・j区に検出した。

遺構 S I 12埋積土には全体に軽石粒が混入し、SD5埋積土にも軽石粒が混入している。竪穴西側は確認調査時の14cグリッドにあたり、カマド構築材である粘土を確認した時点でグリッド調査を止めたため、竪穴遺構の保存状態は良好である。S I 12は、黒褐色土層中(ⅢE)から掘り込まれた3m方形の小竪穴であるが、南西壁にカマドを設け、西隅部に緩傾斜する張り出し出入口をもつ特徴がある。出入口部と竪穴床面境に仕切り溝がある。

カマド前庭部及びカマドと出入口の間に浅い掘り込みがあって、カマド仕事の間を確保している。カマドは石芯構築である。

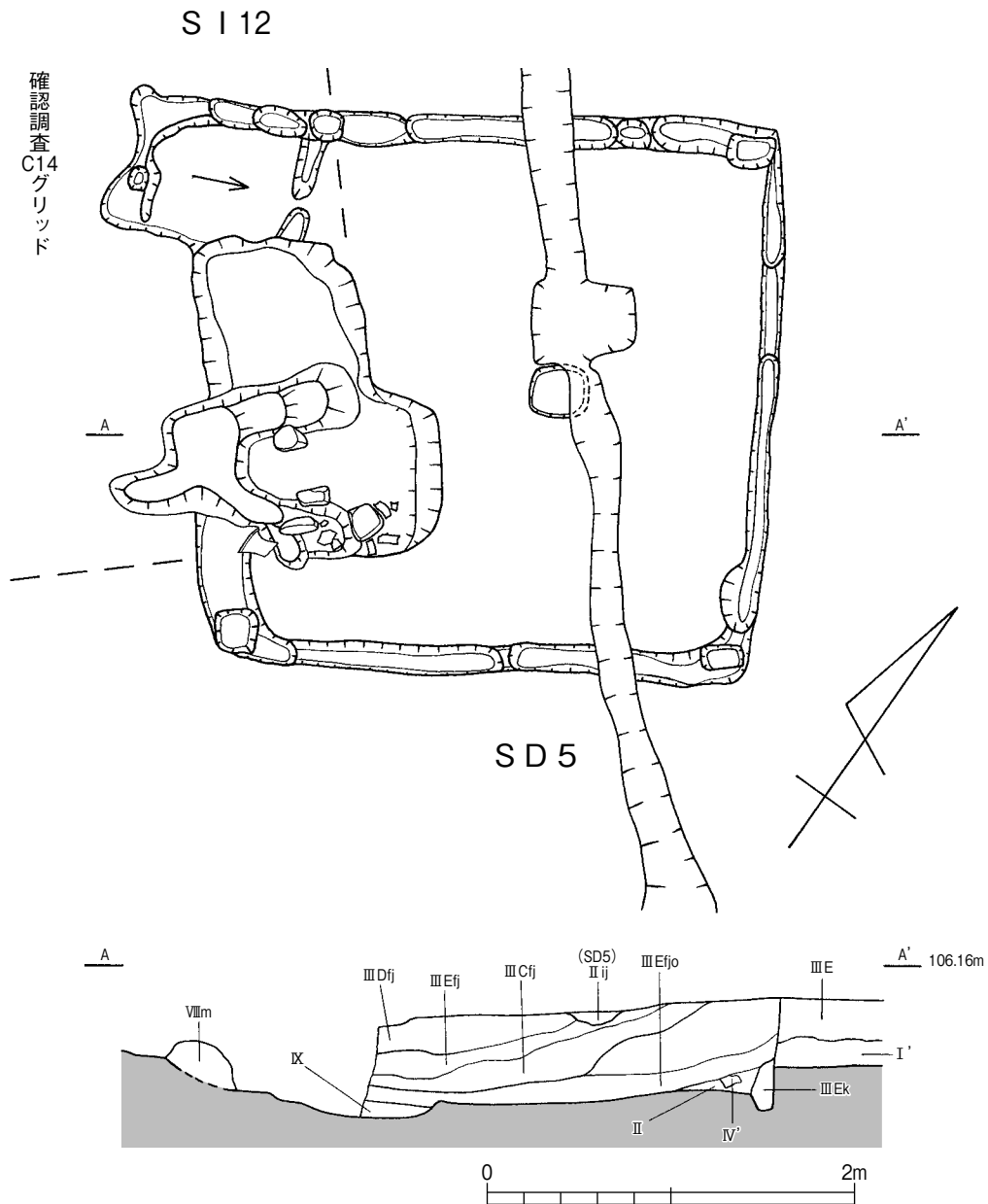
遺物 竪穴内から土師器の小型甕、甕、鍋の破片が出土した。鍋の破片は接合復原できず形状は不明である。第36図1は小型甕口縁部で、復原口径11.5cm、口縁はツマミアゲでわずかに外反する。口縁部の横ナデ幅が広い。器表には2cm前後幅の輪積(巻上げ)痕が明瞭に残り、ケズリ等の整形痕は見当たらない。2は確認調査時の14cグリッドから出土した小型甕口縁部で、復原口径13cm、口縁はツマミアゲで直上、横ナデ幅がやや広い。器表には1～1.5cm幅の巻上げ痕が明瞭に残り、幅0.3～0.5cm幅のヘラケズリが縦位に粗く、内面は木口状工具によるナデ調整が丁寧に行われている。3は甕で、復原口径17.8cm、最大径は体中部にあって19cm前後を測る。器表体上部はケズリとは言えない軽いタッチのヘラナデが行われているが、その仕事が下方からか上方からかの胎土砂粒の移動等の情報は得られない。体中部から下半にかけては、下方から上方への1.5～2cm幅のヘラケズリが、少なくとも2回以上にわたって(重ねて)丁寧に行われている。内面は木口状工具による横ナデが丁寧に行われている。4はカマド出土の甕で、内外面全体に煤が付着している。復原口径21cm、口縁部が外反し、緩やかな波状となって、真上から見ると六弁状に口縁が開いている。器表は体上半と下半の二段に分けて、どちらも下方から上方へむかってヘラケズリが行われている。内面は丁寧な木口状工具による横ナデが行われている。



第34図 S I 11出土土器

5・6は甕底部。5は底径7.2cm、器表は体下半から底縁部にかけて上方から下方へのヘラケズリ、内面には指頭による接合成形のための押圧が顕著。底外面に粗砂粒付着。6は底径8cm前後。器表は立ち上がり部に左方から右方へのヘラケズリ、体下半は下方から上方へのヘラケズリが、内面は木口状工具によるナデ調整が丁寧に行われている。底外面に成・整形時の作業台の痕跡と考えられる柁目痕が明瞭。

時期等 本竪穴はカマドをもつことから住居跡と判断した。時期はⅢ期であり、10世紀の後半頃の年代観が与えられる。



第35図 S I 12

SB1 (第7図)

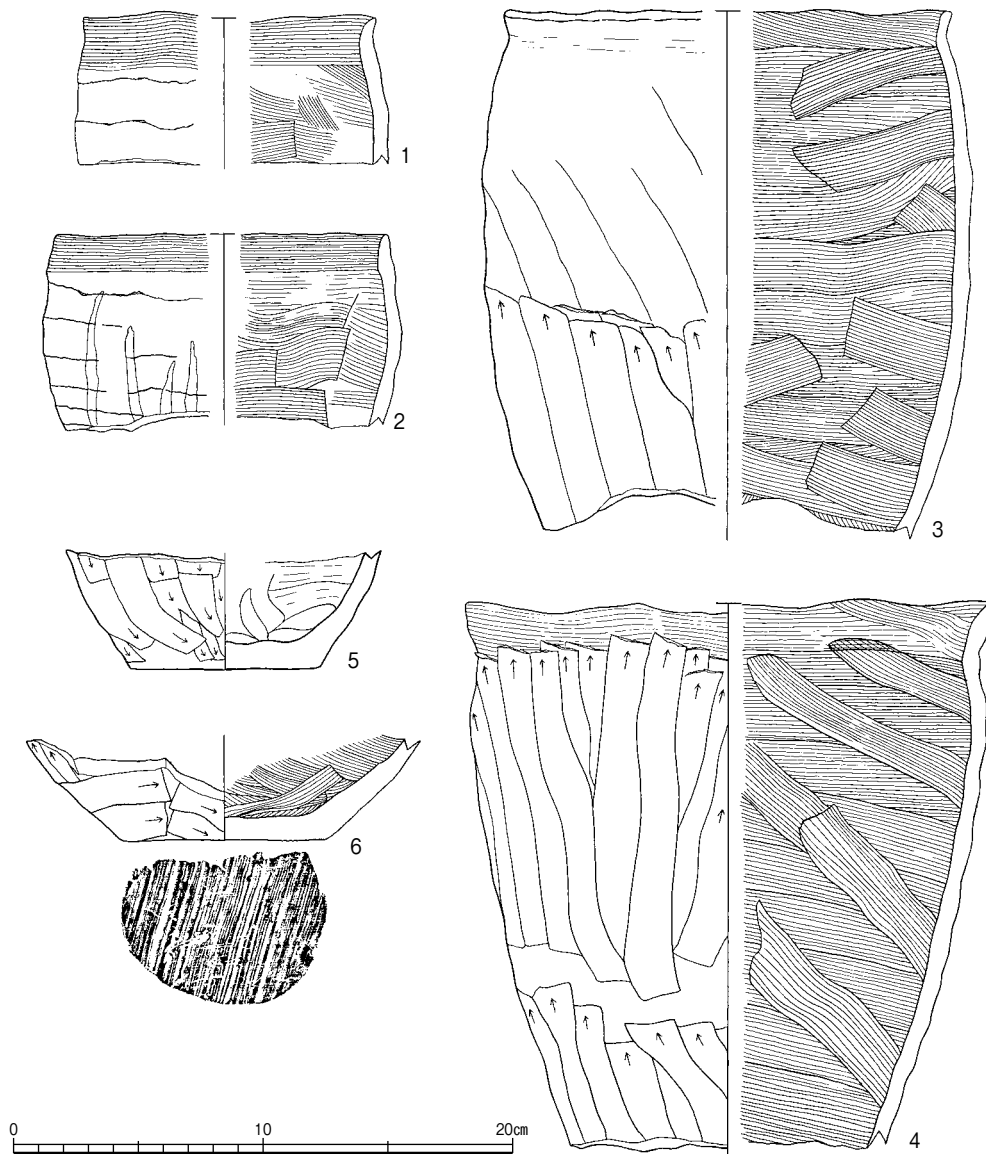
位置 I区の西端部5・6-s・t・u・v区に位置する。

遺構 SB2などと同様、有溝掘立柱建物跡(N-61°-E)かまたは板塀跡の可能性はある。柱間などは不明である。出土遺物はなく、時期も不明である。

SB3 付SD4 (第37図)

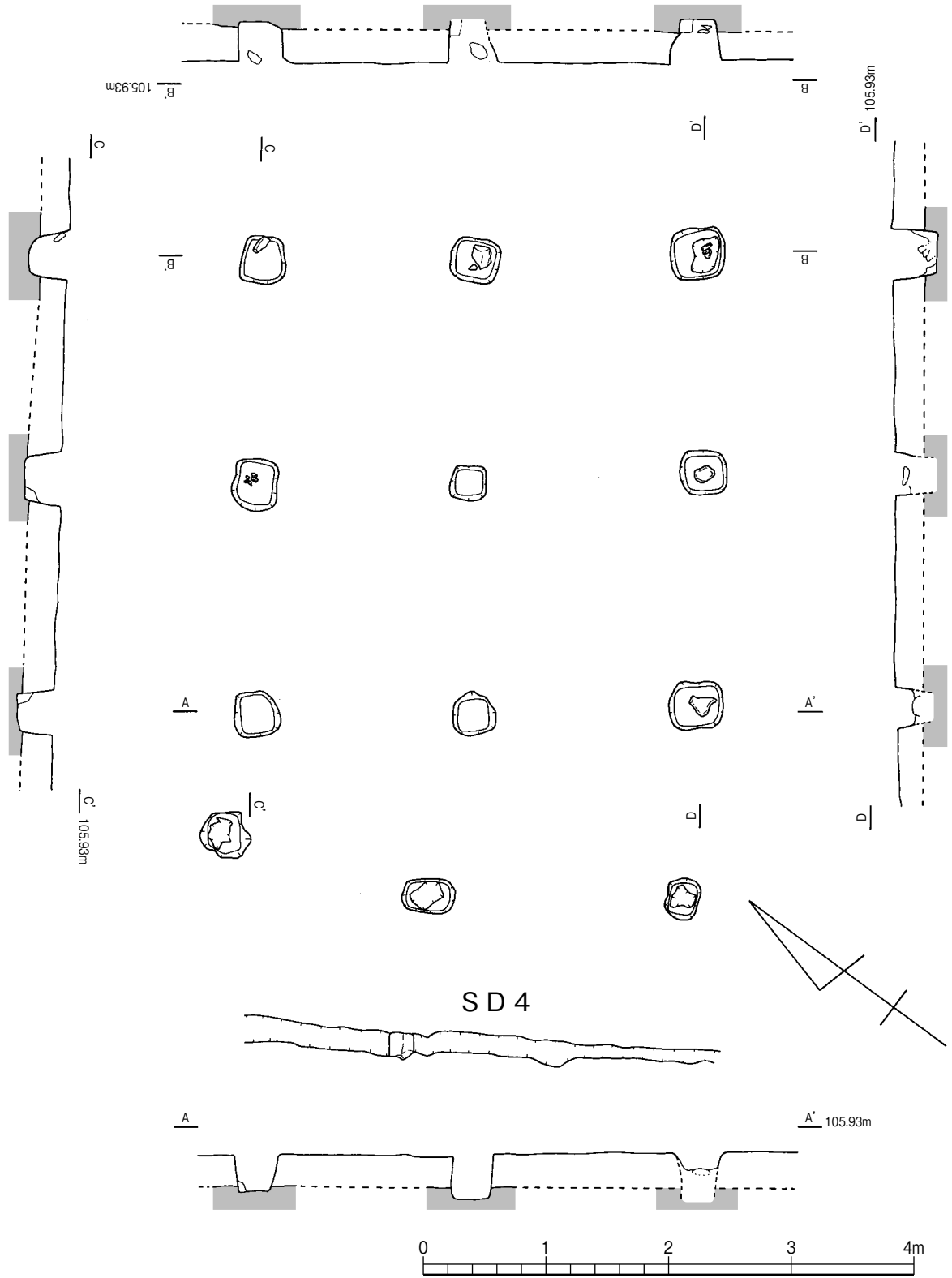
位置 4-t・u区にある。

遺構 2間(3.7m)×2間(3.6m)の建物跡(N-35°-W)である。柱間はいずれも等間である。柱掘り方は一辺30~40cmの方形である。深さ30~35cm(確認面より、以下同じ)である。なお、この建物跡の西には南北方向の溝跡(SD4)がある。



第36図 S I 12出土土器

SB 3



第37図 SB 3・SD 4

S B 4 (第23図)

位置 2・3・4・5 - j・k・l 区に検出。

遺構 S B 4はS I 6埋積土を掘り込んで構築した、梁間2間×桁行3間の総柱立の掘立柱建物跡である。梁間(東西 = x i - x ii - x iii)は柱間2.7mで、全長5.4mを測る。桁行(南北 = y i - y ii - y iii - y iv)は柱間2.7mを基調とするが、y iii - y iv間はやや広く2.9~3mを計測し、全長9.5mである。梁間、桁行とも柱芯通りが軸から左右に若干振れている柱穴もある。

掘り方の確認面は黒褐色土層(ⅢE)上位で、地山面まで0.5mほど掘り込んでいるが、地山面での掘り込みは10~15cmと浅い。掘り方は長軸1m内外、短軸0.8mの楕円形を基調とし、掘り方内には軽石粒・ローム粒を混入する暗褐色土が充填され、柱穴に埋土した黒色土と容易に識別できた。y ii列とy iii列はS I 6と重複していて、掘り方の基底はS I 6の床面を掘り窪めてある。

S K 1 (第21図)

位置 2 - i 区に検出。

遺構 現状で東西1.2m、南北1.2mを測るが、南北軸は北側調査区外に延びていて、全体は長方形を呈すると考えられる。遺物は出土しなかった。

S K 2 (第21図)

位置 2 - i・j 区に検出。

遺構 鍋底状の略楕円形の土坑で、柱穴等の付属施設は確認できず、遺物は出土しなかった。

S K 3 (第21図)

位置 3 - i 区にある。

遺構 S I 5の西側ほぼ中央に、S I 5の埋積土を掘り込んでつくられた、東西1.6m、南北1.4mの北隅がやや張り出す略矩形の土坑。S K 2同様に付属施設は確認できず、遺物は出土しなかった。

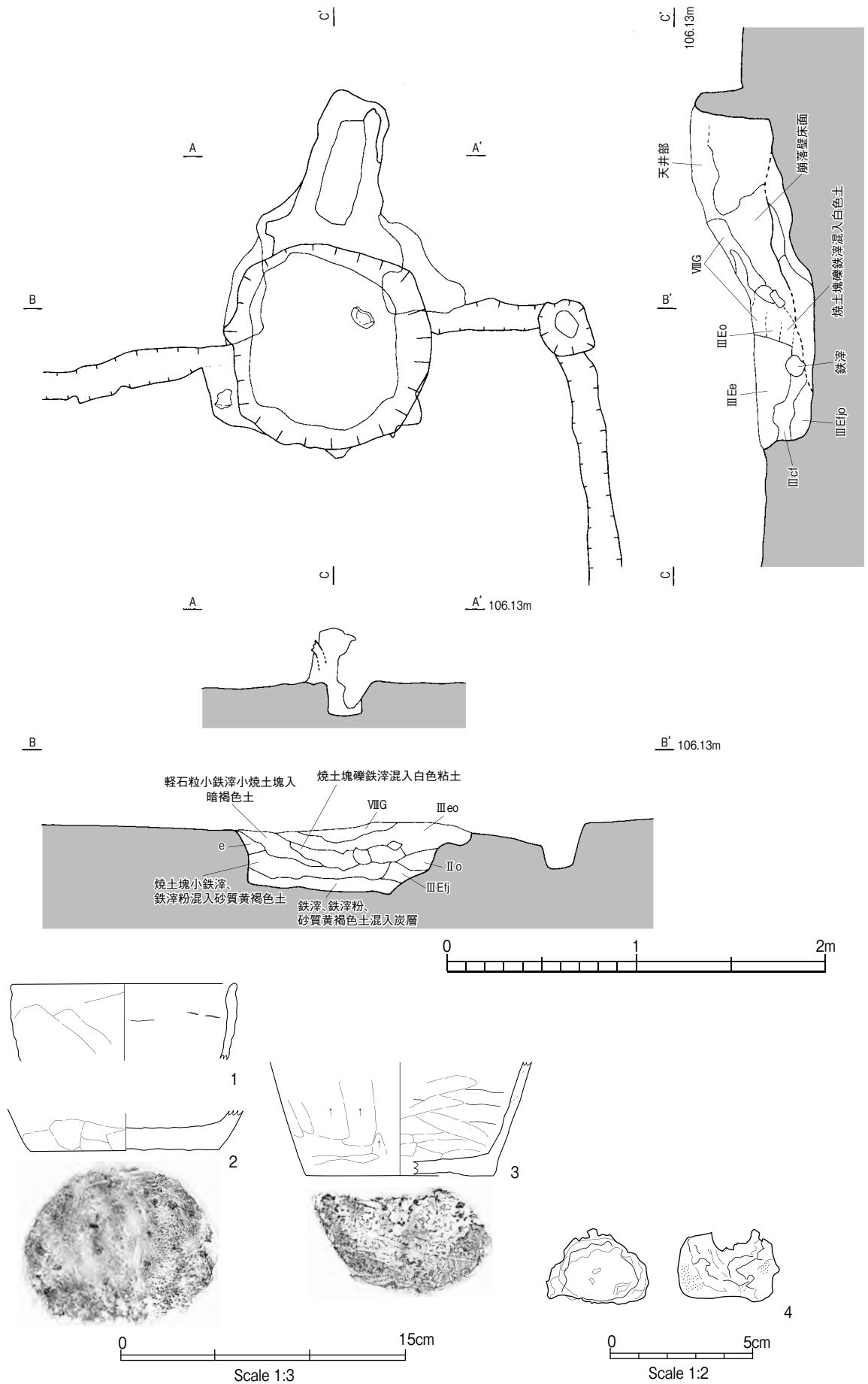
S X 2 (第38図)

位置 I 区の中央部、5 - o区で検出した。S I 3の掘り下げ中に住居の北部より東側の部分で多量の鉄滓が出土したことから確認した。S I 3については焼失住居であり、住居埋積土上層から多量の炭化材・炭化物を検出している。住居埋積土内では炉体が確認できず、住居により切られていることが考えられる。よって本遺構はS I 3より古いものと考えられる。

遺構 本遺構は、住居による破壊が著しく、炉の一部が残存しているのみであった。多量の鉄滓、炉壁破片ならびに粘土ブロックが一部残存している状況で検出された。土層埋積状況においても、明瞭な炉床部が検出されなかった。前庭部については住居床面下に掘り込みがあり、ここに存在した可能性が考えられる。

本遺構の排滓場については、本遺構より北東に約3m離れたところに検出したS I 9の埋積層から排滓と考えられる製鉄関連の鉄滓が出土しており、本遺構の排滓場として機能した可能性についても指摘されうる。

遺物 本遺構から回収した遺物は、羽口39g炉内滓82g、流動滓168g、流出孔滓81g、総重量382gであり、出土遺物から製鉄炉と判断した。第38図1は粘土外壁から出土した非ロクロ土師器である。口縁は直立気味に立ち上がる。口縁部内面は横位、器表面は斜位のナデである。2・3は底部が平底のも



第38図 SX2と出土遺物

ので、底面に砂を付着させている。2は整形後、ナデで消している。4は炉内滓である。不整な五角形で、表面には砂鉄が焼結する。

時期等 時期は遺構の重複関係からI期頃であり、10世紀の前半頃の年代観を与えられる。

SX1 (第26・39・40図)

位置 4・5-m・n区に検出。

遺構 SX1は、SI9堅穴内に軽石粒・ローム粒混入黒褐色土(IEfj)が、すり鉢状に埋積した窪みに、鉄滓・焼け石・羽口片・土師器片を一括廃棄したものである。これらの廃棄物は本堅穴の南西約3m離れた製鉄炉(SX2)の残滓物と考えられるが、SX1にSX2の操業毎の廃棄の積み重ねを示す層序は認められない。これはSX2の南側前庭部にSI3を構築する際に、そこにあったSX2の残滓物をまとめてSI9の窪みに廃棄したものと考えるのが妥当であろう。

遺物 上述のとおり、資料の一括性は高いと思われる。土器の出土個体数は概算で約100点と推定されるが、須恵器は小破片が多く個体数は不分明である。土師器埴類はすべて糸切りである。これらの土器は10世紀中葉前後(II期)に比定される。本遺構から回収した鉄関連遺物は、炉壁191g、ヨヨロ約7,080g、炉内滓3g、流動滓41g、砂鉄焼結塊34g、含鉄鉄滓5gで、総重量7,907gである。

第39図1は埴で、内面黒色処理・ヘラミガキを施す。器表面はロクロナデ後、ヘラナデである。2・3は小型甕の可能性のある底部でいずれも底面に砂を付着させている。2は内面にナデ、外面に斜め方向のヘラナデを施す。3の内面には指ナデと思われる凹凸が見られる。胎土は2~3mmほどの小礫が散見され、橙色を呈す。2は3ほど大きな小礫が含まれないが砂粒の含有量は多く、胎土・色調に相違がある。5~8は甕口縁部で、ロクロ不使用である。大・中・小ほどの区別はあるようであり、5は小型品、6~8は中型品かと思われる。6・7は口縁が直立気味にたちあがる。6は口縁部内外面が横ナデ、体部内面は斜位のナデ、体部器表面は縦位のナデである。7は口縁部内外面が弱い横ナデ、体部内面が横位・斜位のナデ、体部器表面は縦位のナデである。8は口縁端部が丸くおさまる。9~15は甕で、口縁~体部上半部を残すものばかりである。胎土には2~4mm大の小礫が含まれる。9は口縁部が緩く内湾し、体部は丸みをもつ。口縁部内外面が横ナデ、体部内面は横位ナデ、体部器表面は縦位のヘラナデである。10・14・15の口縁部は短く開き、端部は丸くおさまる。13は口縁端部が尖り気味である。14の体部は丸みをもつと考えられるが、13・15は肩が張らないものと思われる。13・15の内面はナデで、15の体部は下から上へのヘラケズリである。

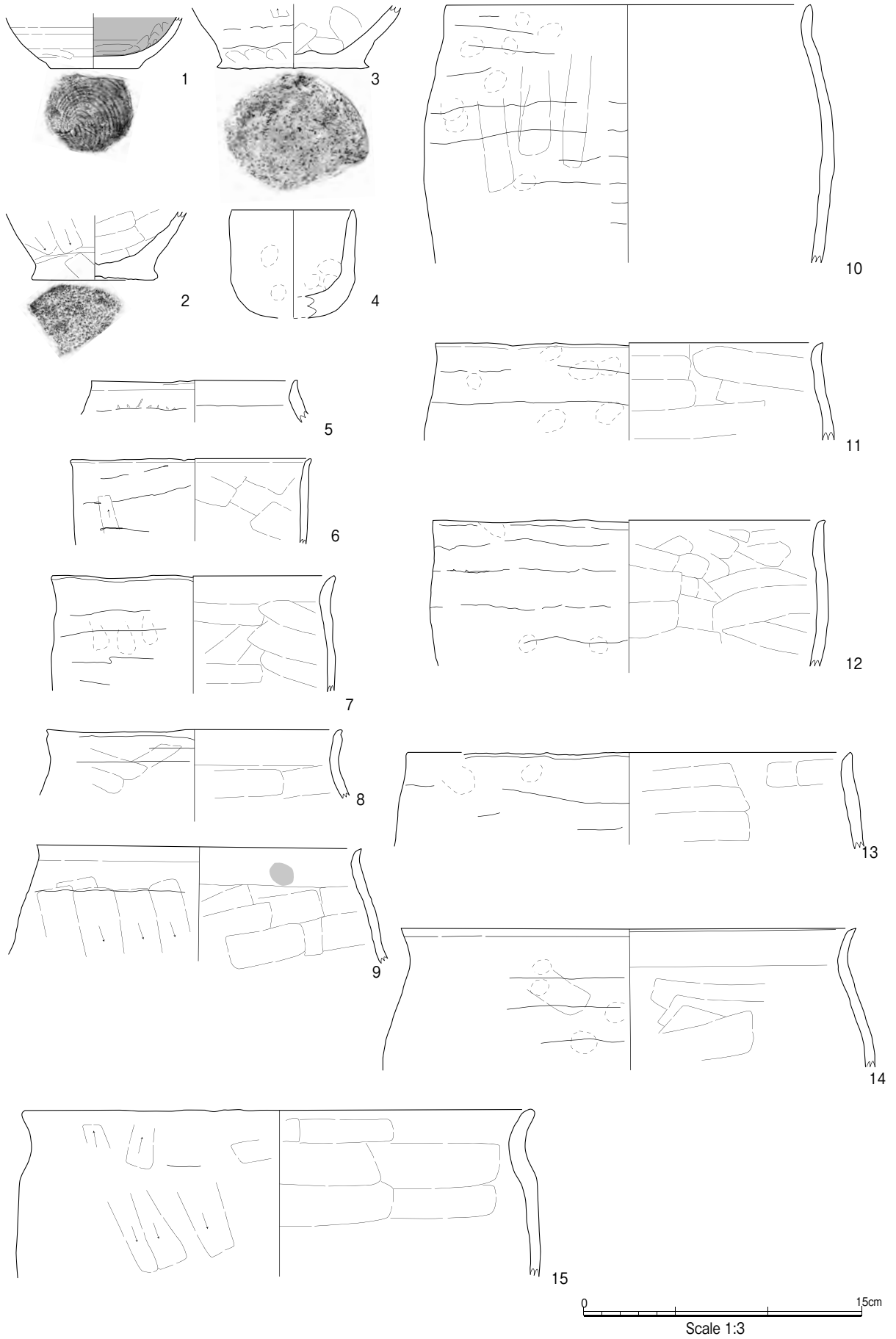
以上のほかにやや特異な器形のものがある。4の全体の器形はわからない。用途不明。土製支脚とも考えられるが、二次焼成は受けていないと見られる。

第40図は羽口である。羽口は40点ほど出土し、うち4点を図示した。胎土をみると、いずれの羽口も例外なく、スサ・小礫が混入している。焼成は堅緻で硬質感があるものと脆弱でポロポロと崩れやすいものがある。いずれの羽口においても、全面がナデによる調整が施されている。断面形は円形のもの(1)と一部に平坦面を有するもの(2~4)がある。いずれも大ぶりで肉厚のものである。1・2は先端~体部の資料である。

SX3 (第41図)

位置 SI11の南隅部の外、1mほど離れて単独で検出された。

遺構 開口部径1.8m、深さ0.4m、底径1mほどの、鍋底状を呈する不整円形掘り込みで、掘り込み内には炭粒がびっしりと埋積していた。柱穴等の上屋構造物を推測できる遺構の検出はなかったが、埋



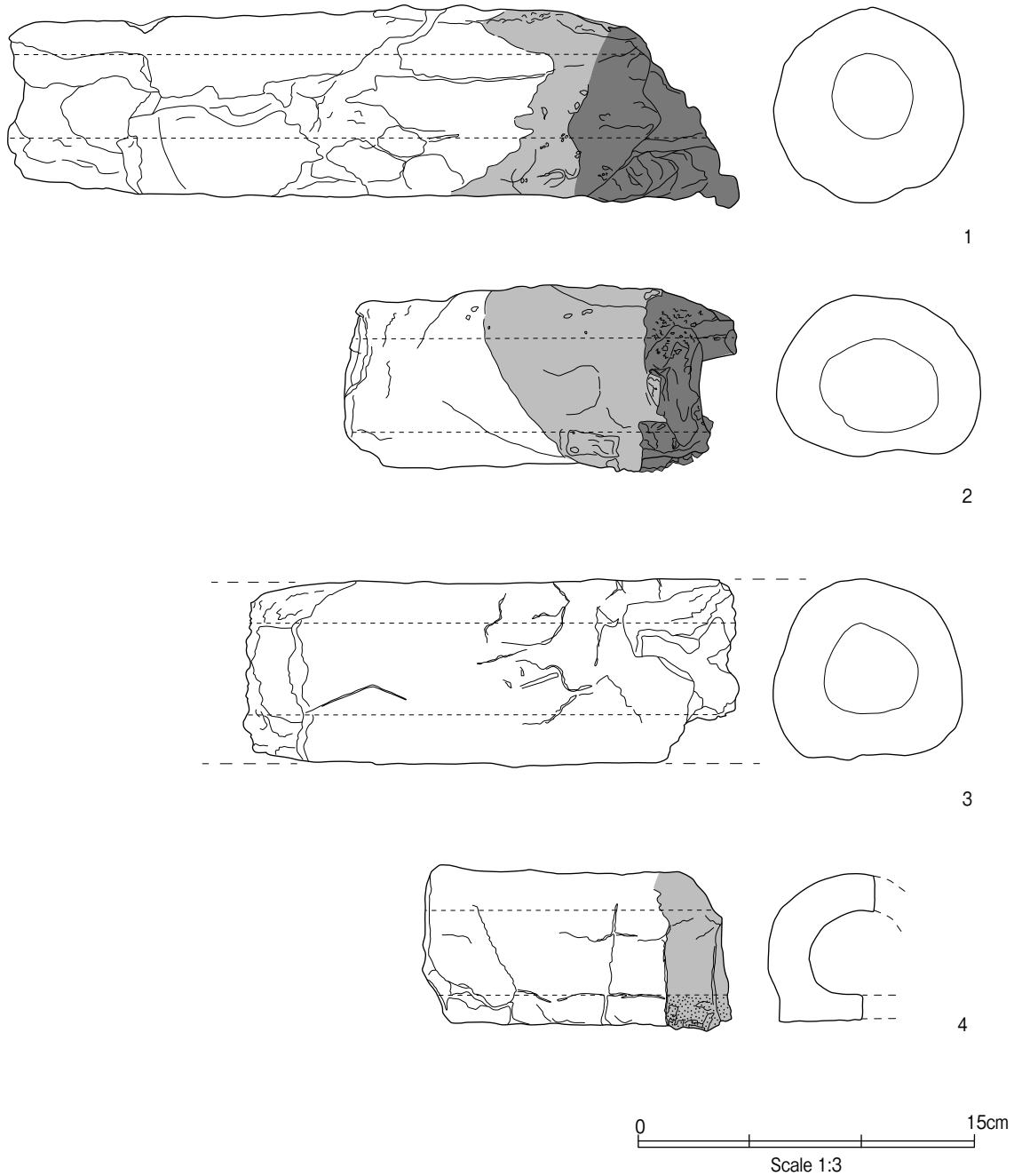
第39図 S X 1 出土土器

積土炭粒から炭焼窯跡と推測した。

SD5 (第7図)

位置 SD5は6・7・8・9-h・i・j区に検出。

遺構 幅20~30cmの溝が、9区から南東-北西方向に延び、6区で急に北東方向へ折れ曲がり6i区で終止する。溝基底はS I 12の埋積土最上位層である黄色土小ブロック・軽石粒混入黒褐色土(ⅢE f j)とその上位の黄色土小ブロック・軽石粒混入暗褐色土(ⅢD f j)を掘り込んでいる。



第40図 SX1出土遺物

2) II区

II区は南北約80mの距離をもち、遺構の時期のあり方などもやや複雑である。平安時代の遺構のうち、建物跡は北東辺部の東西約50mの間に集中し（II建物群）、後半期の遺構もこの範囲内にある。西辺部の建物群は区画施設がないものの、遺構分布に空白域がある。西辺部は遺構の分布が比較的少なく、後半期のものが主となる。溝跡はほぼ全域に分布するが、これについては個々にとりあげず、一括して述べることにする。記述の順序は、調査が一部をのぞいて当地区の北から南へ進行したことを考慮して、基本的には北側からはじめることにする。

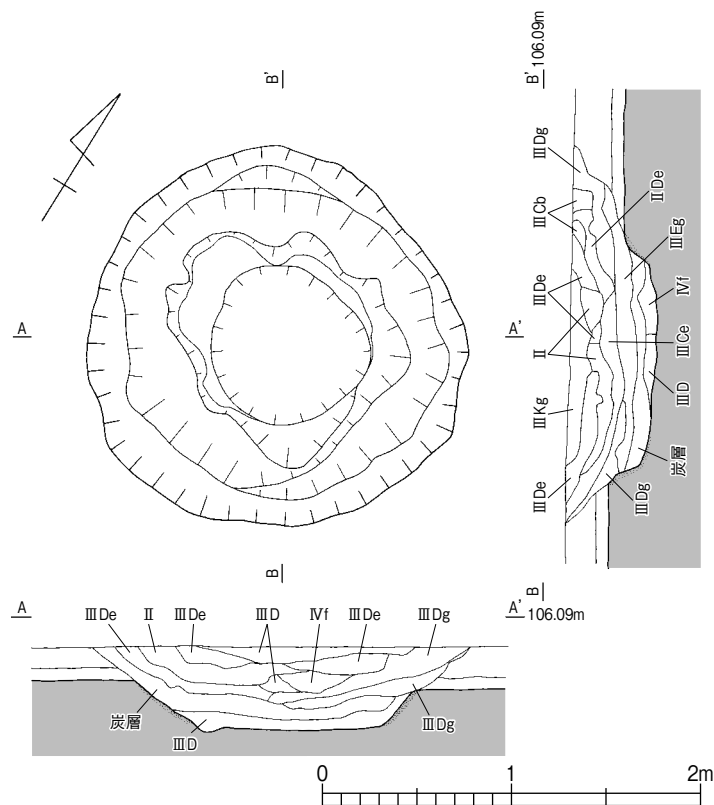
S I 13（第42・45図）

位置 13・g・h区に検出。S I 13は竪穴の南側一部のみを検出で、竪穴本体は北側の調査区外に存在。

遺構 東西2.4mを測り小竪穴であろうと思われる。周囲の竪穴に見られるような南壁にカマドがない。あるいはS I 12のように西壁に存在するものであろうか。竪穴は表土下の茶褐色土（III L）から掘り込まれ、深さは45～50cmある。埋積土は黄色土小ブロック混入暗褐色土（III D f）、黒褐色土（III E f）が自然堆積したのち、軽石粒を混入する埋積土（III D f j・III D j）がそれを覆っている。軽石粒の降下がS I 13の埋積途中にあったと考えられる。

遺物 竪穴内から土師器小型甕、甕破片、鉄滓、製鉄炉壁片が出土した。

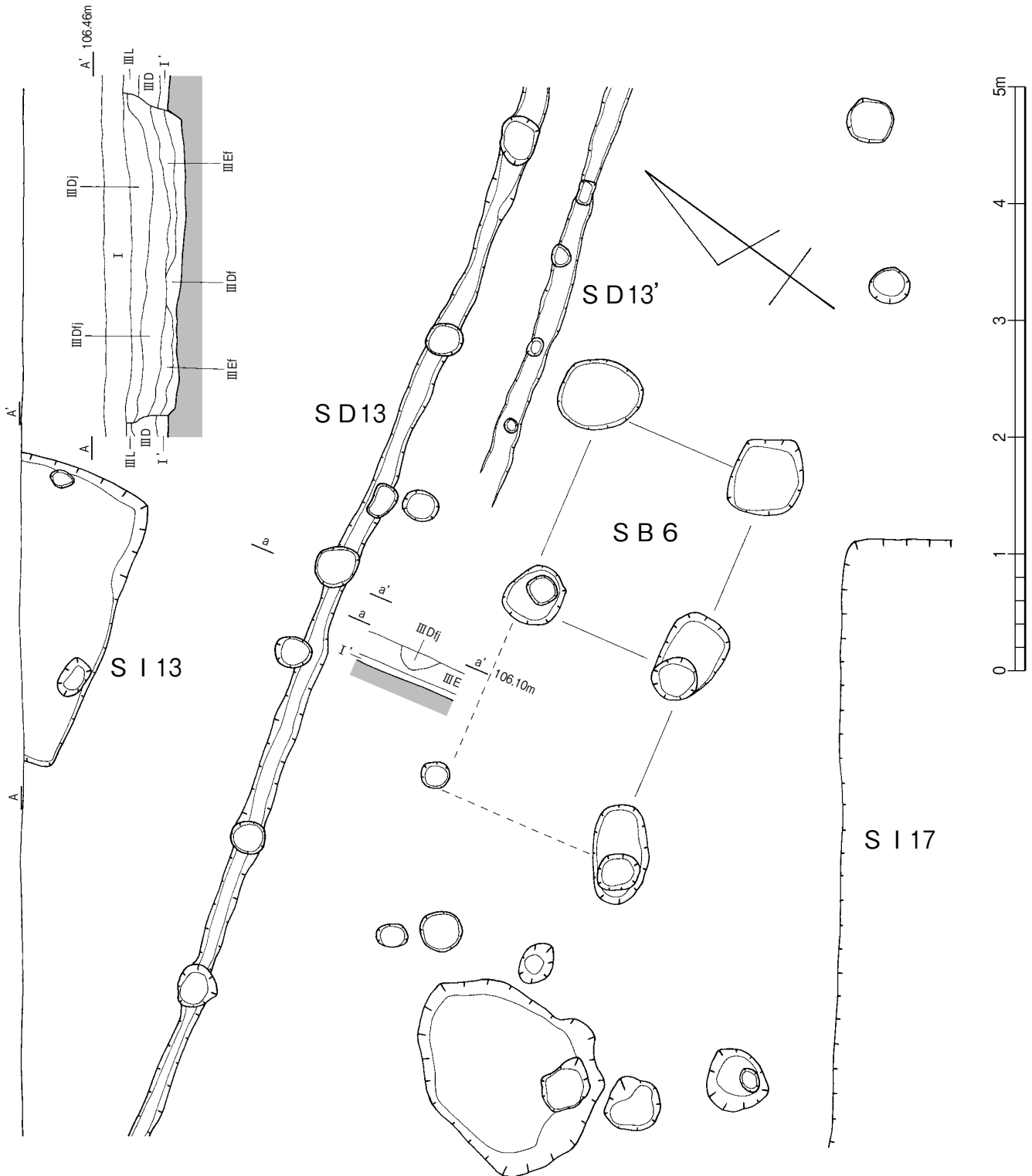
第45図1は甕体上半で、復原口径15.5cm、口径と体部最大径が同値である。口縁部横ナデの後、器表面を下方から上方へ丁寧に1cm幅のヘラケズリを行い、内面は同様に口縁横ナデの後、木口状工具で丁寧に横位のナデ調整を行っている。2は小型甕で、復原口径11.2cm、器高13.5cm、底径7.3cm、最大径は体中部で12cmを測る。口縁横ナデ後に、外面は0.7～0.9cm幅のヘラケズリを、体上部に行ったあ



第41図 S X 3

と体下部に、いずれも下方から上方へ丁寧に行っている。内面は横位に木口状工具によるナデ調整が丁寧に行われ、底立ち上がり部に接合成形のための、指頭による押圧が整然と丁寧に行われている。底外面に粗砂粒付着。

時期等 時期は、埋積土中に軽石粒を含むことから、10世紀初頭と考えられる。



第42図 S I 13・SB 6・SD 13・13'

S I 14 (第43・45図)

位置 13・14-j・k区に検出。S I 15住居跡を切り込む。

遺構 竪穴東側半分の検出でカマドは確認できなかったが、南壁西側の未調査区に位置するものと推察できる。四隅に支柱を配し、北壁下やや東側に出入口施設と考えられる3コの小柱穴が見られる。

遺物 第45図3は須恵器で、小壺ないし鉢と思われる底部片。底面に糸切り痕をもつ。4は床面出土の鉄製紡錘車はずみ車で、径5.2cm、厚さ2～2.5mm、重さ約20gを測る。

時期等 時期は、平安時代中期に属す。

S I 15 (第43・45図)

位置 13・14-j区に検出。竪穴の西側をS I 14住居跡に切られている。

遺構 四隅に支柱を持つ構造で、南壁にカマドが取り付くが、粘土だけの構築で崩れている。竪穴内からは土師器小片等がわずかに出土したのみである。

第45図5は含鉄鉄滓である。表面は全面錆化している。不整な五角形を成している。

時期等 時期は、S I 14より一段階古い、ほぼ同時期と考えられる。

S I 16 (第44・45図)

位置 14-i・j区に検出。

遺構 竪穴埋積土には全体に軽石粒が混在している。柱は四隅と壁央の計八柱からなる構造で、壁溝は南壁下だけに認められる。

カマドは地山まで掘り込み、砂質黒色土(Ⅱb)を敷きつめてカマド床を構築、カマド前庭部に東西1.3m、南北0.7mの不整楕円形の浅い掘り込みがみられ、これがカマド前での作業場範囲であろう。

遺物 第45図1は鉢。底面はケズリ調整である。

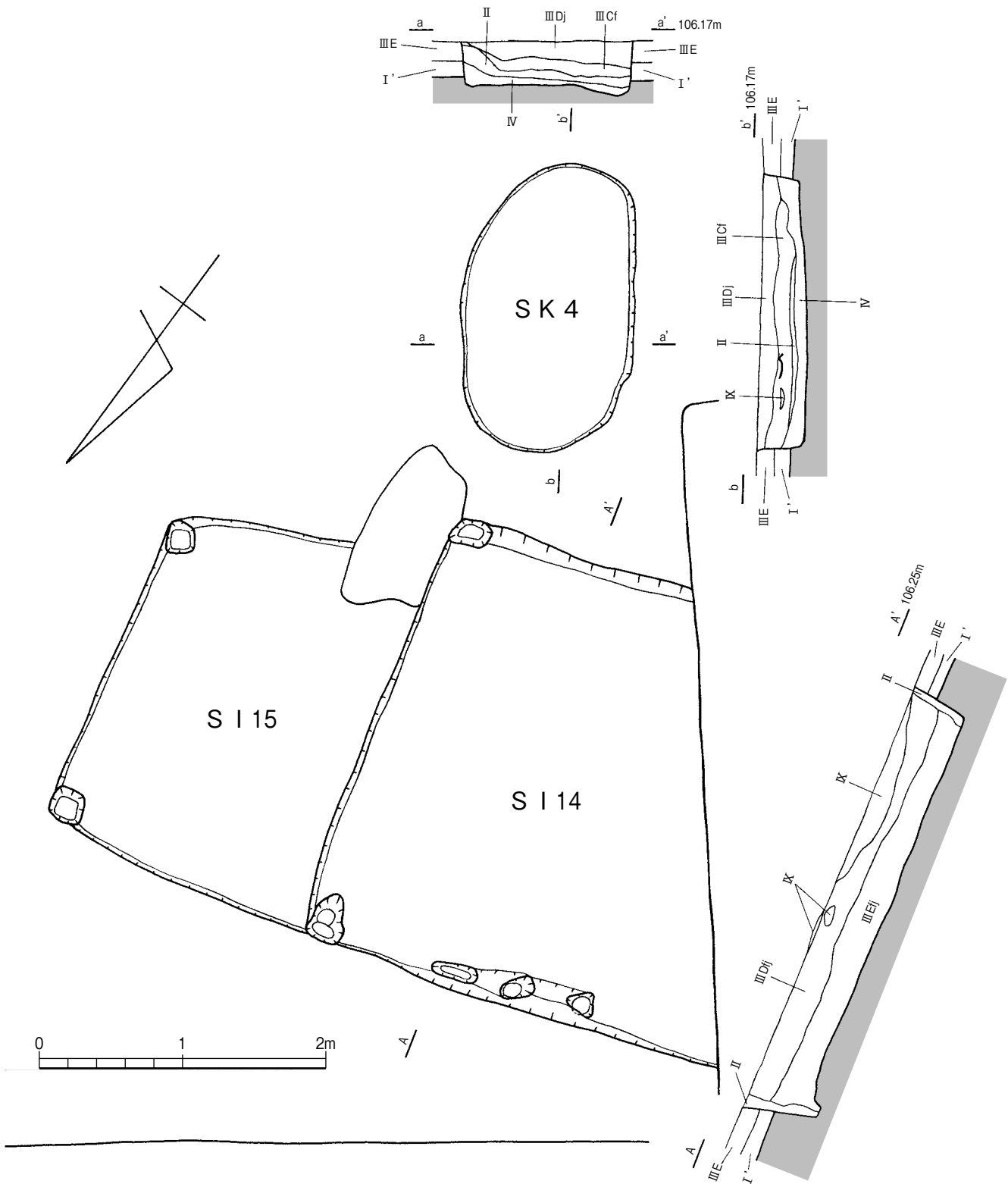
時期等 本竪穴はカマドをもつことから住居跡と判断した。時期はカマドから出土した土器からⅢ期を上限とする。

S I 17 (第46～48図)

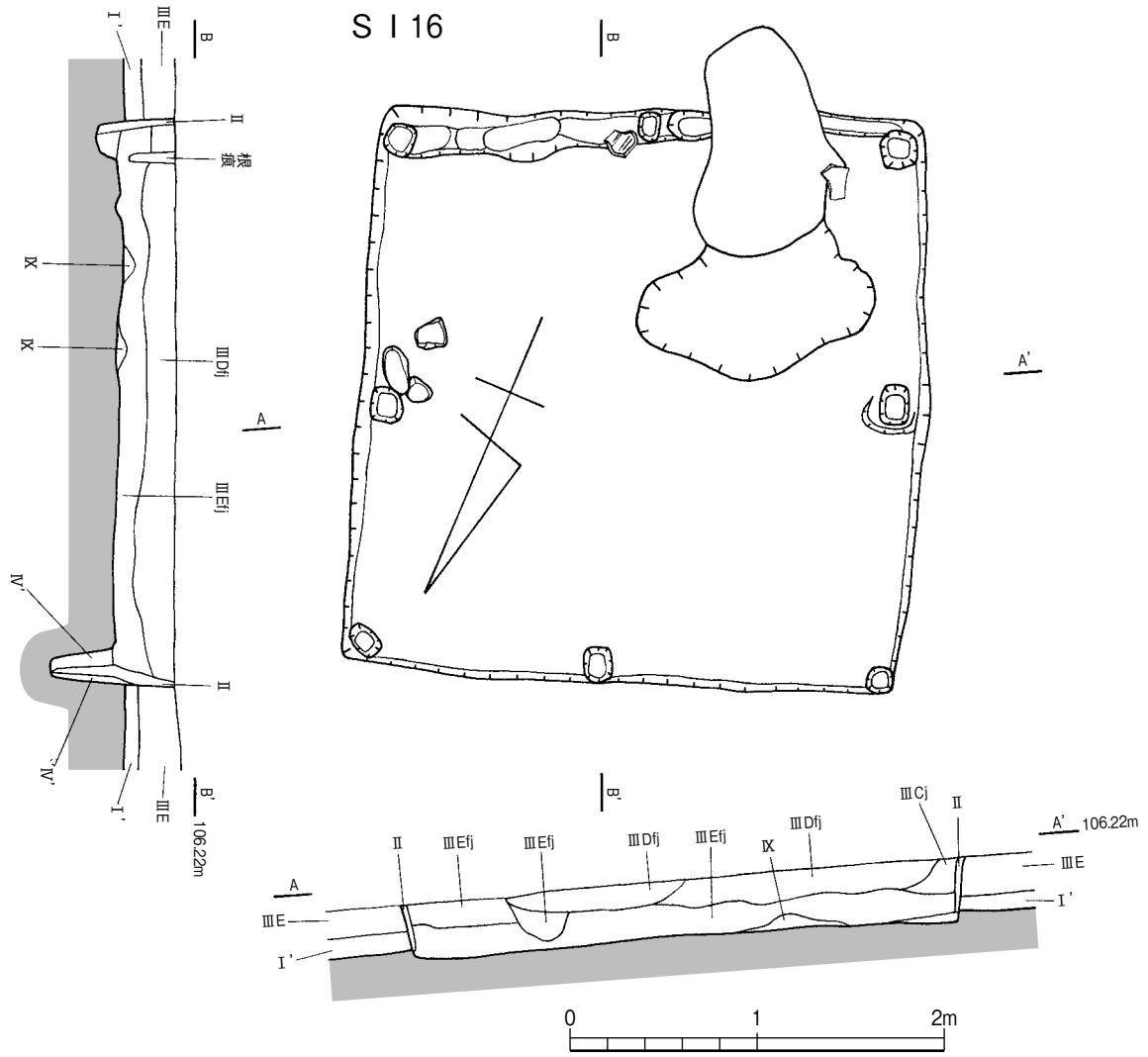
位置 14・15・16-g・h・i区に検出。

遺構 埋積土は全体に軽石粒を混在。西壁外南側に東西1.6m、南北2.7mの張り出しが取り付く。埋積状況からみて、当竪穴廃棄時には竪穴に付属する張り出しであったことは明らか。柱は四隅と各壁に等間隔の3本で計16本柱からなる構造であろう。

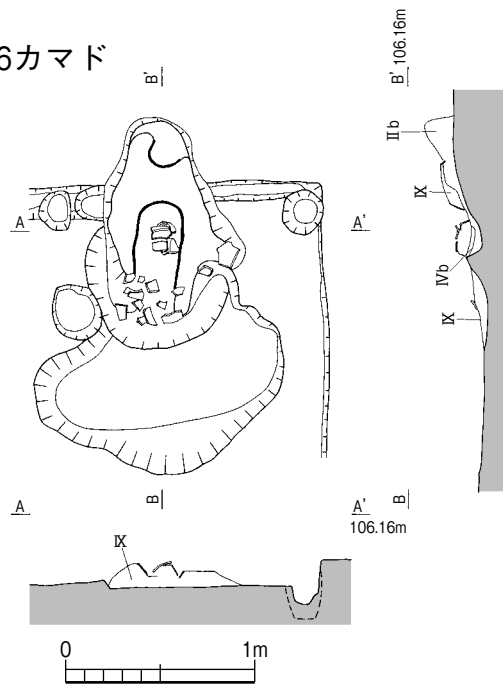
カマドは南壁にあって、旧カマドは5分割の東側第1分割点、新カマドは4分割の西側第1分割点に構築されている。検出した竪穴は新カマド期の姿であって、旧カマド期の様子は確認できない。旧カマドはカマド構築粘土が流れていて旧状の復原はできなかった。新カマドは焚口からカマド尻まで2.1mを測る。焚口・燃焼部は地山を緩やかな登りに削り、カマド尻は黒褐色土(ⅢE)漸移層(I')をけずってカマド底をつくる。カマド幅が35～40cm。煙道立ち上がりは径15cm内外の円筒状で、立ち上がり部直下から40cmほどの煙道部底はゆるやかな鍋底状に掘っていて、雨水等を溜め、燃焼部への浸透を防いでいる。カマド前には東西1.3m、南北1mほどの楕円形の浅い掘り込み(外坑)があり、その内側にさらに東西0.9m、南北0.5mの楕円形の掘り込み(内坑)があってカマド前庭部をつくっている。さらに外坑と内坑の境に径3～5cmの突き込みの小柱穴が廻る。これはカマド前庭部と竪穴内居住区を仕切る背の低い間仕切り施設であろうと考えられる。



第43図 S I 14・15・SK 4



S I 16カマド

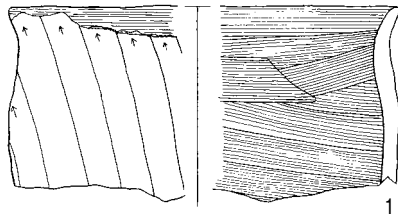


第44図 S I 16

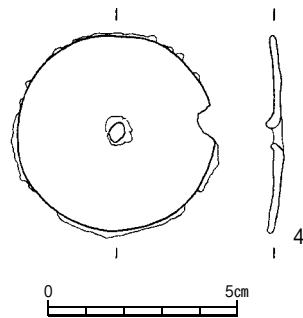
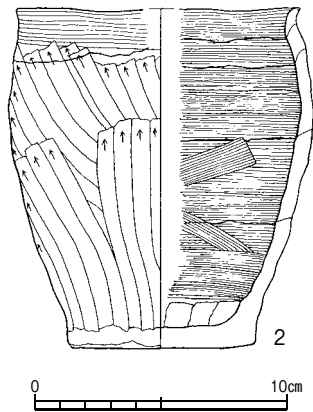
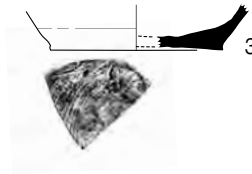
遺物 竪穴内からは土師器甕、小型甕、鍋の破片と須恵器甕破片が出土した。第48図1は新カマド出土の土師器甕口縁部で、外面はヘラケズリ、内面はハケ目で、口縁を横ナデしている。2は新カマド出土で外面は幅の狭いヘラケズリ、内面はハケ目、口頸部がわずかにくびれ口縁が開く。3は床面出土で器厚が他に比べ薄く、口縁が外に折れ口縁内面に陵が走る。内面は条間の広い木口状工具によるカキ目がみられる。4は床面出土で内面に細かなハケ目が施された上に、条間の広い木口状工具によるカキ目がみられる。外面のヘラ削りで口縁を横ナデしている。5は新カマド出土で口縁横ナデ後に器表面ヘラケズリ、内面ハケ目が施される。6は新カマド出土の甕上半部で復原口径17.5cm、器厚は厚ぼったく器壁は凹凸がみられ、口縁端部は回転を利用してつまみ上げている。内面は条間の広い木口状工具によるカキ目がみられる。7は新カマド出土の甕底部で底径8.5~8.8cm、底外面に粗砂粒附着。8は旧カマド前庭部出土の須恵器甕の肩部、木に7条の沈線を掘り込んだ道具で器表面を叩いている。9は張り出し部床面出土の須恵器壺肩部で、上半は叩き、下半はヘラケズリが行われ、内面はロクロ目。上半と体部の一部に自然釉。

時期等 遺物の出土量は比較的多く、S I 11とほぼ同時期と思われる。

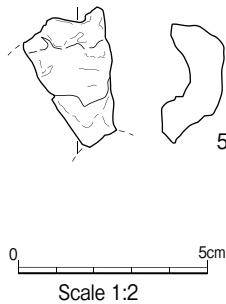
S I 13



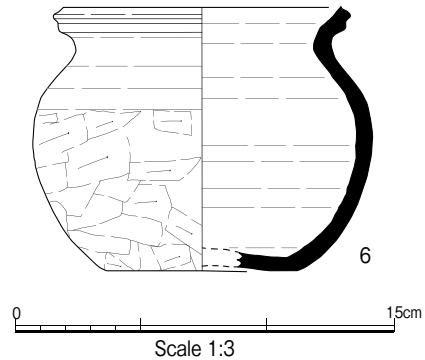
S I 14



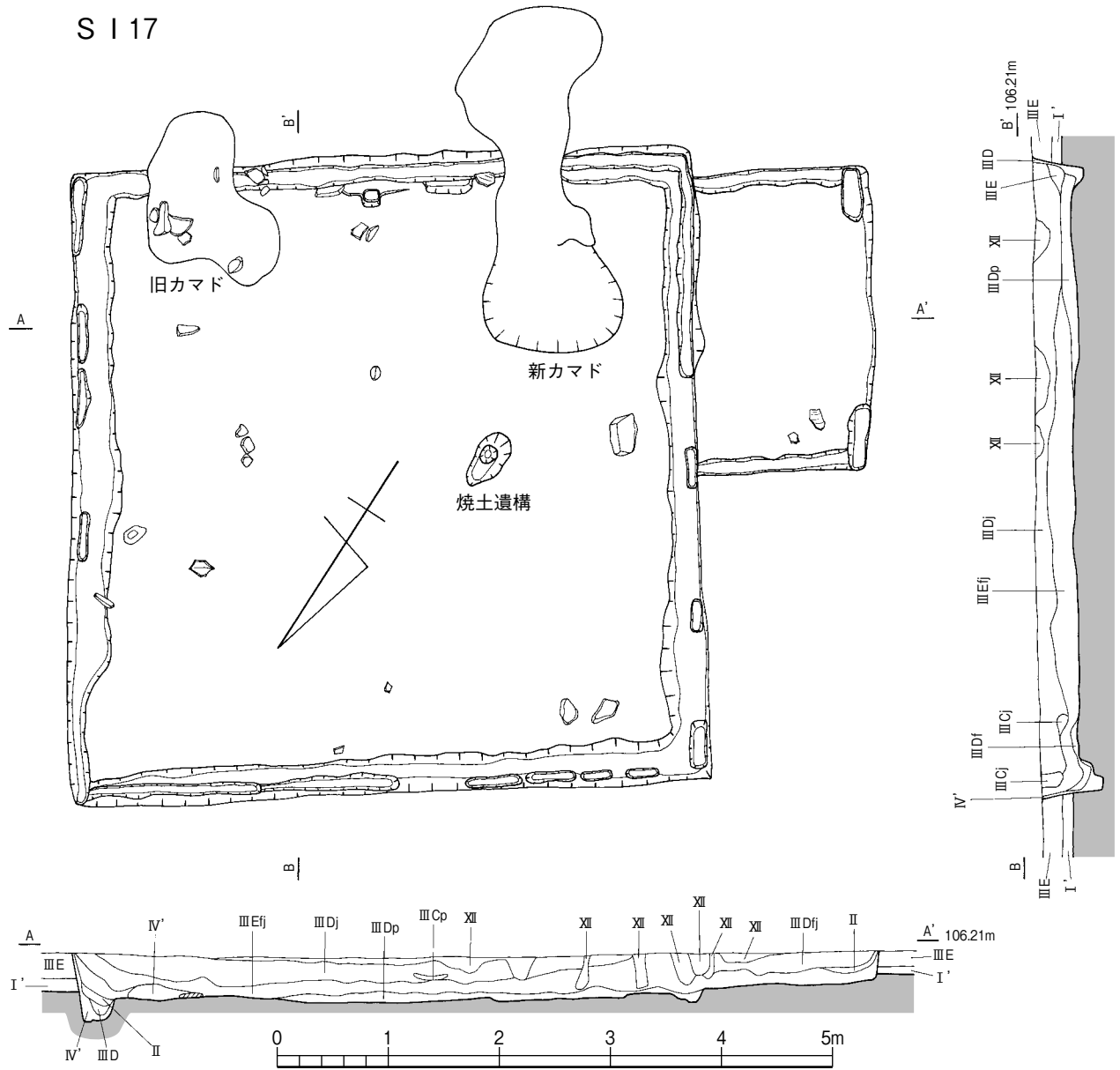
S I 15



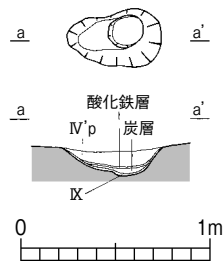
S I 16



第45図 S I 13~16出土遺物



焼土遺構



第46図 S I 17

S I 18 (第8図)

位置 14・15-c区に竪穴の西壁を検出。

遺構 南北4.6mを測る。竪穴の詳細は未確認。出土遺物はない。

S I 19 (第49～51図、図版19・62)

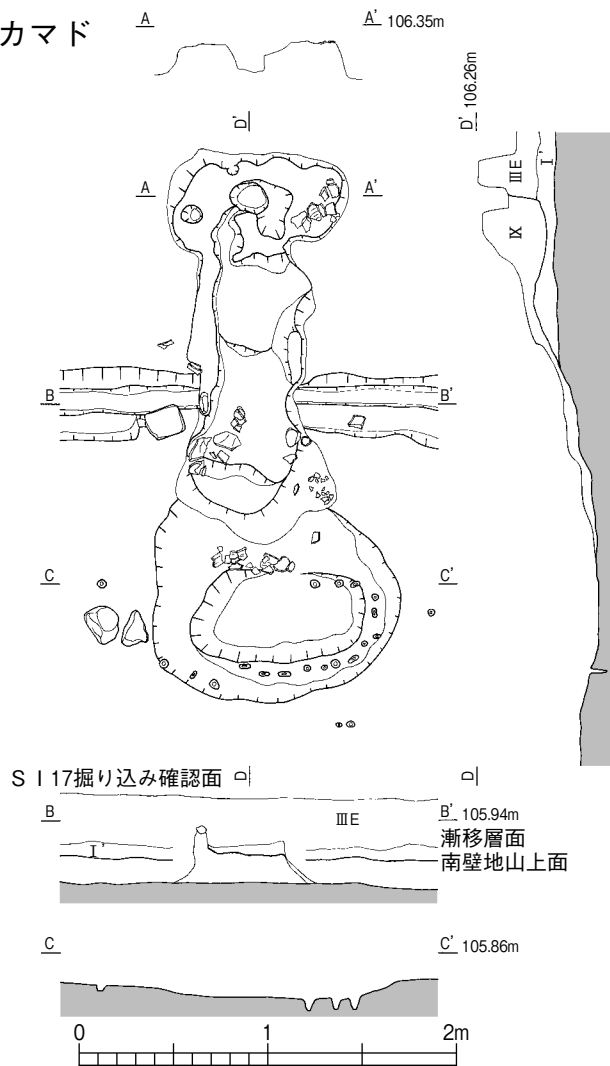
位置 14・15-c・d区に検出。

遺構 焼失家屋で住居の建材炭化物が多く検出された。竪穴北西側に床板材が敷きつめられた状態で出土。竪穴は東西4.4m、南北3.4mの長方形プランで他の竪穴が正方形プランであるのとは異なる。柱穴プランは不明。壁ぎわ埋積土中には矢板状の壁材が廻っている。

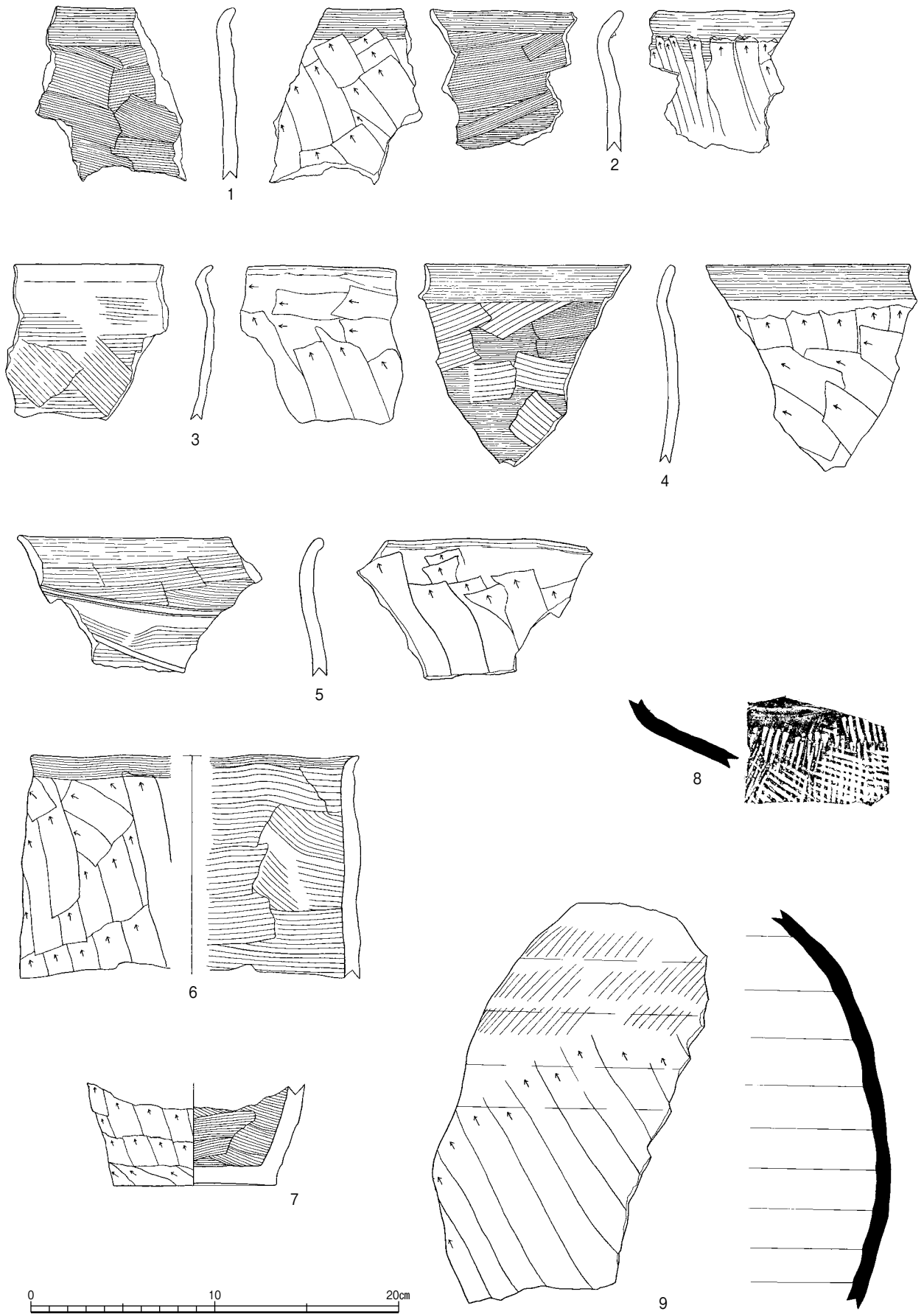
カマドは焚口からカマド尻まで1.6m、焚口幅40cmを測る。焚口部は凝灰岩を直方体に削り調整した袖石を立て、その上に同様の石材を架して焚口天井をつくっている。凝灰岩の削り調整は手斧仕上げで丁寧な仕事ぶりが痕跡として残る(図版19・62)。カマド前には東西1.4m、南北0.9mの楕円形の浅い掘り込みがあってカマド前庭部をつくっている。

遺物 竪穴内からは土師器小型甕、甕、鍋、碗や須恵器壺、鉄製品、木器、羽口などが出土したが、器形を復原できたのは第50・51図である。第50図1は床面出土の破片を接合して復原できた碗で、口径12.5cm、底径4.4cm、器高5.5cm、ロクロ成・整形で底部糸切りで内黒。2はカマド支脚利用の甕底部で、

S I 17新カマド

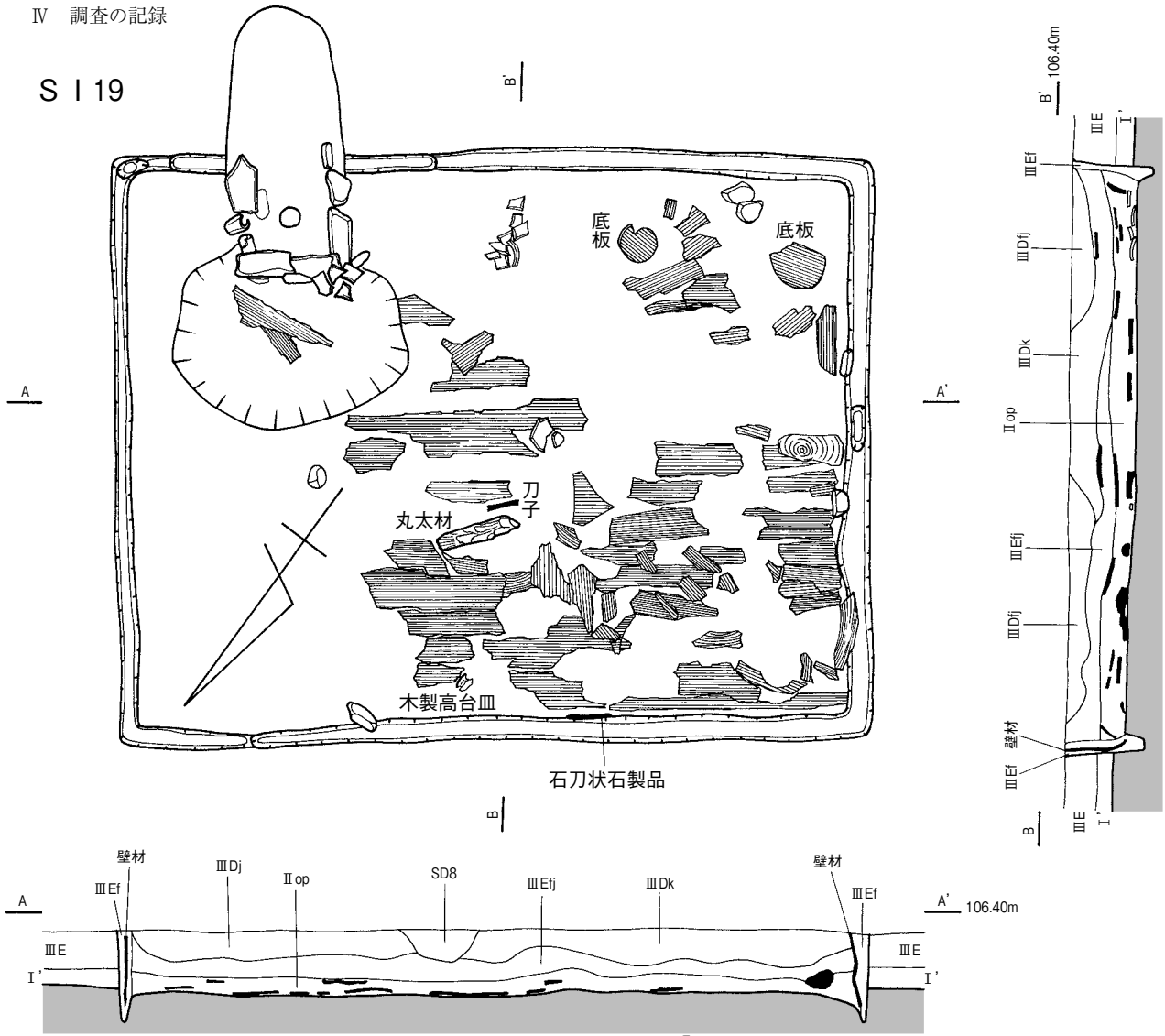


第47図 S I 17新カマド

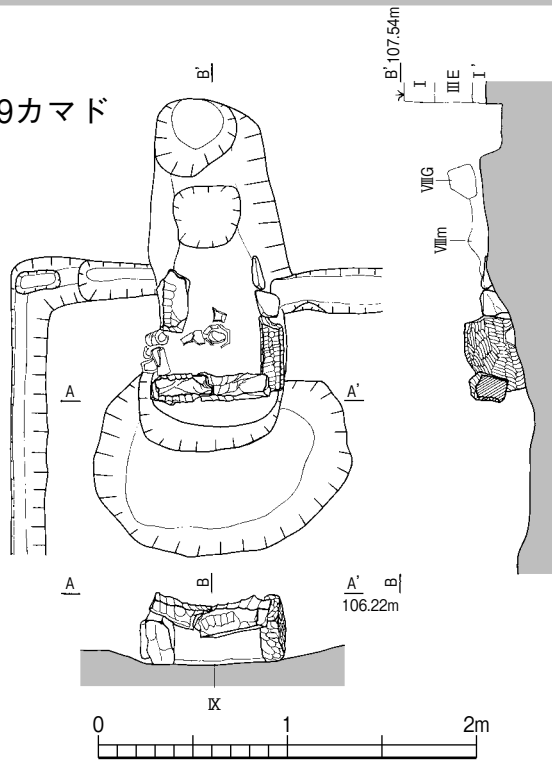


第48図 S I 17出土土器

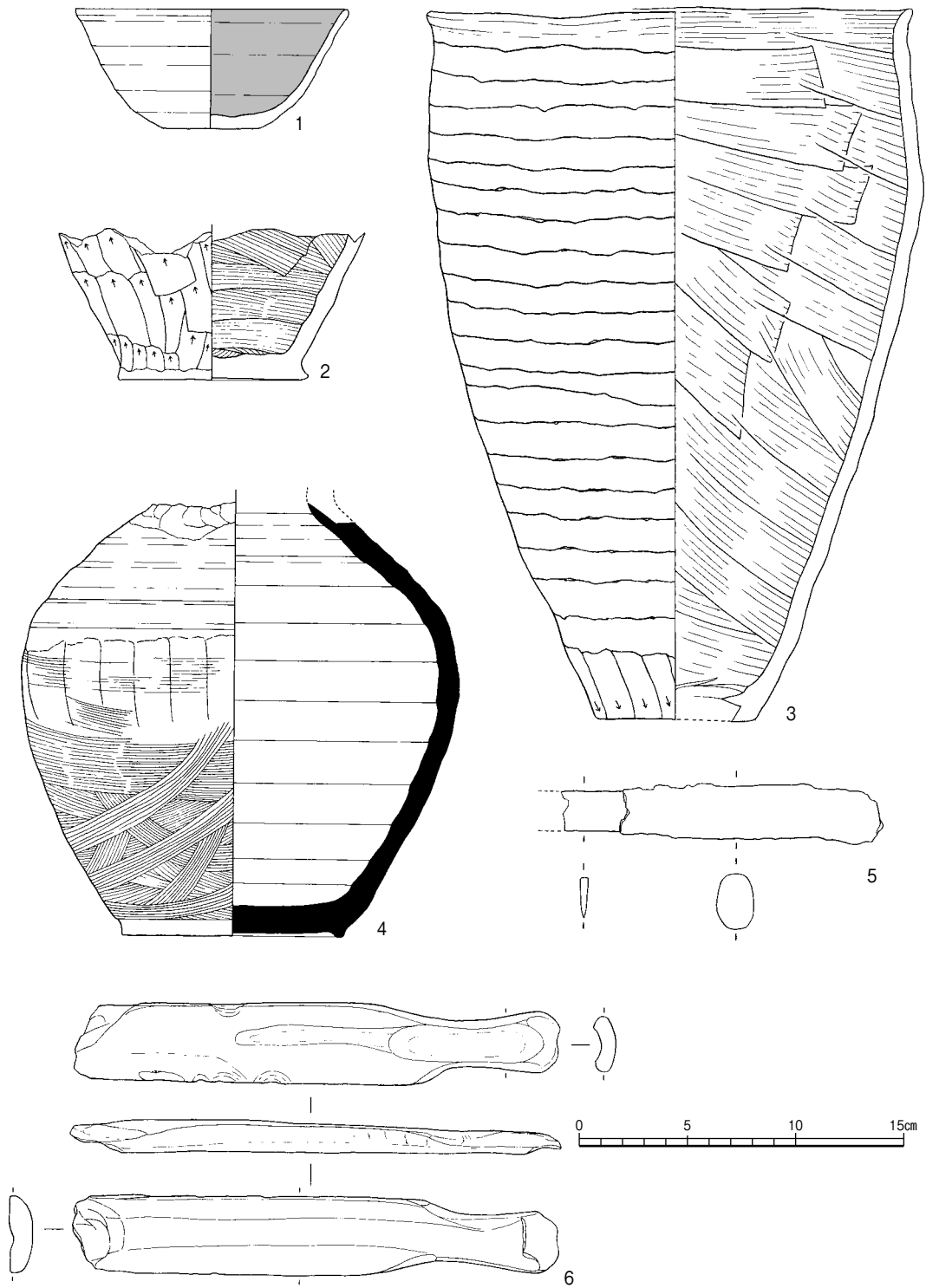
S I 19



S I 19カマド

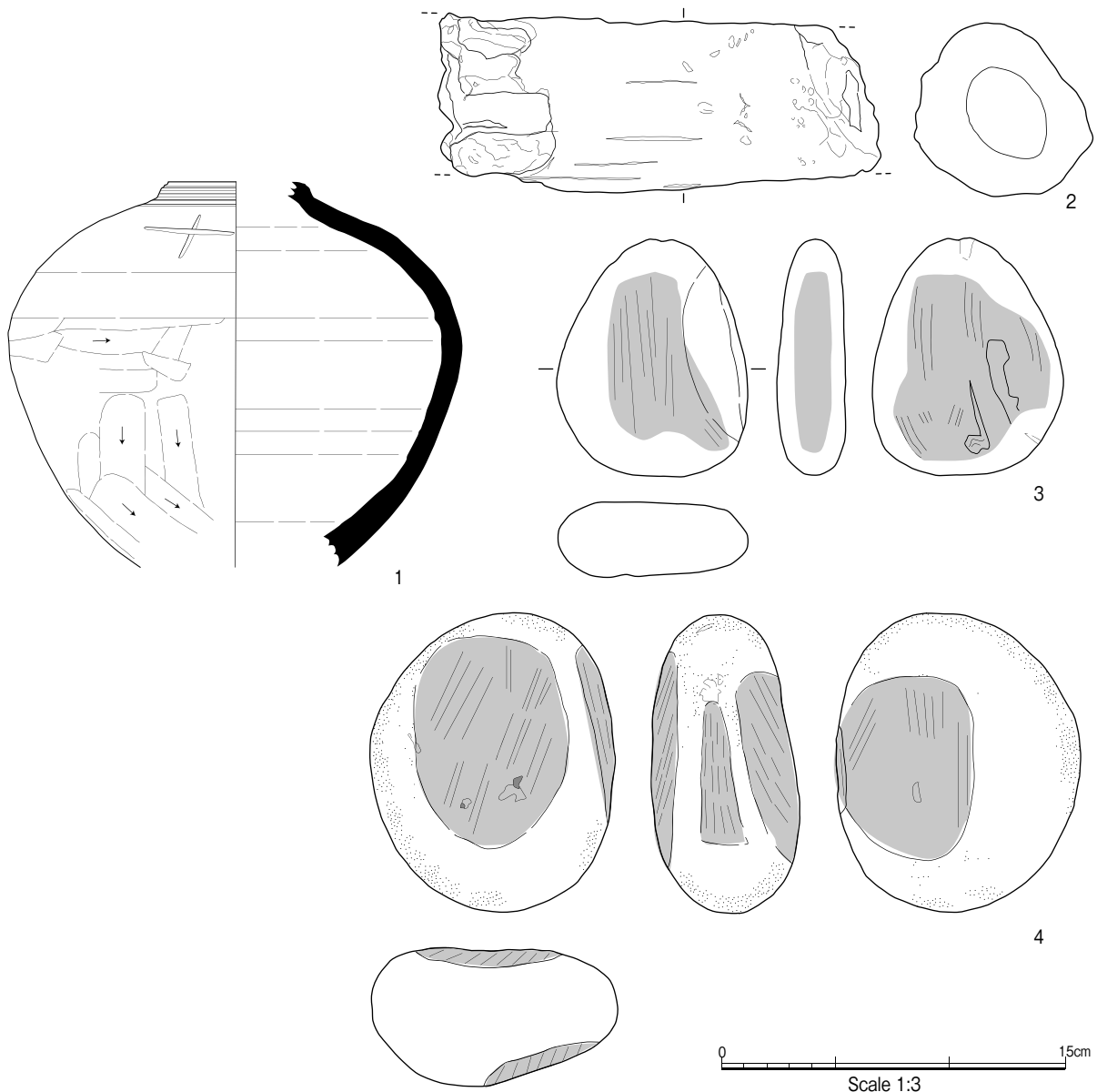


第49図 S I 19



第50図 S I 19出土遺物 (1)

底径8.8cm、外面はヘラケズリ、内面はハケ目痕で底外面に粗砂粒が密に付着。3はカマド内出土の甕で二次焼成を受けて赤褐色を呈し、煤が外面全体に付着、口径22~22.5cm、底径7.3cm、器高32.5cm、外面には巻き上げ痕が明瞭に残り、底縁にヘラケズリ、内面は木口状工具による大ぶりのカキ目が粗く施されている。4は須恵器壺であるが焼成（環元）不良のためか外面は淡褐色、胎土は白褐色を呈している。ロクロ成形で最大径20cm、底径12cm、現高20cmを測る。外面は下半部にハケ目が施され、体中央部に軽いタッチのヘラケズリが行われている。底は微高台。竪穴内床面に散った破片から復原。5は柄付の刀子片で木柄部は錆が全体に上って鉄化している。柄部の長さ12cm、断面は長径2.5cm、短径1.3cmの楕円形、刀部は現長2.8cmを測る。6は北壁中央部直下の壁溝内床側から出土した石刀状石製品で、柄部と刀部からなり、全長22.5cm、刀部幅3.4~3.7cm、刀部厚さ1.2~1.5cm。柄部の片側には挟り込みがみられる。第51図1は須恵器壺で口頸部と底部を欠く。体部は肩がはる。体部下半は器壁が厚く、上半は薄い。外面下半がヘラケズリ、ほかはロクロナデである。肩部に「十」のヘラ書き記号をもつ。器表面は全体的に剥離しており、二次焼成を受けた可能性がある。第50図4も煤が付着して



第51図 S I 19出土遺物 (2)

おり、何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。2は羽口体部で、先端部と基部を欠く。3・4は網掛けの部分に磨痕が認められる。石質は、3がデイサイト、4が珪岩。

時期等 本竪穴はカマドをもつことから住居跡と判断した。時期は、出土遺物からⅢ期である。

S I 20 (第52～54図)

位置 15・16・17-c・d区に検出。

遺構 調査区東縁にかかったため竪穴の西側半分を検出。南北5.9mを測ることから、6m四方の竪穴住居跡と考えられる。耕土下の黒褐色土層(ⅢE)より掘り込まれ、床面までの深さ40～50cmを測る。埋積土には全体に軽石粒が混入し、壁溝全体の壁板材痕跡に黒色土が埋められた地山黄色土(Ⅳ')及び黄色土小ブロック混入の黒黄色土(ⅣE f)が充填されている。

カマドは焚口からカマド尻まで1.55m、焚口幅30～35cmを測る。焚口部には自然石を左右の袖石に置き、燃焼部と煙道の床面傾斜変遷点上位に端部をやや欠くほぼ完形の羽口を横位に据えている、煙道立ち上がり基底部には甕破片が重なって出土したが、これは煙出し口に蓋していた土器片であろう。焚口前には長軸1m、短軸85cmの浅い前庭部が掘られ、前庭部東端には長軸40cm、短軸27cm、床面からの深さ20cmの不整形のピットがあって中には灰がびっしり埋まっていた。灰溜め施設と考えられる。

遺物 竪穴からは須恵器甕、土師器甕、埴や小型甕、鍋の小破片が出土した。

第53図1は須恵器甕体部片である。外面平行タタキ目、内面に当て具痕はない。第54図1は土師器埴で竪穴内からの破片を接合してほぼ半分が復原できた。復原口径12cm、底径5.1cm、器高5cm、底部からの立ち上がりはやや外へ丸くふくらみ、全体が丸みをもっている。内黒で底部糸切り。2は小型甕口縁部で復原口径12.2cm、口縁がやや丸みをもち、器表面に細かで丁寧なヘラケズリ、内面ハケ目。3はカマド出土の甕で復原口径22.8cm、底径9cm、器高28～29cmで、器表面は粗いヘラケズリ、内面は木口状工具によるカキ目、底部は粗砂粒付着。4はカマド内出土の甕で復原口径21cm、底径8.8cm、器高38cm、最大径は体中部にあり、底縁がややすぼまる。外面は軽いタッチのヘラケズリ、内面は粗いハケ目、底外面は細砂粒付着。5はカマド出土の甕底部で底径8.4cm、底縁に整形後の残留粘土が残る。6はカマド燃焼部に架せられた羽口で、現長31.5cm、径8.3～8.8cmのほぼ円筒形で、一端は高熱を受けてガラス質に溶解している。孔径は3.2cm前後で棒状具を芯にしたものと考えられる。

時期等 本竪穴はカマドをもつことから住居跡と判断した。時期は、出土した遺物から、10世紀と考えられる。

S I 21 (第55・56図)

位置 18・19-d・e区に検出。埋積土上位をSD8が切り込む。

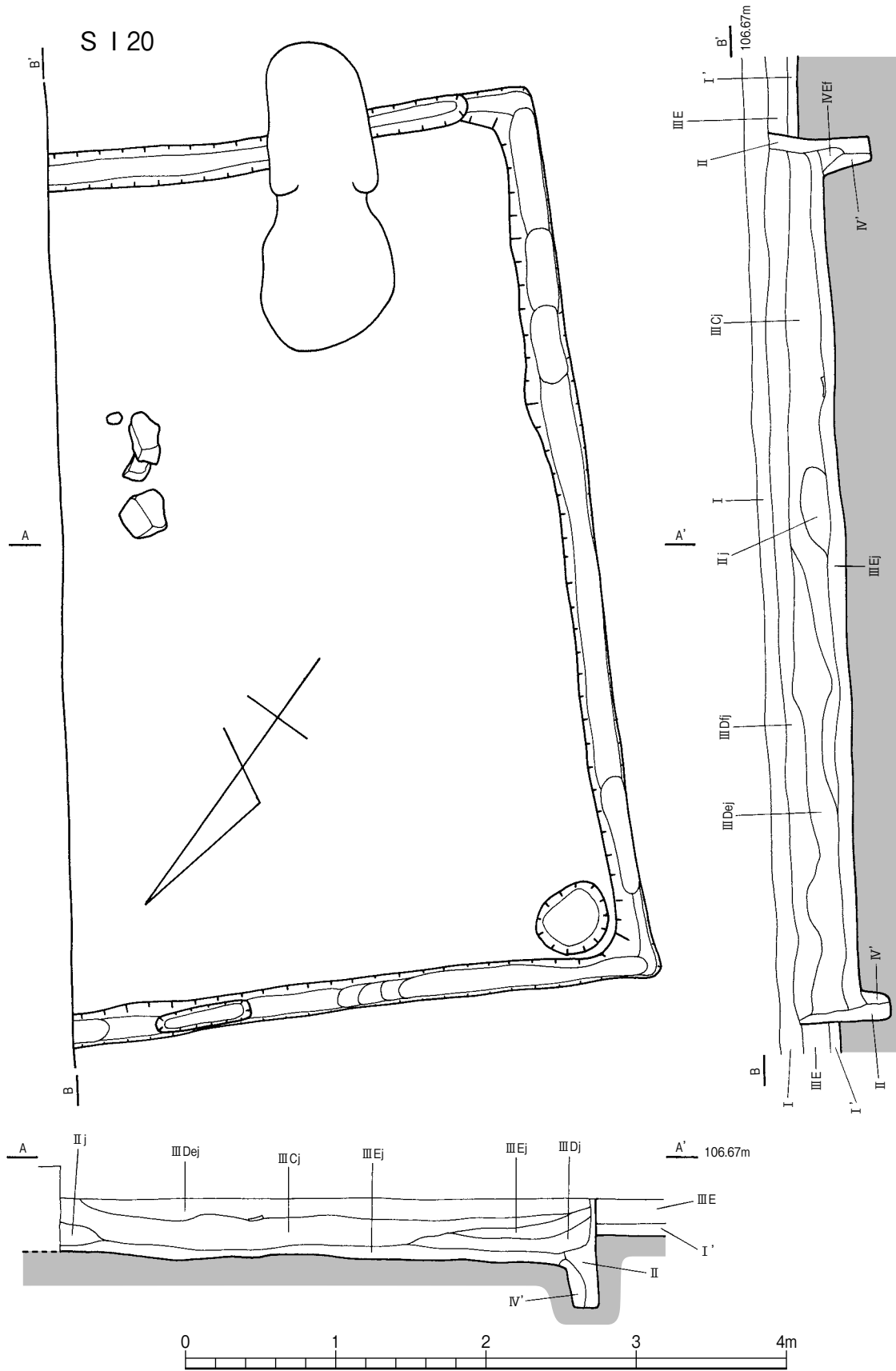
遺構 埋積土には全体に軽石粒が混入し、壁板材痕に暗褐色土(ⅢD)が埋まっている。柱穴は四隅の四主柱。

カマドは旧・新二基があり、いずれも南壁に構築され、旧カマドは東側、新カマドは西側のいずれも1/4等分割点に位置する。旧・新カマドとも崩壊がはげしくまったく旧状を止めていない。

旧カマド前には東西1.2m、南北1.4mの楕円形の浅い前庭部掘り込みがあるが、新カマド前には見られない。

遺物 竪穴内からは土師器甕・小型甕・鍋・埴破片が出土した。

第56図1は新カマド内出土の埴で、器高8cm以上あって立ち上がりが直線的で深い椀形を呈し、内



第52図 S I 20

黒である。2は旧カマド前出土の小型甕で、口縁部に特徴がある。端部がつまみ上げで尖り、外口縁に回転を利用して幅広の浅い湾曲面をつくる。体外面は丁寧な幅の狭いヘラ調整。3は旧カマド出土で小型甕の口縁部、全体が回転を利用した横ナデ調整。4は新カマド出土の小型甕口縁部で巻き上げ痕が明瞭。5は新カマド出土の甕底部で底径7.7cm、外面は丁寧なヘラケズリ、内面はハケ目痕。6は旧カマド前出土の甕で、現高22.5cm。巻き上げ痕が明瞭で整形の様子がよくわかる。器表面は軽いタッチの粗いヘラケズリ、内面は木口状工具によるカキ目が施される。7は鉄製品。器種は不明。

時期等 時期は、出土した土師器から、10世紀と考えられる。

S I 22 (第57図)

位置 18・19-g・h・i区に検出。

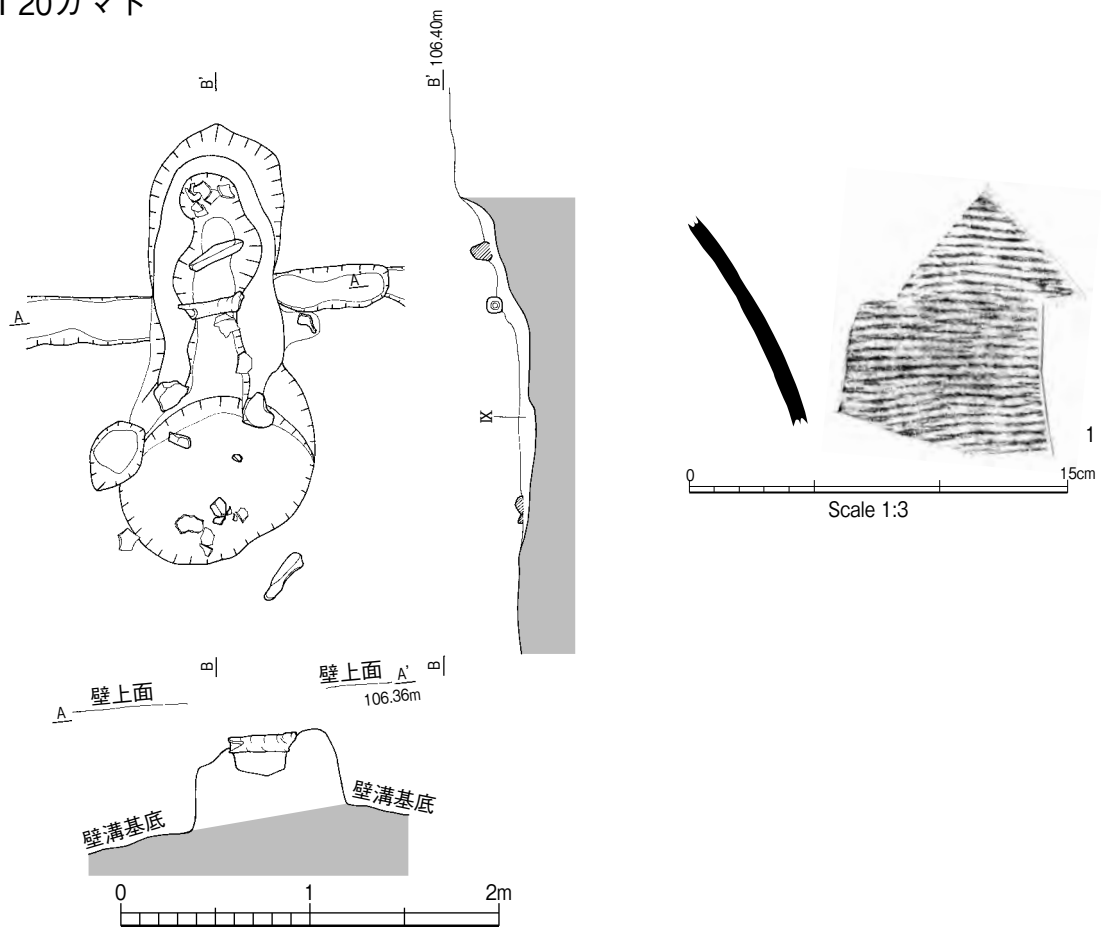
遺構 5、6m四方の方形竪穴の東壁半分が張り出す構造の竪穴。竪穴内にはまったく火気使用痕は認められない。P1~P6が主柱穴で南東隅部の柱穴と南側中央柱穴を欠く。P4とP7間が出入口部と考えられ、それは竪穴内に緩傾斜するスロープ式の出入口と考えられ、地山面での土壁は認められない。

遺物 竪穴内からは土師器甕の小片や4片の須恵器片、鉄滓小塊が出土したが、土器は復原できるものはまったくない。

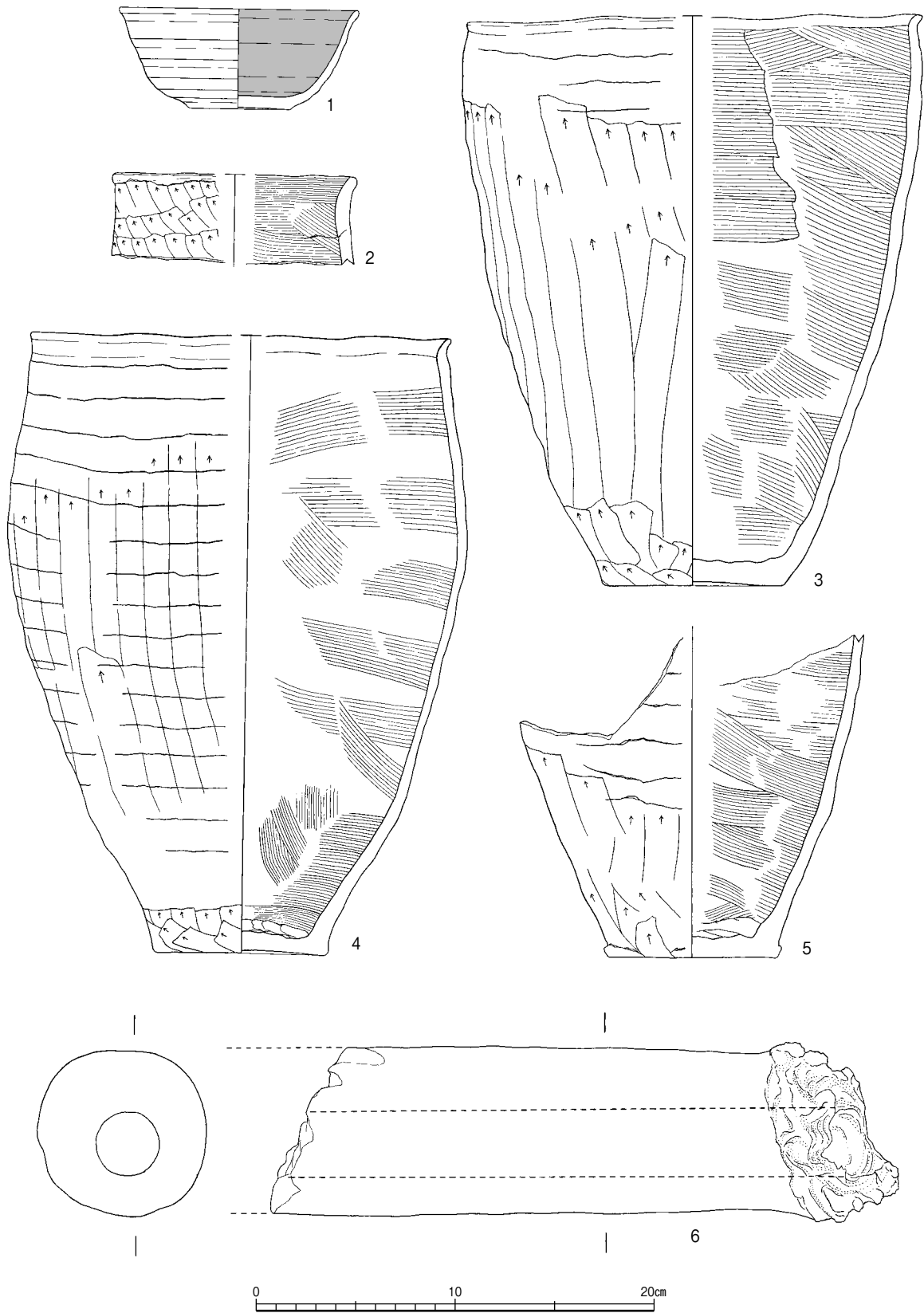
第57図1は鉄塊系遺物で、メタル度はH (○) である。色調は褐色を呈する。

時期等 時期は、出土した遺物から、10世紀と考えられる。

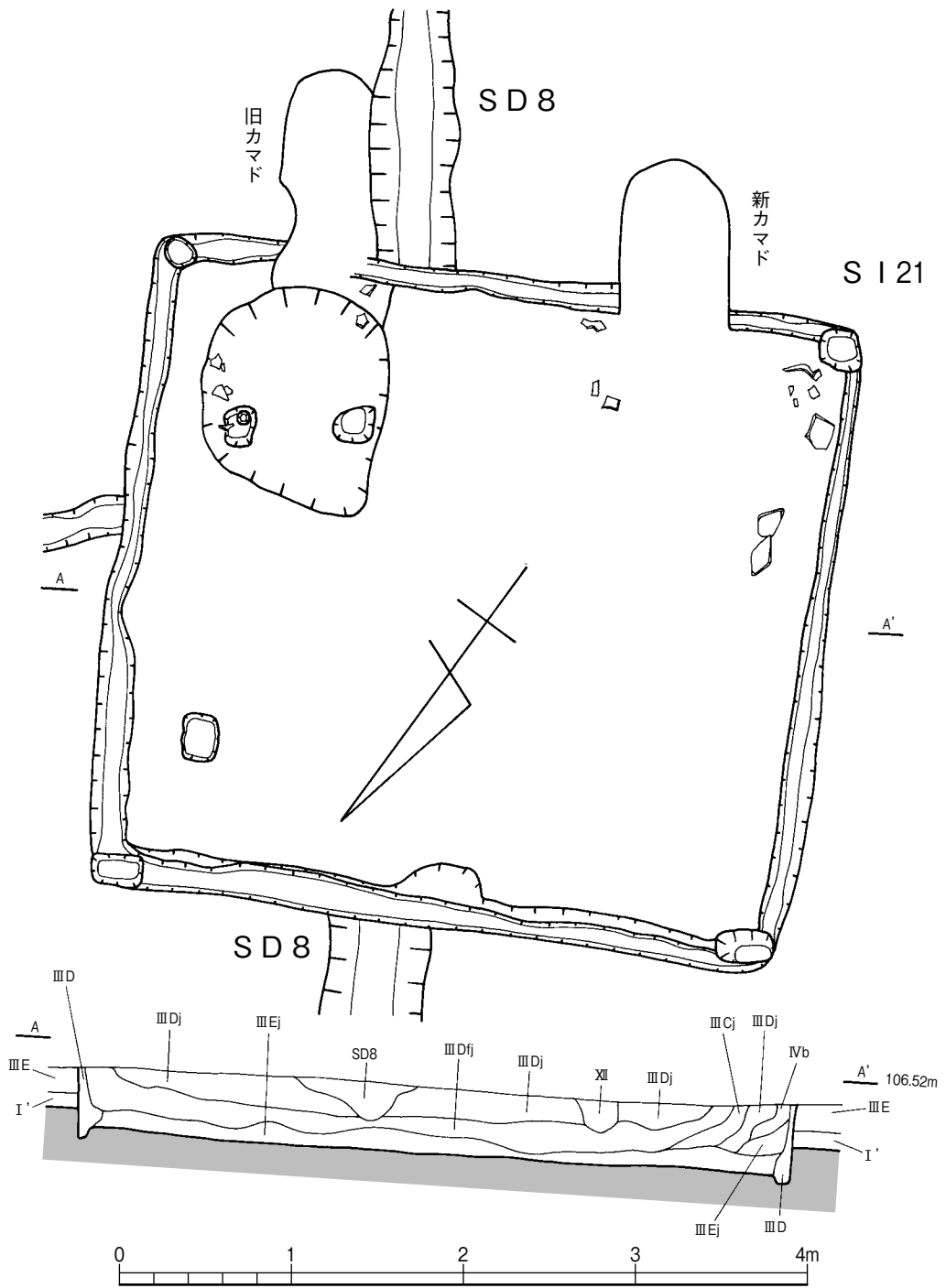
S I 20カマド



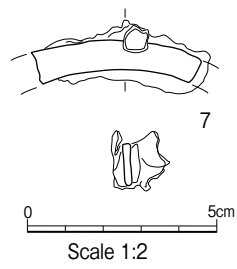
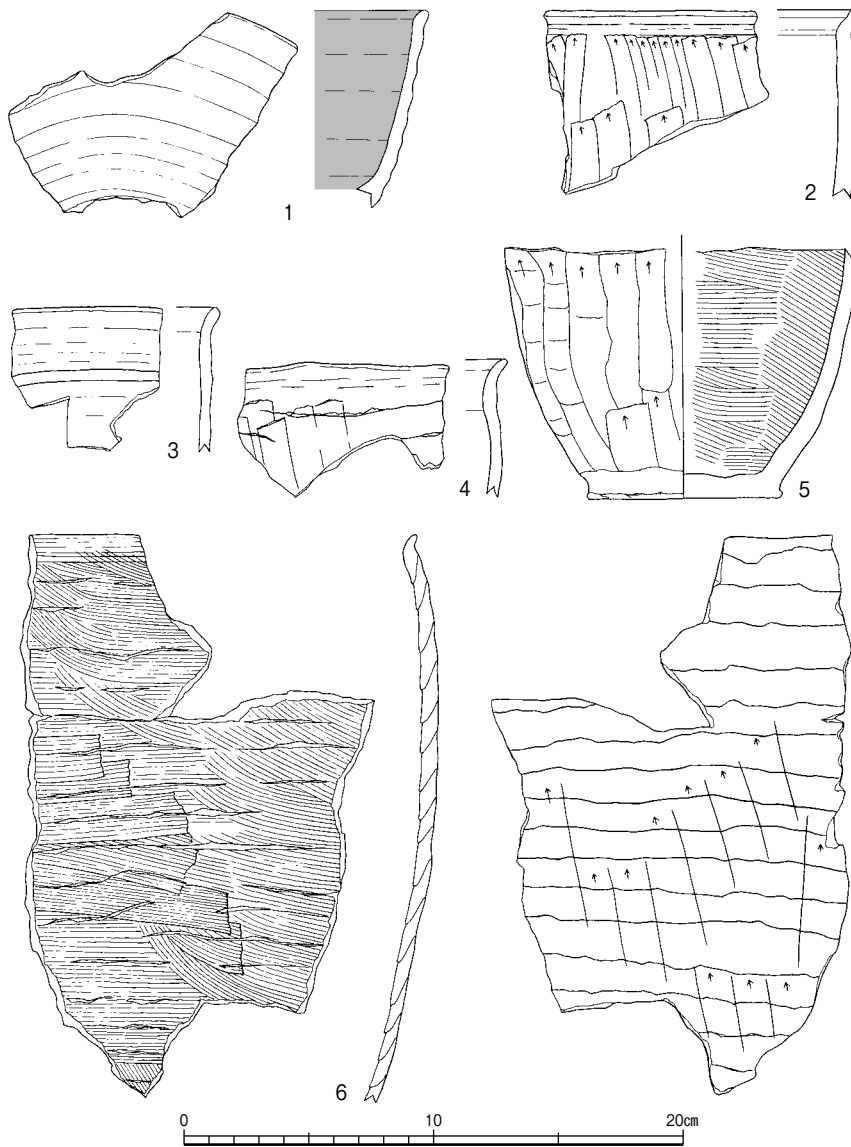
第53図 S I 20カマドとS I 20出土遺物 (1)



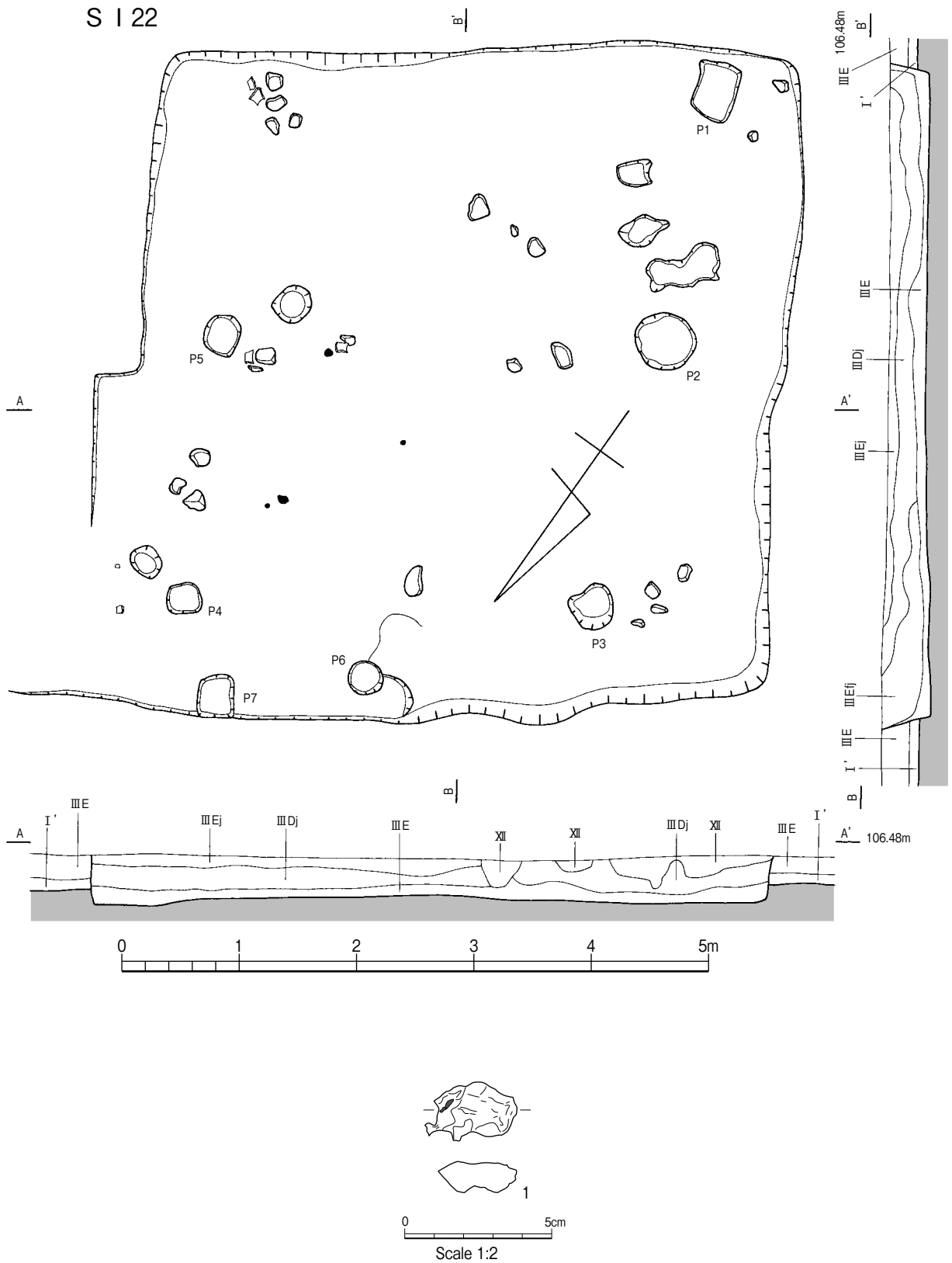
第54図 S I 20出土遺物 (2)



第55図 S I 21



第56図 S I 21出土遺物



第57図 S I 22と出土遺物

S I 23 (第58図)

位置 20-g・h区に検出。

遺構 北壁にカマドをもつ竪穴住居跡で大館野遺跡では異例。S D 10に竪穴東壁が並行する。埋積土全体に軽石粒が混入、自然堆積の状況を示す。柱穴は四隅と壁央部の計8柱。カマドは構築粘土が流れ、全体が崩壊している。

遺物 竪穴内からは土師器甕、小型甕、鍋の破片が出土した。

第58図1はカマド出土の小型甕で口径13.4cm、最大径が体上部にあつて14.2cm、推定器高14.5cmを測る。外面には巻き上げ痕が明瞭で、幅の狭いヘラケズリが行われ、その上から禾本科植物茎による数条のナデ痕がみられる。内面は上半に木口状工具による幅広3のカキ目、下半は木口状工具によるハケ目が雑に行われている。2は甕底部で底径8cm、底外面に粗砂粒付着。

時期等 時期は、出土した遺物から、10世紀と考えられる。

S I 24 (第59・60図)

位置 21・22-i・j区に検出。

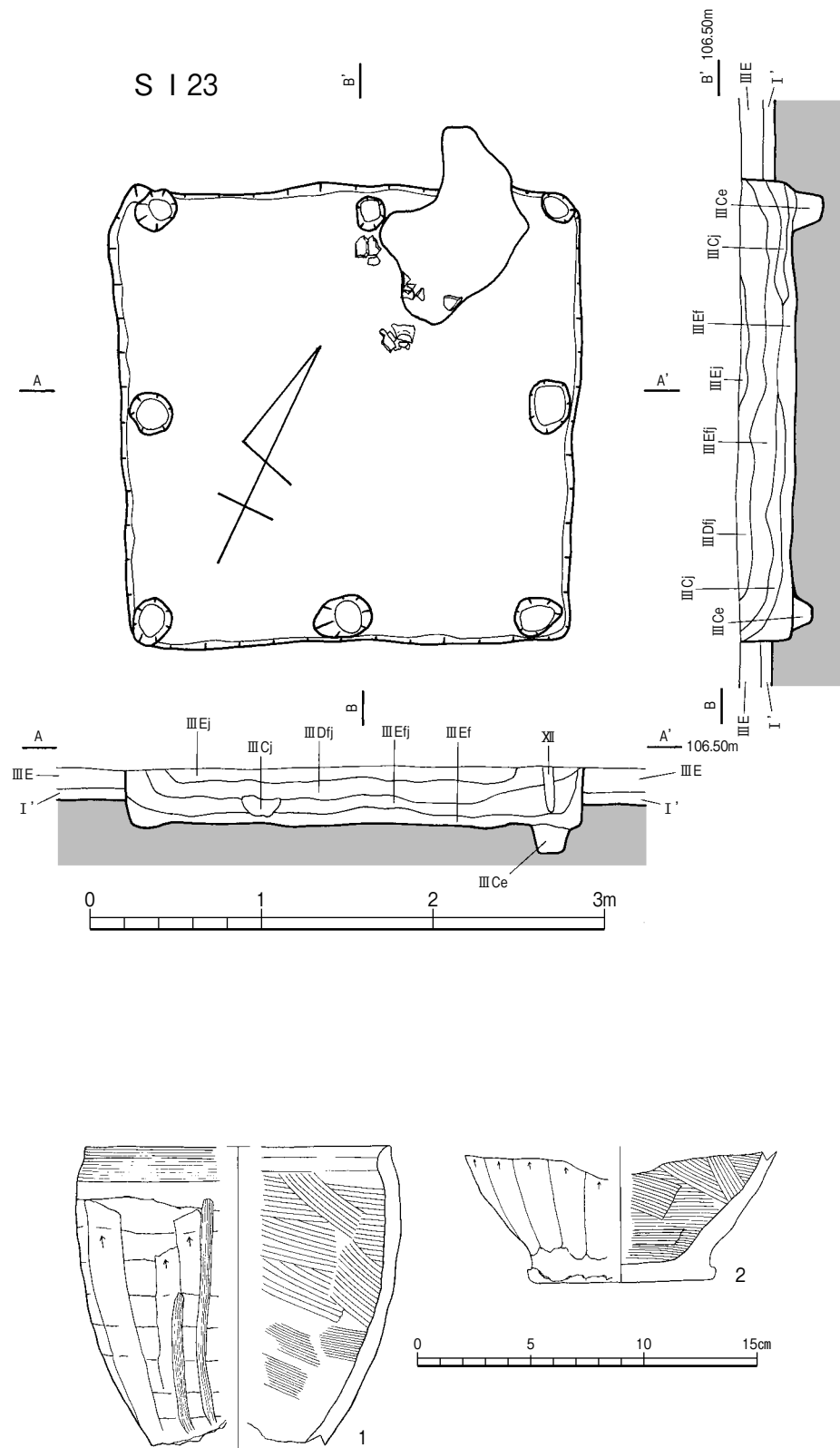
遺構 焼失家屋で埋積土の最下層中より、炭化建材が検出された。焼土や炭化材層(IXo・II no)の上位層には軽石粒が混入している。柱穴は四隅と壁央それらの中間にそれぞれ配され形16柱。南西部南壁ぎわに手斧で面調整した凝灰岩を立て掛けている。北東隅に長径90cm、短径65cmの不整楕円形ピットがあり、ピット中央床面上から苧引金2個が出土した。

カマドは焚口部が石芯構築で袖石は旧態を留めていたが、他は動いていた。左袖石外と焚口部、及び北西隅から多量の土師器片が出土した。焚口幅35cmで火床に焼けた砂、その上位に焼土、その上位に粘土が埋積している。カマド床は壁にむかってゆるやかに傾斜している。

遺物 竪穴内からは土師器甕、小型甕、鍋、鉄製品が出土した。

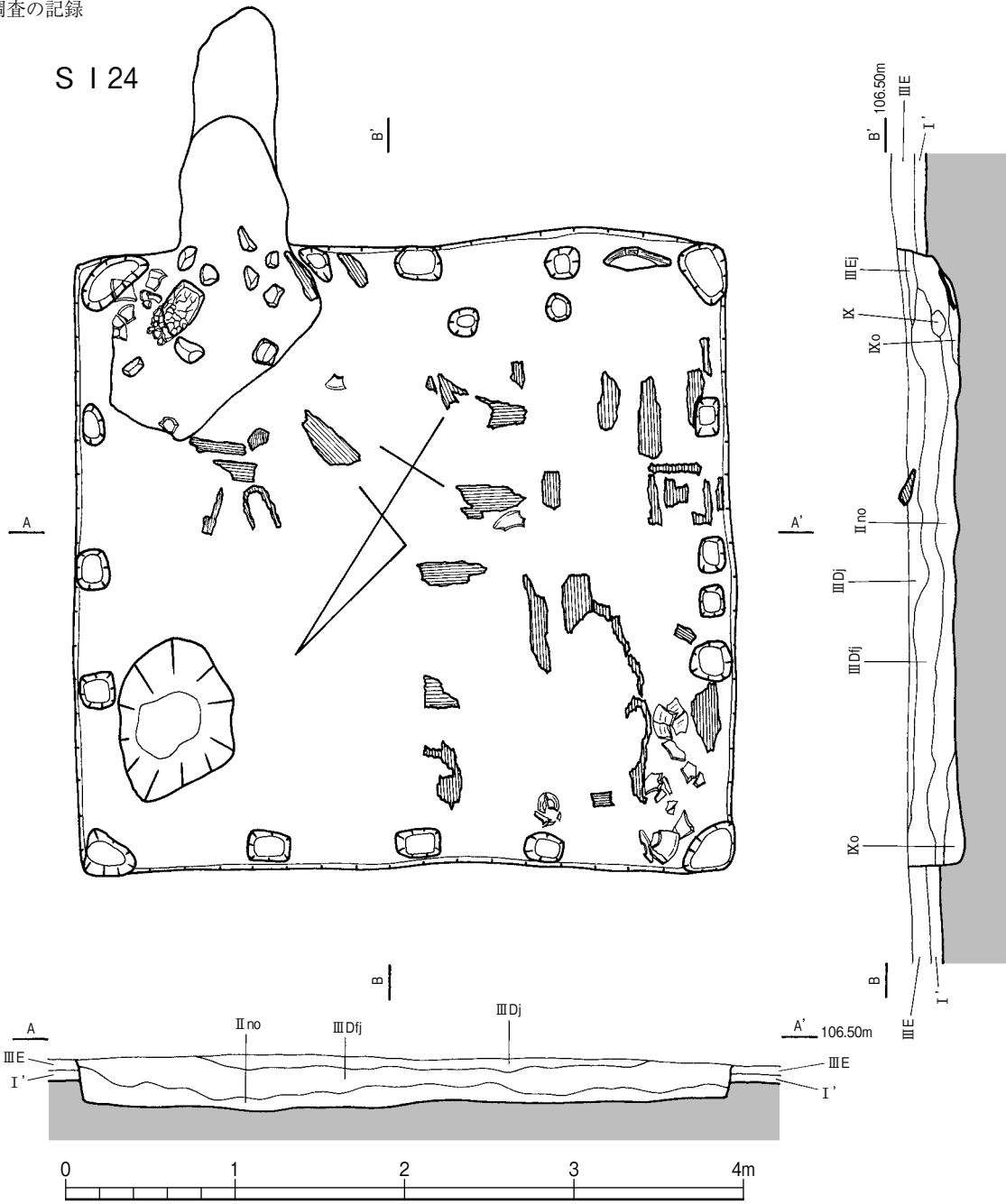
第60図1は竪穴北西部床面上に散在していた破片を接合して復原できた小型甕で、口径12.2cm、器高12cm、底径8cm、最大径が体中央部にあつて13.6cmを測る。器表面には巻き上げ痕が明瞭で、その上を丁寧なヘラケズリ調整を行っている。口縁部は横ナデ。内面は黒色処理がなされ、体下半に粗い木口状工具によるカキ目が施される。底外面に微細な砂粒が全面に付着している。2は床面出土の鍋破片。3はカマド内およびカマド左袖外から出土した破片を接合して復原できた甕で、口径19.8~24cm、器高23~26cm、底径11~12.5cmのいびつな形状である。器表面は粗いヘラ調整、内面は木口状工具によるカキ目が施される。底外面はヘラ調整がなされ砂粒は見られない。4は北西部床面出土の破片を接合して復原できた甕で、口径21.7cm、器高27.5~28.2cm、底径8.5cmの端正なプローションで3の甕とは好対照をなす。外面には巻き上げ痕が残り、ヘラ調整が丁寧に行われ、口頸部にヘラの痕跡が残るが、体部はたんねんに調整が行われているため、ヘラ調整作業の先後関係は見極めがたい。口縁部は横ナデ後にヘラ調整を行っている。底縁には底から持ち上げられた胎土が廻る。底外面縁周に粗砂粒が付着していて、その上をヘラ調整している。5は竪穴北東部貯蔵穴内床面上出土の手鎌である。長さ8.5cm、幅1.7cm、背峰の厚さ3mmを測る。両端に径3~4mmの目釘穴があつて、左側目釘穴には目釘と考えられる小鉄棒が付着している。6も手鎌で両端を欠く。現長6.2cm、幅1.5~1.8cm、背峰の厚さ2.5mm。背峰、刃部ともに弧状にえぐれ、かなり使い込まれた様子を残す。

時期等 時期は、出土した土師器から、10世紀と考えられる。

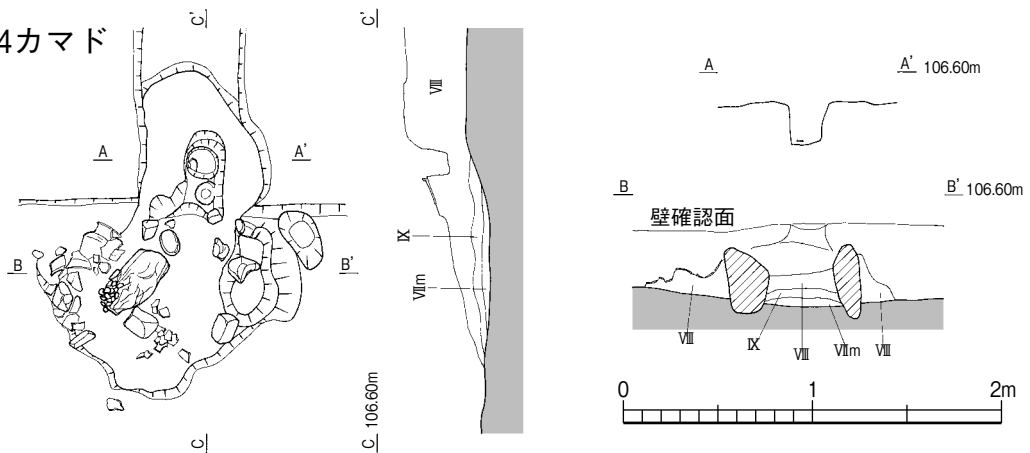


第58図 S I 23と出土土器

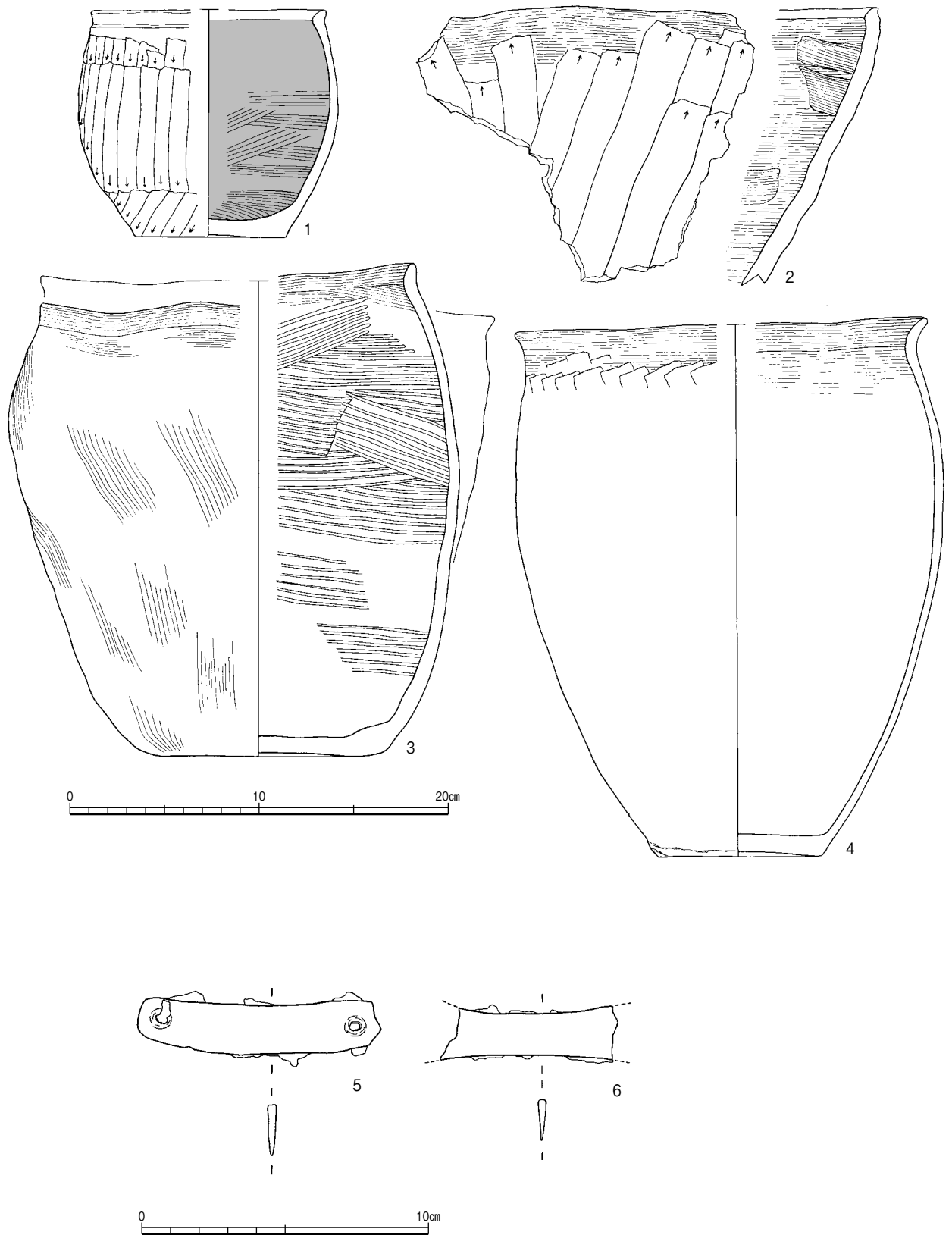
S I 24



S I 24カマド



第59図 S I 24



第60図 S I 24出土遺物

S I 25・26 (第61図)

位置 23・24-b・C区に検出。調査区東縁のため、竪穴西壁部を検出したに止まる。重複竪穴でS I 25→S I 26の構築順になる。

遺構 S I 25は南北現長3.5mを測るが推定の長さ6m前後。S I 26は南北現長4.3mを測るが推定の長さ5m前後と考えられる。S I 26は軽石粒を含む暗褐色土(ⅢDj)層中位面から掘り込まれ深さ60cmを測る。埋積土には軽石粒を含み、特に埋積土上位の暗褐色土に軽石粒が著しい(ⅢDj)。

遺物 竪穴内からは土師器甕破片の出土が数片みられたが、器形がわかるもの、復原できた土器はない。

時期等 時期は、土師器片が出土しており、平安時代と考えられる。

S I 27・28 (第62・63図)

位置 23・24-e・f区に検出。

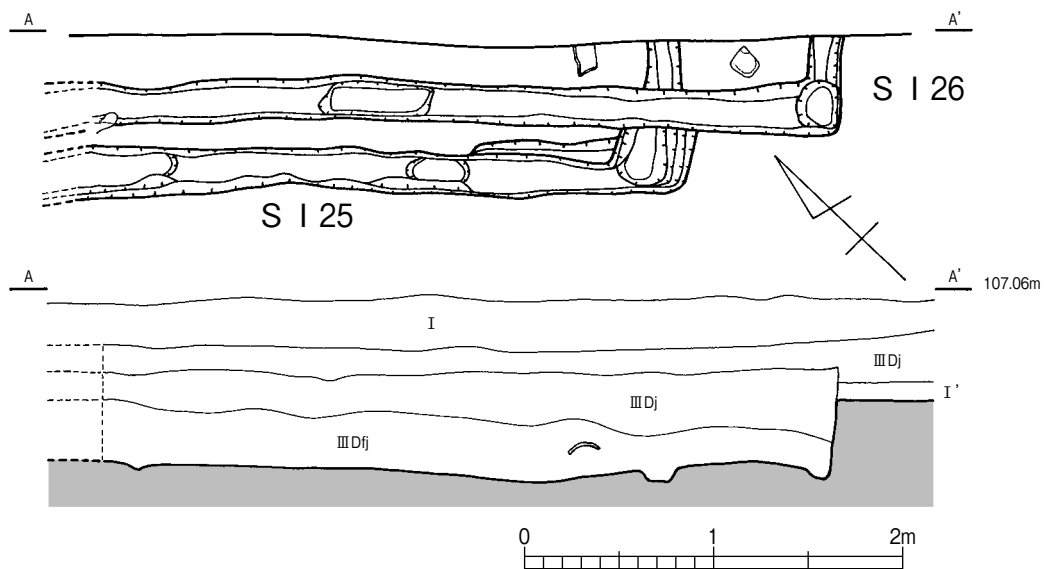
遺構 三期にわたる竪穴住居跡である。

S I 27はもっとも古い時期の竪穴住居で、東西4.6m、南北4.0mの規模で、カマドは南壁1/4東側第1分割点にあったが、S I 28の構築の際にすべてが整理され、焚口下の床面焼成面を残すのみである。

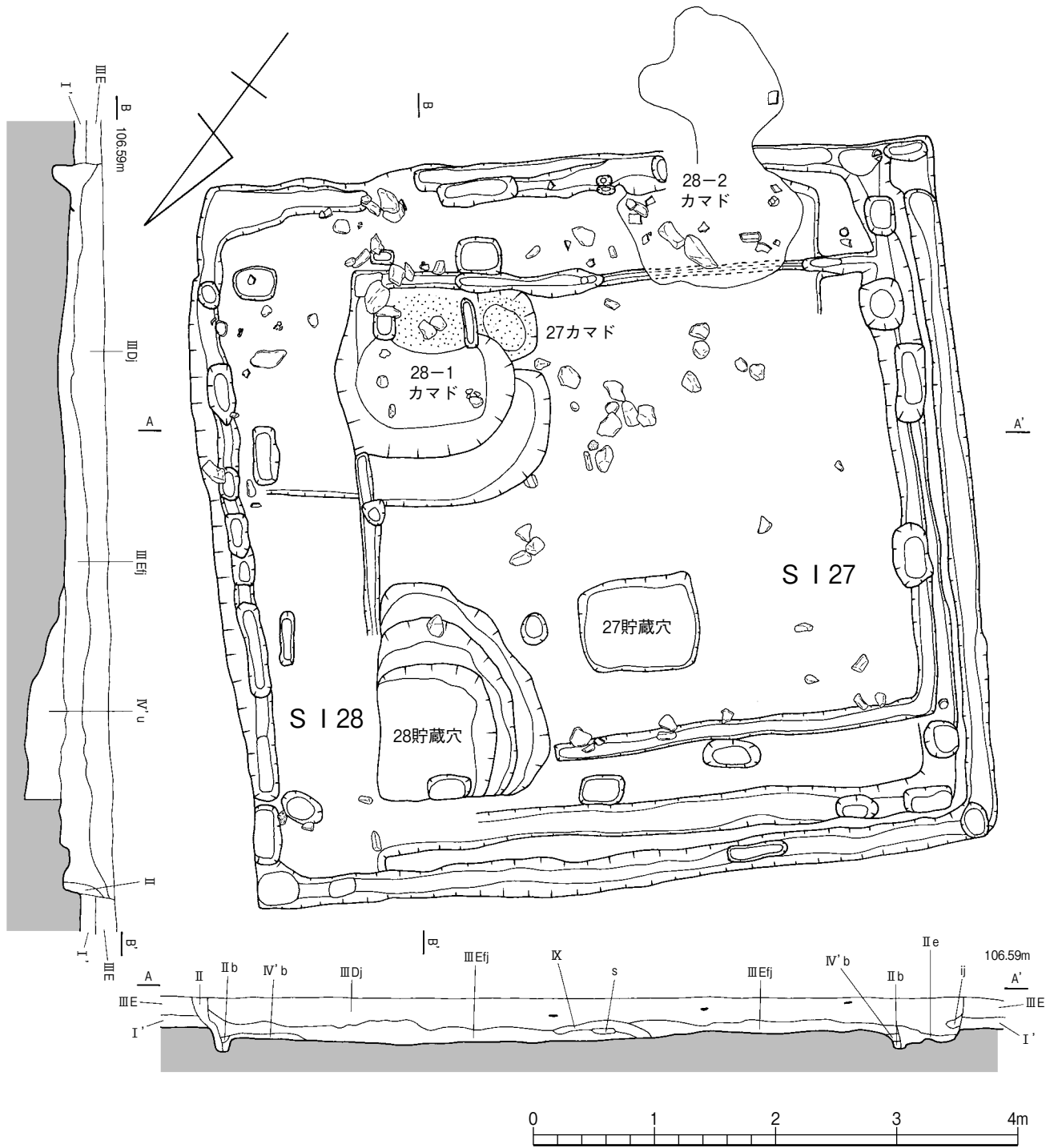
S I 28-1は、S I 27を南・東・北側に6~1mほど拡張し、西壁はS I 27西壁と接するように構築されている。東西5.6m、南北5.6mを測り、カマドは南壁1/3東側第1分割点にあつて、焚口部がS I 27南東隅にあたる。焚口の袖石を据えるためのピットが掘られ、カマド前には東西1.5m、南北1mの楕円形掘り込みの、二重になるカマド前庭部をつくっている。カマドは丁寧に構築されたしっかりしたものであつたと考えられる。

S I 28-2はS I 28-1を全体に30~40cmほど拡張した規模で、これが最後の竪穴住居跡となる。東西6.2m、南北6.1mの規模で、カマドは南壁1/3西側第1分割点に構築されているが、袖石は抜き取られ、構築粘土が流れ出し、旧状をとどめていない。埋積土には軽石粒が混入している。

遺物 竪穴内からは土師器甕、小型甕、鍋、埴、須恵器甕破片が出土したが、これらはS I 28-2竪穴期のものが大多数と考えられる。

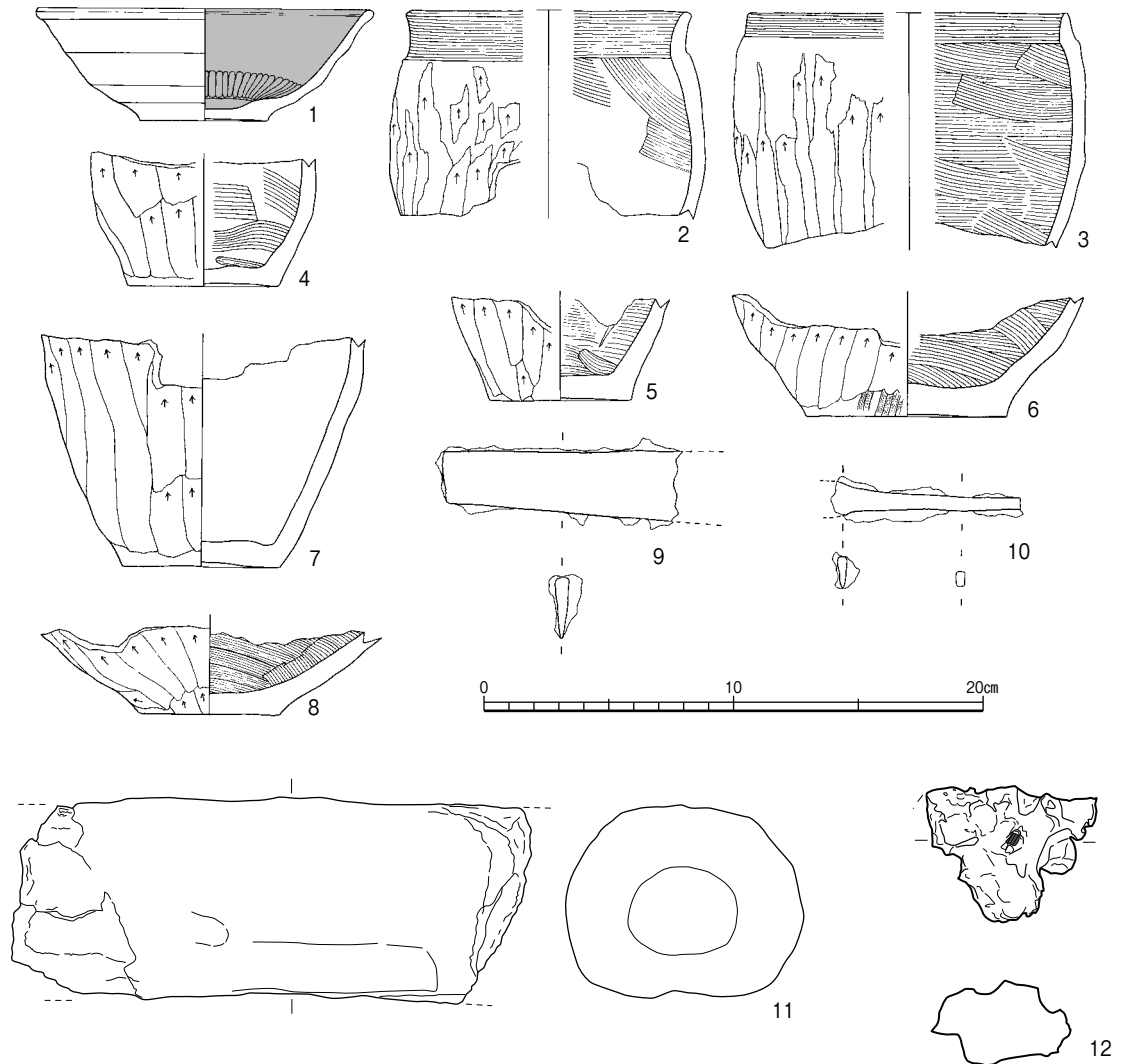


第61図 S I 25・26



第62図 S I 27・28

第63図1は埋積土中位出土の埴で、口径13.4cm、器高4.5cm、底径5cmを測り、やや平べったい形で、内面は内黒で底部と体部の接合部に丁寧に仕上げられた暗文がみられる。2はS I 28-2カマド崩落粘土上部出土の小型甕で、口径11.3cm、現高8.2cm、最大径は体中央部にあつて12.6cm、体部に巻き上げ痕がみられその上からヘラケズリが行われ、口縁には幅広い横ナデが行われる。内面は木口状工具によるハケ目。3は竪穴南東隅28-1竪穴柱穴内出土の小型甕で、口径12.7cm、現高9.3cm、最大径は体部上位にあつて14cmを測る。外面に巻き上げ痕を残し、その上から軽いタッチのヘラケズリ（ヘラナデ）が行われ、口縁は幅の狭い横ナデ、内面は木口状工具によるカキ目。4は南壁中央部下のS I 28-2壁溝中出土の小型甕底部で、底径6cm。器表面は幅は狭いものの粗いタッチのヘラケズリが行われ、内面はヘラナデ、底外面には粗砂粒付着。5は埋積土中出土の小型甕底部で、底径5.6cm。外面はヘラケズリ、底外面には粗砂粒が付着し、その上から底縁部だけをヘラナデしている。6は埋積土中出土の甕底部、底径8cm、器表面はヘラケズリ、内面はハケ目、底外面に粗砂粒付着。7は28-1カマド上部出土の甕底部、底径6.2cm、器表面はヘラケズリ、内面のヘラナデ痕は明瞭ではなく、底外面は粗砂粒付着。8は埋積土中出土の鍋底部で、底径5.6cm、外面は粗いヘラケズリで行われ、底外縁の一部も削り取っている。内面は化粧粘土が貼られ、その上にハケ目痕。底外面には細砂粒付着。9



第63図 S I 27・28出土遺物

は竪穴南西部床面上出土の小刀で、現長9.5cm、幅2.1~2.7cm、背峰の厚さ5mmを測る。刀子というよりも刀に近いものと考えられる。10は3と同様の柱穴内出土の刀子茎部で、現長7.5cmを測る。11は羽口。断面形の一部に平坦面を有する。12は炉内滓。鉄分は含まれない。炉底塊から鉄を取り出すために割りとられた残滓と考えられ、大きさは10cm程度である。

時期等 時期は、出土した土師器から、10世紀と考えられる。

S I 29・30 (第64~67図)

位置 25・26・27-b・c・d区に検出。

遺構 S I 29が先行する住居跡で、東西7.4m、南北7.2mでカマドは南壁1/5西側第1分割点にある。カマド前には東西2.3m、南北1.5mの不整楕円形の浅い掘り込みで前庭部をつくっている。S I 30はS I 29の南壁を切り込んで南壁をつくっていて、東西5.0m、南北5.0m、カマドは南壁1/4東側第1分割点にあり、カマド前には東西2m、南北2mの浅い掘り込みで前庭部をつくっている。

埋積土はS I 29・30ともに軽石粒を混入している。S I 29は黒褐色土層(ⅢE)中から掘り込まれていて、竪穴の深さ60cmを測る。

遺物 竪穴内からは土師器甕、小型甕、鍋、須恵器小片、羽口片、鉄製品が出土した。

第66図1はS I 30カマド出土の小型甕で復原口径12.3cm、器高11.8cm、底径6.8cm、体部を上から下へヘラケズリをしていて、残余土が底縁にまとめ押し付けられている。底面はヘラ調整。2は復原口径15cmの小型甕で巻き上げ痕が明瞭、S I 30カマド出土。3はS I 30カマド出土の復原口径20cmの甕で、器表面は粗いタッチのヘラケズリが下から上へ行われ、残余土が口頸部に集められている。7はS I 30床面上出土の鍋破片で、外面に巻き上げ痕が明瞭に残る。8はS I 30カマド前出土の刀子で木柄がついている。刀身の長さ9cm、柄の長さ4.6cm。9はS I 29北面壁下床面上出土の、三本の中空の鉄棒を取り付けた木製品で、木部は錆化して保存が良好。鉄棒の先には第25図2のような逆刺のついた銚状の利部があって、三本扱であろうと考えられる。10は刀子または手鎌と思われる。第67図は鉄関連遺物。1・2は羽口の先端~体部。いずれも断面形に平坦部を有する。3~5は椀形鍛冶滓。いずれも金属鉄を内在する。3・4は大ぶりで厚みがあるもので、精錬鍛冶工程に相当すると考えられる。3は直径が20cm以上と推定される特大サイズの椀形鍛冶滓である。側面に人為的と見られる大きな破面がみられる。残存する部分の厚みをみると、75mmである。4は直径が15cm前後と推定される。ほぼ完形資料である。5は直径が10cm前後と推定される。人為的な破面をもち、概ねもとの1/2に破砕されたと考えられる。

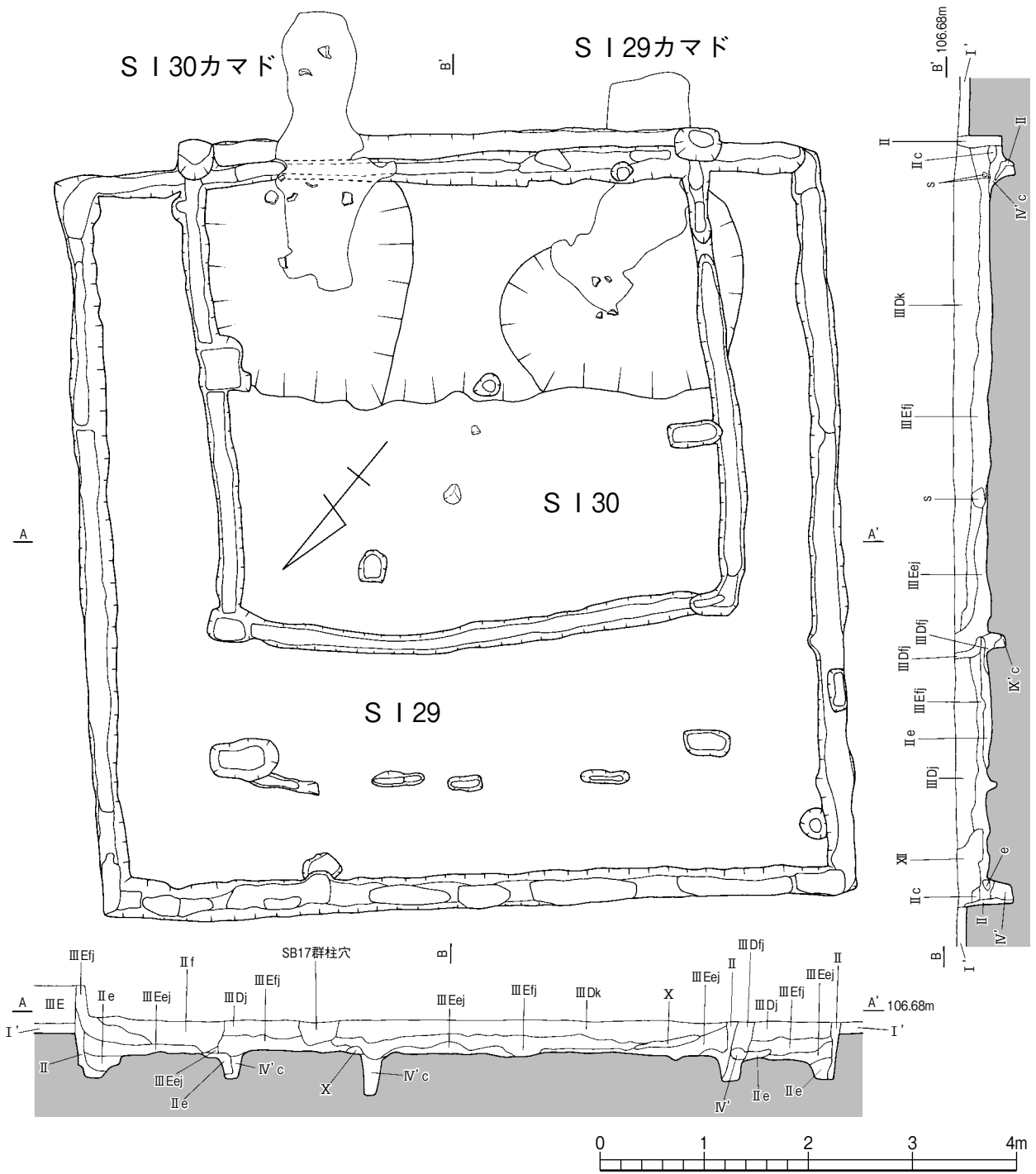
時期等 本竪穴から鍛冶に用いられたと考えられる羽口や椀形鍛冶滓が出土していることから、鍛冶工房である可能性がある。時期は、出土した土師器から、10世紀と考えられる。

S I 31 (第68図)

位置 24・25-j区に検出。

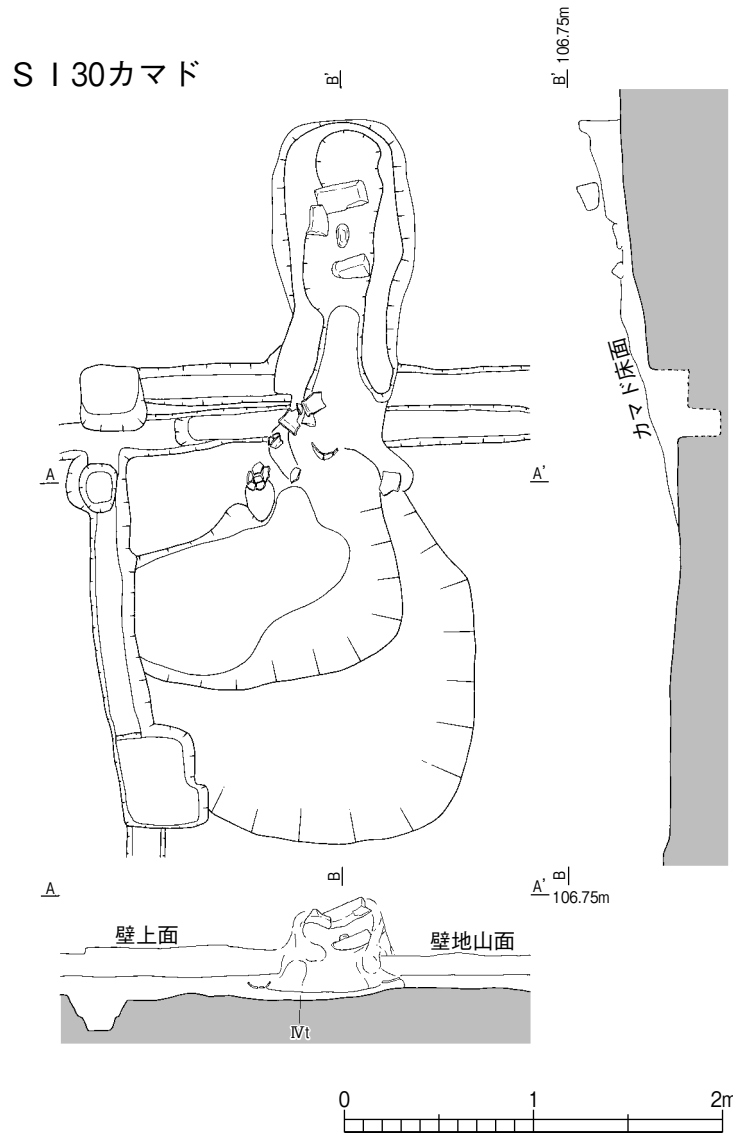
遺構 調査区縁に検出されたため、掘り込み断面を観察することが出来た。耕土層(I)下の軽石粒混入黒褐色土層(ⅢEj)からの掘り込みが確認されたが、掘り込み縁は耕土層にまで達していたと考えられ、竪穴の深さは50cm以上であった。竪穴内には軽石粒と黄色土ブロック(地山掘り上げ土)が全体に混在していて、ⅢEj層を掘り込んでいることから、軽石粒の降下後の竪穴構築である。北東壁中央部に大ぶりの柱穴が検出されたが、これは当竪穴堆積後に掘り込まれた柱穴である。

遺物 竪穴内埋積土中からは土師器甕、小型甕、鍋の破片が検出されたが、床面上からの出土はなかつ

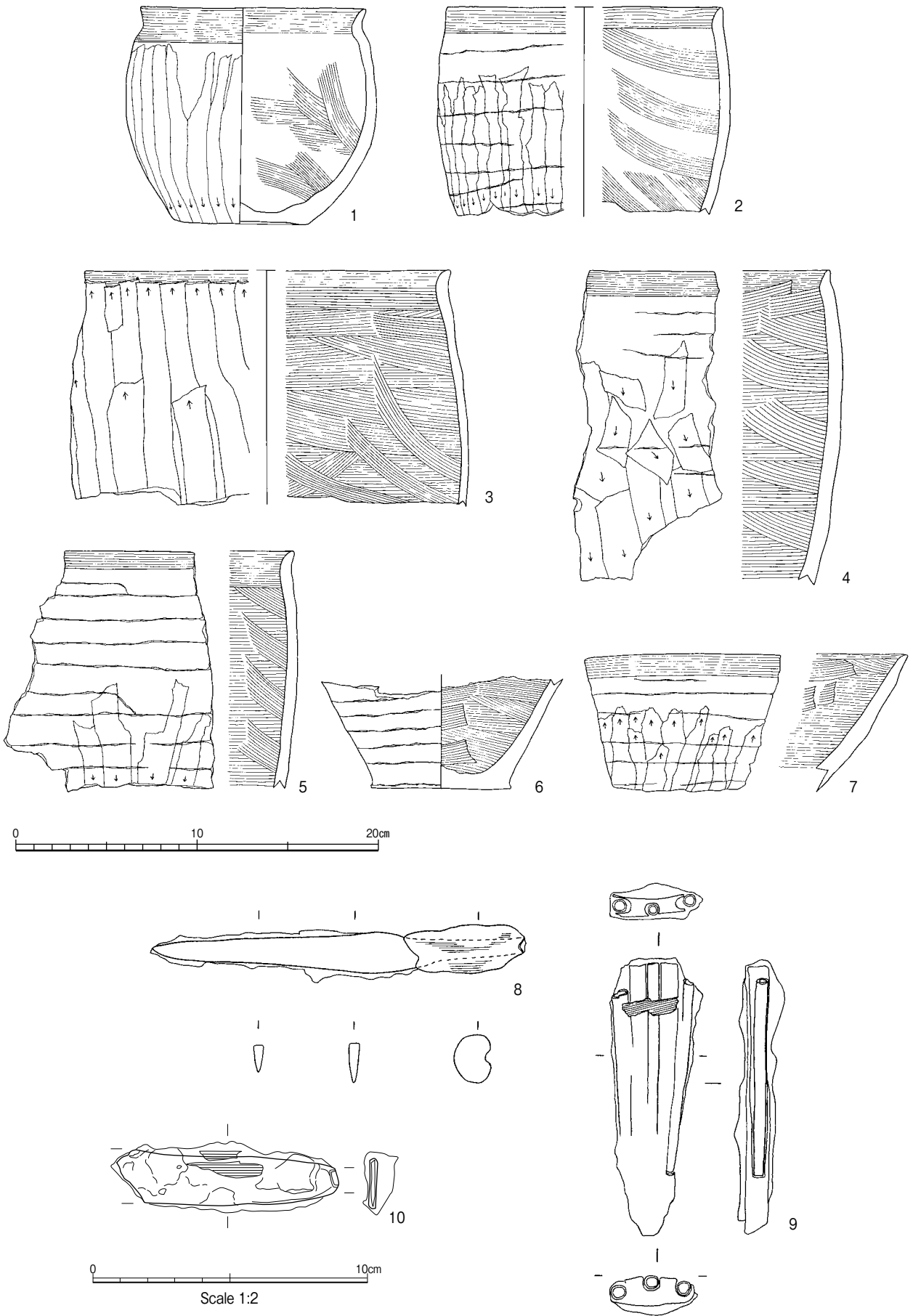


第64図 S I 29・30

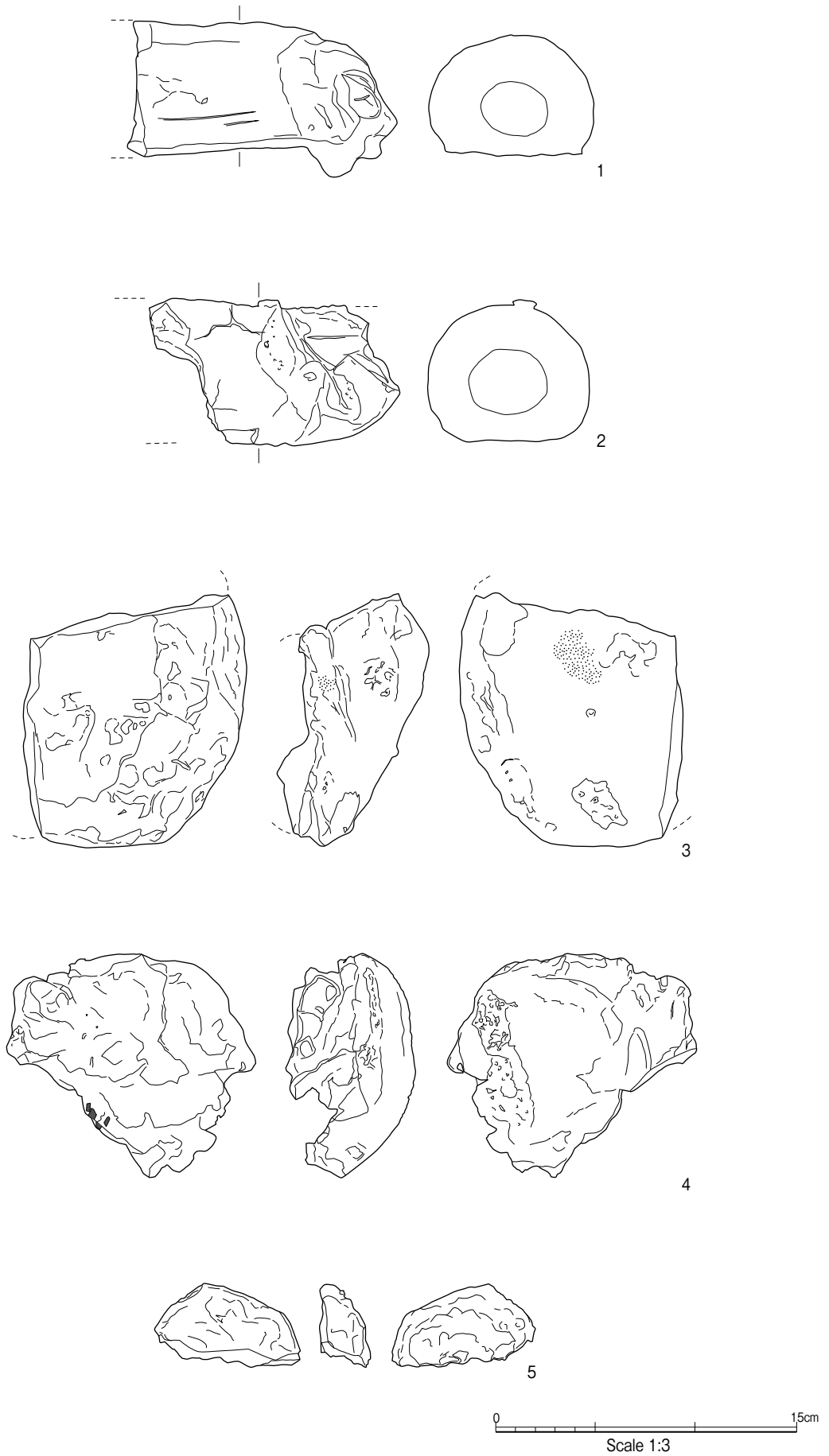
た。第68図1・2は小型甕、3・4・5は甕で5の底面は砂底、4の底外面には蓆編み痕が見られる。6は鍋口縁部で端部が受け口状に内湾し、山王台遺跡出土の「口唇内湾」土器の鍋に近似する。
 時期等 時期は、出土した土師器から、10世紀と考えられる。



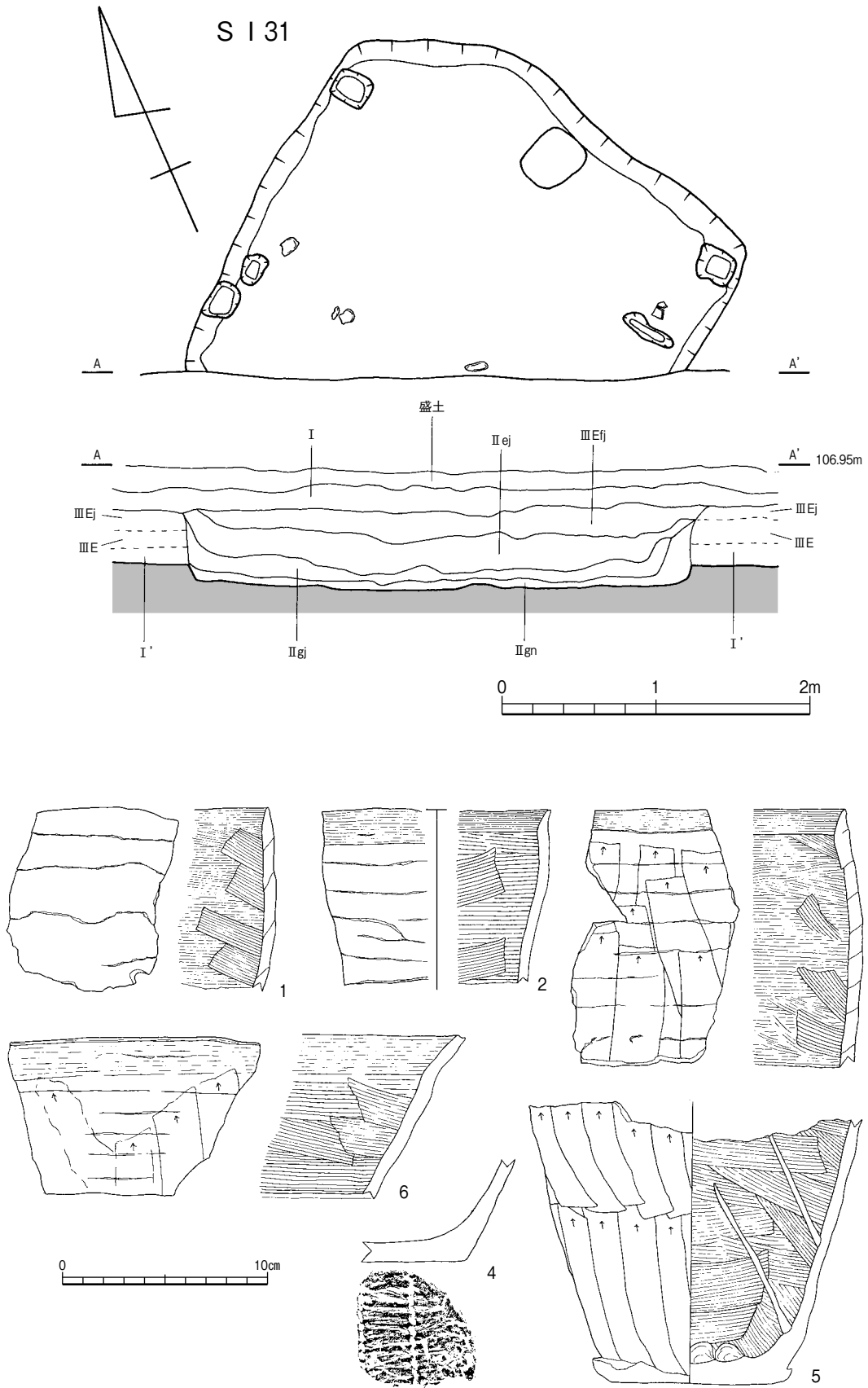
第65図 S I 30カマド



第66図 S I 29・30出土遺物 (1)



第67図 S I 29・30出土遺物 (2)



第68図 S I 31と出土土器

S I 32 (第69・70図)

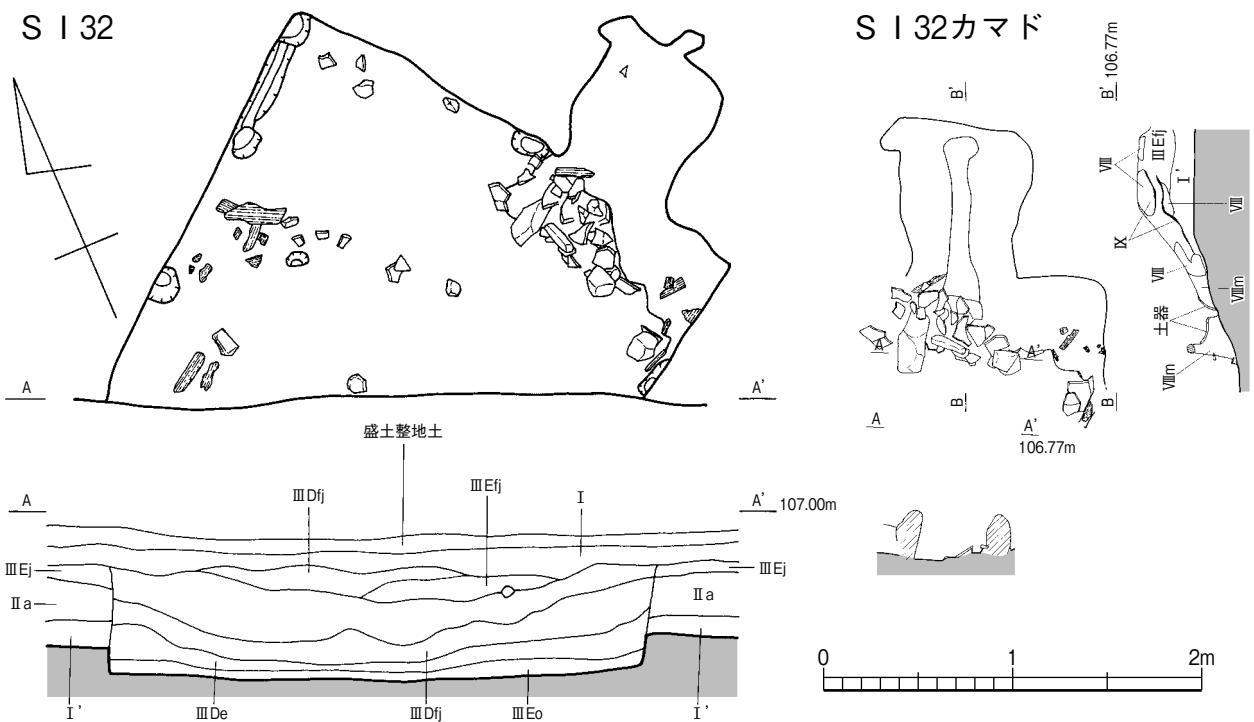
位置 25・26-h・i 区に検出。

遺構 S I 31の南東2m離れていて、調査区縁に検出されたため掘り込み断面を観察することができた。S I 31同様に耕土(I)下の軽石粒混入黒褐色土層(III E j)からの掘り込みが確認されたが、掘り込み縁はもっと上位にあったと考えられる。竪穴内埋積土中には軽石粒と黄色土小ブロック(地山掘り上げ土)が全体に混在している。

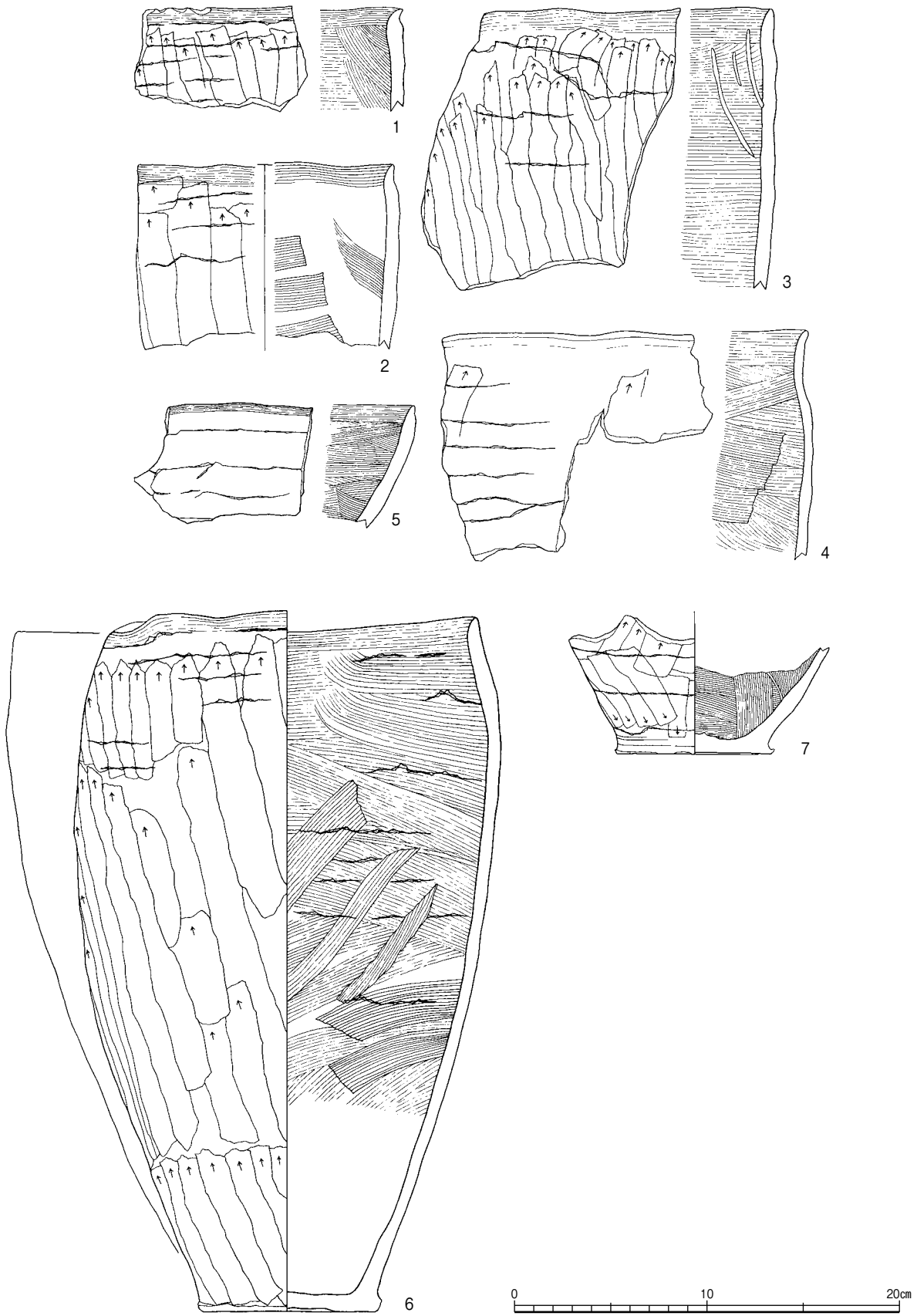
カマドは東壁に構築され、東壁を3分割した南側第1分割点にある。カマド床は竪穴内から地山を斜めに削って登り、竪穴外に出て漸移層上面を煙道床としている。カマド床は粘土を貼ってつくり、カマド床から煙道床にかけての傾斜変換点付近に、火熱を受けた床面が残存している。また、煙道天井部も傾斜変換点部で一部残存していた。焚口、燃烧部には甕一個体分が圧壊していた。

遺物 竪穴内からは土師器甕、小型甕、鍋破片が出土した。第70図1・2は小型甕で口縁部は横ナデによるつまみあげで、小さく外反して尖る。3・4は甕で3の外面は幅狭く丁寧なヘラケズリが行われている。5は鍋の破片で口縁部は横ナデつまみあげによって、小さく外反して尖る。6はカマド焚口出土の甕でカマドに据えられていたものであろう。口径は18.5cm~24cmと不整楕円形で、最大径が体上部にあり、器高が34.5cm~36cm、底径は9cmを測る。口縁は横ナデで、外面は口頸部、体部、体下部に分けて幅広のヘラによって丁寧なケズリが行われ、器内は木口状工具によるハケ目が体部に施されているが、ヘラでナデられていて平滑である。底外面はドーナツ状に砂底で、内円部は凹みヘラナデが行われた上に半円状に砂が付着している。7はカマド支脚に利用された甕底部で、外面はヘラケズリ、内面はハケ目、底外面は全体が砂底となっていて、二次焼成を受けて赤褐色に焼き締まっている。

時期等 時期は、出土した土師器から、10世紀と考えられる。



第69図 S I 32



第70図 S I 32出土遺物

S I 33 (第71～75図)

位置 15～18-1～n区に検出された5棟の重複した竪穴住居跡で、古い方からS I 37→S I 36→S I 33→S I 35→S I 34の構築順序となる。

遺構 東壁8.7m、南壁8.6mを測り、竪穴北面は調査できなかったが、床面積74.8㎡の規模の竪穴であったと考えられる。焼失家屋で床面全体に炭化材が散乱していたが、一部の壁板材を除いて構築部位を知る手掛かりは得られなかった。確認調査グリッド(No.11 d)が竪穴北東部に当たり、その際には炭化材上位に炭化した禾本科植物茎(茅と思われる)が、東壁側では東西方向に茎軸を、北壁側では南北方向に茎軸をそろえて検出されたことから、四方に軒が下る構造で、葺材は禾本科植物を利用して茅葺屋根であったと考えられる。

カマドは南壁にあり、南壁を5分割した東第1分割点に構築される。カマド前庭部には東西約3m、南北約2mの不整矩形の浅い掘り込みがあり、その北西部から竪穴西床にむかって掘り込みが連続し、南壁4分割西第1分割点前庭部で、東西約2m、南北約1.2mの不整矩形の掘り込みに至る。

柱穴は竪穴床面南側の2本の柱穴と壁隅及び壁下に側柱が見られ、南壁下では6～7本、東壁下では7～8本の側柱がみられ、いずれも柱穴が大ぶりで深い。

遺物 竪穴床面には炭化材、焼灰土に混じりあるいはその上位から大量の須恵器甕、瓶の破片が出土し、竪穴北東隅には土師器鍋2個が伏せた状態で出土した。

第74図1は須恵器長頸瓶。口縁部と底部を欠き、頸部はラッパ状にひらく。体部は球形にちかい。この頸部は比較的細い。無台である。第72・73図は須恵器大甕。口径52cmのとくに大きなもの(第72図)と口径21cmのものがある(第73図)。第72図は幅広の口縁端部をもつ。口縁部は横ナデ²⁾であり、体部器表面は平行タタキ目、内面は当て具跡が不明瞭である。胎土は精良であり、つくりはきわめてよい。初穀を入れて軽量したところ、口までで丁度1石、頸までで9斗あった。第73図は口縁端部が外傾した面をもつ。体部内面は当て具痕が不明瞭、器表面は平行タタキ目である。

第74図2～14は土師器。2～4は埴で、内面黒色処理した黒色土師器である。4は口径12.3cm・器高5.8cmのヘラミガキの埴である。器壁は薄い。内面のヘラミガキは体部が横位である。体部器表面はロクロナデである。5～12は甕であるが、全体を復原できるものはない。5は復原口径11.8cmであり、直線的な肩部に短く開く口縁部をもつ。端部は明瞭な面をもたない。6は復原口径12.4cmであり、口縁部が短く開く。体部に丸みをもち、底部は9のように底径7cm前後のものと考えられる。7～12は甕と思われる平底の底部である。底面は砂底(7～10)と網代痕をもつもの(11・12)がある。11・12は全体の器形が不明であるが、大型の器種の底部である。内面はナデ、器表面は粗いナデである。胎土は甕類とかわりない。13・14は鍋。口径約35cmの大きなもので、口縁部は内湾し、体部は直線的で底部となる。14は体部下半に下から上へのヘラケズリが施される。

第75図1は紡錘車で紡錘輪と軸が遺存している。重量は63gである。2は流動滓。

時期等 時期は、出土した須恵器に前田野目段階のものがあり、10世紀中葉と考えられる。

S I 34 (第71・75～77図)

位置 16・17-1・m区に位置する竪穴住居跡である。

遺構 一辺4.2～4.6mの方形で、深さ30cm程である。埋積土は暗褐色土と黒褐色土を主体とする。南壁西側の部分がカマドと思われる。柱穴は隅柱の構造をとる。

2) このような大型品ではロクロ回転を利用したナデを施すことが可能かどうかは不明である。

遺物 第75・76図は注記から、本竪穴出土と判断した須恵器である。4は本竪穴床面とS I 35埋積土が接合したもので、完形の長頸瓶である。器高35cm・体部最大径27cm。体部はほぼ球形にちかい。器面は全体にロクロナデ調整が施される。頸部に「上」のヘラ記号がある。3は短頸壺で、肩の張った球形の器形に、外反した短い口縁部をもつものである。口縁端部は丸くおさまる。肩部から頸部はロクロナデ、底部にかけては手持ちで左上から右下へケズリを施す。口径12.5cm・器高28.5cm。第76図は大甕で、口縁端部は外方へのび、外傾する面をもつ。内面にヘラナデが施される。

土師器は、甕があるが全体の器形を復原できるものはない(第77図)。口径11~13cmの小型甕(1・2)と口径20cm程の大型甕(3・4)がある。小型甕の口縁部は内湾気味に立ち上がるもの(2)と屈折して外反するものがある(4)。体部は丸みをもつものと推定される。大型甕の口縁部も内湾気味に立ち上がるもの(4)と屈折して外反するもの(3)がある。4の体部下半には器表面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施される。底部には平底のものがある(5)。5の底面は砂底である。

6は壁溝から出土した鉄製品の鋳造品で、器種不明。厚さ約10mmの板状を呈する。重量は86gである。
時期等 重複する5軒の竪穴の中では最も新しく、前田野目3号窯と考えられる時期の壺が出土しており、最終段階のⅢ期(10世紀後葉)に位置づけられる。

S I 35 (第71・78図)

位置 17・18・19-1・m区に位置する竪穴住居跡である。南東部をS E 1に切られる。

遺構 一辺が5.5~5.8mある方形でカマドは確認されていない。深さは20cm、埋積土はやや軽石粒を含む暗~黒褐色土で、地山ブロックを少し含む。柱穴は径20cmのほぼ円形である。

遺物 第78図1の須恵器大甕が出土した。口頸部は小さくすぼまり、体部は球形にふくらむものである。口縁端部はくぼみ、つまみ出される。器表面は平行タタキ目、内面の当て具痕は不明瞭である。2は鉄製品で、刀子または手鎌の身部の破片である。3・4は椀形鍛冶滓で、含鉄の資料である。3は直径5cm前後と推定される椀形鍛冶滓である。5は鉄塊系遺物。メタル度はいずれも銹化(△)である。

時期等 重複する5軒の中では2番目に新しい竪穴である。出土遺物は多くはないが、須恵器大甕が前田野目段階であり、Ⅱ~Ⅲ期に位置づけられる。S I 36・37・33よりも新しく、建物群の変遷の一面期を示す資料として重要である。

S I 36・37 (第71図)

位置 17・18-m・n区に位置する竪穴建物跡で、S I 33・35とS X 9に切られる。

遺構 大半がS I 35に切られているうえ、北半はS I 33に切られており、遺存しているのは西辺部の一部のみである。主軸はN-64°-Wであり、カマドは確認されていない。深さは約30cmである。S I 36は柱穴と考えられるピットが壁溝に沿っていくつかある。遺物は土師器小片が30点程出土したのみである。

S I 38 (第79~81図)

位置 16・17-o・p区に位置する竪穴住居跡。Ⅱ区のなかでは北西側に位置する。

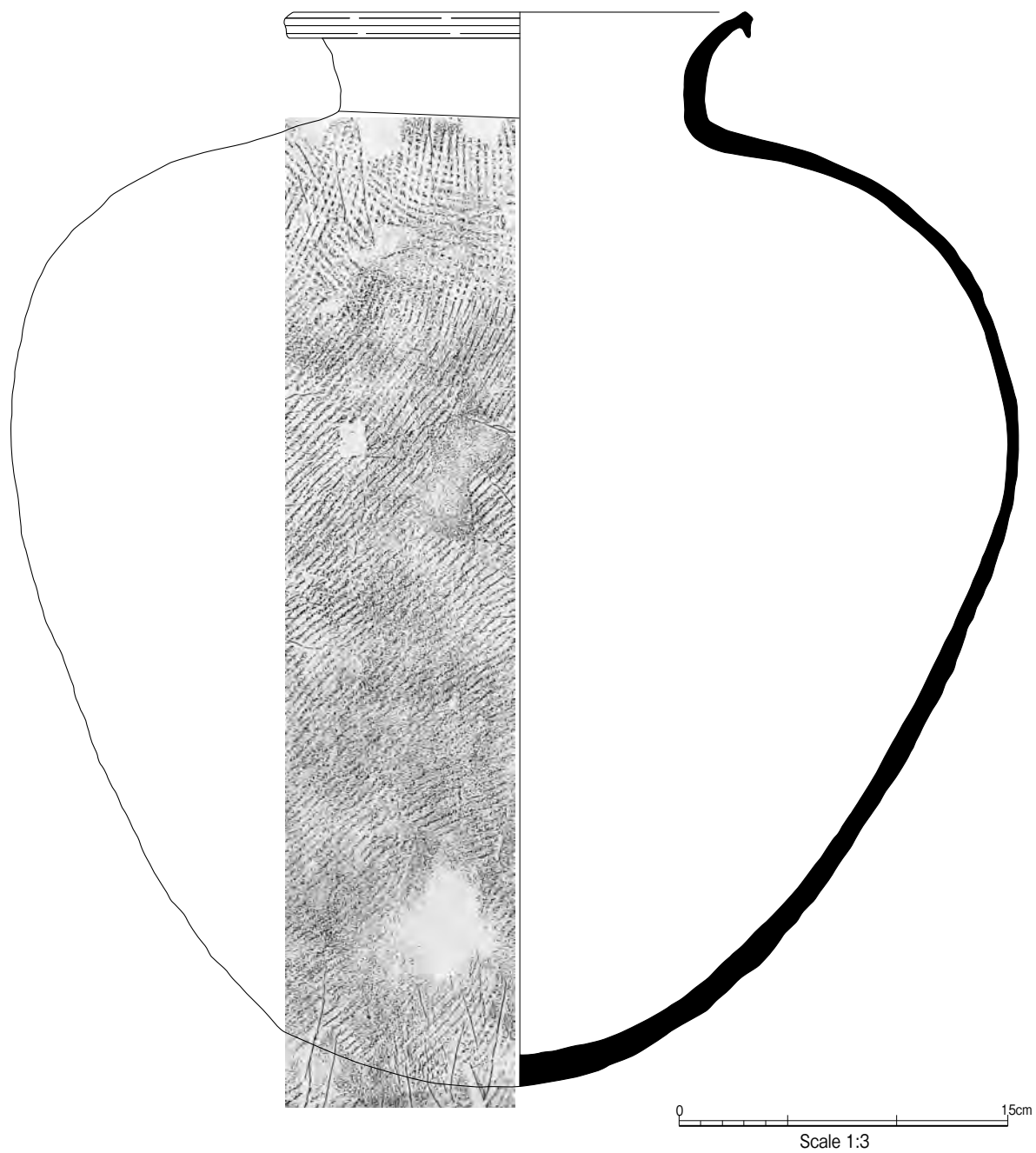
遺構 主軸はN-64°-Wで、南西辺にカマドがある。竪穴の一部を検出したのみであり、北西側は調査区外へ広がる。検出した部分では、一辺6.2mである。深さは30cm前後である。床面に小さなピットがあるが、住居の柱穴かどうかは不明である。周溝は壁際に全周する。カマドは1.7×0.8m、高さ約



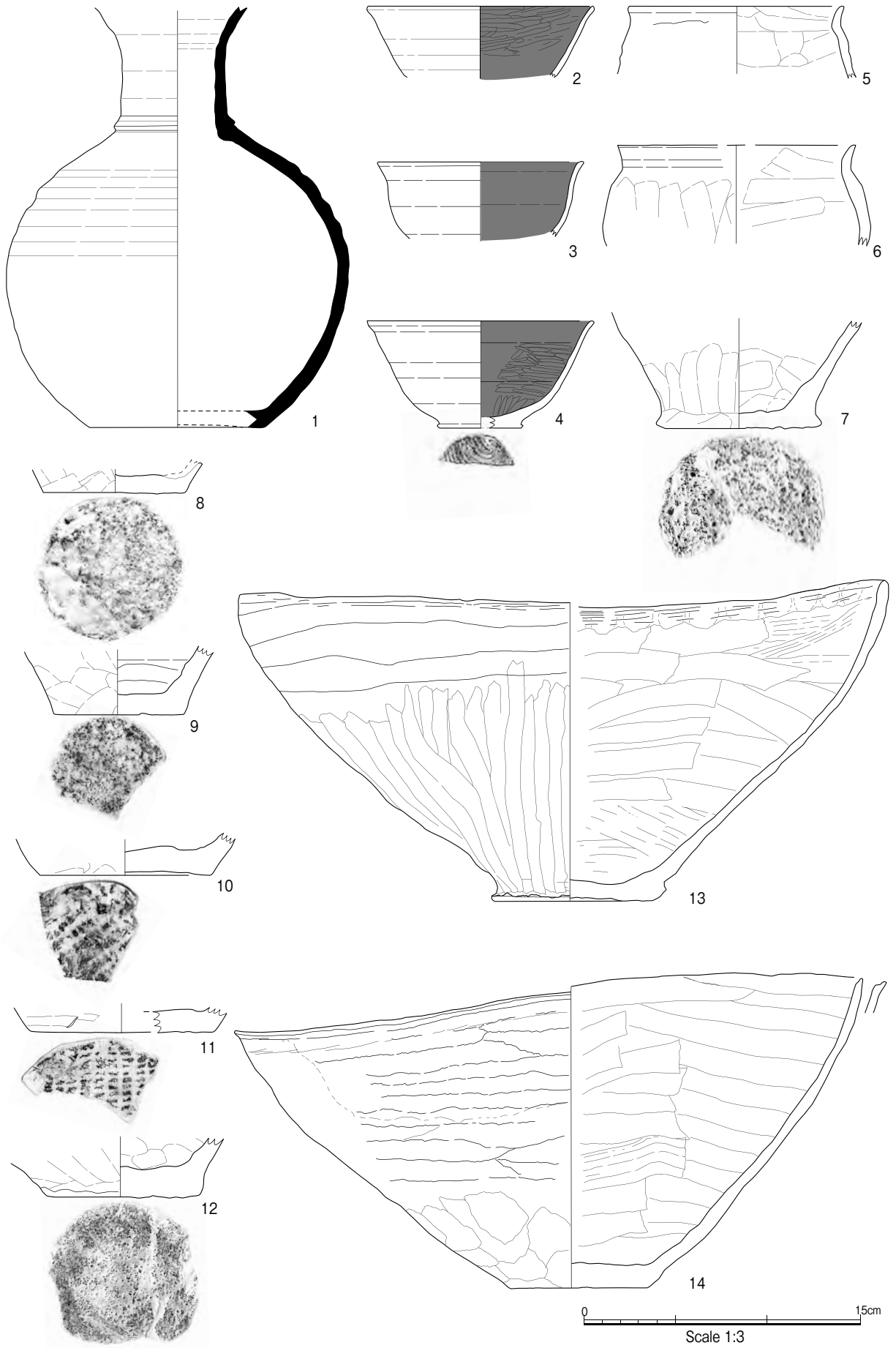
第71図 S I 33~37



第72図 S I 33出土土器 (1)

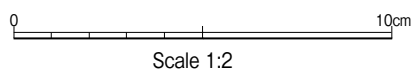
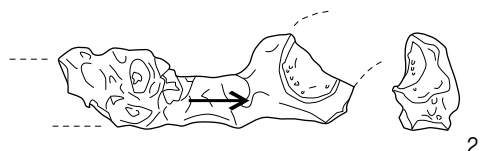
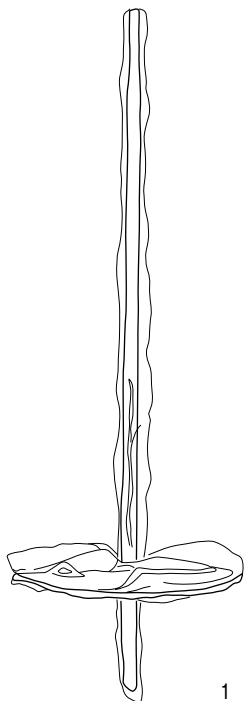
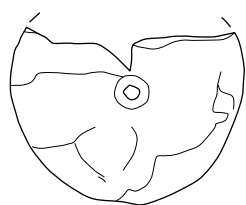


第73図 S I 33出土土器 (2)

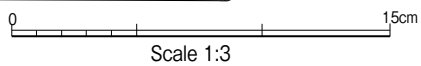
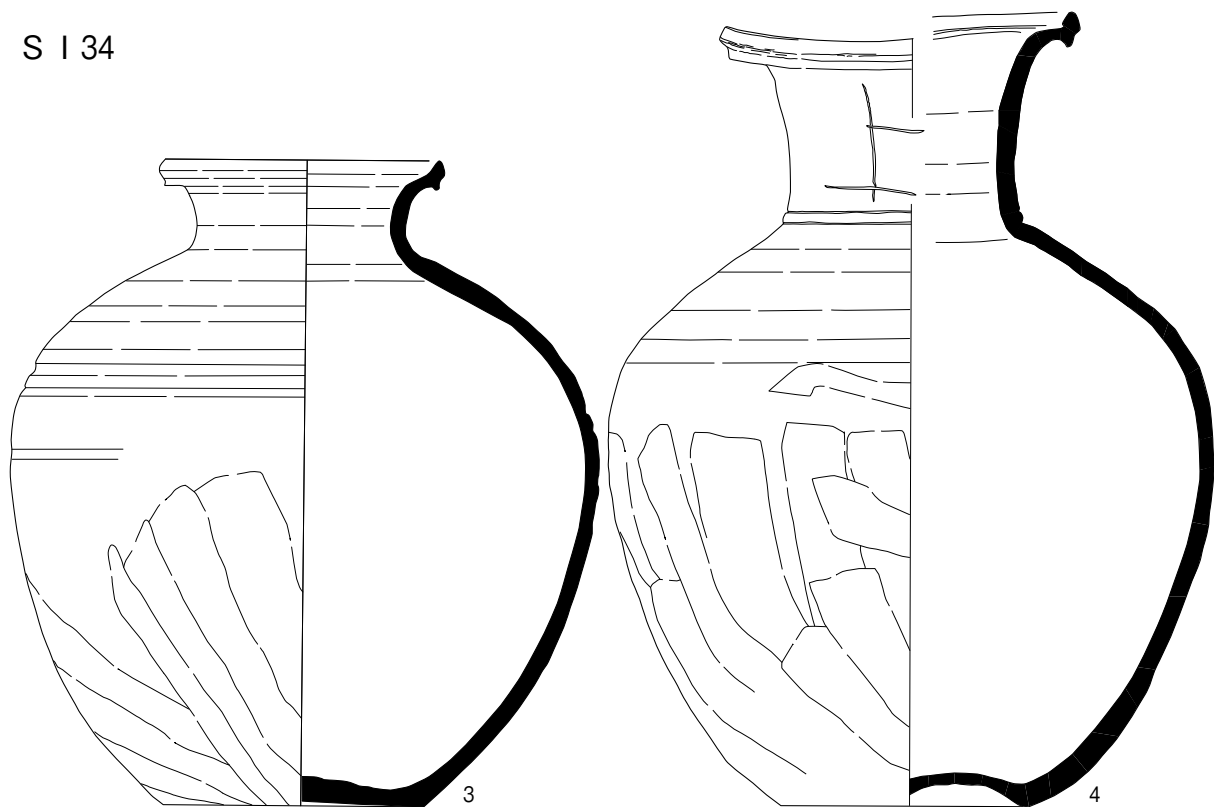


第74図 S I 33出土土器 (3)

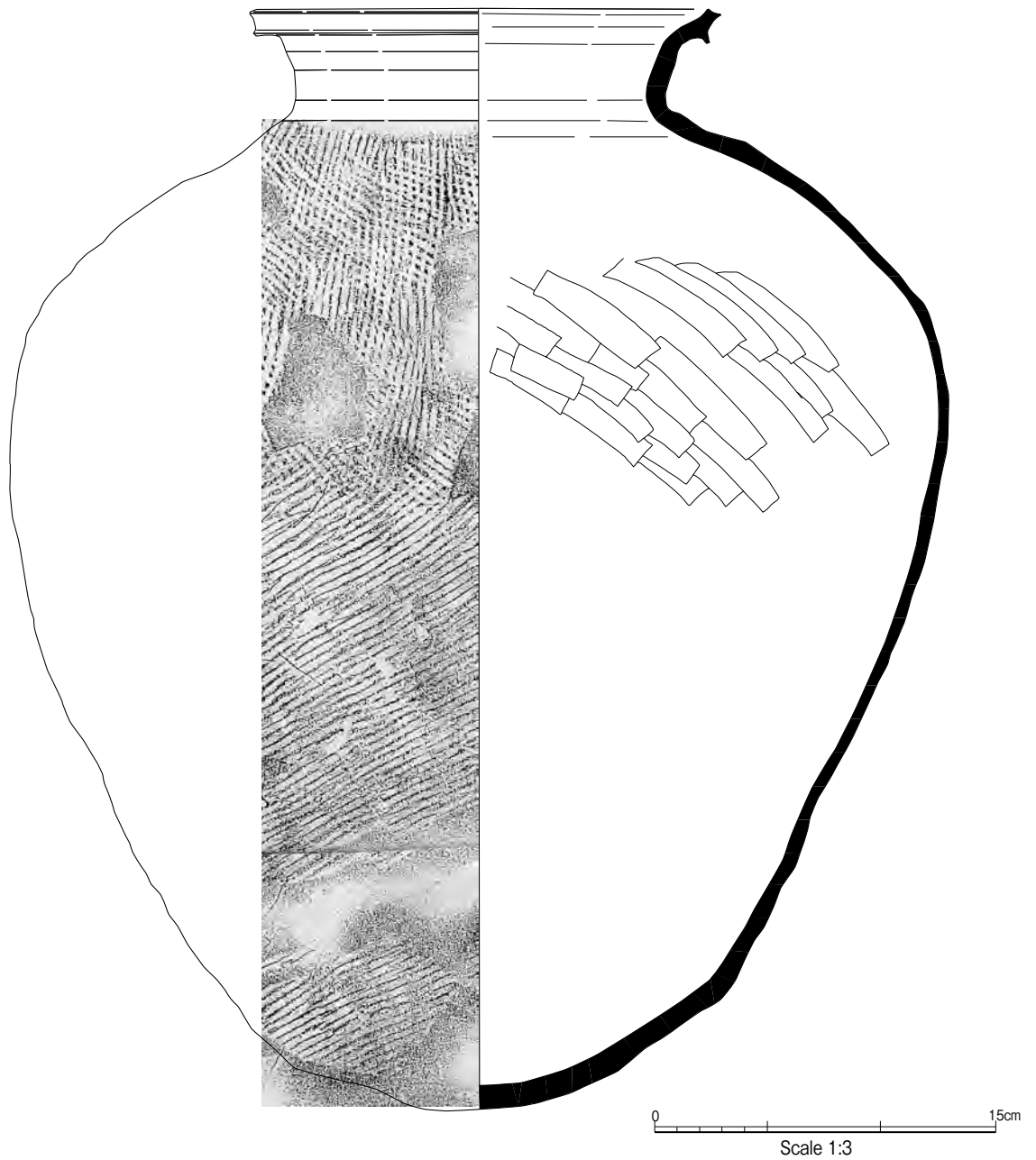
S I 33



S I 34



第75図 S I 33出土遺物・S I 34出土土器 (1)



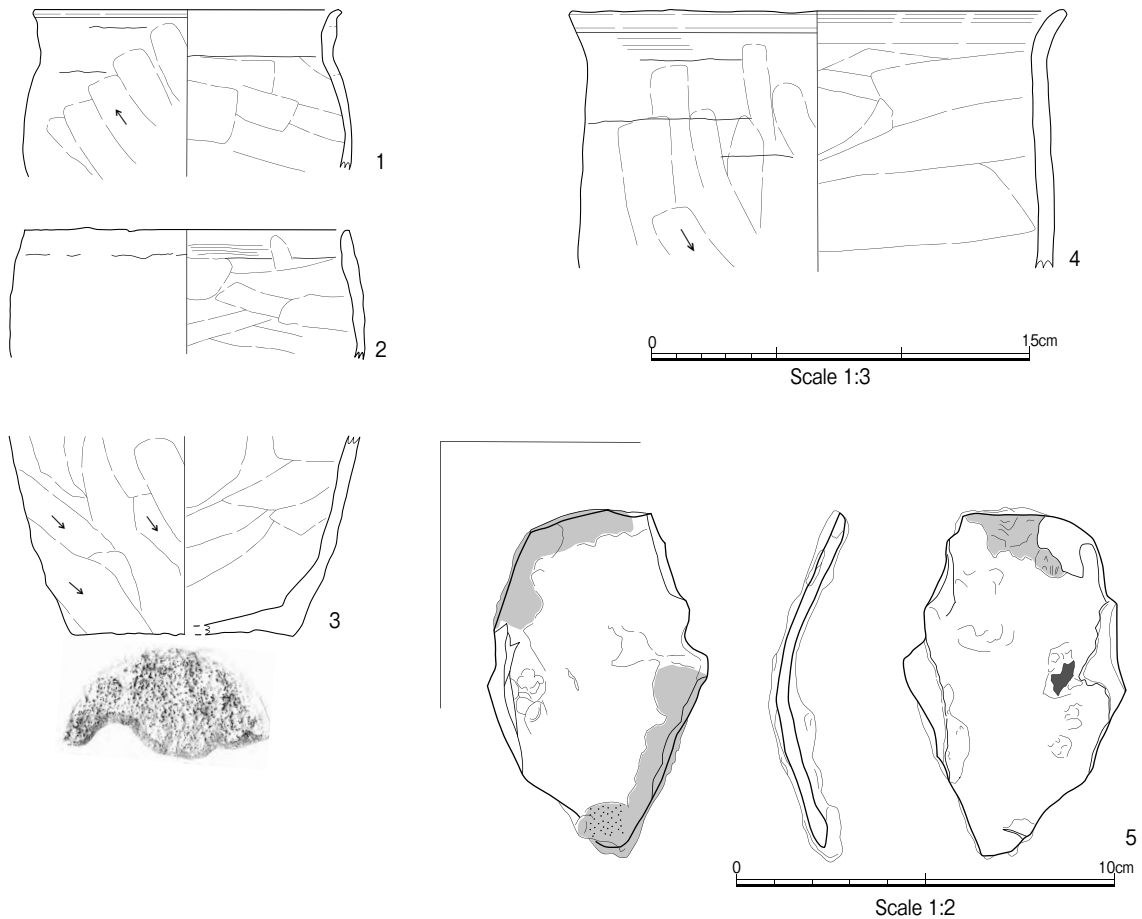
第76図 S I 34出土土器 (2)

40cmである。最下層が焼けている。埋積土は基本的に上・中・下に分かれ、上層は暗褐色土、中層が焼土・炭化粒混入暗褐色土で、下層は黒褐色土である。

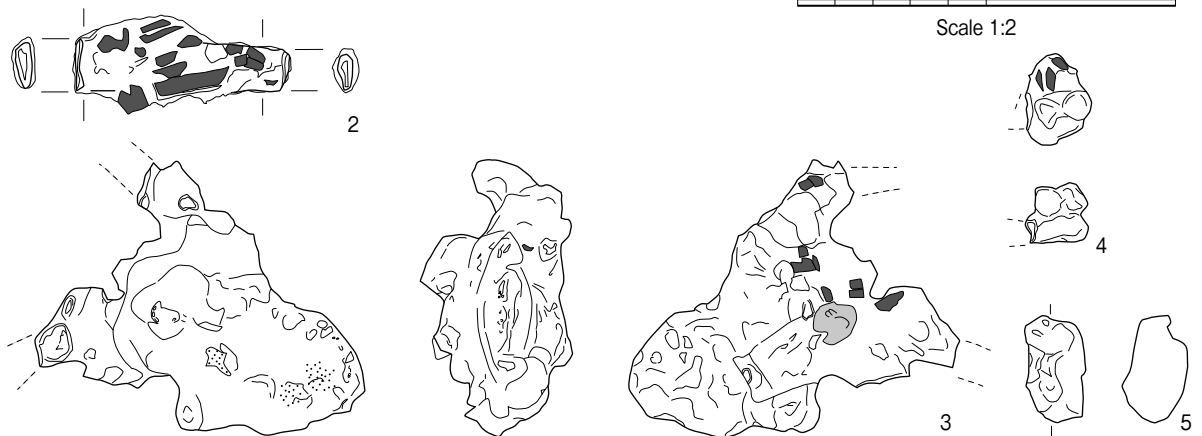
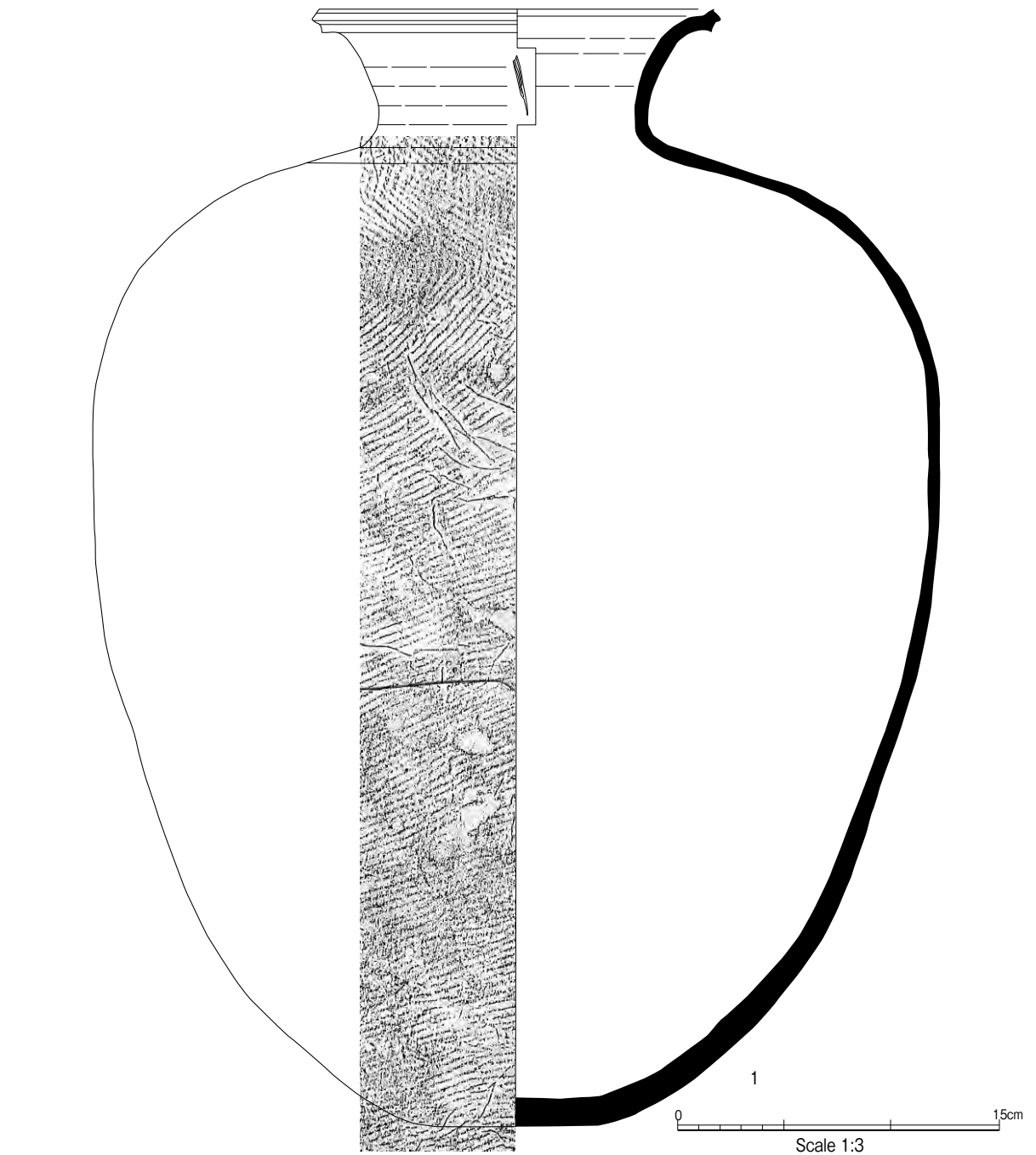
遺物 南東床面より土師器甕・小型甕が出土した。土器の出土量は9個体以上と少ない。

第80・81図は土師器甕で、いずれもロクロ不使用のものである。第80図1・2は口縁部がゆるく内湾する小型甕である。胎土に小礫を多く含み、褐灰色を呈する。3の底部はかすかに砂痕をとどめる。第81図1・2は口縁部が外反するもの。5～7は甕である。色調はにぶい黄～黄橙色を呈し、胎土は小礫を若干含む。この小礫は意図的に混入した可能性がある。口縁部は体部からくの字状に屈折し、端部は丸くおさまるもの（5）と口縁部がゆるく内湾するもの（6・7）がある。3・4は底面が砂底で、内面は指ナデである。

時期等 時期はⅢ期に比定される。



第77図 S I 34出土遺物

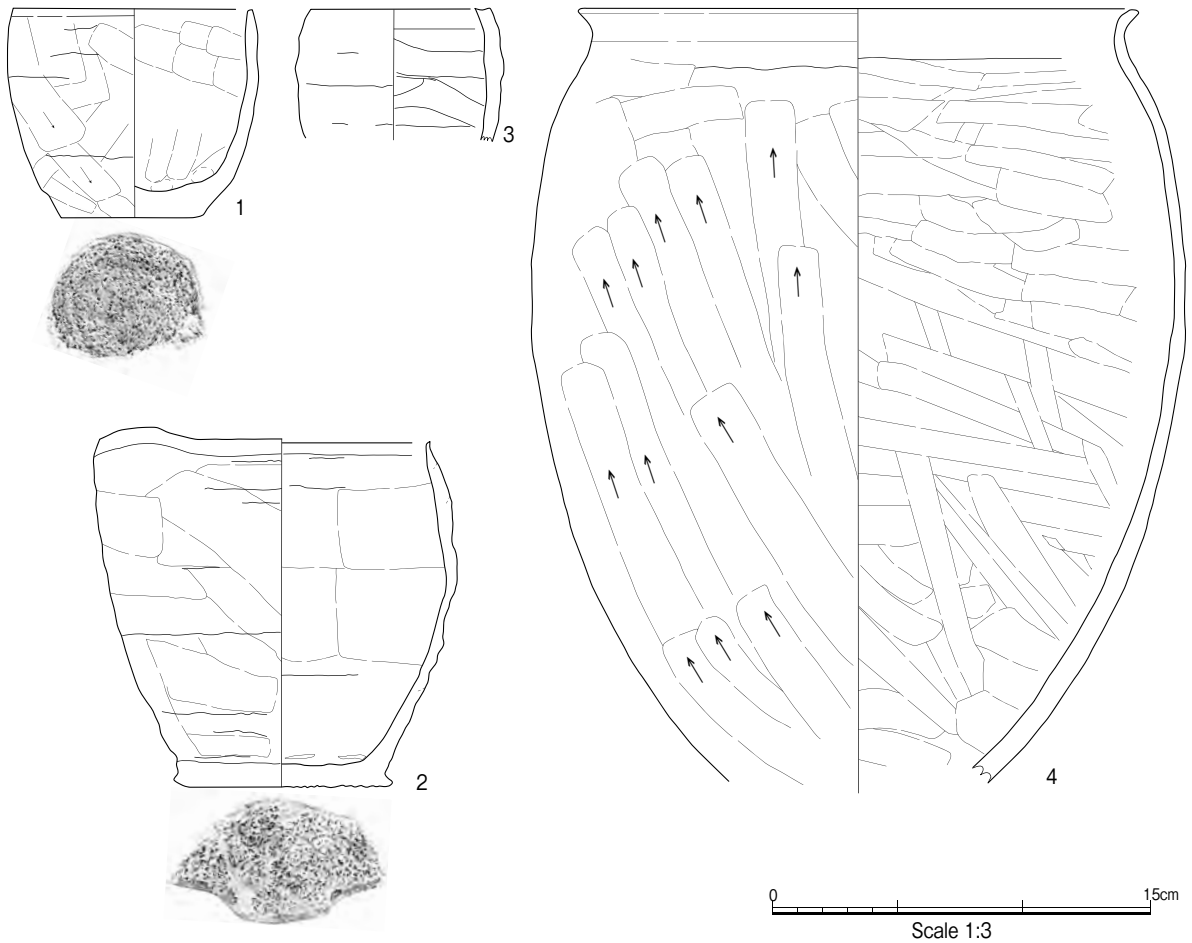
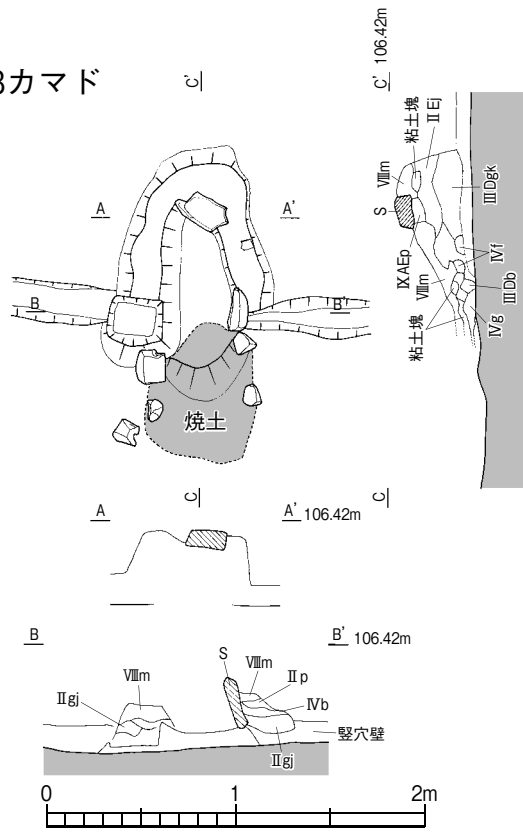


第78図 S I 35出土遺物

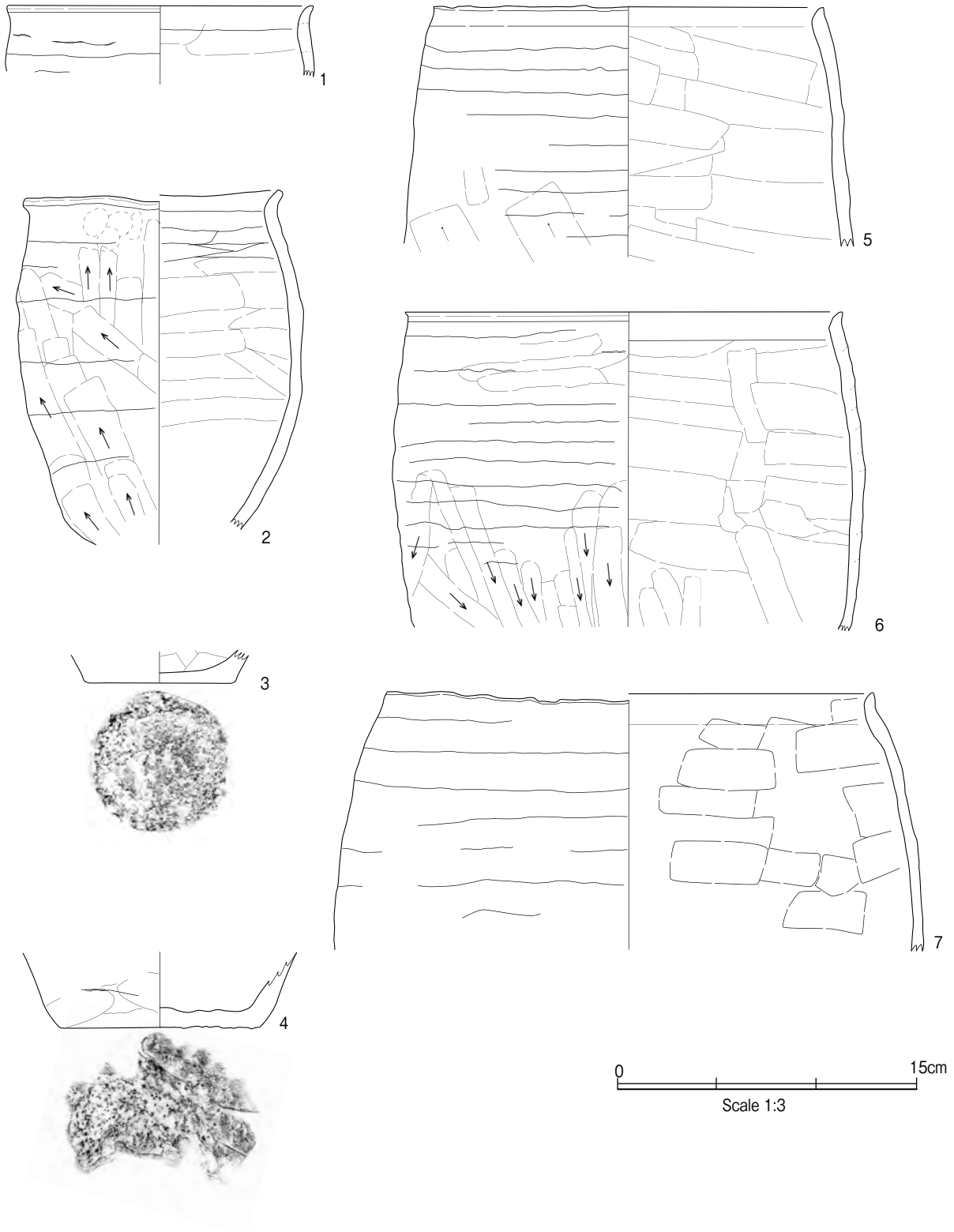


第79図 S I 38

S I 38カマド



第80図 S I 38カマドとS I 38出土遺物 (1)



第81図 S I 38出土遺物 (2)

S I 41～43 (第82・83図)

位置 17・18・19-q・r・s区に位置し、重複する3軒の竪穴。古い方からS I 43→S I 42→S I 41の構築順序となる。

遺構 カマドをもち、鉄関連遺物の出土も少ないことから、住居と考えられる。主軸はN-36°-Wで、カマドはS I 41東側コーナーにある。S I 43は一辺3.2～3.3mのほぼ正方形で面積は8.1㎡と小さい。S I 42は一辺4.6～5.5mの長方形で面積は19.2㎡、S I 41は一辺4.0～4.2mのほぼ正方形で面積は13.6㎡である。深さは10～25cm前後である。各竪穴はS I 42北側コーナーを除き、各コーナーにピットが一つないし二つある。柱穴の可能性はある。周溝はいずれの竪穴にもある。カマドは1.4×0.6m、高さ40cmで、焼けている。カマドより土師器甕が出土した。

遺物 S I 41より土師器小型甕、甕のほかに、羽口、鉄製品、鉄滓、S I 43より鉄滓が出土した(第83図)。

第83図1は小型甕で丸い体部をもち、器表面にナデがある。3は甕の口縁部であり、内外面ナデである。口縁部は短くひらき、短部は丸くおさまる。胎土は小礫を少量含む。2・4は甕の底部であり、底面は砂底である。ともに器表面にヘラケズリがみられ、胎土に3～5mm大の小礫を含む。

5はカマド前庭部より出土した羽口体部。両端を欠損しており、断面形は不明。復原口径は8cmで、内面にケズリ後、ナデがなされている。溶着物はみられない。胎土はほかの土師器と大きくことなるものでない。カマドの芯材として転用されたものと考えられる。6は全長14.6cmの刀子。7は鉄製品で、刀子または手鎌の身部の破片である。8は鉄塊系遺物。

時期等 遺物は多くはないが、II～III期と考えられる。

S I 44 (第9・83図)

位置 17-r区の調査区際に位置する竪穴。

遺構 南東の一部を検出したのみで、大半は調査区外へ延びるため、詳細は不明である。

遺物 第83図9は土師器甕の平底の底部。底部外面に砂痕があり、ヘラケズリがなされる。

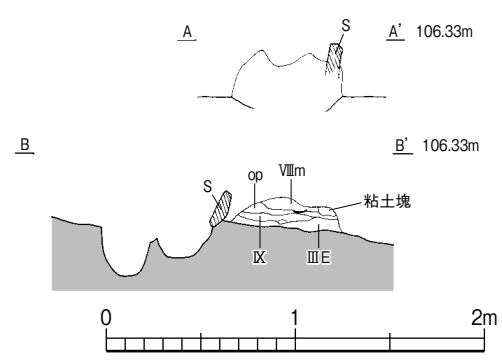
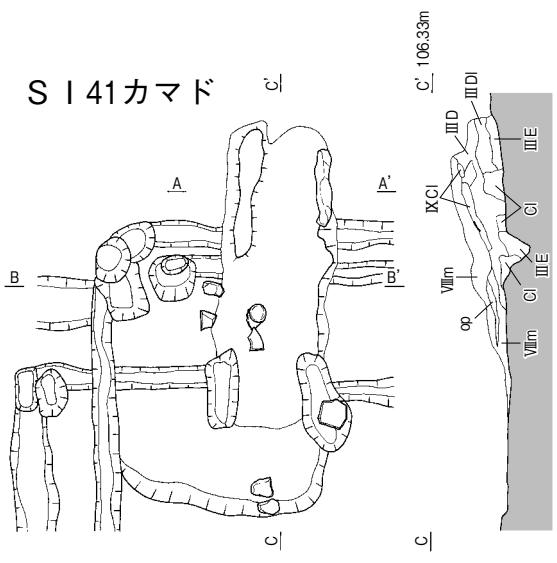
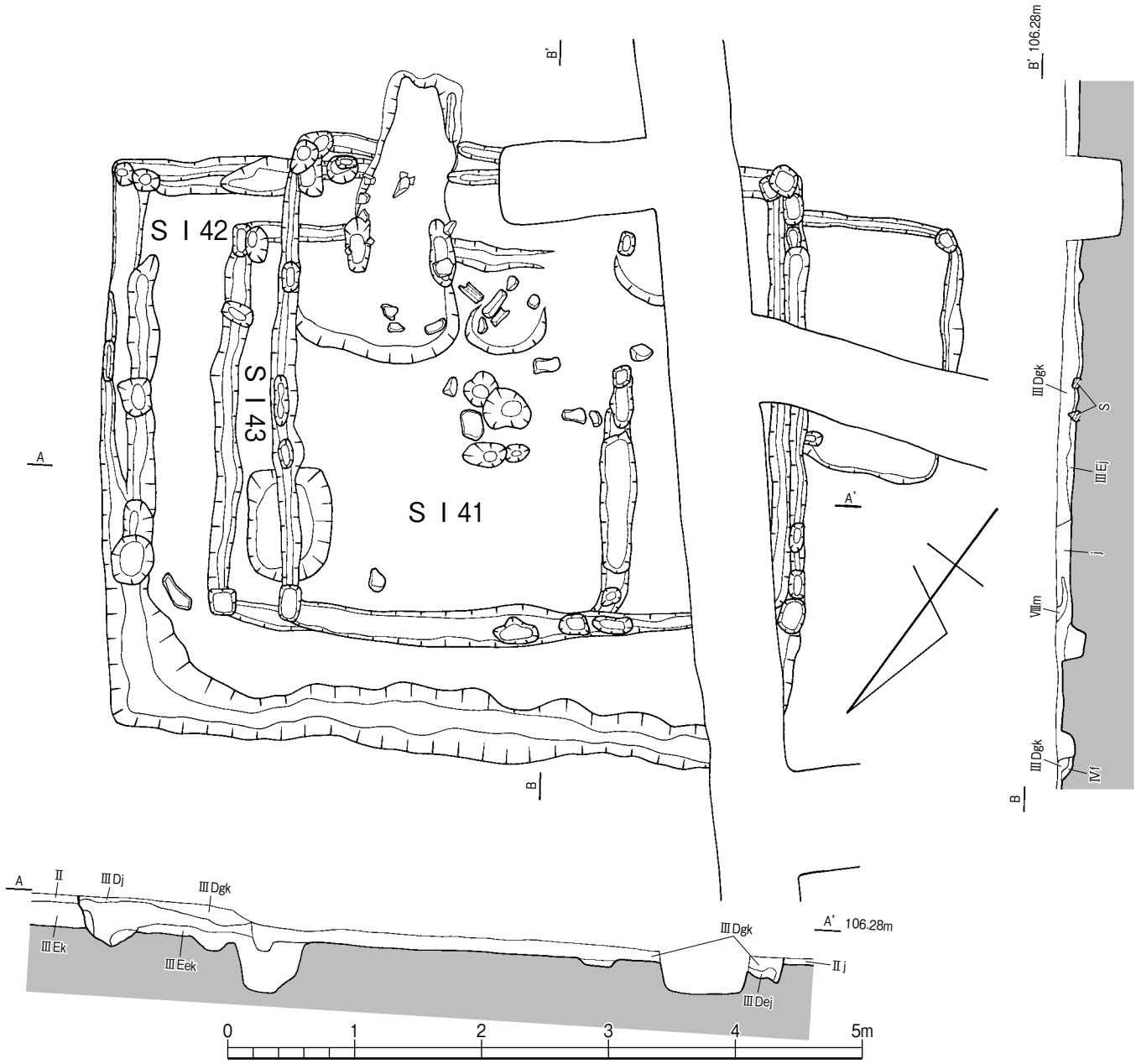
S I 45 (第84～87図)

位置 20・21-t・u区に位置する竪穴住居。

遺構 主軸はN-30°-Wで、南東辺にカマドがある。一辺4.8～5.2mで、ほぼ正方形を呈し、南東部に張り出しをもつ。面積は19.3㎡、深さは20～30cmである。竪穴の各コーナーに径20～30cmのピットがあり、柱穴と思われる。北西の1個を除き、このほかにピットは存在しない。周溝はほぼ全周する。カマドは1.0×0.7m、高さ20cmで、住居の外側に張り出す。当遺跡ではこのようにカマドが住居の外に張り出す例が多い。遺存状況はあまりよくはない。カマド内からは土師器甕・小型甕などが出土した。埋積土は中位に暗褐色土がある。

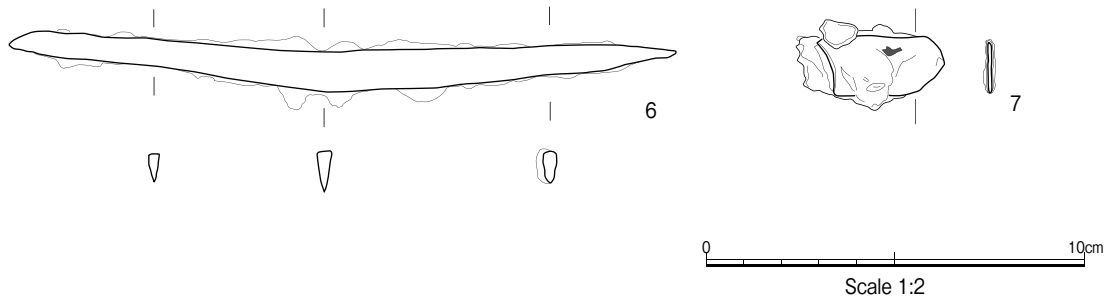
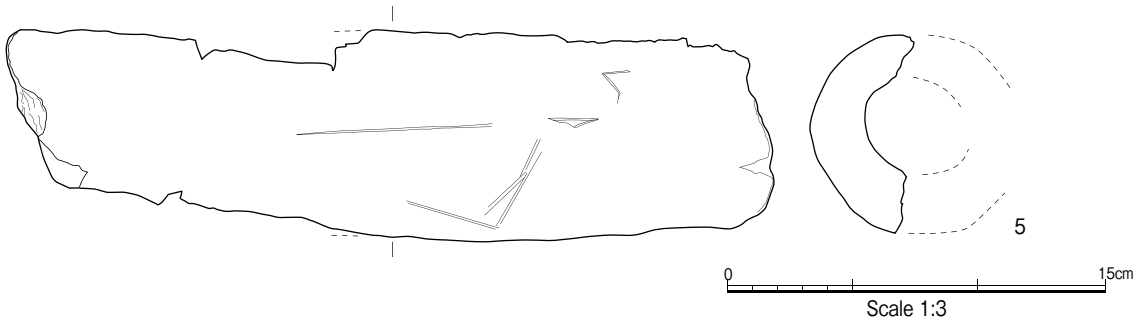
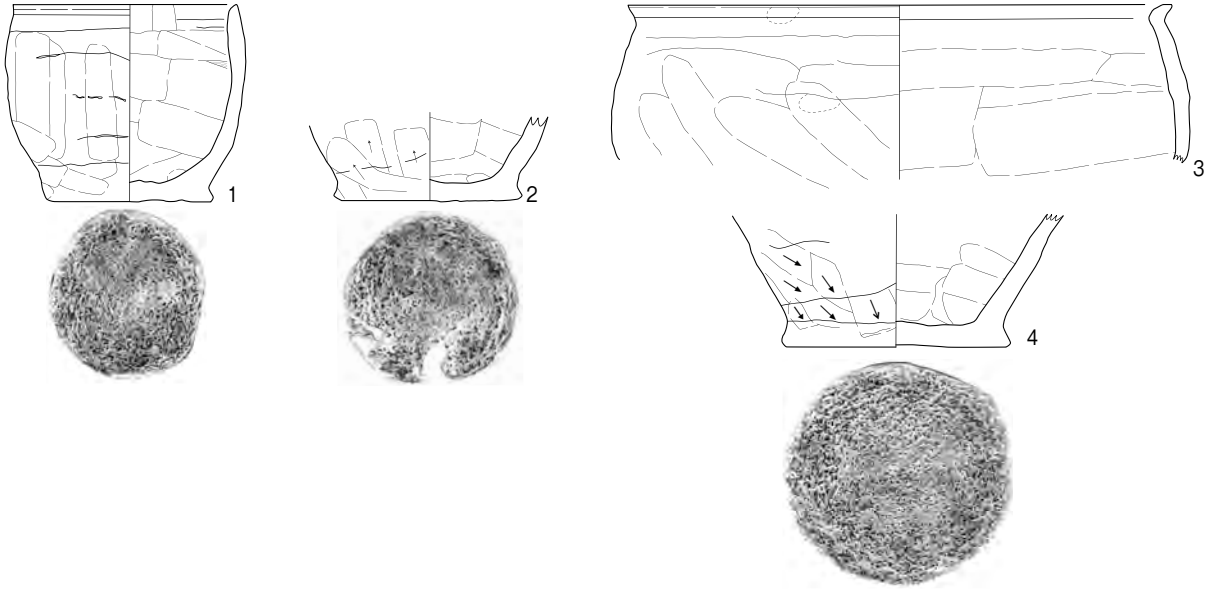
遺物 出土土器は20個体未満であるが、須恵器は甕の小片が1点あるのみで、大半は土師器煮炊具である(第85～87図)。

第85図1は無台塚で、内面黒色処理した黒色土師器である。法量からみると、口径13.5cmの小型品である。器高は5.3cm・径高指数39である。底径指数40である。内外面はほぼ全面が丁寧にロクロナデされ、器面はなめらかである。甕はいずれもロクロ不使用である。法量から中型甕(第85図2～4)と大型甕(第85図3～6・第87図1～5)に分けられる。第85図2～5は口縁部から体部上半部を残すものである。中型甕の2は復原口径14.4cmである。2・3は、口縁部が体部から直立気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。底部は平底であろう。内外面ナデである。2は口縁部内面と体部外面上



第82図 S I 41~43

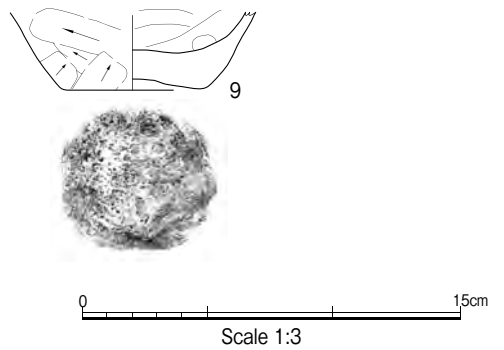
S I 41



S I 43

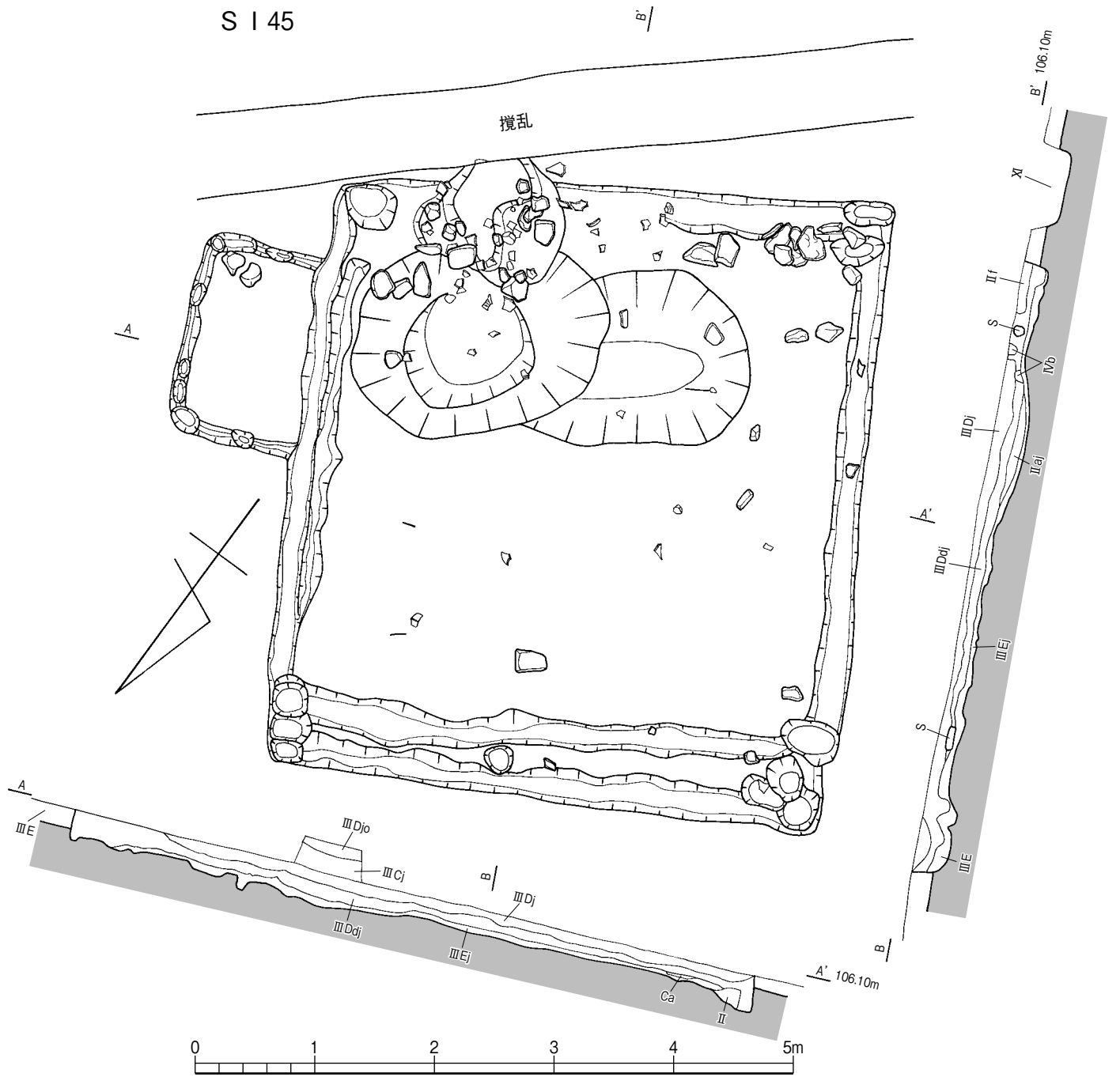


S I 44

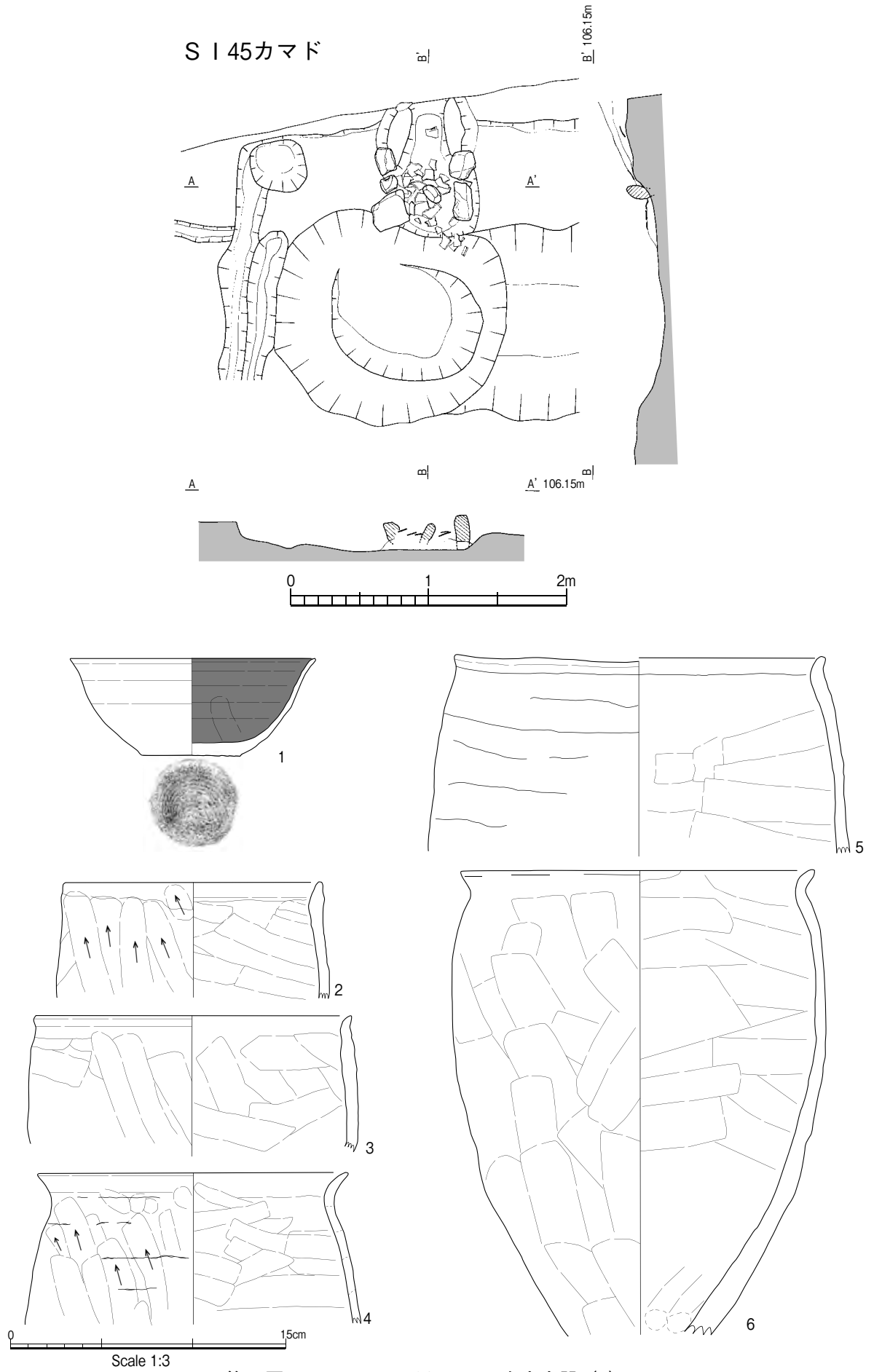


第83図 S I 41・43・44出土遺物

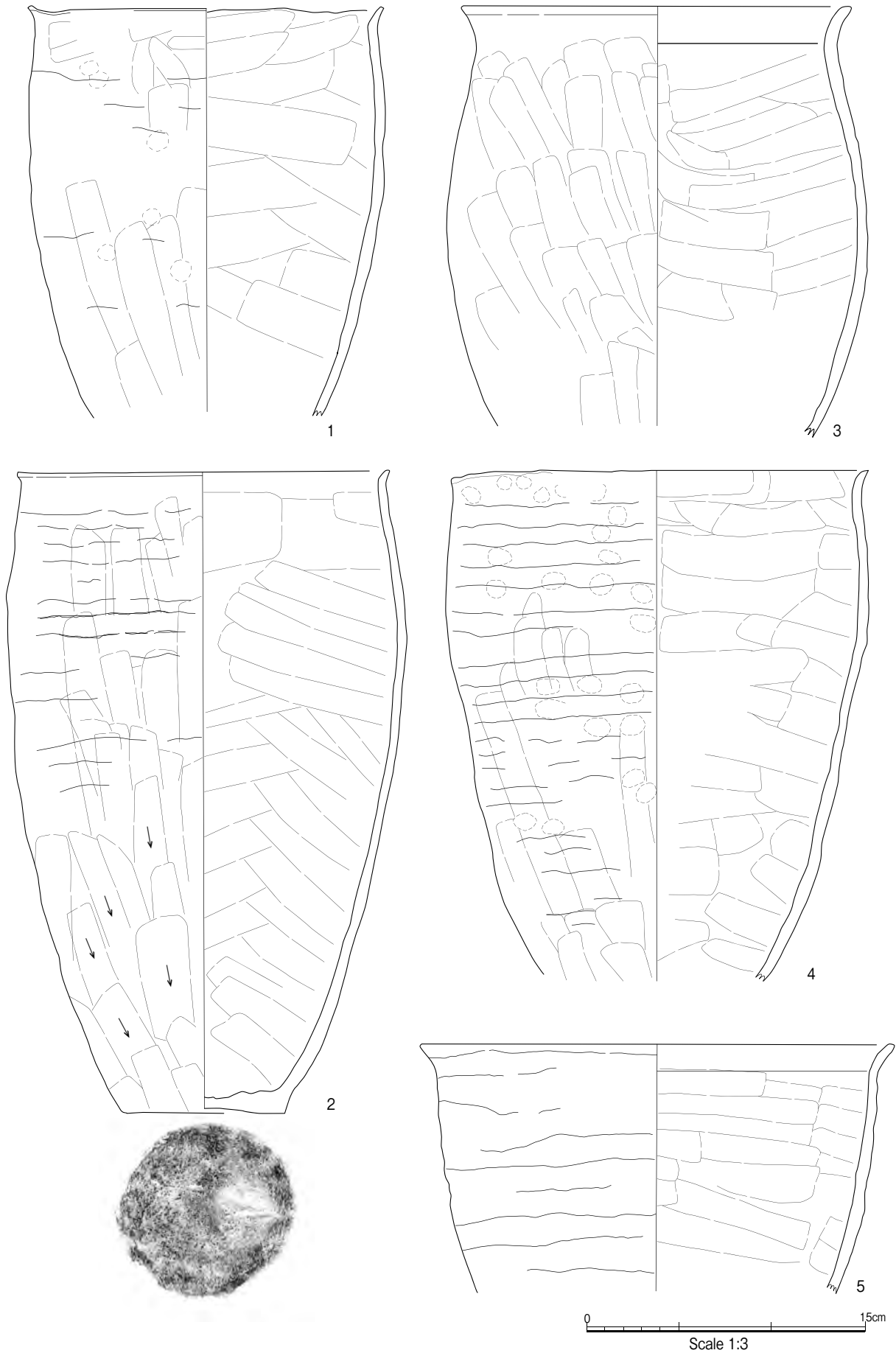
S I 45



第84図 S I 45



第85図 S I 45カマドとS I 45出土土器 (1)



第86図 S I 45出土土器 (2)

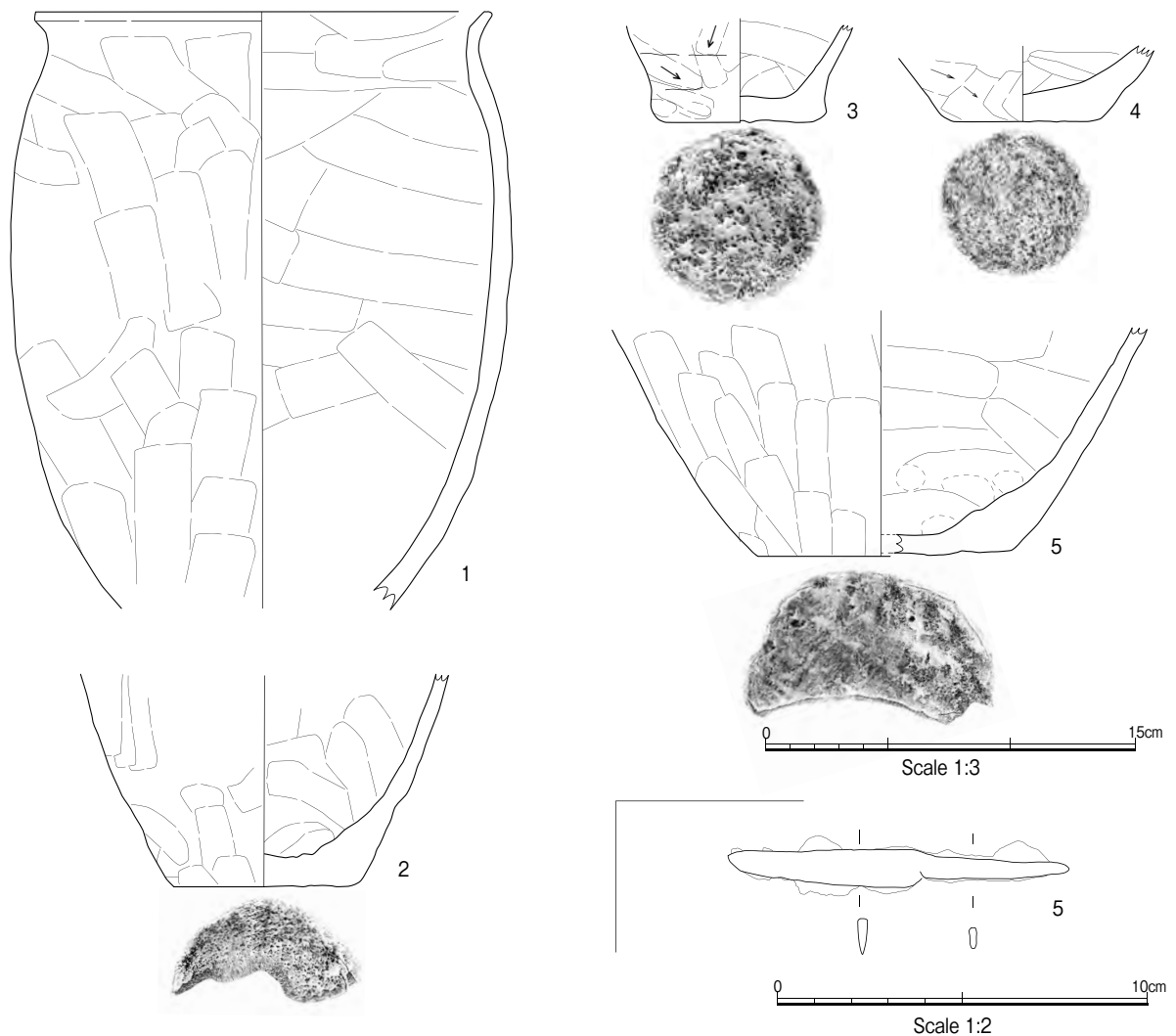
半に煤の付着がみられ、S I 1 出土土器に類似する（第18図6）。3・4の内面はナデで、4の体部は下から上へのヘラケズリである。大型甕は口径19~26cmである。短く直線的に開く口縁部の端部は丸くおさまるもの（第85図5・6・第86図3）と尖り気味のもの（第86図1・2・4・5）がある。このうち第86図3は横ナデが強い。粘土紐の接合痕がきれいに消されている。第85図5・6、第86図1・2・4・5は横ナデが弱い。粘土紐の接合痕がよく残り、口縁部の歪みも大きい。第86図3・5の体部器表面は縦位のヘラケズリが観察される。1・4は、外面下半に下から上へのヘラナデが施される。胎土には小礫を多く含む。第87図1~4は甕で平底である。1の底部外面には粗い砂の付着がみられる。3の内外面にヘラナデ痕が明瞭に残る。5は全長9.2cmで刀子と見られる。

時期等 時期は平安時代中期に比定される。

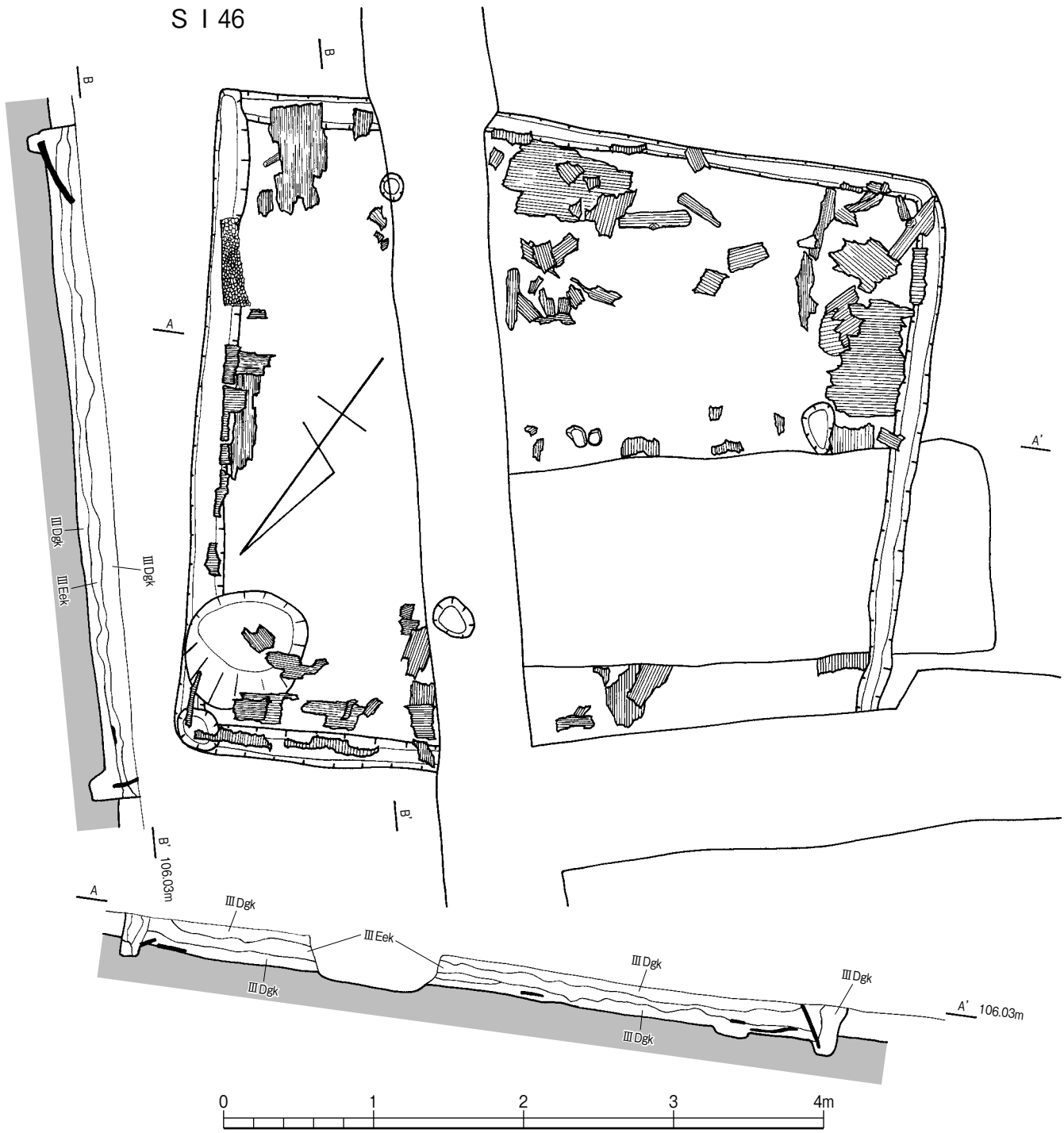
S I 46 (第87図)

位置 19・20・21-v・w区に位置する竪穴住居跡である。攪乱に北西辺を切られる。

遺構 遺物はないが、板敷きで住居と考えられる。主軸はN-30°-Wで、カマドも確認されていない。全容は不明であるが東西は長さ4.8mある。床面には小さくて浅いピットが3つあるが柱穴かどうかはわからない。周溝は壁際に廻る。埋積土最上層は暗褐色土層で、その下部は黒褐色土層である。遺物がなく、時期も不明である。



第87図 S I 45出土遺物



第88図 S I 46

S I 47 (第88～90図)

位置 20・21-x・y区に位置する竪穴住居跡である。

遺構 中央に大きい攪乱溝がある。主軸はN-60°-Eで、カマドは北東辺にある。一辺の長さは3.8mで、面積は12㎡の小型の竪穴住居跡である。深さは8～10cmで、周溝が西壁をのぞく三方を廻る。北と南壁際に径20cmほどの小さなピットが、3個ずつ存在する。住居に伴う柱穴と考えられる。カマドは1×0.9m、高さ約25cmで、土層は焼けた砂質土である。このなかにカマドの芯と考えられる土師器甕(第90図7)が入っていた。カマド上部にはこの他かなりの土器が出土した(5・6)。埋積土は黒色土層である。鉄滓の出土量は9,817gであり、特大の椀形鍛冶滓2点出土しており、この竪穴で鍛冶作業をしていた可能性も考えられる。

遺物 出土土器は約10個体である。

第90図1～7は土師器甕。1は小型甕で、復原口径約15cmで、口縁部は短く開き、口縁部内面に煤の付着がみられる。3・7の甕はまったく同一のつくりである。口縁部は端部が外側に開き、内外面に弱い横ナデをする。体部の整形が不十分で凹凸が大きい。外面のヘラナデは弱く、部分的である。胎土は石英や長石を含むが比較的精良で、器面の感触はなめらかである。8は置砥石の資料である。正面に作業面をもち、被熱している。石質は泥岩。第91図は直径が20cm以上と推定される特大サイズの椀形鍛冶滓である。いずれも側面に人為的と考えられる大きな破面がいくつか見られ、底面には炉床と考えられる砂粒・小礫が付着し、破面からみる滓内部は、気孔が散在する。残存する部分の厚みをみると、1は7.5cm、2は9.0cmである。1・2の上面には炭化物が付着する。金属学的調査を実施していないが、精錬鍛冶工程における派生物と考えられる。

時期等 時期は平安時代中期に比定される。

S I 48 (第91図)

位置 22-o・p・q・r区の調査区際に位置する竪穴である。

遺構 主軸はN-58°-Eで、住居の大半は調査区外へ延びる。カマドは確認されていない。深さは40～50cmである。小ピットが2個あるが、柱穴かどうかは不明である。周溝は確認された部分では、全周する。遺物はなく、時期も不明である。

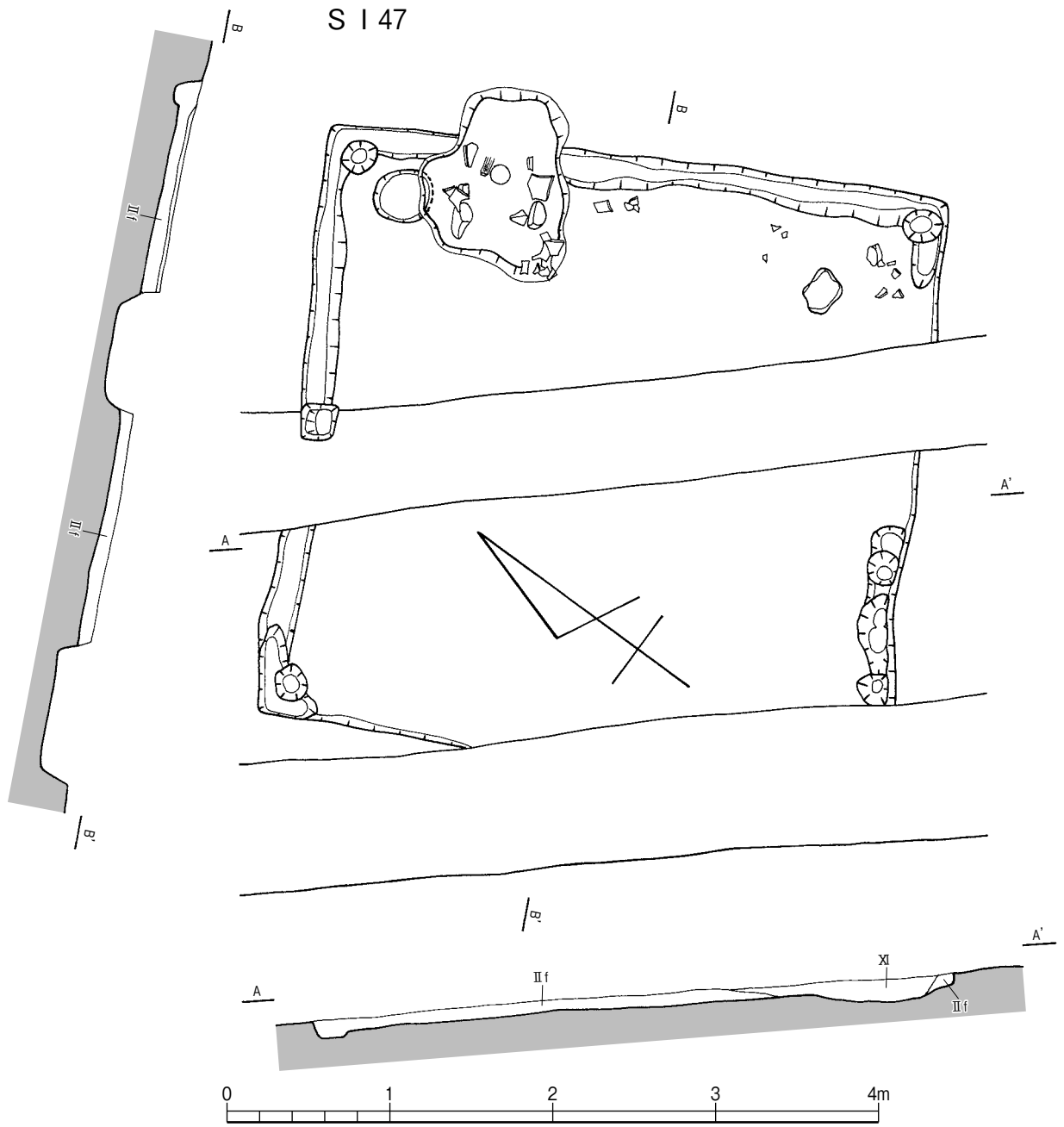
S I 49 (第93～95図)

位置 23・24・25-i・k・l区に位置する竪穴住居跡で、南西辺でS I 50を切る。

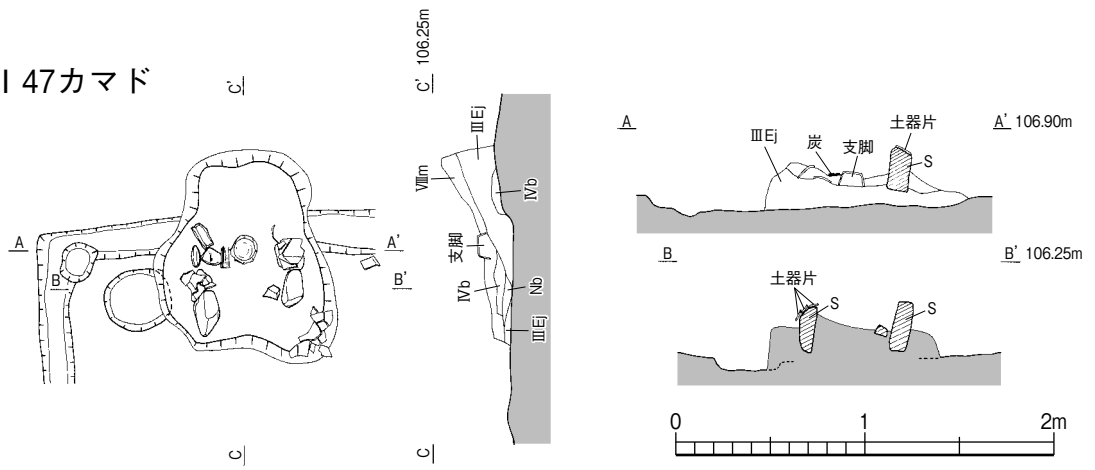
遺構 N-32°-Wで、南西辺にカマドがある。主軸方向の北西・南東辺がやや長く、5.9m、ほかは5.6mで、面積は25.4㎡で、比較的大きい。深さは30cm前後である。カマドのある辺をのぞいて、周溝が廻る。南東辺はカマドに近い部分で周溝が切れる。周溝は幅20～30cm、深さ20cmである。壁面の立ち上がりはいずれも垂直に近い。周溝の埋積土は暗い。南東辺のコーナーには小さなピットがあり、住居の柱穴と考えられる。このほかの壁際のピットも柱穴と考えられる。床面にある小さなピットは規則的な配置ではなく、性格は不明である。カマドは1.4×0.4mで、高さ20cmである。カマドの中央より土師器(第94図8・9・11第95図3)、20cm角の礫が出土した。これらの土師器はカマドの芯と考えられる。住居埋積土最上層は黒色土層がある。黒色土層の下は暗褐色系の土層である。

遺物 土器は最上層を含めても少なく、カマド以外では数個体である。

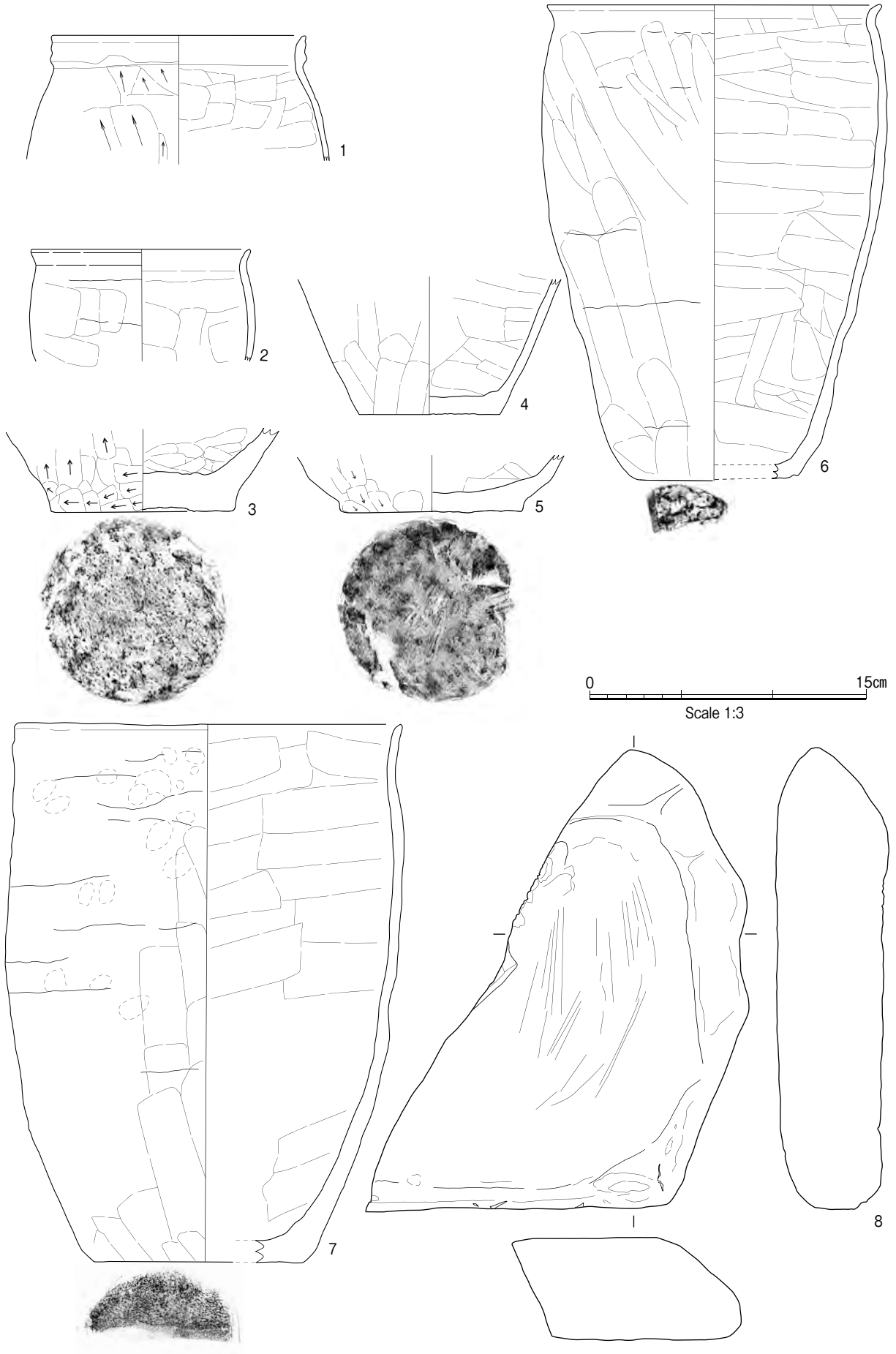
第94図1・2は碗で、内面黒色処理した黒色土師器である。3～11・第95図1～3は甕。すべて非口クロである。第94図3～5・8は小型甕。3は緩く口縁部が外反する。4・5はナデ調整の底部。



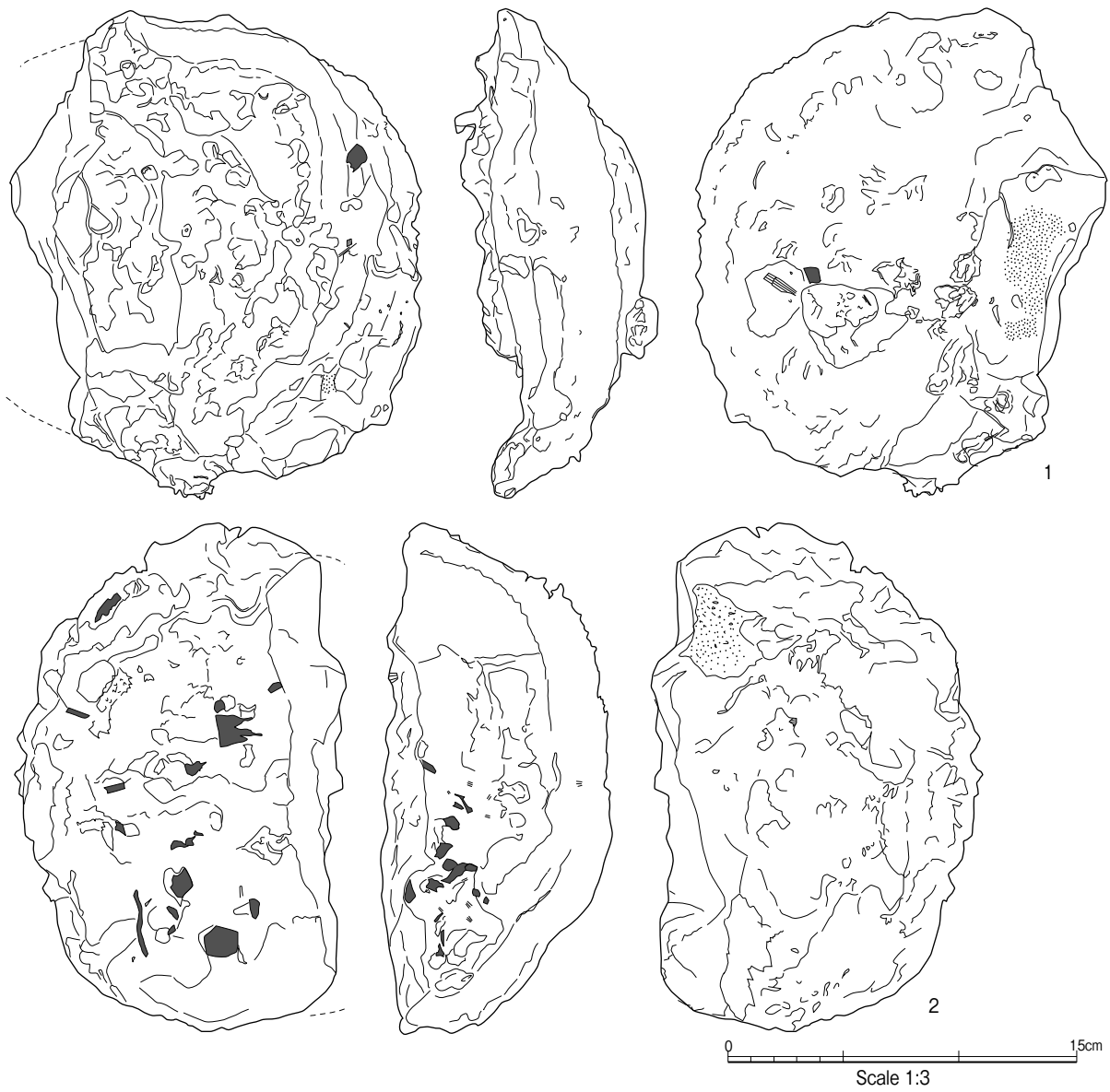
S I 47カマド



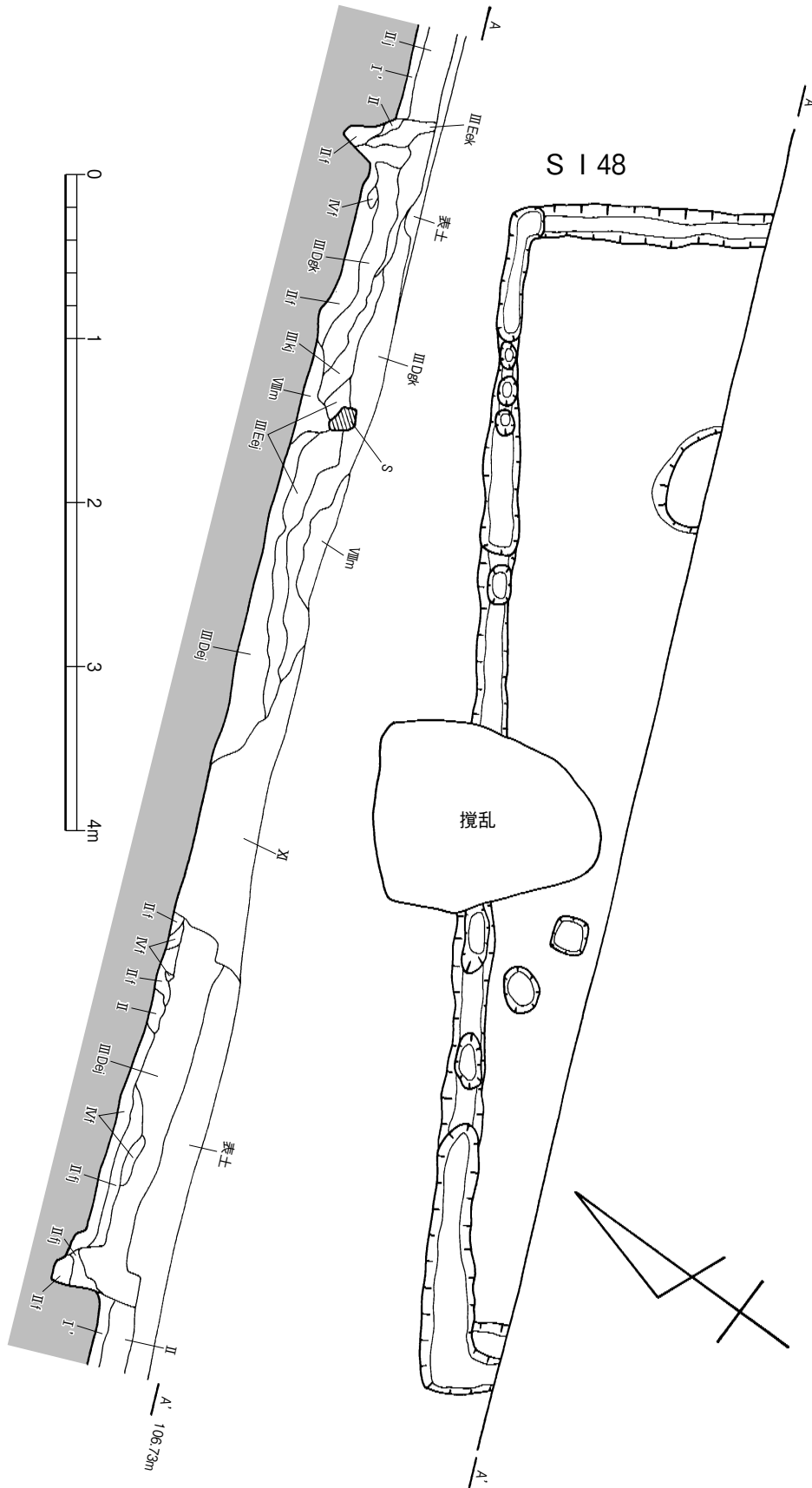
第89図 S I 47



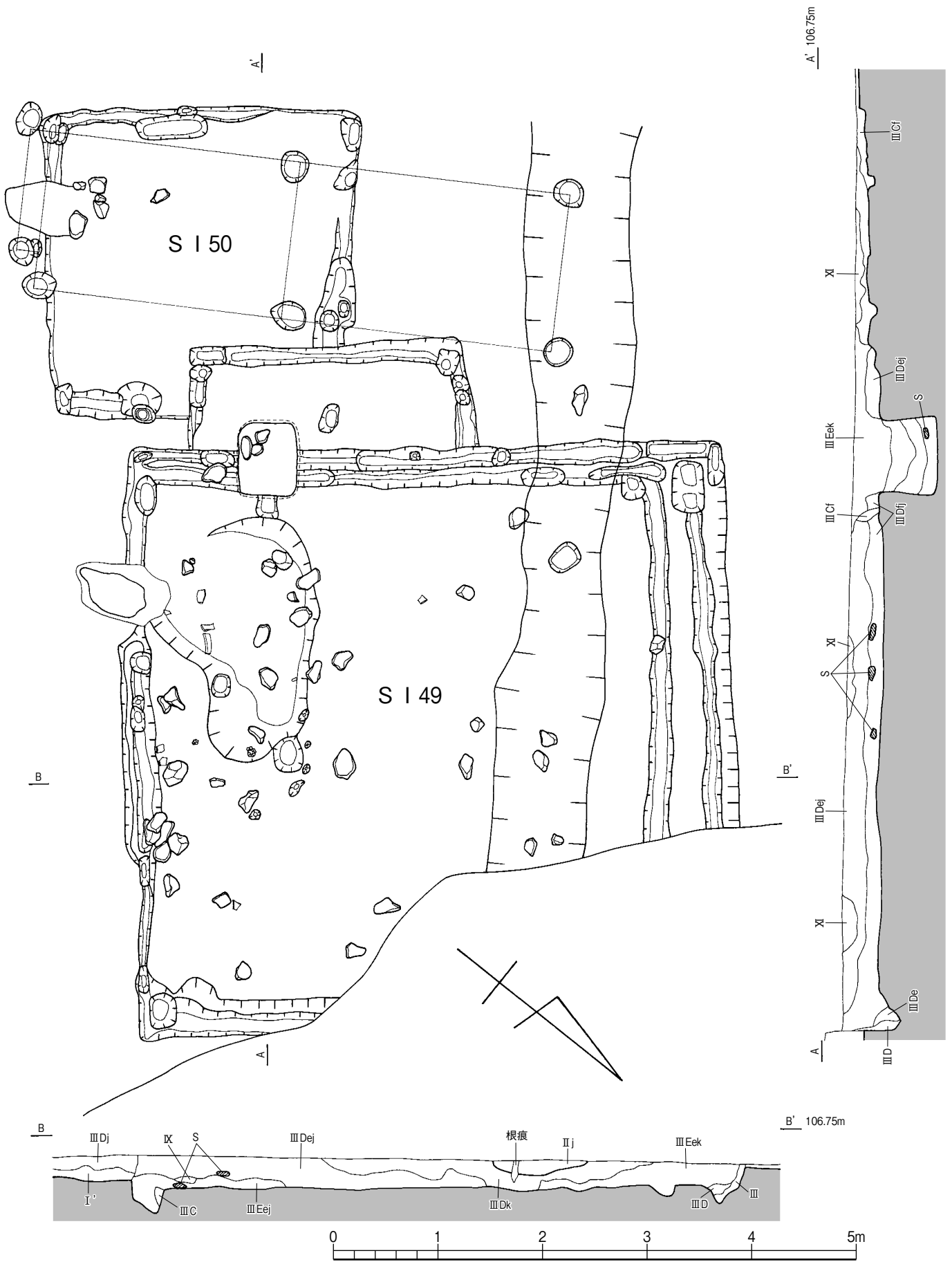
第90図 S I 47出土遺物 (1)



第91図 S I 47出土遺物 (2)

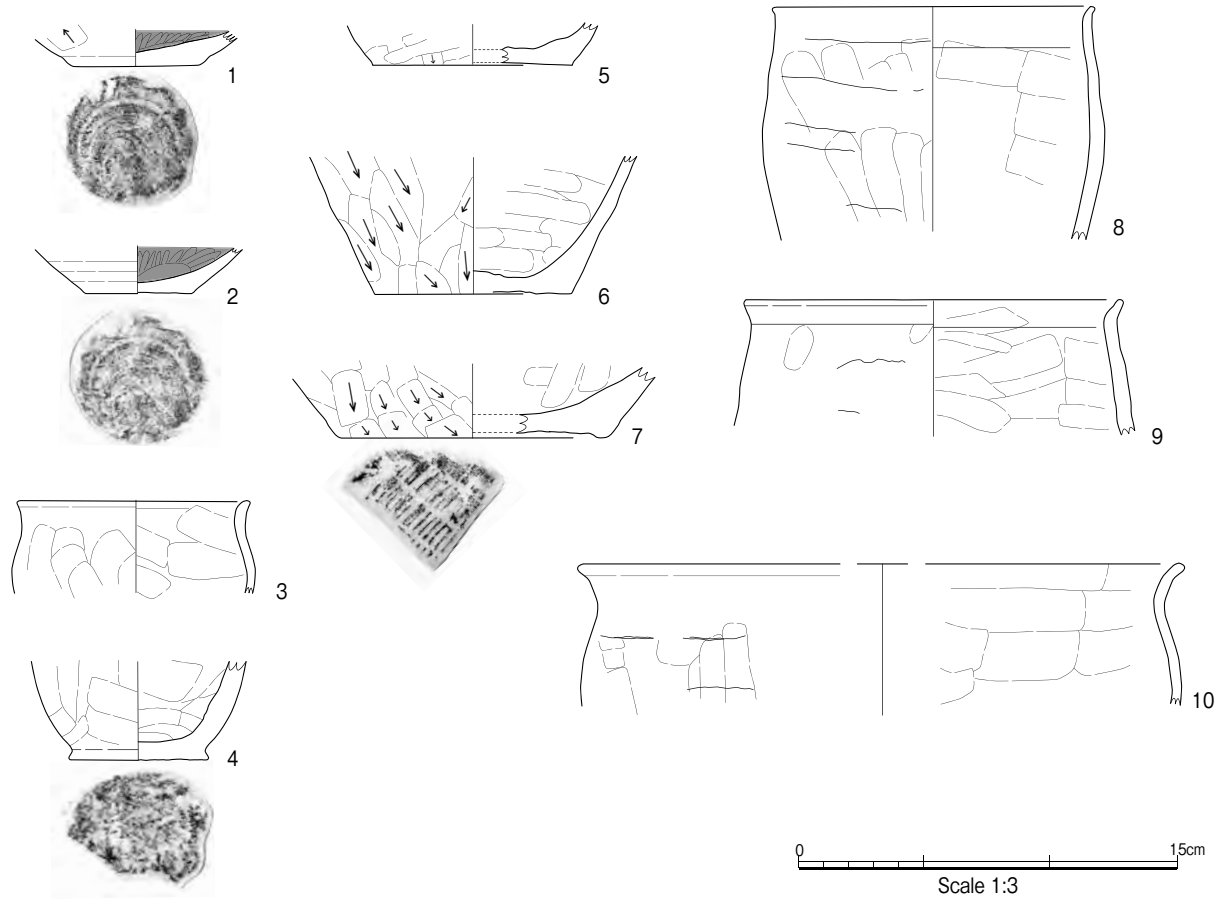
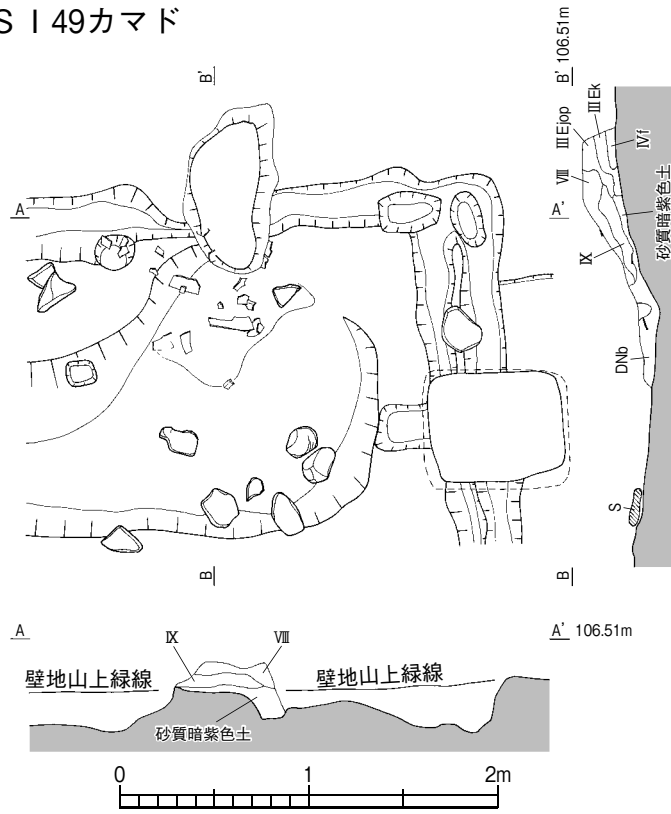


第92図 S148



第93図 S I 49・50

S I 49カマド



第94図 S I 49カマドとS I 49出土土器

底部外面は、3がナデ、4・6が砂底である。10は口縁部が「く」の字状に外反し、端部は丸くおさまる。内面はハケ状工具によるナデを残す。第95図1は弧状に短く内湾し、端部は尖る。器表面は弱いナデである。体部器表面には粘土紐の積み上げ痕が見られる。内面は不明瞭であるが、部分的にハケ状工具によるナデがみられる。2・3は手法が同様である。3は口縁部が歪み、短く反り、端部にやや丸みをもつ。体部上位器表面は指頭圧痕があり、内外面はナデである。4は直径が20cm以上と推定される特大サイズの椀形鍛冶滓である。側面に人為的と考えられる破面をもつ。破面の観察から2つの滓が層状に重なっていると考えられる。5は再結合滓。

時期等 時期は須恵器が少なく、やや不明であるが、Ⅲ期と考えられる。

S I 50 (第93・96図)

位置 24・25-1区に位置する竪穴住居跡で、北東辺はわずかにS I 49と接する。S I 49との切り合い関係は、本遺構が切られる。また、掘立柱建物跡にも切られる。

遺構 主軸はN-36°-Wで、南東辺にカマドをもつ。一辺が2.9~3.0mでほぼ正方形を呈する。面積は6.7㎡である。深さは約10cmである。径20cm程度の小さなピットがいくつかあり、柱穴と考えられる。周溝は南東、南西、北西壁に一部ある。カマドは1.0×0.5mである。カマドから土師器甕が出土した。埋積土は基本的に2層で、下層が黄褐色土層である。

遺物 土器の出土量は少なく、全体でも数個体しかない。

第96図は土師器甕。本竪穴の甕で全体の器形を復原できるものは少ない。1・5・7はヘラケズリがされている。4は甕口縁部で、端部は面をもつ。5は4とことなり、端部が尖る。7は口縁端部が上へつまみ上げられ、尖り気味である。体部器表面下半にヘラナデが施される。6は復原口径26cmを測る甕である。底部はいずれも砂底。

時期等 土器が少なく時期はあまり明確でないが、Ⅱ期頃と推定される。

S I 51 (第97図)

位置 23・24・25-n・o区に位置する竪穴住居跡。

遺構 主軸はN-20°-Wで、カマドは東側コーナーちかくにある。一辺は4.1~4.3mで、平面形はほぼ正方形をなす。面積は14.4㎡。南東部にかなり大きな攪乱坑がある。深さは10~15cmで、周溝は全周する。カマドは1.6×1.5mであるが、図面がなく詳細は不明である。

遺物 土器の出土量は少ない。第96図は土師器。1は塊で、内面黒色処理した黒色土師器である。2は甕の底部で、底部外面は砂底である。

時期等 時期は平安時代中期に比定される。

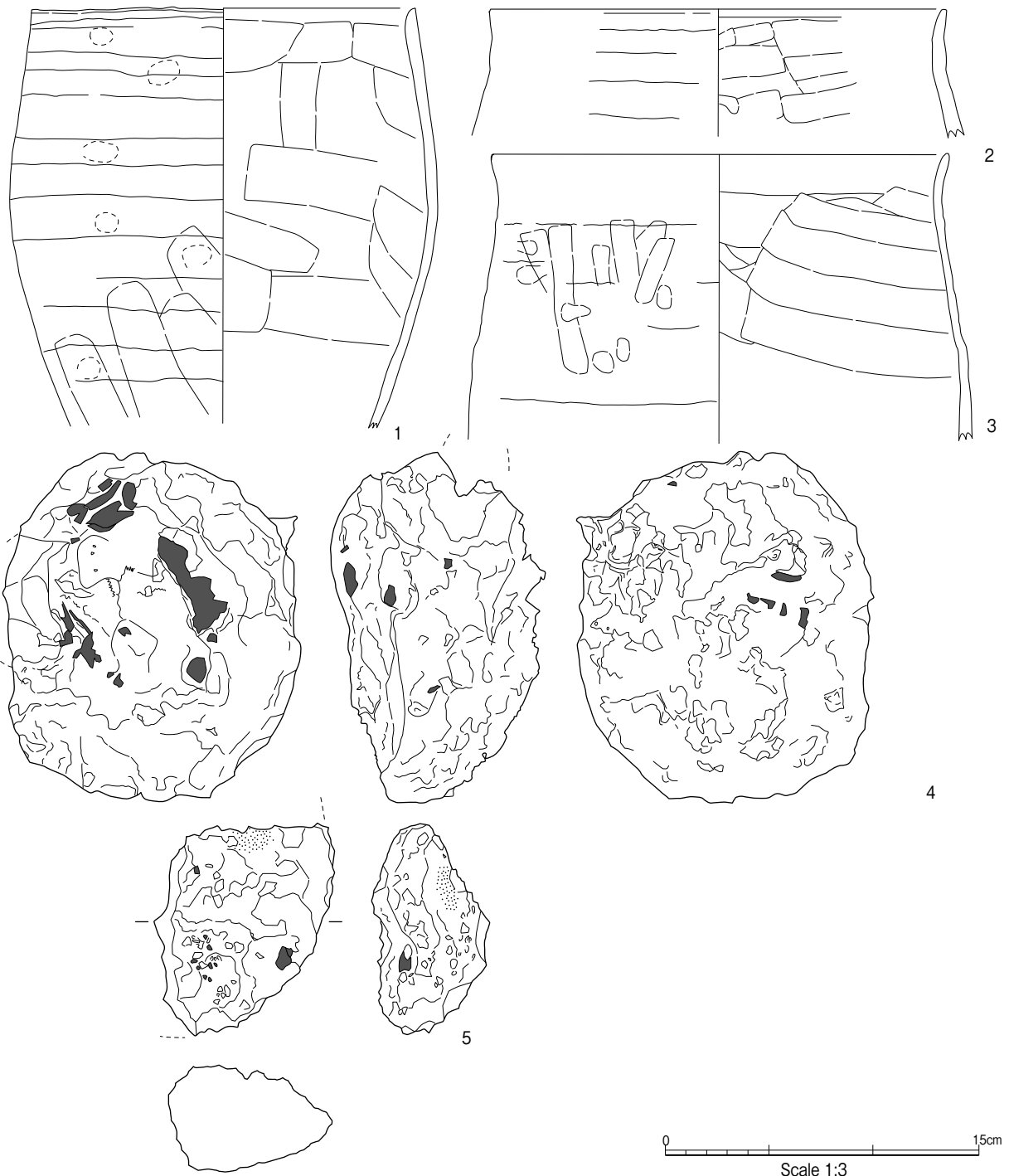
S I 52 (第98・99図)

位置 25・26・27-n・o区に位置する竪穴住居跡。

遺構 主軸はN-24°-Wで、南西辺にカマドがある。一辺約5.0mで、面積は20.2㎡である。深さ20cmで、カマドの部分のをのぞいて、幅15~60cm、深さ10cmの周溝が廻る。床面にいくつかピットがあるが、柱穴かどうかは不明である。カマドは1.0×1.0mであるが、図面がなく詳細は不明である。埋積土の最上層は暗褐色土層である。

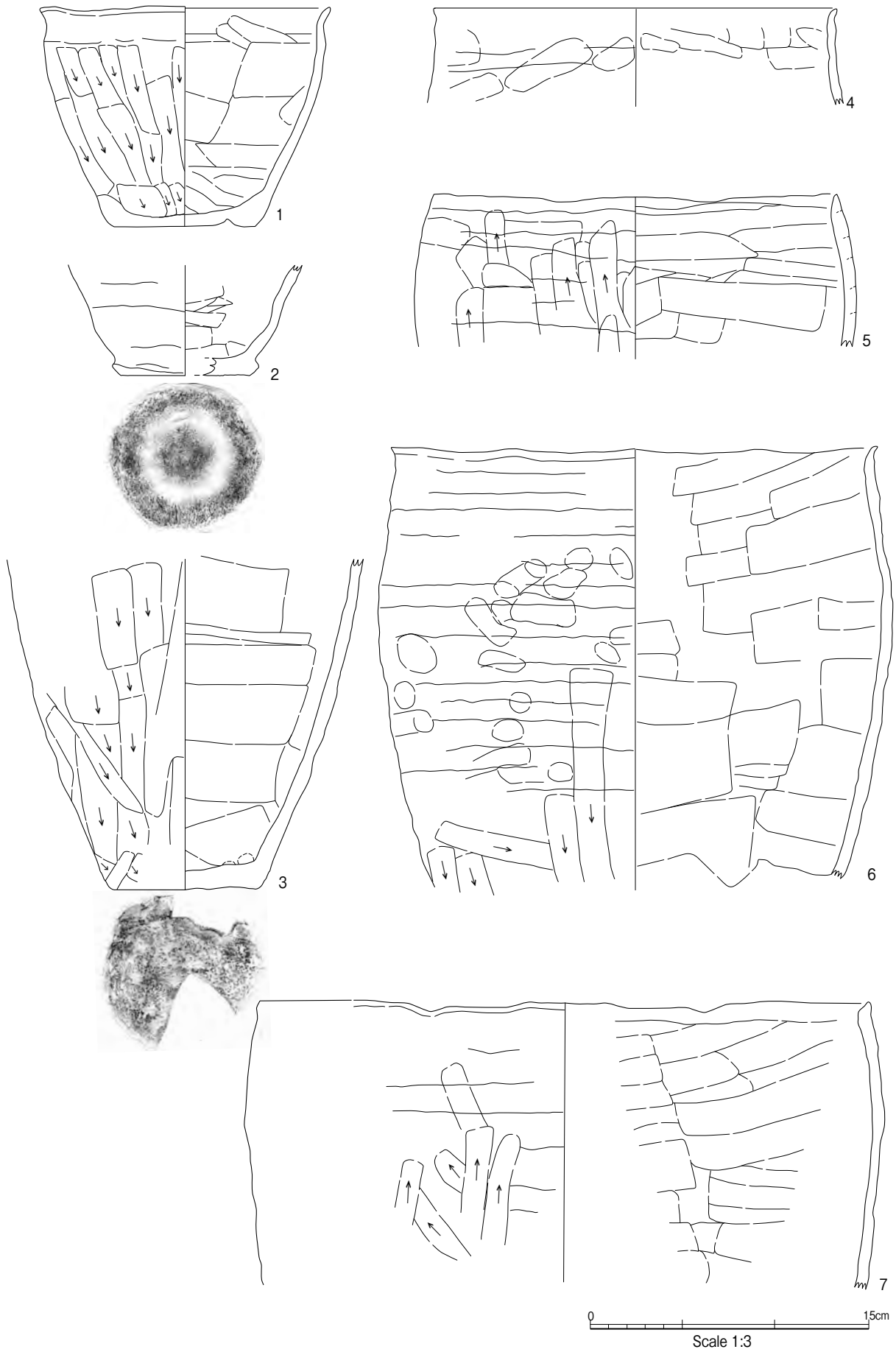
遺物 遺物の出土は比較的少ない。

第99図1が黒色土師器である。2~5・7は小型甕。法量から見て、口径約10cmのもの(2・5)、

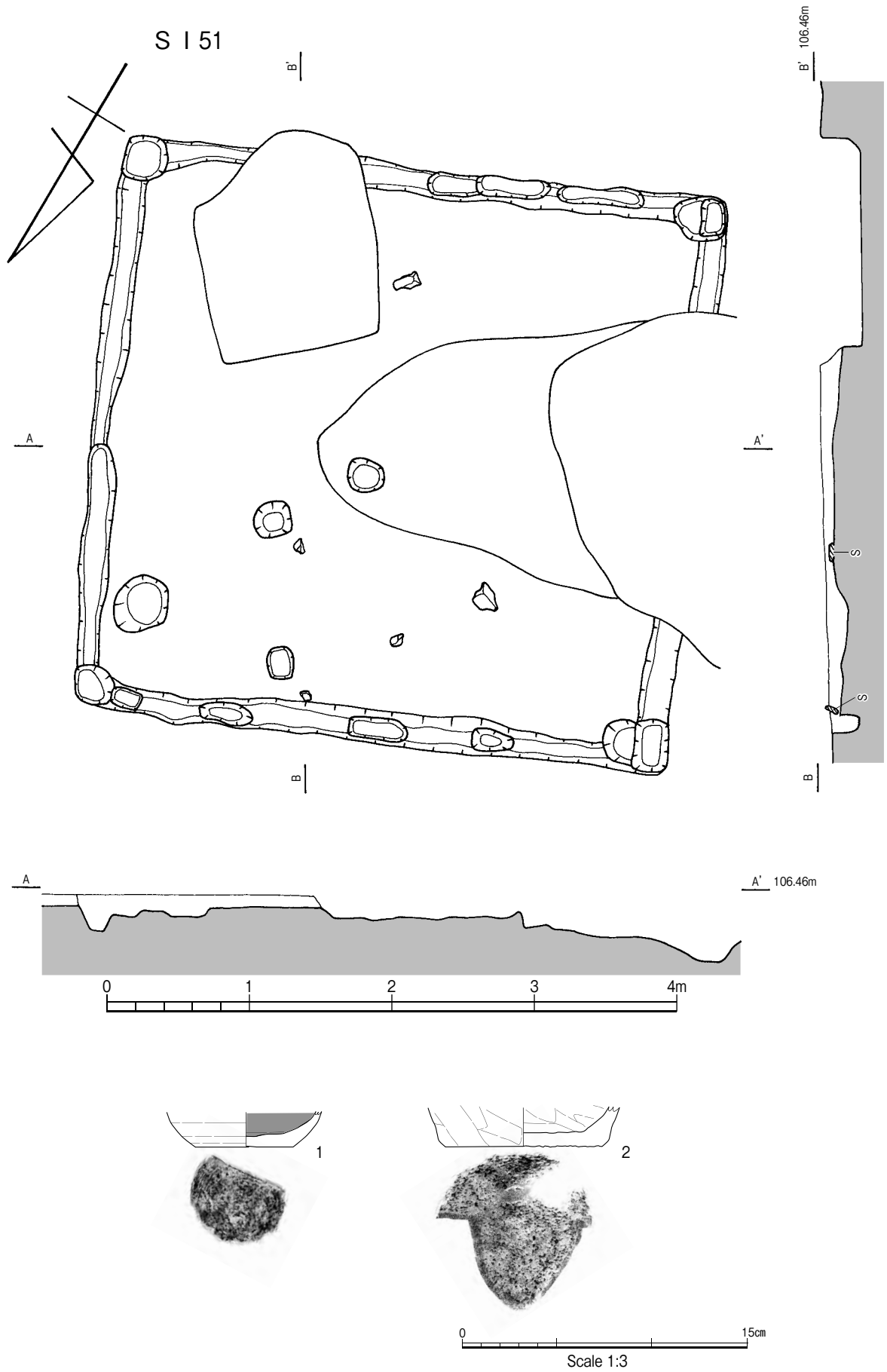


第95図 S I 49出土遺物

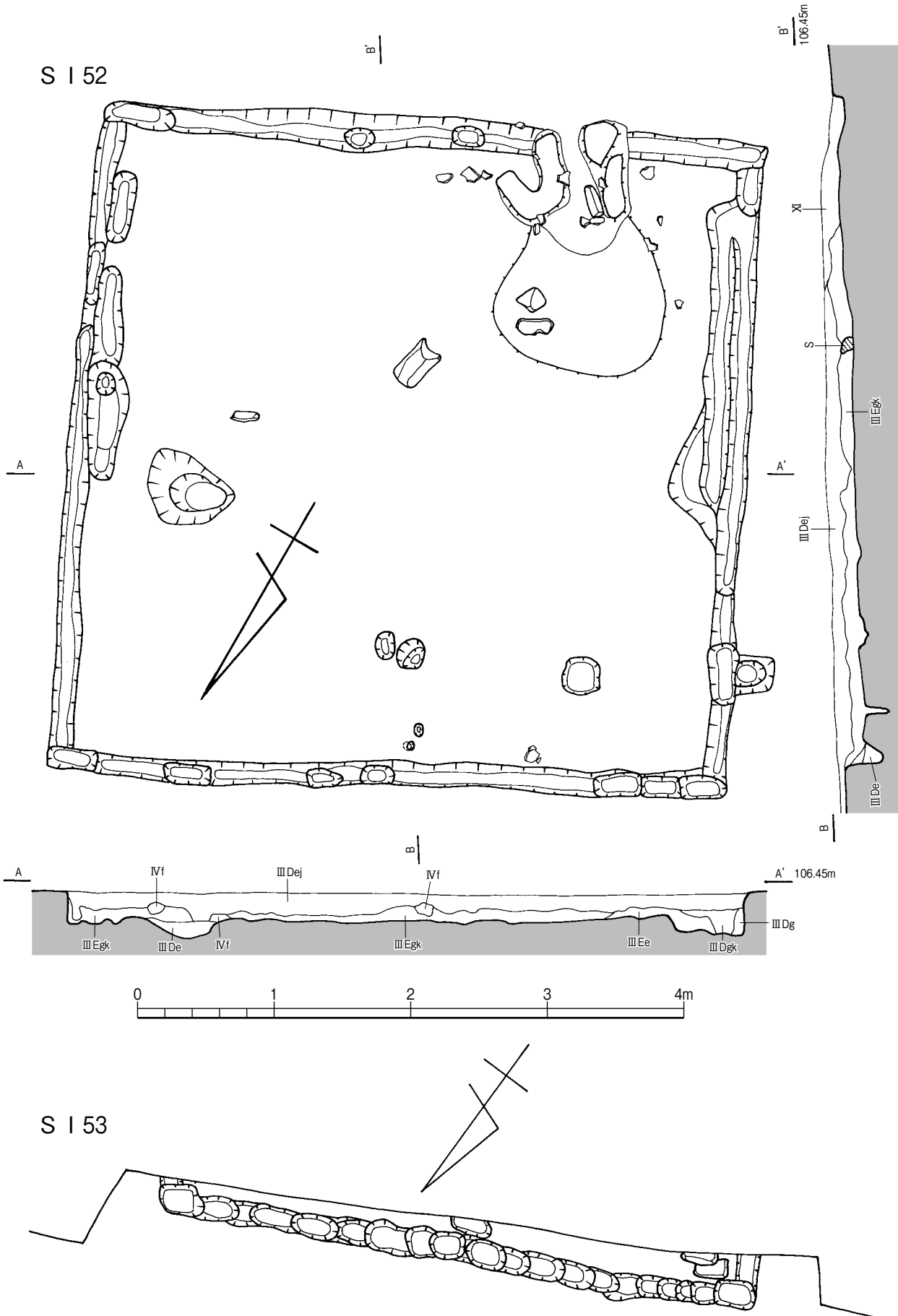
IV 調査の記録



第96図 S I 50出土土器



第97図 S I 51と出土土器



第98図 S I 52・53

口径13~14cmのもの（4・6）に分けられるが、全体の器形、法量が不明なこともあり、それぞれの区別は明確ではない。6を除き、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁端部は丸くおさまる。いずれも体部器表面に炭化物がよく付着する。底部（3・7）は大きさから見て、小型甕であろう。

時期等 時期は平安時代中期に比定される。

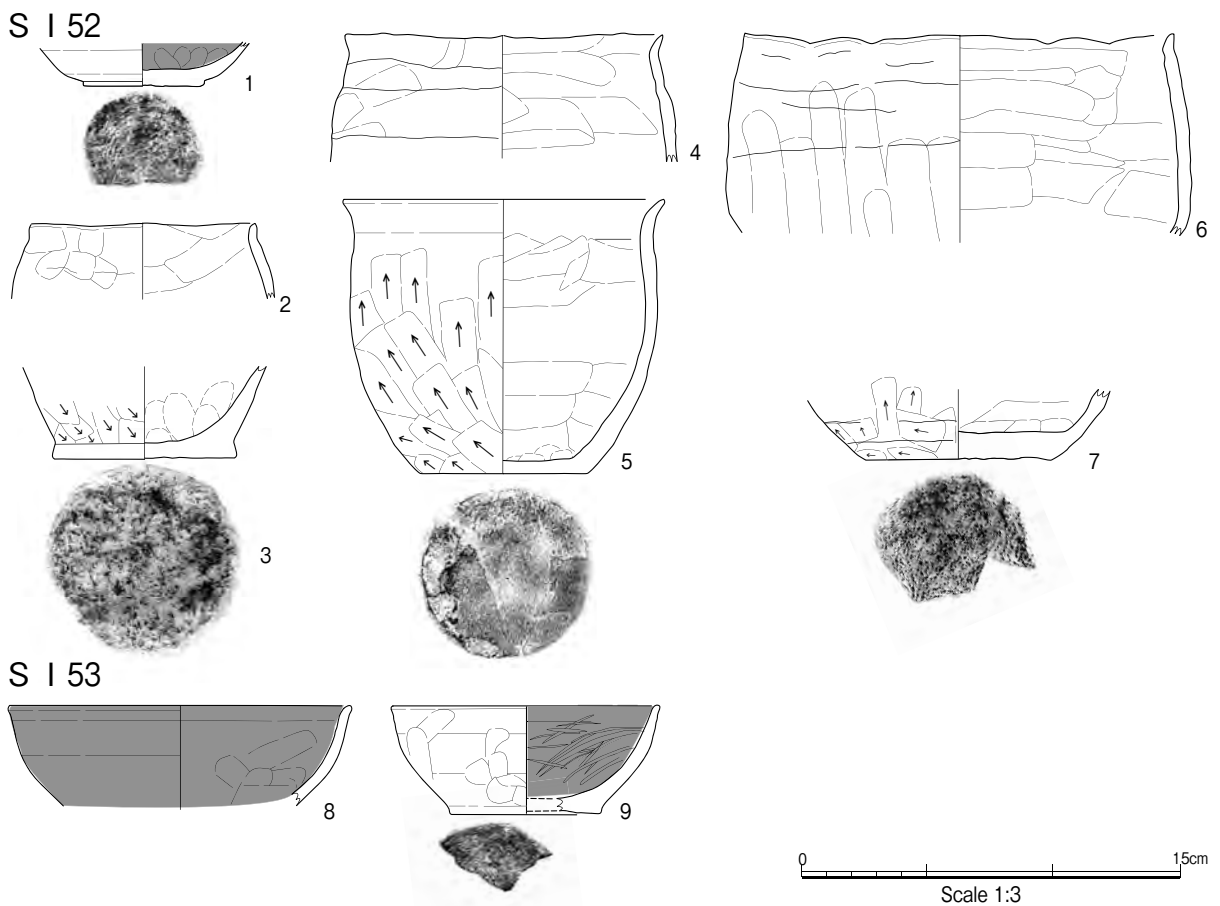
S I 53（第98・99図）

位置 27-1・m区の調査区際に検出された。

遺構 北の一部を検出したのみで、大半は調査区外へ延びるため、詳細は不明である。

遺物 第99図1・2は無台碗で、黒色土師器である。法量からみると、1は口径14cmの中型品。2はこれ以下の小型品である。

時期等 時期は平安時代中期に比定される。



第99図 S I 52・53出土土器

S B 6 付 S D 13・S D 13' (第46・47図)

位置 13・14-f・g・h・i 区に検出。

遺構 S B 6 は東西2間 (1.8m+1.8m)、南北1間 (1.6m) の掘立柱建物跡。掘り方は北西隅柱を除いて長軸65~90cm、短軸55~60cmの楕円形で、柱当たりは北西隅柱も加えて径30~40cmの柱穴となる。この建物跡の北隣には2条の溝跡 (S D 13・S D 13') がある。S D 13は13・14-f・g・h・i 区に検出。14 f 区でS D 10から90度西に分岐して一直線に伸びている。溝内には1.4~2.5m置きに、径30~40cm、深さ15~20cm大の柱穴が点在して穿たれていて、柵様施設の存在をうかがい得る。S D 13' は14-f・g 区にS D 13と並行して検出され、溝内に同様に径12~15cm大の小柱穴が、60~80cm置きに点在している。いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。

S B 7 (第99図)

位置 14・15-j 区に位置する。

遺構 2間 (3.2m) × 1間 (1.8m) の南北棟建物 (N-22°-W) である。柱間は桁行はほぼ等間であるが、梁間は1間のみの検出のため、不明である。柱掘り方は径40~50cmの円形ないし方形である。遺物は出土しなかった。

S B 8 (第99図)

位置 15・16-j・k 区に位置する。南西部は調査区外へ広がる。

遺構 2間 (3.7m) × 1間 (1.6m) の南北棟建物 (N-19°-W) である。柱間は東側柱列は南より1.7m・1.8mであるが、梁間は1間のみの検出のため、不明である。柱掘り方はほぼ円形で、径は30~40cmである。遺物は出土しなかった。

S B 9 (第100図)

位置 16・17-g・h 区に位置する。

遺構 2間 (3.0m) × 2間の建物跡である (N-20°-W)。柱間寸法は1.4m等間である。柱掘り方は径30~70cmの楕円形である。柱痕跡は径約20cmである。外周溝をもつ。

遺物 遺物は須恵器片、土師器片が若干出土した。

時期等 出土遺物から平安時代の遺構と考えられる。

S B 10 (第101図)

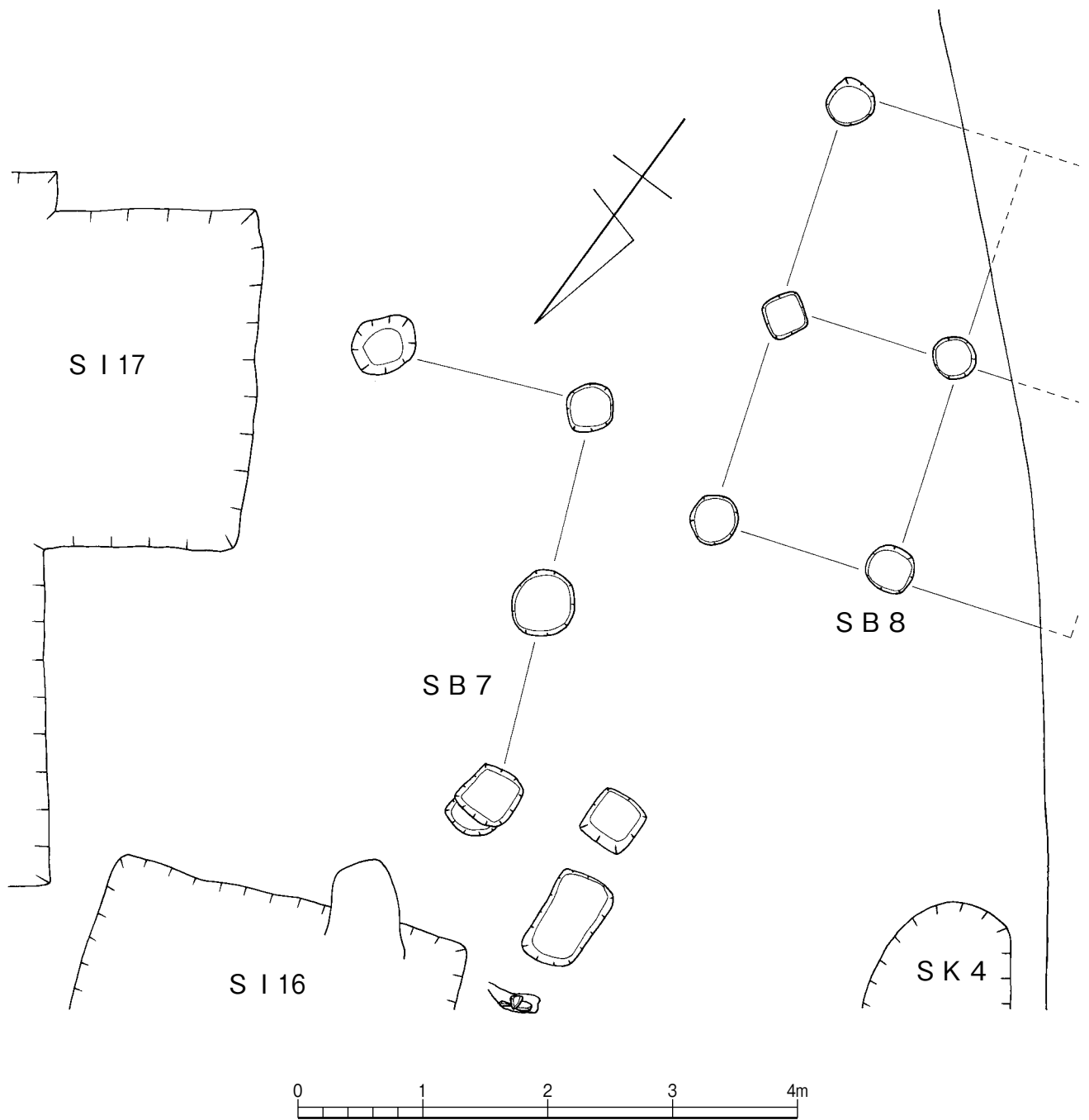
位置 19-g・h 区、S I 22の東側に位置する。

遺構 1間 (1.7m) × 1間の建物跡である。柱掘り方は一辺30~40cmの隅丸方形である。遺物は出土しなかった。

S B 13 (第102図)

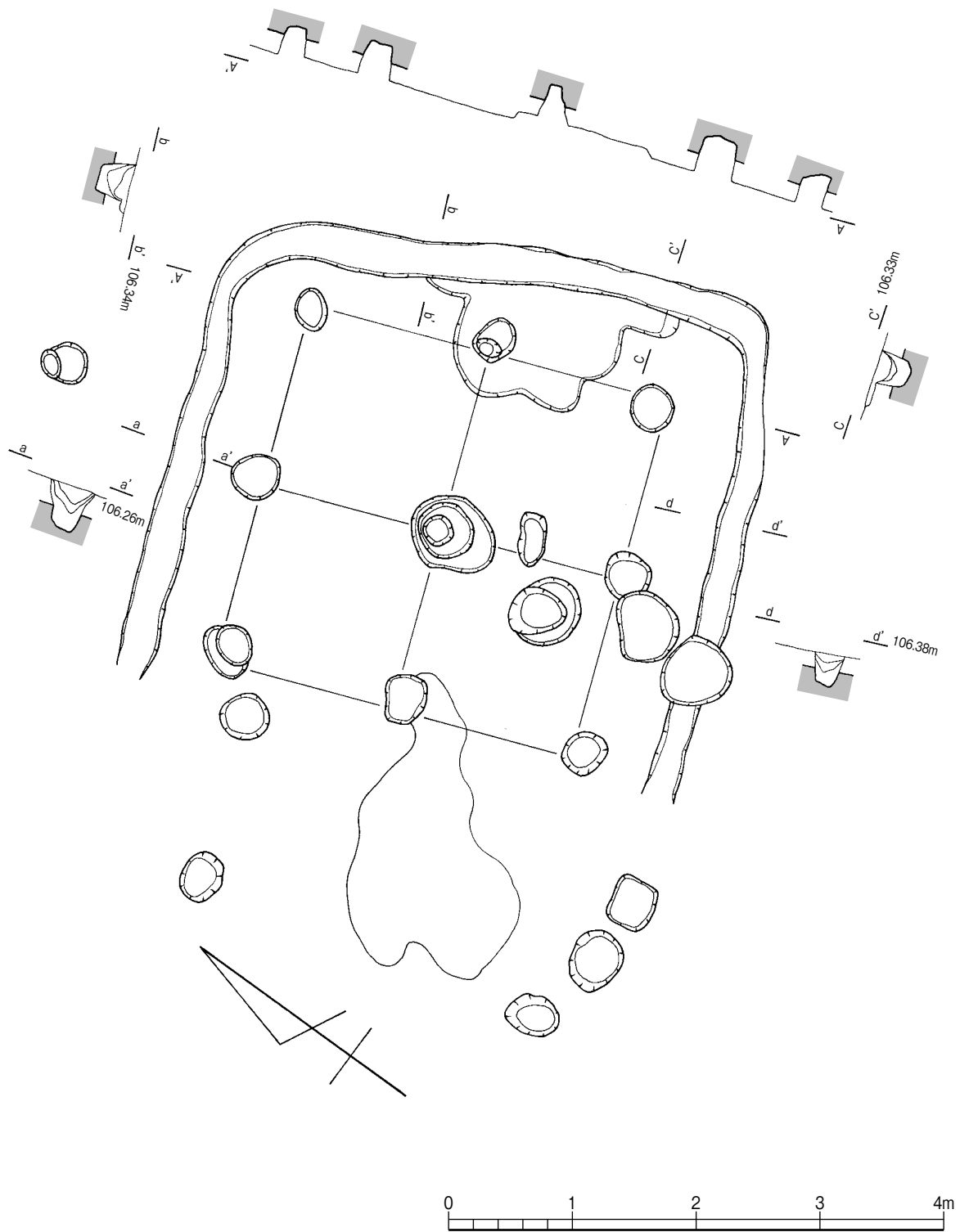
位置 20・21-i・j 区に位置する1間×1間の建物跡で、S X 7と一部重複する。新旧関係は本遺構の方が古い。

遺構 東西・南北とも等長 (2.7m) で、正方形の平面形をとる。柱掘り方は径30~40cmの円形である。北西隅が、S X 7と重複し、これよりも古いことがわかる。方位はN-19°-Wである。遺物は出土しなかった。

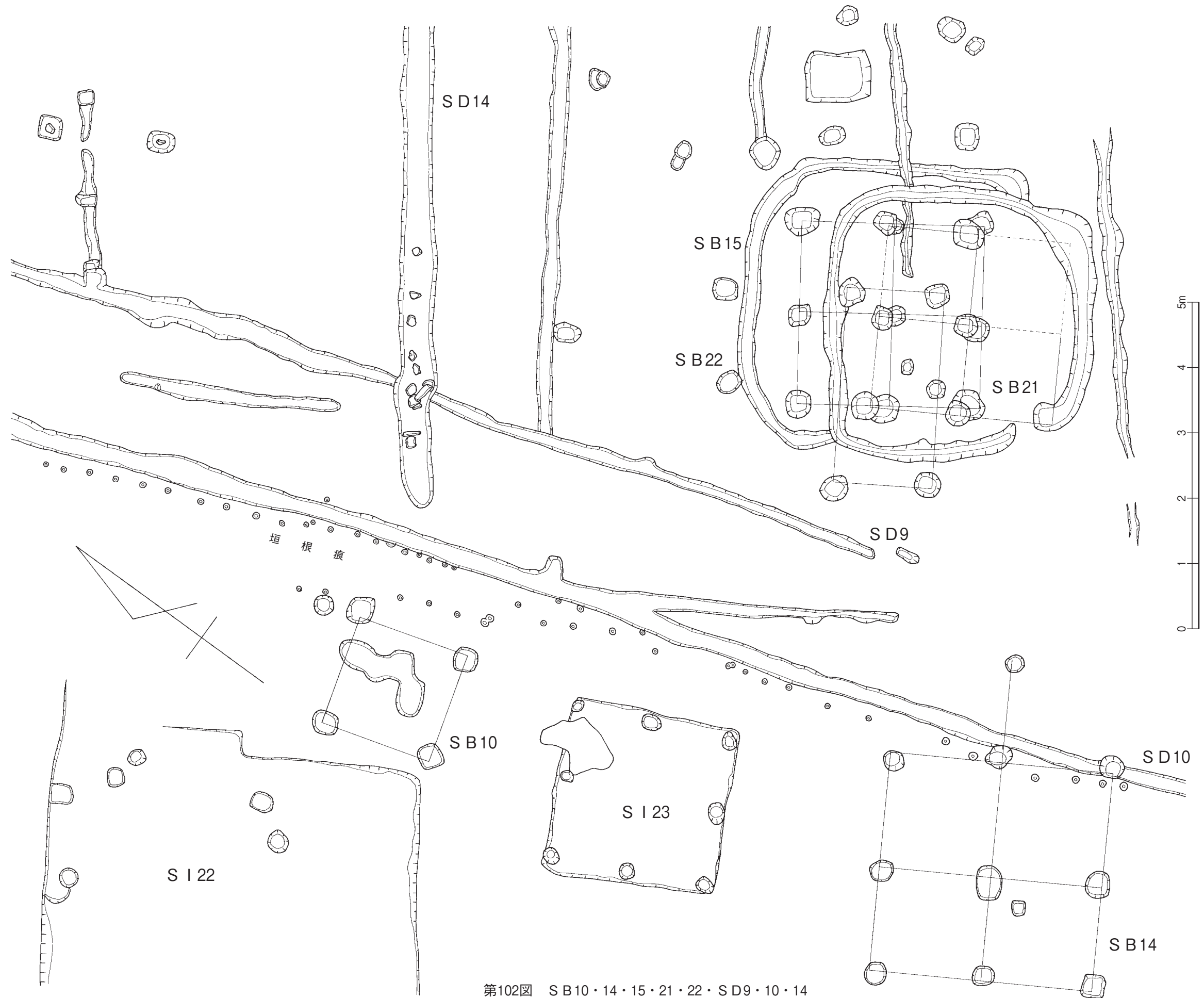


第100図 SB7・8

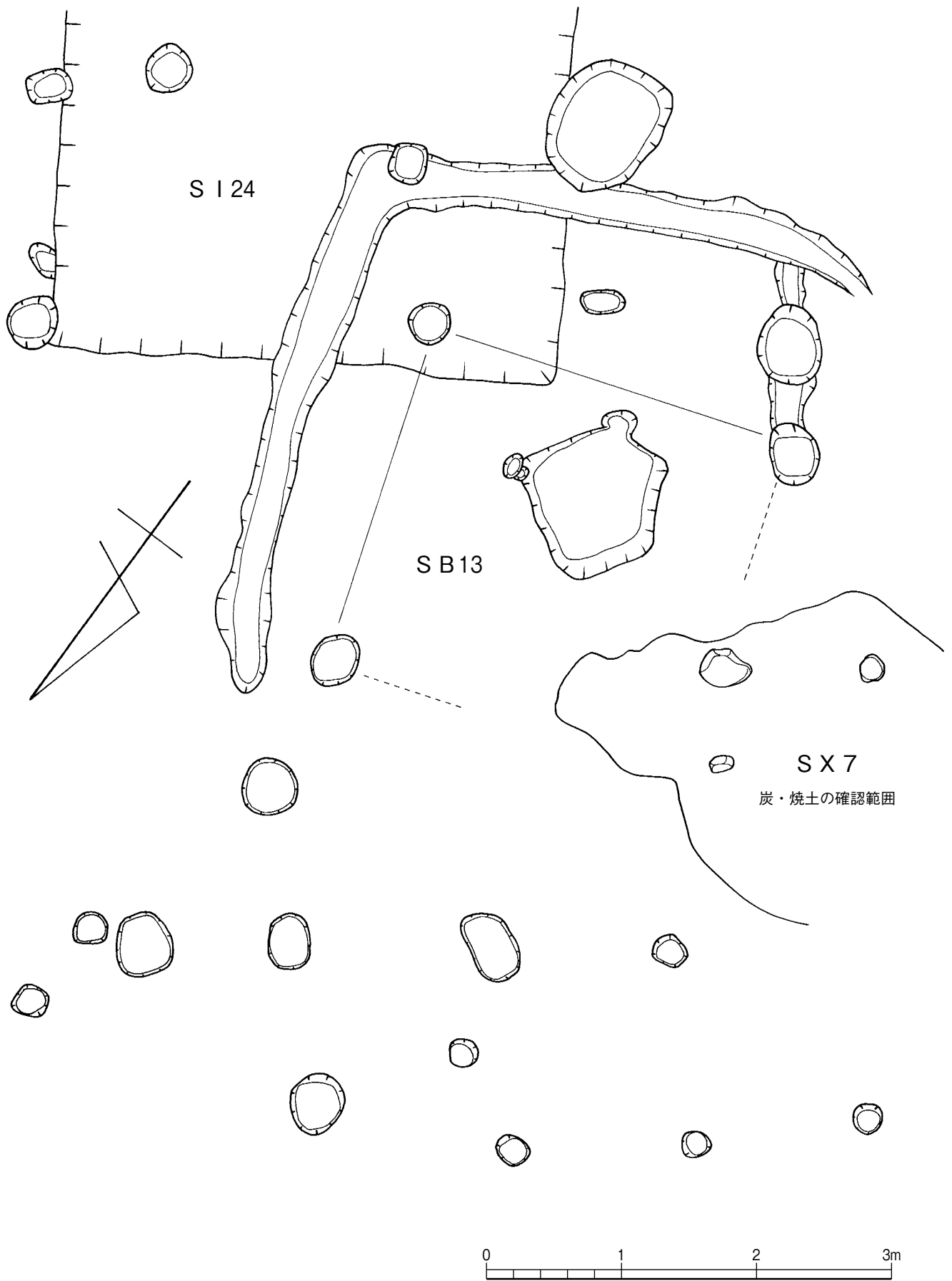
SB9



第101図 SB9



第102図 SB10・14・15・21・22・SD9・10・14



第103図 SB13

S B 14 (第101図)

位置 21・22-h区に位置する。

遺構 東西2間(3.4m)×南北2間(3.4m)の建物跡で、正方形の平面形を呈する。柱間はそれぞれほぼ等間であるが、東西の西側は短くなる。また、建物東側に柱穴が一つあるが、本建物に伴うかどうかは不明である。柱掘り方は円形ないし隅丸方形で径30~50cmである。建物の方位は、N-30°-Wで東側に位置するS B 22と一致し、これと同時存在の可能性が強い。遺物は出土しなかった。

S B 15・21・22 (第101図)

位置 20・21-e・f区の同一地点に重複して存在する建物跡で、S B 21・22は外周溝をもつ建物跡であり建替えが明確にうかがえる。建替えの順序はS B 15→S B 21→S B 22である。

遺構 外周溝をもつ建物跡はⅡ区のみで少数例である。3棟とも規模はほぼ同一で、S B 15・22は桁行・梁間2.8mである。柱間はすべてほぼ等間となる。建物の方位はS B 15がN-34°-W、S B 21がN-32°-W、S B 22がN-30°-Wである。柱掘り方は径25~50cmの楕円形である。遺物は出土しなかった。

S B 16 (第103図)

位置 21・22-d・e区に位置する。

遺構 2間(2.8m)×2間(2.8m)の建物跡(N-34°-W)である。外周溝をもつ。柱間はほぼ等間である。柱掘り方はやや丸味をもち、径40~50cmである。柱痕跡は径約20cmである。遺物は出土しなかった。

S K 4 (第43・106図)

位置 14-k区に位置する長楕円形の土坑である。

遺構 長辺2m、短辺1.2m、深さは30cmである。底面は軟弱で平坦である。柱穴になるようなものは存在していない。埋積土は上面から暗褐色土、黄褐色土、黒色土、黄色土である。

遺物 遺物は黒色土から土師器片が若干出土した。

第106図1~5は土師器小型甕である。全体を残すものはない。2~4は口縁部から体部上半を残す。口縁部は短くひらき、端部は1・2が丸くおさまり、3・4が尖り気味である。3・4の体部上半はやや丸みをもつ。内面はいずれもナデ、器表面は1・3がケズリ、2・4がナデである。底部はおそらく、5・6のように平底であろう。4は復原口径14cm。すべて埋積土中出土。

時期等 時期は平安時代中期に比定される。

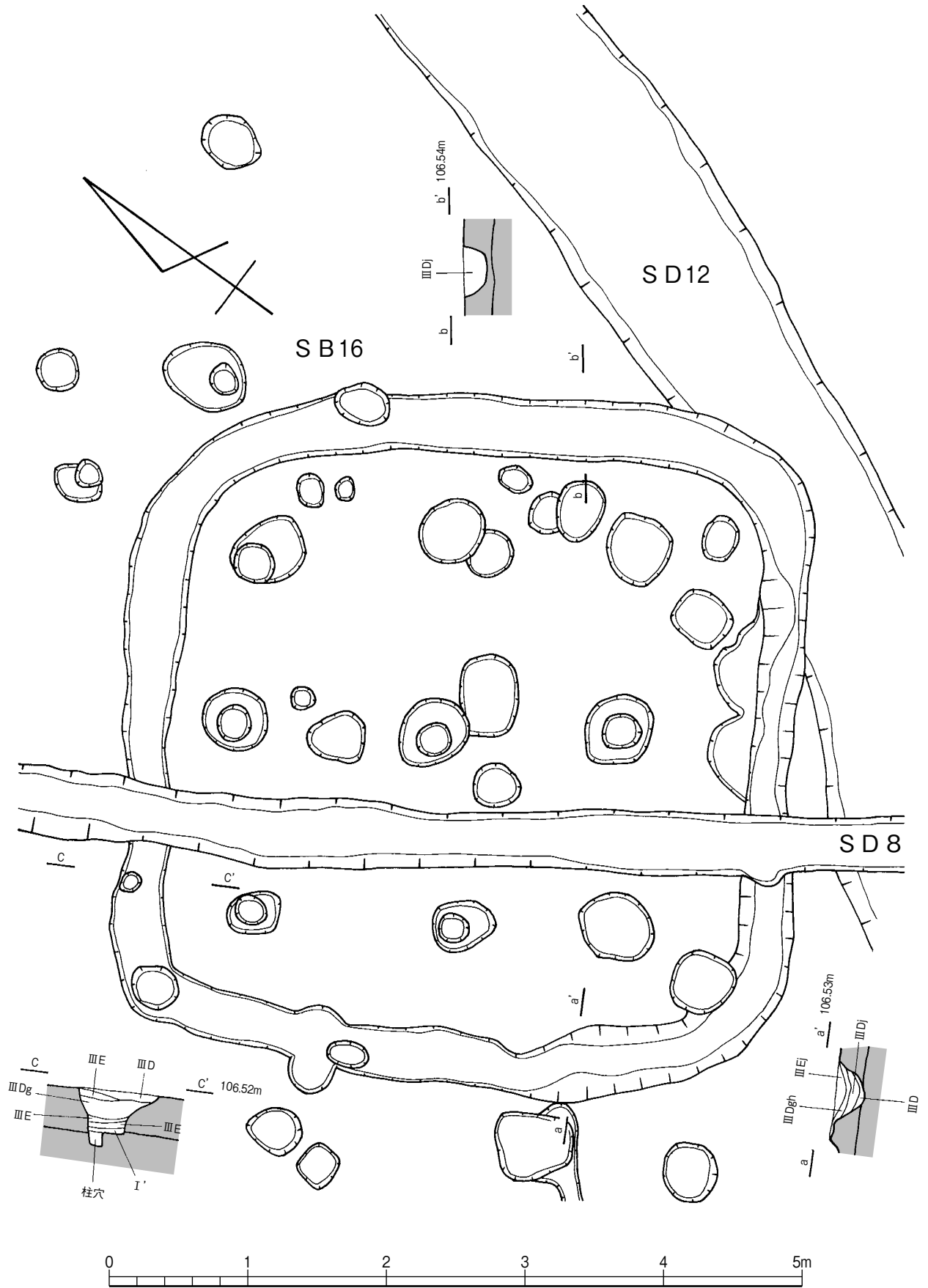
S K 5 (第105・106図)

位置 25-d・e区のS I 29の西側に位置する土坑である。

遺構 この遺構の調査は昭和63年度に行った。南北1m、東西1.3mで、深さは10cmである。

遺物 遺物は北部から土師器片が若干出土した。第106図7は土師器甕底部である。底面が砂底であり、内面にはナデによる凹凸がある。胎土に3mmほどの小礫を含む。器表面に炭化物が付着する。

時期等 時期は平安時代中期に比定される。



第104図 SB16・SD8・12

SK6 (第104図)

位置 25・26-d・e区に位置する不整形の土坑である。

遺構 上端の径は約3mで、緩やかに窪み深さは10cmである。埋積土は最上層が黒褐色土約10cmの厚さで、その下は部分的に黄褐色粘土で地山土を主体とする。この黄褐色粘土層は自然堆積ではなく、人為的に埋めた土と考えられる。

遺物 遺物は土師器と鉄関連遺物がややまとまって出土した。

第106図8～12は土師器甕。8・10・11は口縁部でロクロ不使用の土師器である。11は端部に面をもつが、8・10は丸くおさまる。大・中・小ほどの区別はあるようであり、8は小型品、10・11は中型品かと思われる。

時期等 時期はⅡ～Ⅲ期であり、10世紀の後半頃の年代観が与えられる。

SK7 (第8図)

位置 25-f区に位置する方形の土坑である。

遺構 記録がないため、詳細は不明である。遺物の出土量はごく少ない。

SK8 (第9図)

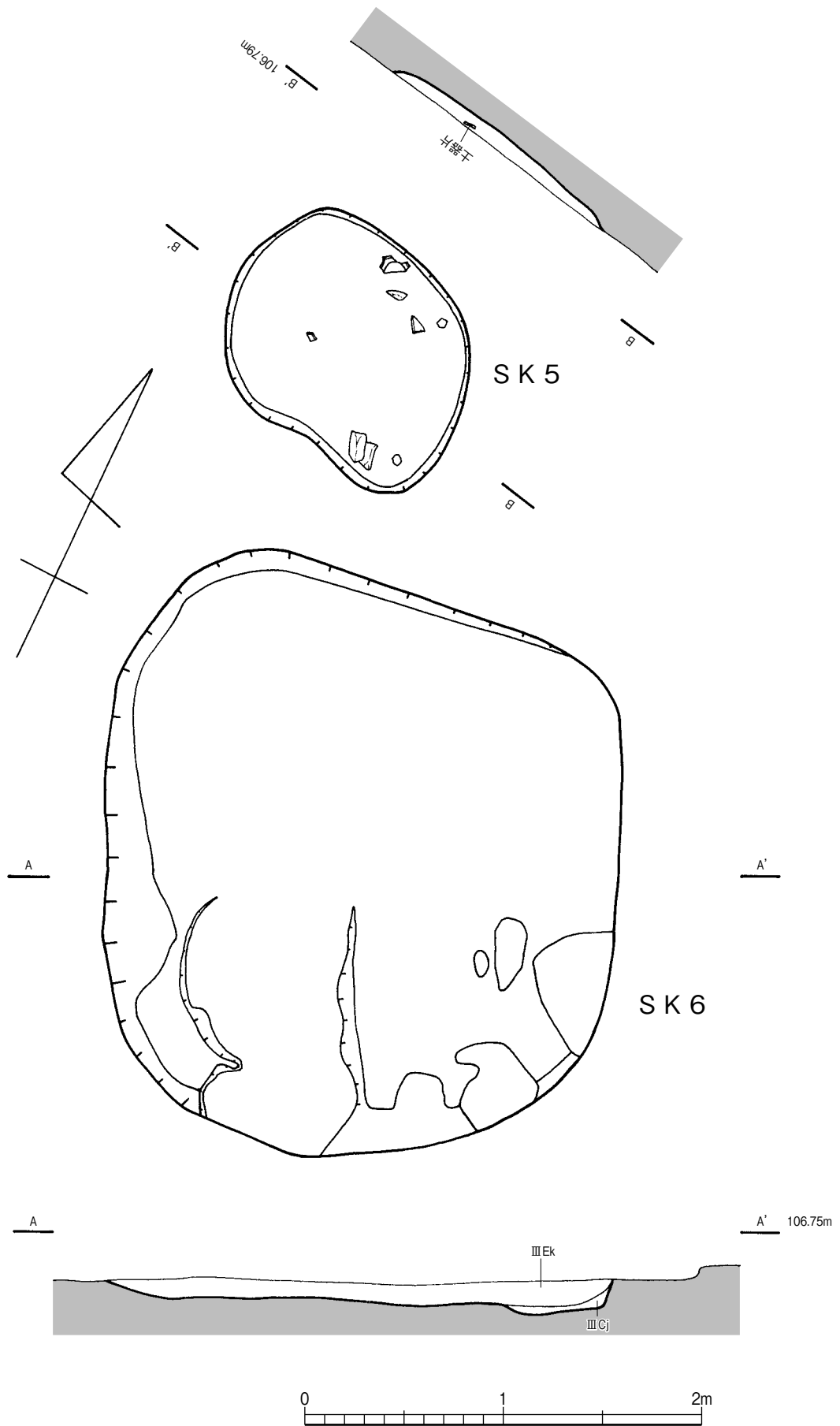
27・28-j区に位置する隅丸方形を呈すると思われる土坑である。半分検出したのみで、調査区外へ北東に広がる。遺物は出土しなかった。

SX4 (第107・108図)

位置 調査区の東側、25・26-f区から検出した製鉄炉跡である。平坦面に位置し、標高は106.7mを測る。本遺構の南西に隣接して、SX5が存在する。本遺構とSX5は遺存状態が良好であり、校舎建設予定地から外れることから、完掘せずに現状保存することとした。

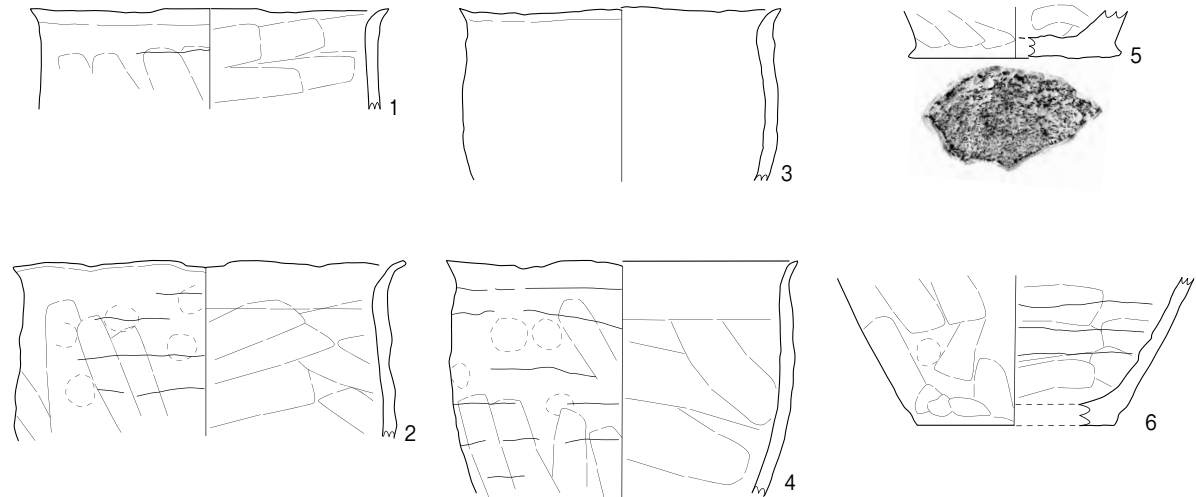
遺構 昭和62年に実施した確認調査で検出した。炉壁や流出滓を主体とする遺物がおよそ1.9×1.4mの範囲で広がっていた。本遺構は、コの字を反時計回りに90°回転させた形をとる。中央の隙間は掻き出し口であり、両端部に袖のような形状の堆積鉄滓が見つかった。炉の北西側には、流出滓が比較的多量に出土する部分が見られ、前庭部に相当する施設と考えられた。本遺構は、完掘しておらず、炉の形式は不明である。長軸が1.1m、幅1m、高さ40cmの横形である。主軸はN-50°-Wを測る。なお、高さに関しては未調査部分、つまり下部に認められる可能性が高く、その場合半地下式であろう。ただし、完掘していないため、地下構造などは不明である。この遺構は平坦な土地に存在しており、炉は地山を掘り込んだものではなく、粘土を積み上げて作り上げた炉壁であろう。炉壁の粘土は炉背部側から前庭部側に行くにつれて、灰白色→暗褐色・暗紫色→黄橙色を呈し、熱変の度合いがことなっていた。このことから、炉背側に近い部分の還元化の度合いが強いと考えられる。炉壁粘土には、スサ、小礫が混入していた。

遺物 本遺構から出土した遺物は土師器と鉄関連遺物がある。鉄関連遺物は、炉壁853g、羽口(製錬)98g、砂鉄焼結塊36g、流出孔滓549g、孔～溝滓294g、流出溝滓549g、流動滓552g、流動滓(鳥足状)102g、炉内流動滓159g、炉底塊639g、炉底塊または椀形鍛冶滓3,289g、椀形鍛冶滓3,291g、炉内滓2,106g、鉄塊系遺物メタル度M(◎)7g、錆化(△)17g、再結合滓657g、鉄製品(鍛造品)1点(16g)であり、総重量は13,214gである。遺物の割合として特徴的なのは、滓類・鉄塊類といういわゆる製錬炉関係の遺物が12,247gと、遺構鉄関連遺物の約93%を占める。

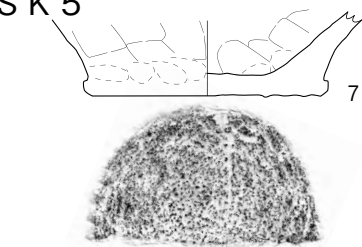


第105図 SK5・6

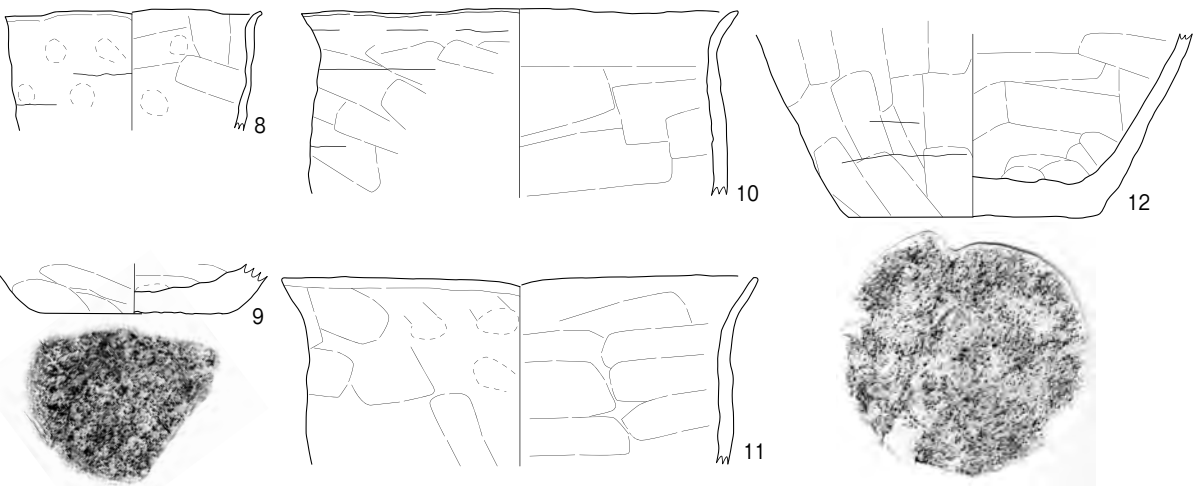
SK 4



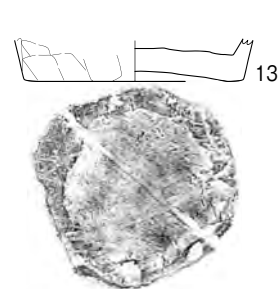
SK 5



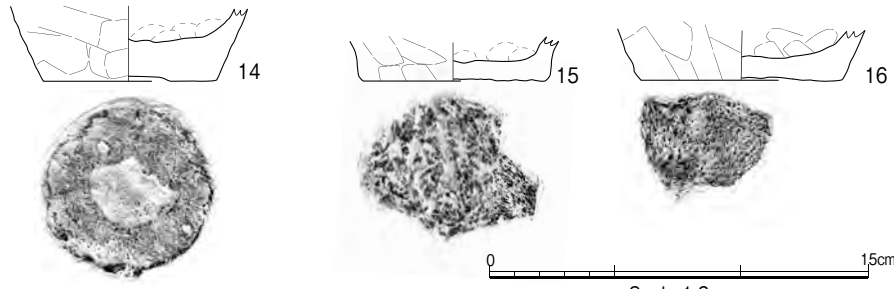
SK 6



SD 10



SD 14



0 15cm
Scale 1:3

第106図 II区SK・SD出土土器

第107図1は土師器甕底部。炉壁は17点出土した。2は砂鉄焼塊結付きの炉壁である。胎土にはスサと長石が含まれ、色調は内・黒褐色→中・黄灰色→外・剥離と推移する。内面に砂鉄焼塊が付着し、製錬工程を思わせる。他の炉壁も横方向接合痕付き、滓付きなどである。流出孔滓は29点出土し、8点図示した。重量は12～94g。細身の孔滓は2～3条の筋状滓をもつが、大ぶりの孔滓は1条である。両端に破面を持つ物が多く、気孔が大きく目立つことから、外気に触れ冷却されたため、ガスが閉じ込められたことが観察できる。流出溝滓は11点出土し、1点を図示した。滓幅が2cm程度の物から8cm程度のもので出土しているため、溝幅は最低でも8cm前後はあったものと考えられる。

第108図1～3は流動滓で、1は5mmほどの筋状滓を18条もつ鳥の足状のもの。2は4つの破面をもつ16条の流動滓。緻密で気孔はほとんど見られず、長さ7.4cm、幅4.1cmと大ぶりである。1・2ともに光沢のある黒色を呈す。3は1条の流動滓であるが、重量は79.8gと重く、表面には多数の小さな気孔が見られる。4・5・13は炉底塊である。4・5はいずれも小型の炉底塊であり、磁力はない。13は炉底塊または特大型の椀形鍛冶滓である。椀形鍛冶滓(14)とならび本遺構の代表的な遺物である。これは不整六角形を呈し、破面を2つもつ。底部の鉄塊が磁力を帯びてはいるが、メタルは検出されなかった。表面は流動状の滓をもち、1cm超の気孔が多くスポンジ状である。木炭痕が付着し、底部の鉄塊7.5cm×13cmであり、裏面に礫が付着している。径23cm、重量3,289gで非常に大型。6・7は炉内滓であり、6の重量は27gである。不整三角形で磁力を持つが、錆化が激しく茶褐色。内部に気孔が目立つことから、ガスが抜け切れていないのがうかがえる。7は不整五角形で、表面に炉内流動滓をもち、全体が錆で覆われ茶褐色を呈す。緻密で内面の気孔が少ない。炉内滓は76点出土し、100gをこえるものは数点である。8・9は鉄塊系遺物。8は7.0gで中程度のメタルが検出された。磁着度は5である。黒錆に覆われ、黒褐色である。9は2.6gと小粒で磁力を帯びているが、錆化しており、木炭痕付着。木炭痕は酸化し、茶褐色。10・11は再結合滓である。10は重量が276gで不整五角形を呈し、粒状滓がわずかに見られ、木炭・礫付着。色調は暗茶褐色。11は不整六角形で表面に酸化した木質付着で茶褐色を呈する。裏面には酸化土砂・砂鉄が付着し、スサ・礫が混入。さらには流動状の滓を巻き込んでいる。重量は340g。10・11ともに磁力はない。12は鉄製品（鍛造品）であるが、器種は不明である。長さ3.9cm、幅3.1cm、厚さ2.2cm、重量16gの筒形で内部空洞の製品。わずかにメタルが検出され、磁着度は7と強い。錆化が激しく、内部にも錆ぶくれが目立つ。色調は黒褐色で、錆部は茶褐色を呈す。14は特大型の椀形鍛冶滓であり、前記した炉底塊または椀形鍛冶滓と共に代表的な遺物である。不整五角形を呈し、円周部はなめらかである。木炭痕が付着し裏面にスサ・木炭痕が付着。細かい凹凸があり、所々に錆が付着している。色調は黄橙色。中心部は黒色を呈す。

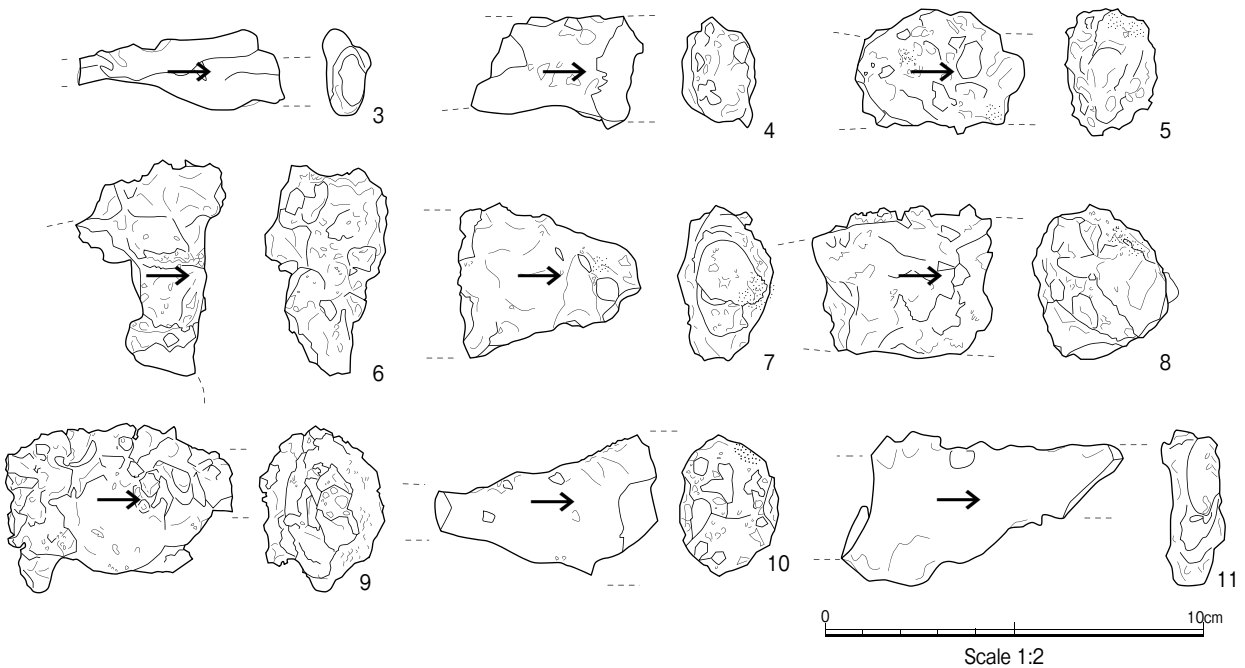
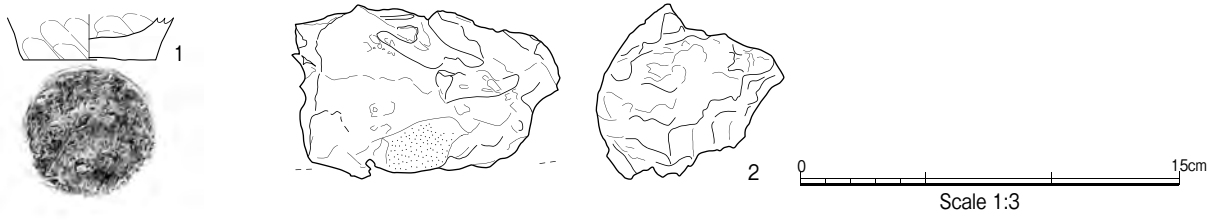
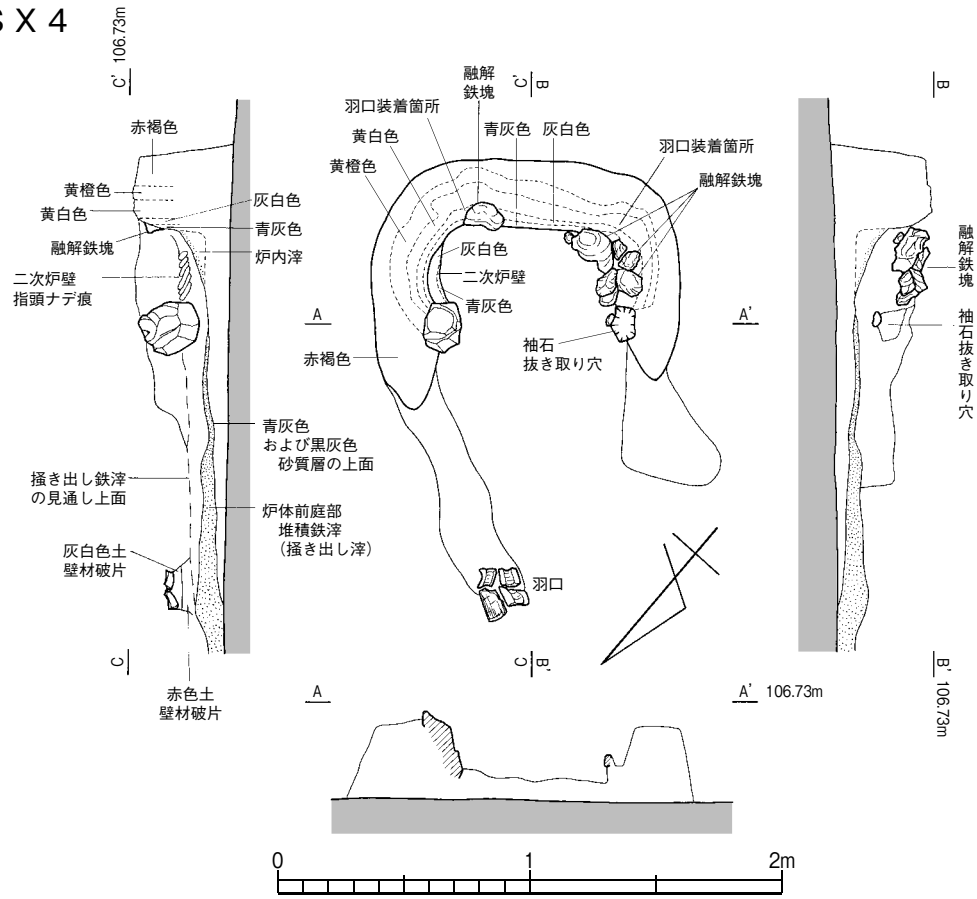
S X 5 (第109図)

位置 調査区の東側、25・26-e区で検出した。

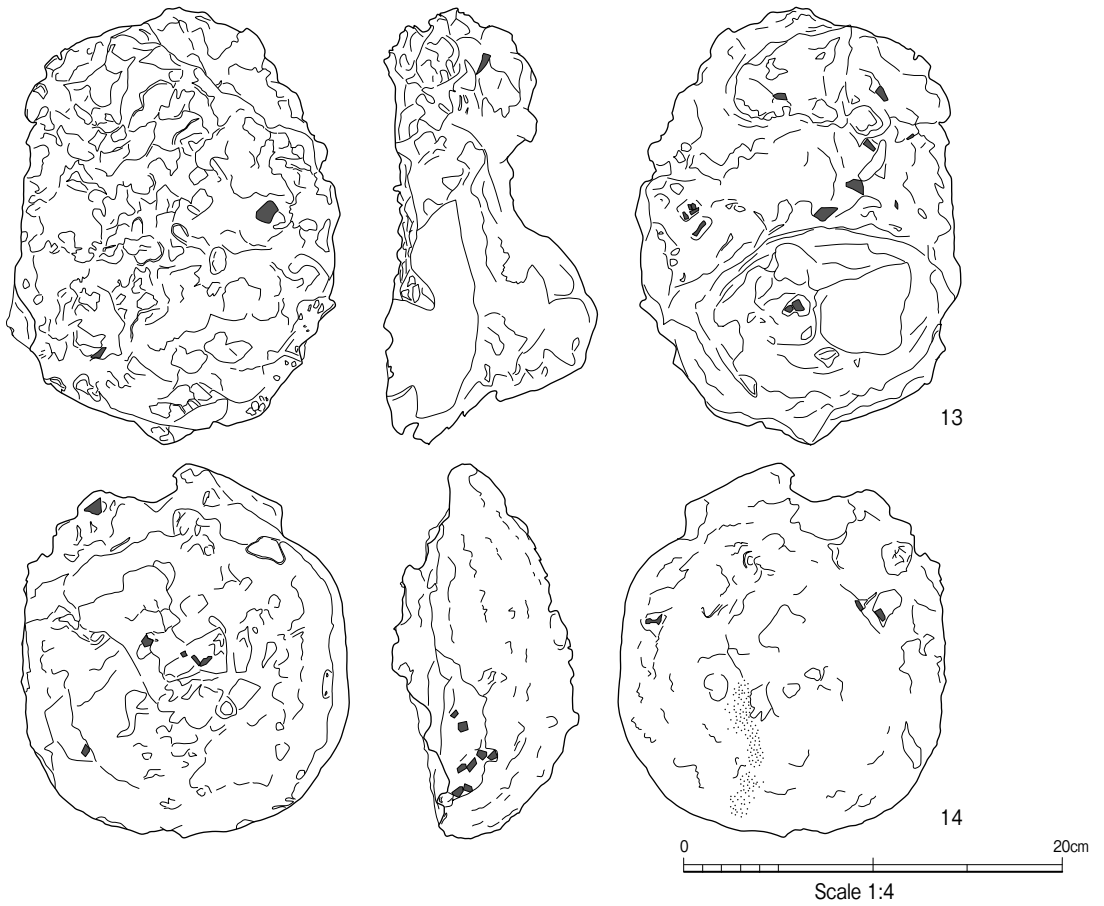
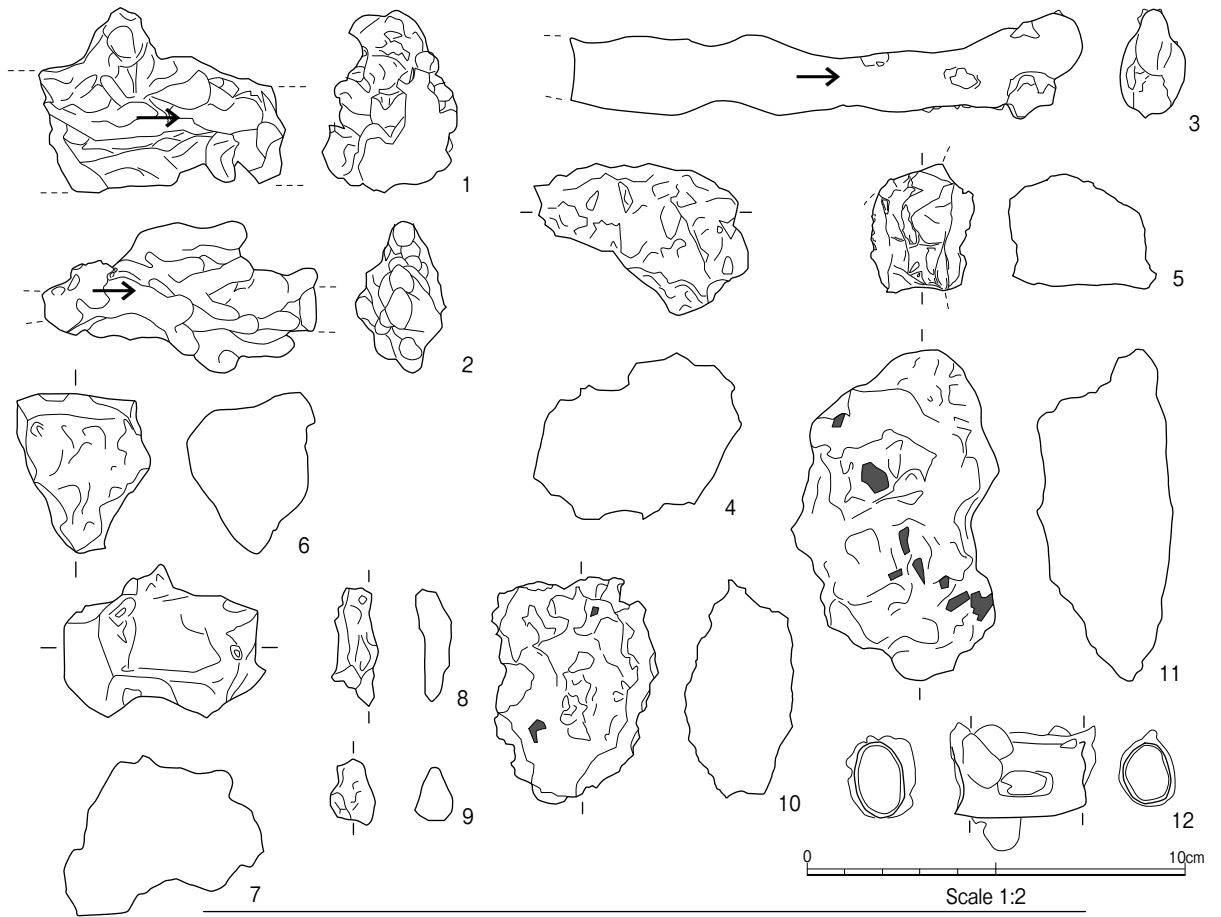
遺構 炉の形状は馬蹄形をなし、前庭部を持つ。長軸は90cm、幅60.2cm、高さは地山から20.8cmである。前庭部は、幅30cm、深さ2cmである。中心のピットから椀形鍛冶滓が検出された。壁面は被熱により赤化ならびに還元化し、炉壁の色調の変化が確認できる。炉内から砂鉄を検出した。

遺物 本遺構から回収した遺物は炉壁1,860g、羽口（製錬）40g、砂鉄148g、流出孔滓1,104g、流出溝滓252g、流動滓170g、炉内流動滓76g、炉内滓632g、鉄塊系遺物16g、含鉄鉄滓12g、石2点27g。総重量4,337gである。炉壁と流出孔滓が大半を占める。炉壁は炉内及び湯口部から17点出土した。第109図1は滓付きの炉壁である。長さ14.8cm、幅15.2cm、厚さ4.1cm、厚さ683gである。色調は内・明褐色→中・にぶい褐色→外・剥離と推移する。内部には滓が付着し、錆に覆われている。

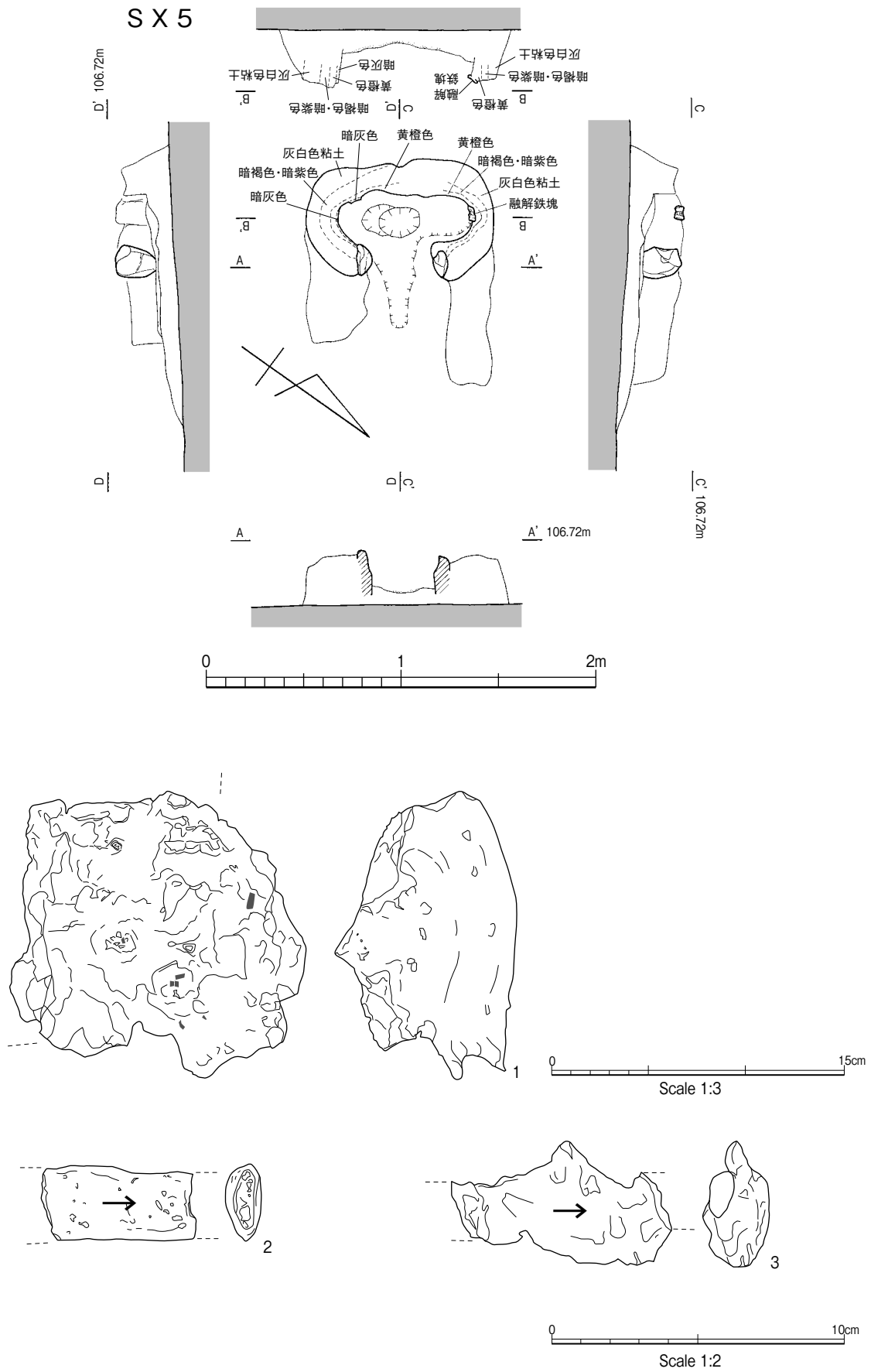
SX4



第107図 SX4と出土遺物 (1)



第108図 S X4出土遺物 (2)



第109図 S X5と出土遺物

S X 6 (第110図)

位置 23-g・h区に位置する。

遺構 上端は2.5m×2mの不整形を呈し、断面形は浅い台形状を呈す。底面は南東側にやや傾斜する。深さは40cmを測る。埋積土は17層に分けられる。下層は炭化層が埋積する。各層に焼土粒・塊を多く含むことから、土師器焼成遺構の可能性が考えられる。

遺物 出土遺物はやや多く、土師器甕・鍋(第110図)が出土している。1・2は小型甕で口縁部が若干外反する。1は内外及び断面も黒色である。2は平底であり、内面にはハケ状工具によるナデが施される。器表面は縦位のナデ、底外面もナデである。胎土に少量の小礫を含むが、ほかの甕に比べ精良で、塊の胎土に似る。体部器表面に炭化物が付着している。3は平底で、底部外面の砂底が特徴と言える。体部下器表面にヘラケズリが施される。4は内面に錆が付着している。5は器壁が厚く、体部はゆるく曲線的に立ち上がる。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸味をおびる。体部器表面がヘラケズリ、内面がナデである。6は鍋と見られる。鍋は甕に比しごく少ない。6は復原口径27.4cmで、体部から口縁部は屈折し、端部は丸くおさまる。体部上半にヘラケズリがなされる。

時期等 所属時期はⅡ期頃に比定されよう。

S X 7 (第111図)

位置 20-j区に位置する。南西部は削平されている。S X 7と重複し、新旧関係は本遺構の方が新しい。

遺構 2m×2mの円形を呈す。断面形は浅い箱状を呈し、深さは30cmを測る。埋積土は4層に分けられる。北東部に4ヶ所礫を配する土坑である。上層が焼成時に形成された土層であり、下層は整地層と考えられる。

遺物 出土遺物は少なく、土師器碗、甕が出土した(第111図)。第111図1は黒色土器無台碗である。ロクロナデ後、器表面にナデが施される。2は甕で体部器表面にヘラケズリが施される。

時期等 時期は、遺構の新旧関係からⅢ期頃であろう。

S X 8 (第112図)

位置 19・20-r区に位置する。

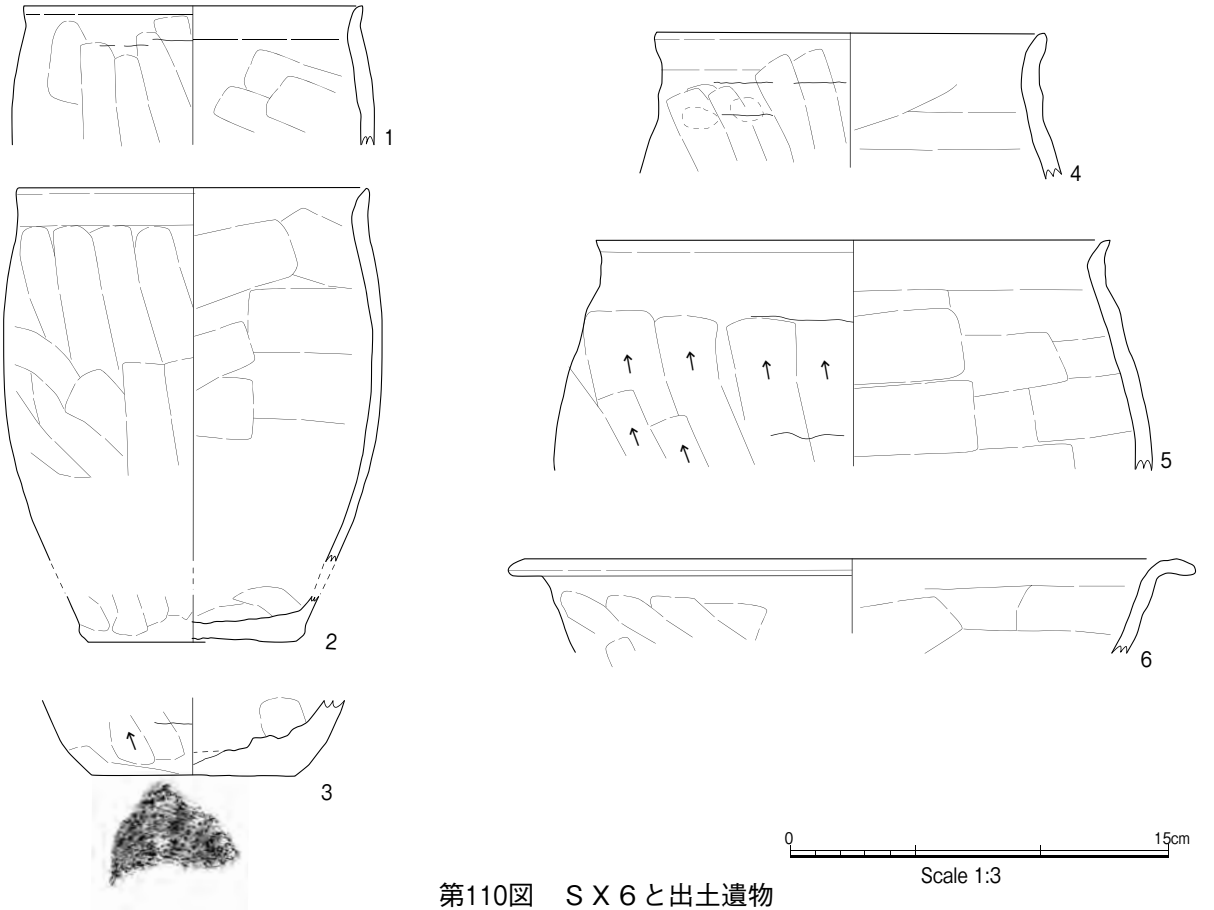
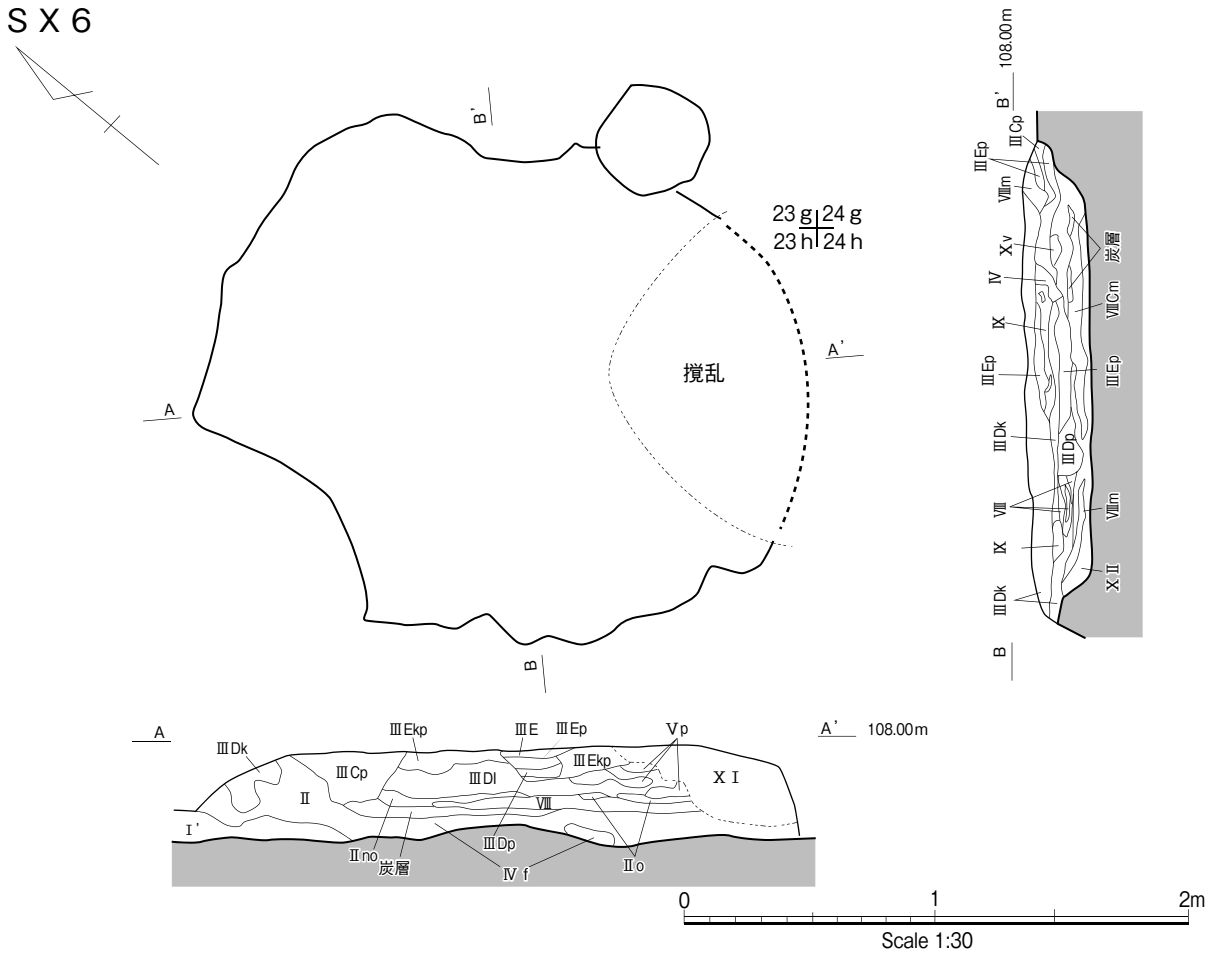
遺構 上端は2m×1.5mの隅丸方形、断面形は浅い皿状を呈し、深さは25cmを測る。埋積土は3層に分けられる。上層は炭化物を含み、赤化している。

遺物 出土遺物は多く、土師器甕、羽口などが出土した(第112図)。

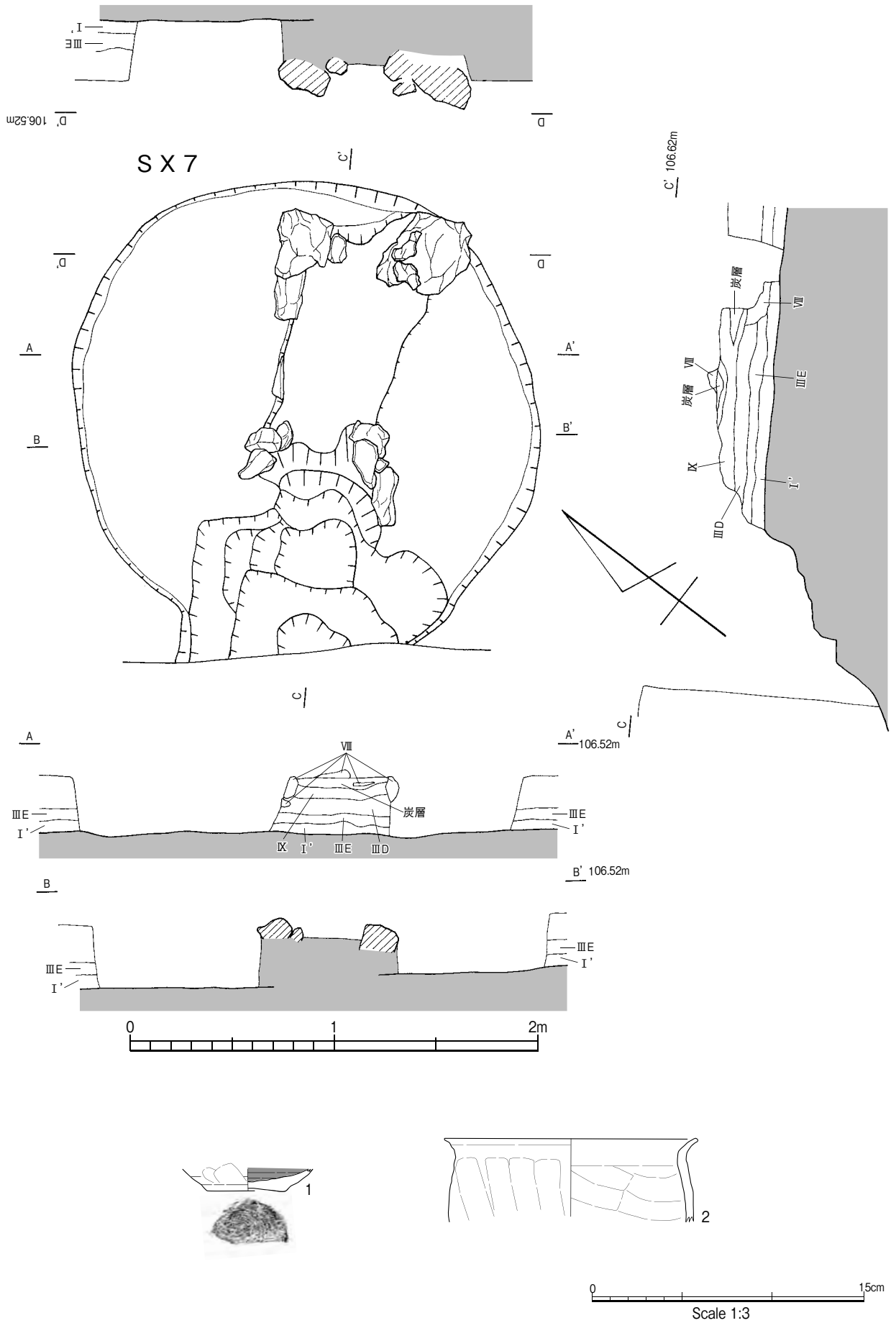
1は小型甕である。口縁部は緩く屈曲して、受口状となり、体部は丸味をもつ。2・4・5は甕で、口縁部から体部上半部を残すものばかりである。4の口縁部は短く開き、端部は丸くおさまる。4の体部は丸味をもつと考えられるが、2・5は肩が張らないものと思われる。内外面はいずれもヘラナデである。5の胎土にはとくに2～3mm大の小礫が多く含まれる。6は鍋で、復原口径26.4cm。口縁部は直線的で、体部は中位で曲がり底部となるものと推定される。7は羽口でカマボコ形を呈する。

時期等 本遺構は上層が炭化物を含む焼土であることから、焼成を伴う行為をしていたものと推測される。時期は、平安時代中頃の10世紀代に比定される。

S X 6



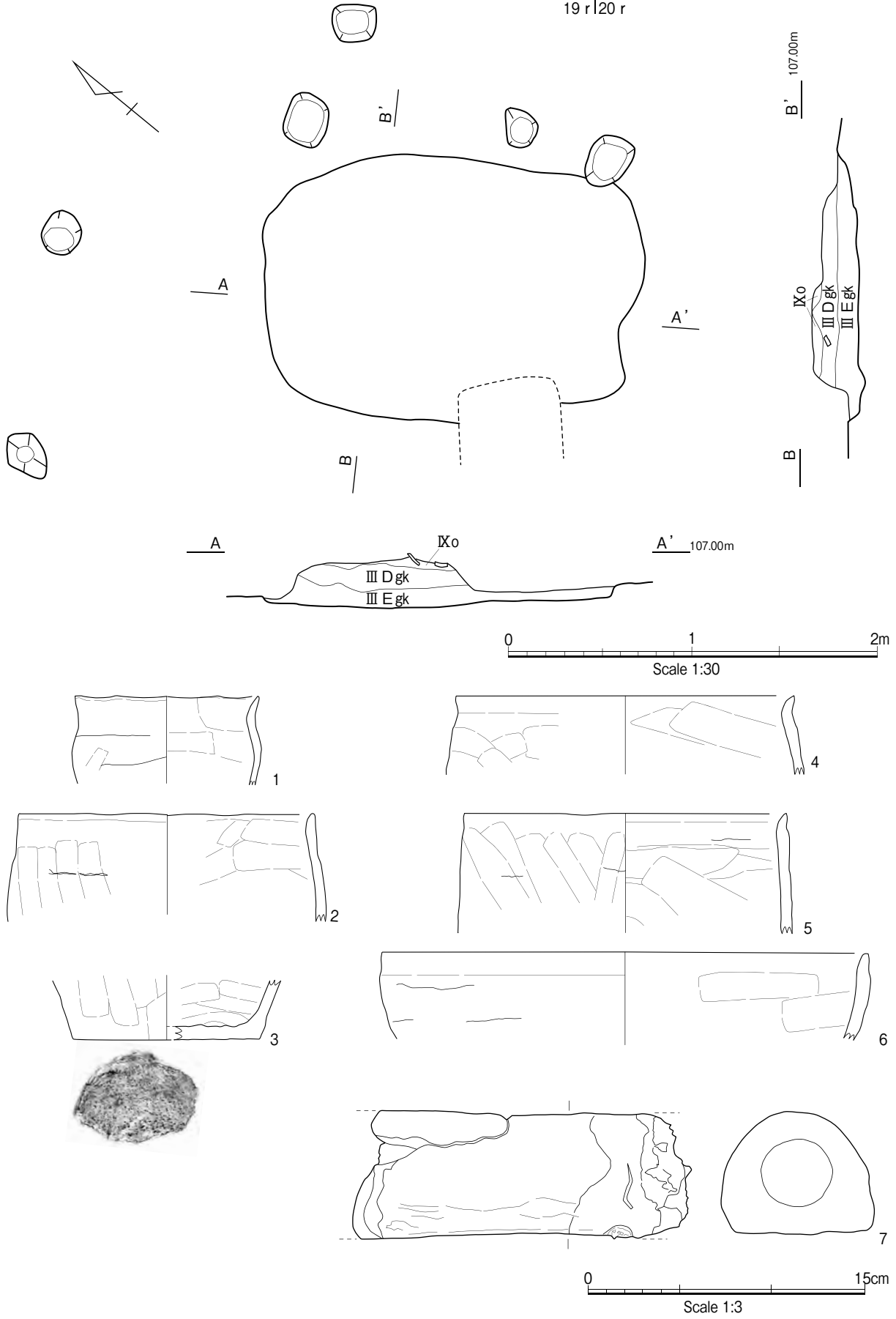
第110図 S X 6と出土遺物



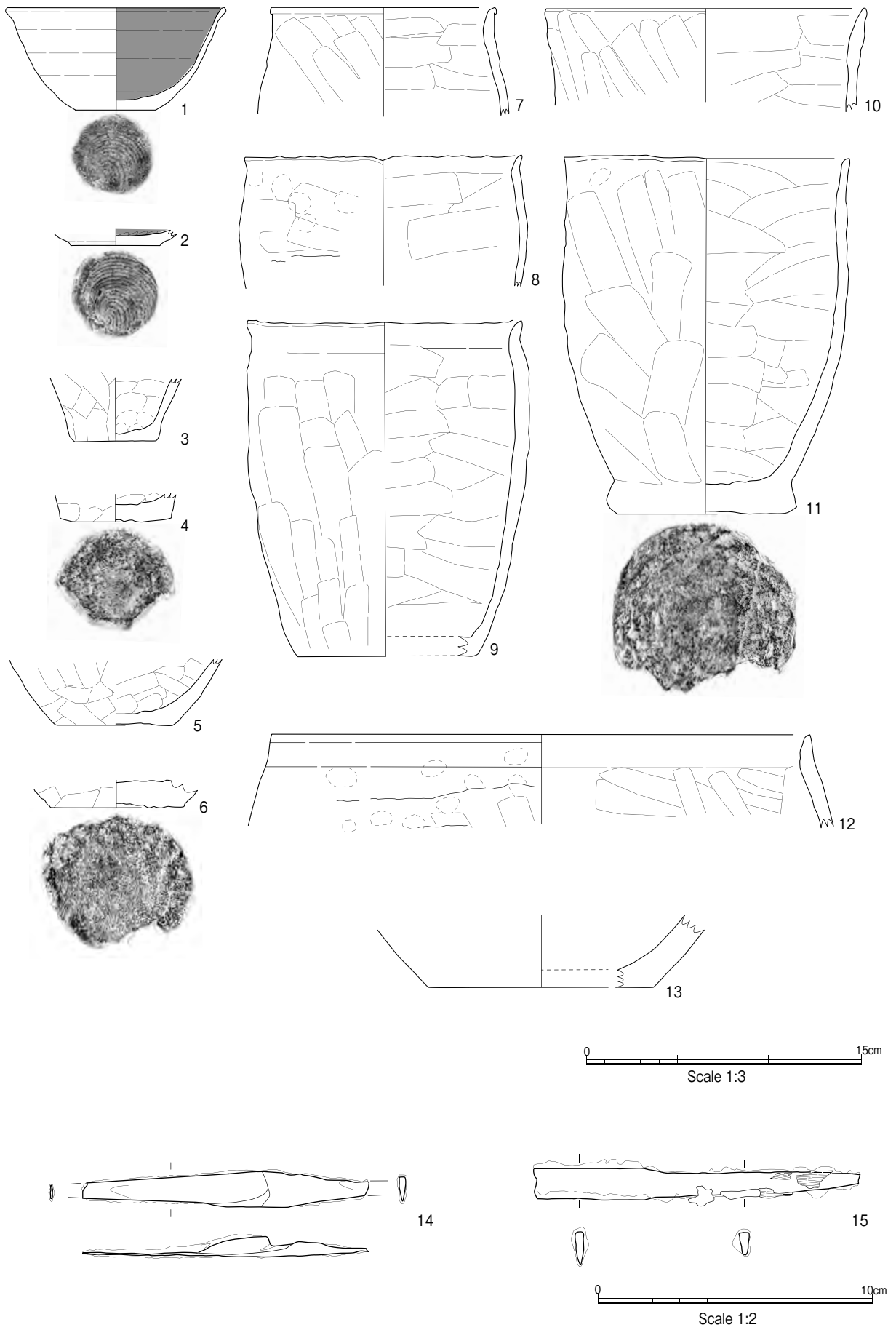
第111図 SX7と出土遺物

S X 8

19 r | 20 r
19 r | 20 r



第112図 SX 8と出土遺物



第113図 S X 10と出土遺物

S X 10 (第113図)

位置 15-g・h区に位置するが、図面等の記録がなく、詳細は不明である。

遺物 土師器甕、鉄製品などが出土した(第113図)。

1は内外ロクロナデの黒色土師器で、つくりはよい。内外の黒色処理は一部に止まる。口径12cm・器高5cmで、器形は底径が小さく、壙形である。器面はなめらかである。胎土やつくりからは搬入品とは考えられない。2も黒色土師器である。3～12は、いずれもロクロ不使用の土師器である。5～7・10～12は甕。5は復原口径12.2cmで、口縁部のつくりは、S X 6出土(第110図2)と同じく、短く屈曲する。このように口縁部は体部から短く「く」の字状に屈折するもの(7～9)と直立気味に立ち上がるもの(10・11)があるが、端部はいずれも丸くおさまる。10は口縁部が緩く外反する鉢形甕である。胎土に小礫を多く含み、にぶい黄橙色を呈する。7～9・11の色調は10よりも明るく、橙色を呈し、胎土は小礫を若干含むほかは精良である。この小礫は意図的に混入した可能性がある。9・11は内外面ヘラナデが施される。3・4は小型甕底部。3は底径4.4cmととくに小型である。4・6・9・11は底部砂底である。5は平底の底部で、7と同一個体の可能性がある。12は復原口径29.4cmで、口縁端部は丸くおさまる。13は土師質土器。平安時代の土師器と比して、硬質である。平たく厚い底部で、底面はナデである。推定底径12cmと大きい。大きな皿か鉢と思われる。にぶい黄色を呈する。

時期等 中世のものとみられる土師質土器が1点出土しているが、ほかは平安時代中頃の10世紀代に比定される。

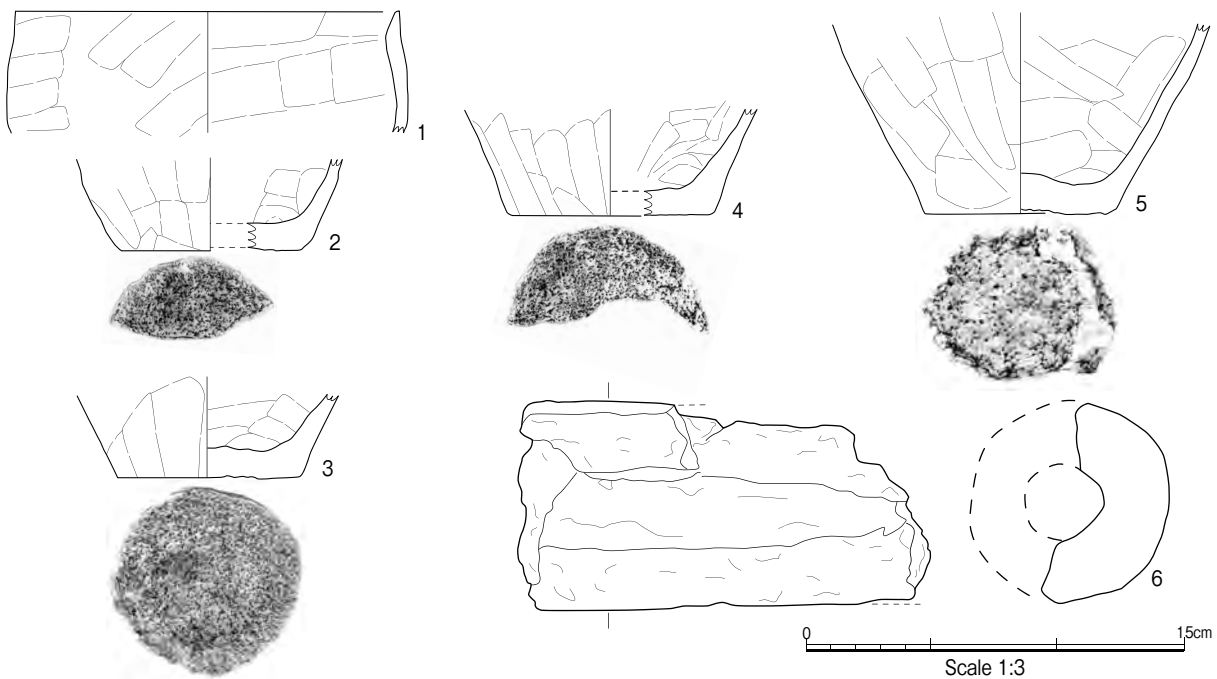
S X 12 (第114図)

位置 II区に位置するが、図面等の記録がなく、詳細は不明であるが、廃棄場と書かれていた。

遺物 土師器甕、羽口などが出土した(第114図)。

1は甕口縁部で、端部は上方へつまみ上げられ尖る。2～5は甕の底部であり、いずれも砂底である。1と3は胎土、色調などからみて、同一個体の可能性がある。6は羽口で、先端部と基部を欠く。

時期等 平安時代中頃の10世紀代に比定される。



第114図 S X 12と出土遺物

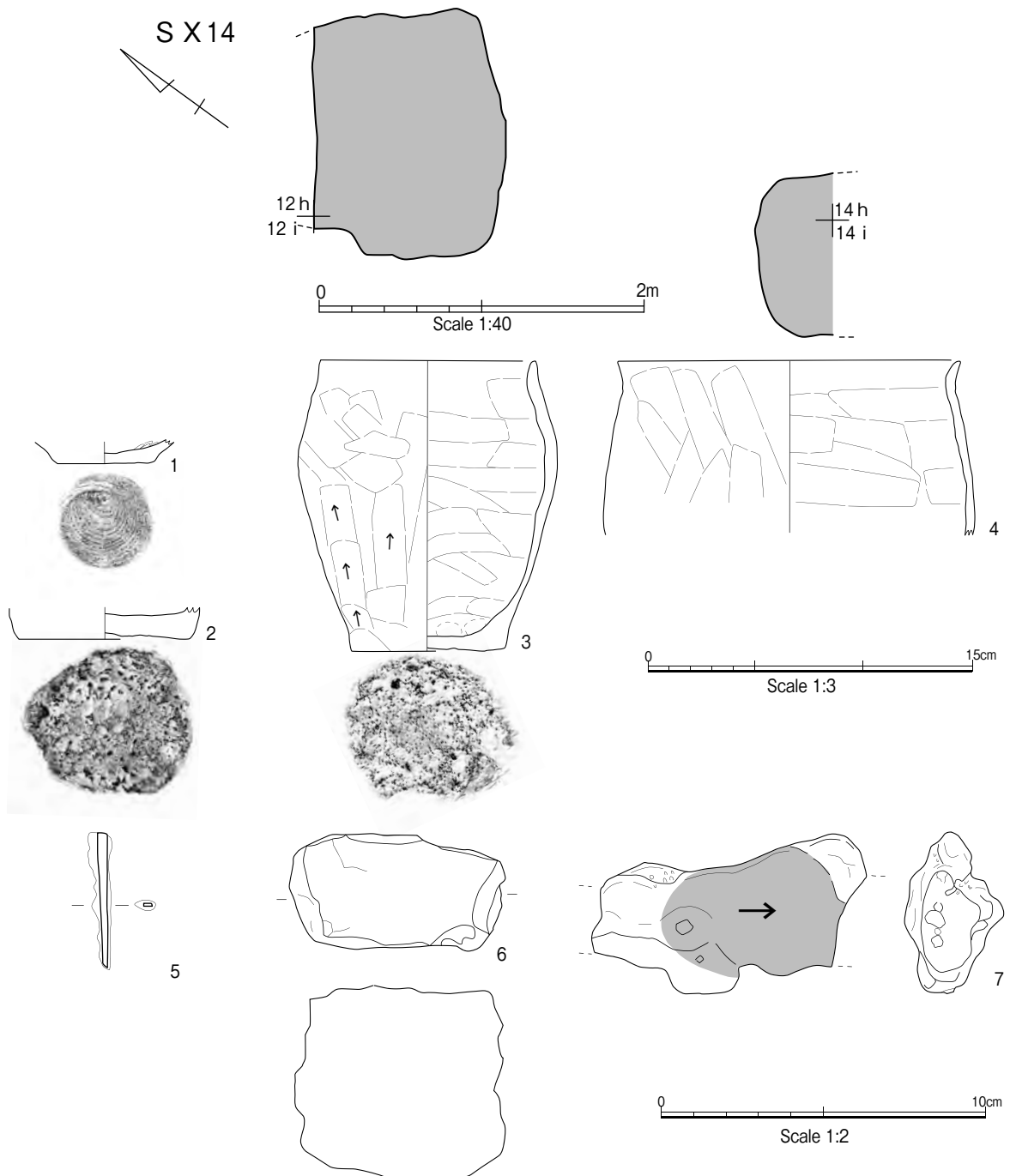
S X 14 (第114図)

位置 12-g区から14-i区に位置する。

遺構 記録がなく、詳細は不明である。遺構内から近代の硬貨が1枚出土しており、近代の所産かもしれない。

遺物 上述の硬貨のほか、土師器壺、甕、鉄製品及び鉄関連遺物が出土した(第114図)。

1は黒色土師器である。2～4は甕。2の底部は内面黒色処理される。3は小型の土師器甕である。平底であり、内面にはナデが施される。器表面は体部下半が縦位のヘラケズリ、体部上半はヘラナデである。胎土に小礫を多く含む。4は甕口縁部～体部で、3に胎土、色調が類似する。5は棒状の鉄製品。6は炉壁。7は流出溝滓である。



第115図 S X 14と出土遺物

SD8 (第8・10図)

位置 12-d区から29-e区にのびる南北溝で、平安時代の建物群(Ⅱ建物群)を切る。

遺構 幅約30cm、断面形は立ち上がりが垂直でない。遺物は出土しなかった。溝方位はN-30°-Wであり、SI17・SI22とほぼ一致する。

SD9・10 (第8・106図)

位置 14-e・f区から27-g区にある南北溝である。

遺構 幅10~60cm、Ⅱ区では長さ約55mで、深さ15~20cmである。方向はN-15°-Wである。埋積土は上下2層で、上層は暗褐色土、下層は黒褐色土である。SD9とSD10は並行しており、集落の中を区画する道跡と考えられる。

遺物 出土遺物は土師器片と鉄関連遺物をわずかに含む。第106図13は土師器甕底部。

時期等 時期は平安時代の中期、実年代で10世紀前半を中心とする時期と考えられる。

SD11 (第8図)

位置 23-g~j区に位置し、SB14の南に並行して存在する。

遺構 幅約30cmの浅い溝跡である。遺物は出土しなかった。

SD12 付SD17 (第8・9図)

位置 21-c区~24-m区に位置する溝跡である。

遺構 幅約12cm、長さ約47mである。東部では方向は方位と一致する。出土遺物は土師器片などがあるが、そう多くはない。建物群を区画する機能が想定される。西側の延長線上にあるSD17はこれと同一の溝跡の可能性もある。SB16はSD12より新しい。

SD14 (第8・106図)

位置 19-c~f区に位置する東西溝である。

遺構 幅40~70cmである。遺物は比較的少ないが、土師器片などが出土している。この溝跡は大規模ではないが、SB15・16などの建物と並行しており、建物群を区画する機能をもつものと想定される。調査区東端ではSD8に切られている。

遺物 第106図14・15は土師器の平底の甕である。胎土に1~4mm大の小礫を少量含む。

SD15 (第9図)

位置 21-p区から22-1区に位置する東西溝である。

遺構 幅約20cmである。出土遺物は土師器片がある。

SD16 (第9図)

位置 19-w~z区に位置し、SI46付近で途切れる溝跡である。

遺構 溝方位(N-50°-W)は、SI47と並行するが、両者は重複せず、新旧関係は不明である。両者が交わらないことからみて、併存した可能性も考えられる。遺物は出土しなかった。この溝跡は小規模ながら建物群を区画するものとして重要な機能があったと考えられる。

3) Ⅲ区

Ⅲ区は大館の遺跡の中ではもっとも東に位置し、東から南にかけては段丘崖によって区切られている。土層は昭和62年度の調査区域であるグリッドj列より東が畑地で耕作による影響のみであったのに対し、63年度分であるk～z列では旧校舎の掘削により、攪乱を受けていたため全くことなっていた状況であった。

昭和62年度分では、表土をのぞけば旧地表面から地山面まで2層に分けられる。表土は厚さ10～15cm前後の黒褐色土である。包含層は黒色土であり、厚さ30cmである(第116図)。

昭和63年度分では、削平がほとんどの部分で地山層に達し、ごく限られた部分に断片的に認められる黒色土の包含層をのぞけば、地表面から地山面まで1層であり、20～30cmの厚さがある(第116図)。

包含層中からは、弥生土器及び平安時代中頃の遺物が出土したが、両者が明瞭に別々の層を形成するものではない。包含層、漸移層下が地山面であり、標高は107m前後である。土質は黄褐色の粘質土である。

Ⅲ区で検出されたおもな遺構は竪穴建物跡13棟・掘立柱建物跡1棟・溝跡15条・土坑1基などである(第10・11図)。これらはいずれも平安時代中頃の遺構である。また、上述した遺構のほかにもいくつかのピット等が検出された。とくに建物跡(S I 61・S I 65)の周辺には、径30cm前後の柱穴と考えられるものが存在するが、建物として抽出することはできなかった。なお、遺構の大部分を占める平安時代中頃の遺跡の性格は、すべての建物・溝跡が近い方位をとって配置していることなどから、一般的な集落跡と考える。

S I 54 (第117図)

位置 28・29-c 9区、S I 29・30の南東側に接する竪穴住居跡。北西部の一部が確認調査の試掘坑により、切られている。

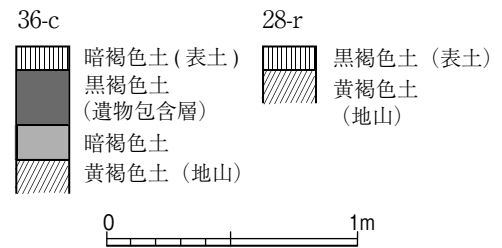
遺構 主軸はN-39°-Wで、カマドは北コーナーにあり、特異である。長さ約2.5mで、比較的明確な正方形を呈する。面積は5.5㎡である。深さは30cm前後である。周溝はない。竪穴内四隅にピットがあり、柱穴と考えられる。カマドは0.9×1.4mであるが、遺存状況はよくない。

遺物 第117図1は土師器無台碗。底部が水平で、焼成が硬質のものである。2は小型甕で、器壁が厚く、肩の張らない体部である。3は体部外面に指頭圧痕がみられる。4の甕はカマドから出土したものである。体部器表面はほとんどナデであるが、下半部に縦位のヘラケズリ調整があり、口縁部も短く、外方に屈折する形態である。器壁が厚いこと、胎土が比較的精良で、橙色を呈することもその特徴と見ることができる。

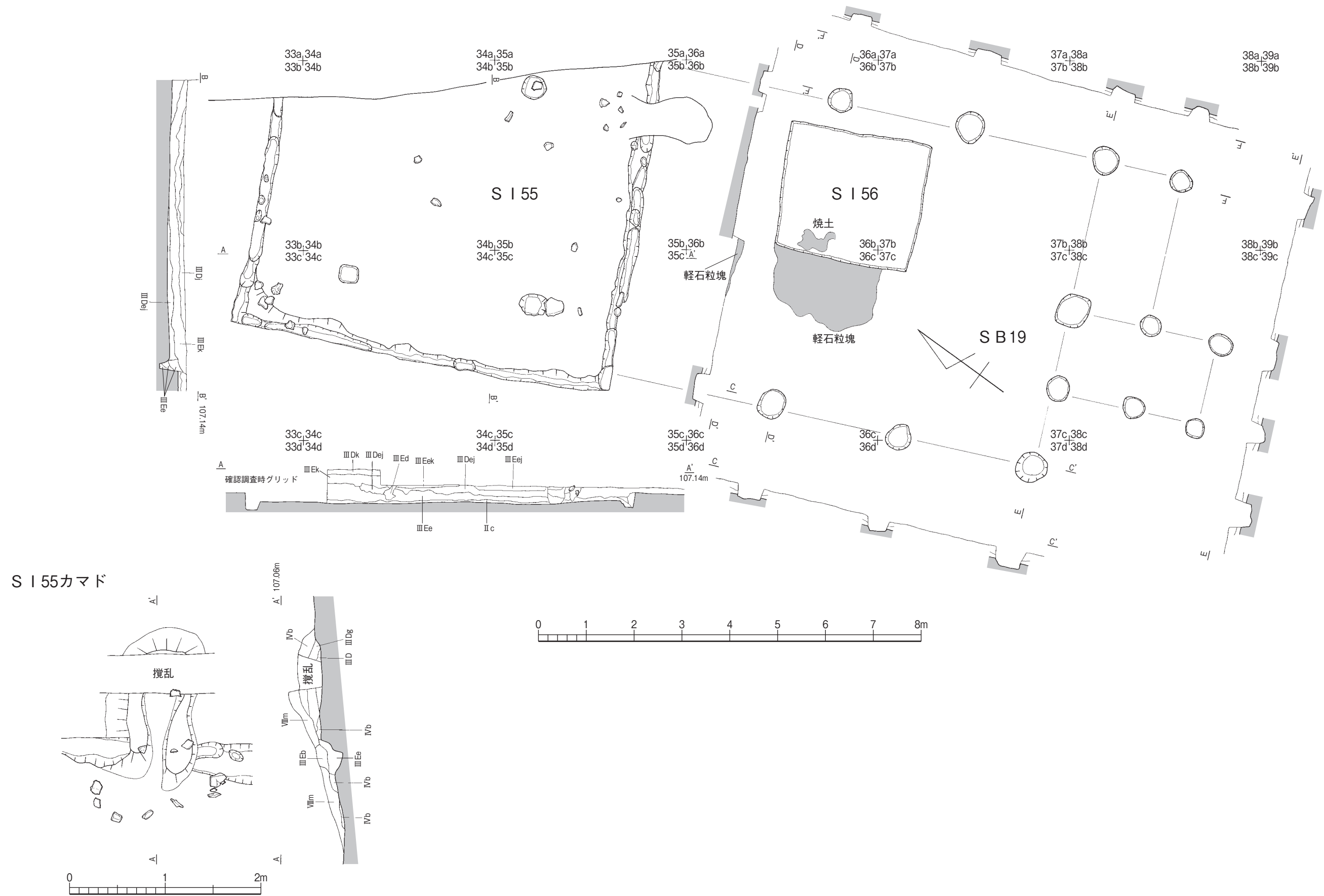
時期等 土器が少なく、時期はあまり明確ではないがI期の古い段階かと考えられる。

S I 55 付S I 56・S B 19 (第118・119図)

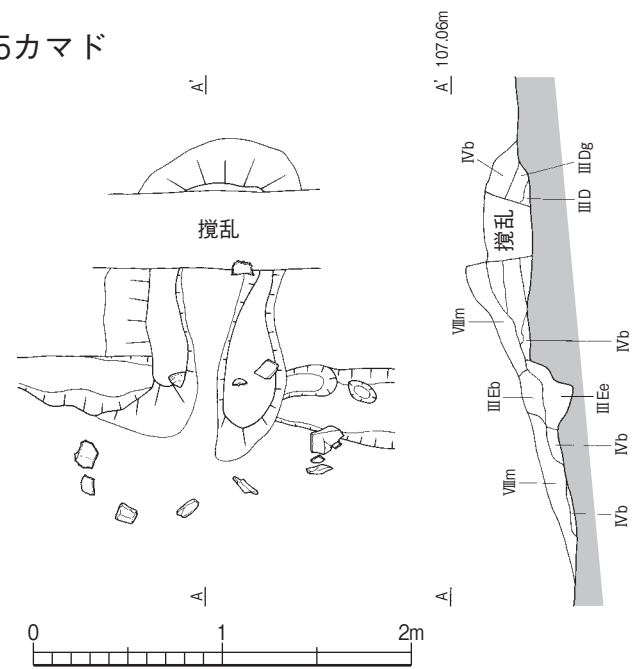
位置 33-a区から35-c区に位置する平安時代の竪穴住居跡。北東部の一部は調査区外に延び、全容は不明である。



第116図 Ⅲ区土層柱状図



S I 55カマド



第118図 S I 55・56・S B 19

遺構 主軸はN-26°-Wで、カマドは南コーナーにある。東辺は長さ8mで、正方形を呈するものと思われる。面積は46.4㎡とやや大型である。周溝は壁際を全周し、住居の柱穴と考えられる小ピットが3基ある。カマドは2×1m、高さは30cmである。埋積土は水平埋積の土層で、最下層は黒褐色土である。南側には本竪穴に付属すると考えられるSB19とSI56がある。SB19は4間(8.8m)×3間(6.4)の南北棟建物跡(N-26°-W)である。柱間は北側2列がほぼ等間で、南側2間の2列の柱穴列は柱掘り方がほかのものより小さく、廂かそれに類するものと推定される。したがって身舎は2間となる。柱掘り方は径25~30cmの円形で、深さは12~30cmである。SI56はSB19内に位置する平安時代の竪穴で、カマドは検出されていない。南北が長く約3m、東西が約2.5mで、深さ約8cmである。周溝・柱穴はない。

遺物 出土土器は全体でも10個体未満で少ない。土師器には甕・小型甕がある。

第119図1は小型甕で、口縁部が緩く外反し、端部は丸味をおびる。つくりは全体的にシャープさに欠ける。内面は横位のナデ、器表面は縦位のナデである。胎土はSI52の4と同じである。2は小型甕の底部。3もつくりがシャープさに欠け、口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさまる。4は口縁部が緩く外反し、端部が丸くおさまる。胎土が粗く、小礫を多く含む。5は口縁部が短く開き、端部は尖る。胎土は比較的精良である。6a・bは同一個体の甕で、胎土に2~4mm大の小礫が含まれるほかは精良で橙色を呈する。6bは底部で、内外面にヘラナデが施され、底外面は砂底である。

7~9はSI56出土の土師器甕。7は甕の口縁部。8・9は底部で、8は厚い器壁である。いずれも底部外面は砂底で(図版90)、器表面は、8がヘラケズリ、9がヘラナデである。

時期等 土器が少なく、時期は明確でないがⅡ期に比定されよう。

SI57 付SB20 (第120・121図)

位置 35-d区から37-f区に位置する平安時代の竪穴住居跡。

遺構 主軸はN-32°-Wで、南東辺にカマドがある。一辺約7.5mのほぼ正方形を呈する。面積は49.7㎡でやや大きい。深さは45~80cmと深い。これは調査区南東部に位置したため、上面が削平をまぬがれたことによる。竪穴内の南側に比較的大きな掘り込みがある。カマドの付近は床面よりやや低くなる。周溝は壁際に全周し、柱穴は四隅コーナー近くにある。カマドは1.2×2.4m、高さ30cmである。本竪穴を取り囲むようにSB20が付属する。6間(16m)×2間(8m)の南北棟建物(N-32°-W)である。SB2と同様に溝を有するもので、この溝は39-d区で北東側へ90°折れ曲がる。柱間は不揃いである。柱掘り方は一辺40~70cmの方形で、深さは40~50cmである。

遺物 出土土器は少ない。羽口片や椀形鍛冶滓が若干出土している。

第121図1~4は内面黒色処理した埴である。1は、体部の立ち上がりが曲線的である。内面黒色の埴である1は新しい器形として注目される。5は棒状の鉄製品。

時期等 土器が少なく、時期ははっきりしない面があるが、Ⅱ期頃に比定されよう。

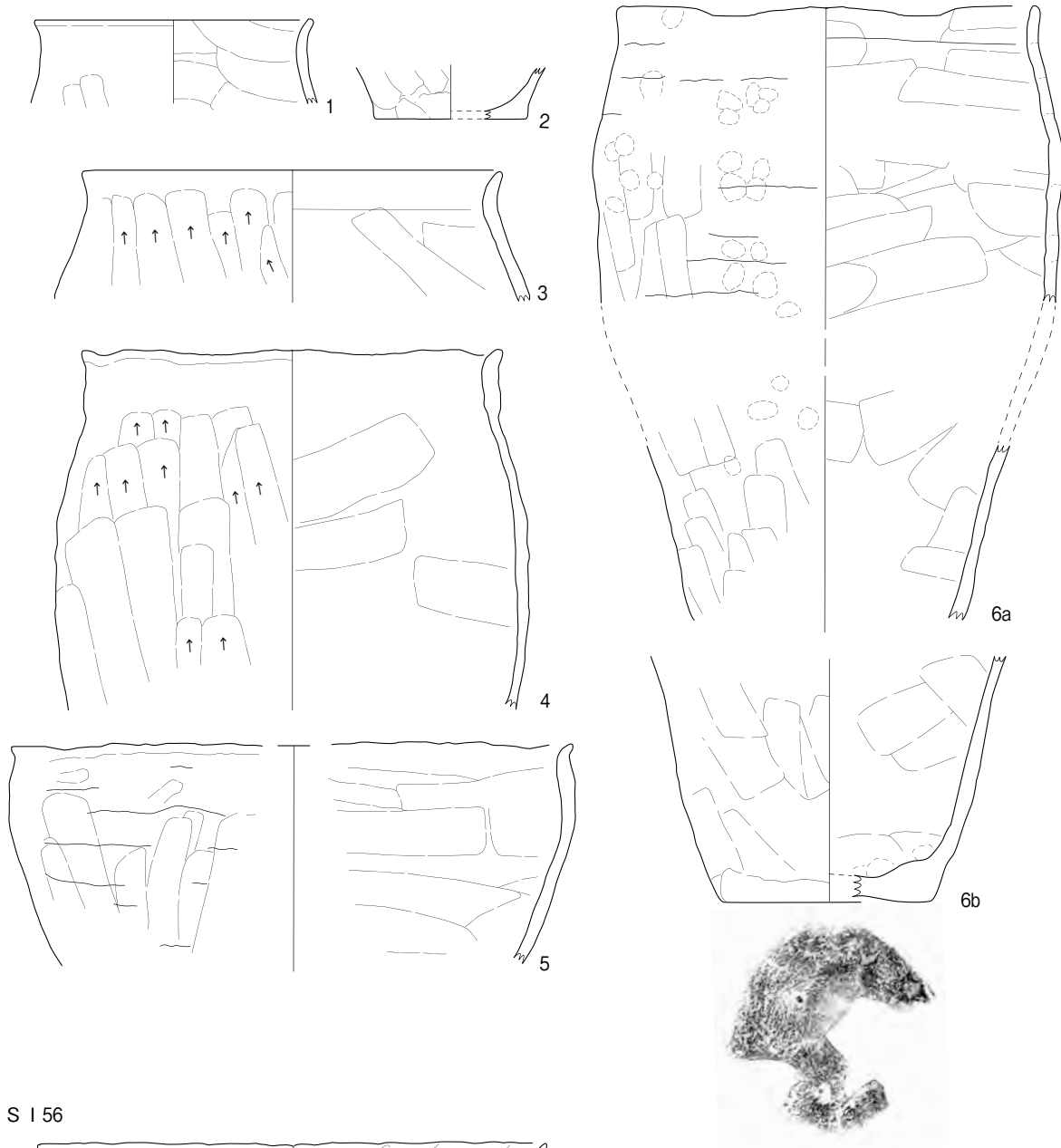
SI59 (第122図)

位置 37・38-f・g区に位置する平安時代の竪穴。

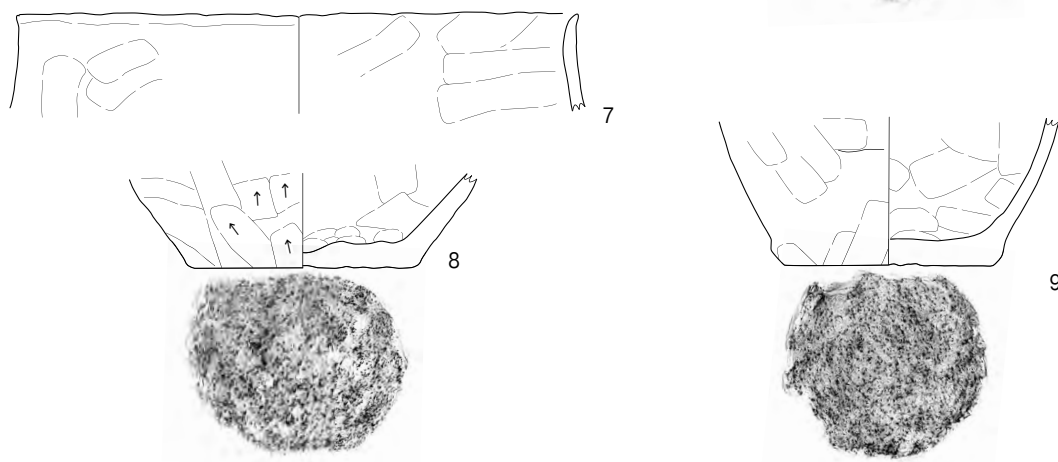
遺構 主軸はN-21°-Wで、カマドはない。一辺3.1~3.2mで、面積は7.5㎡である。南東部に位置するため、深さは40cmと深い。各コーナーにピットがあり柱穴と考えられる。埋積土は上層が暗褐色土で下層が黒褐色土ないしは黄褐色土である。

IV 調査の記録

S I 55

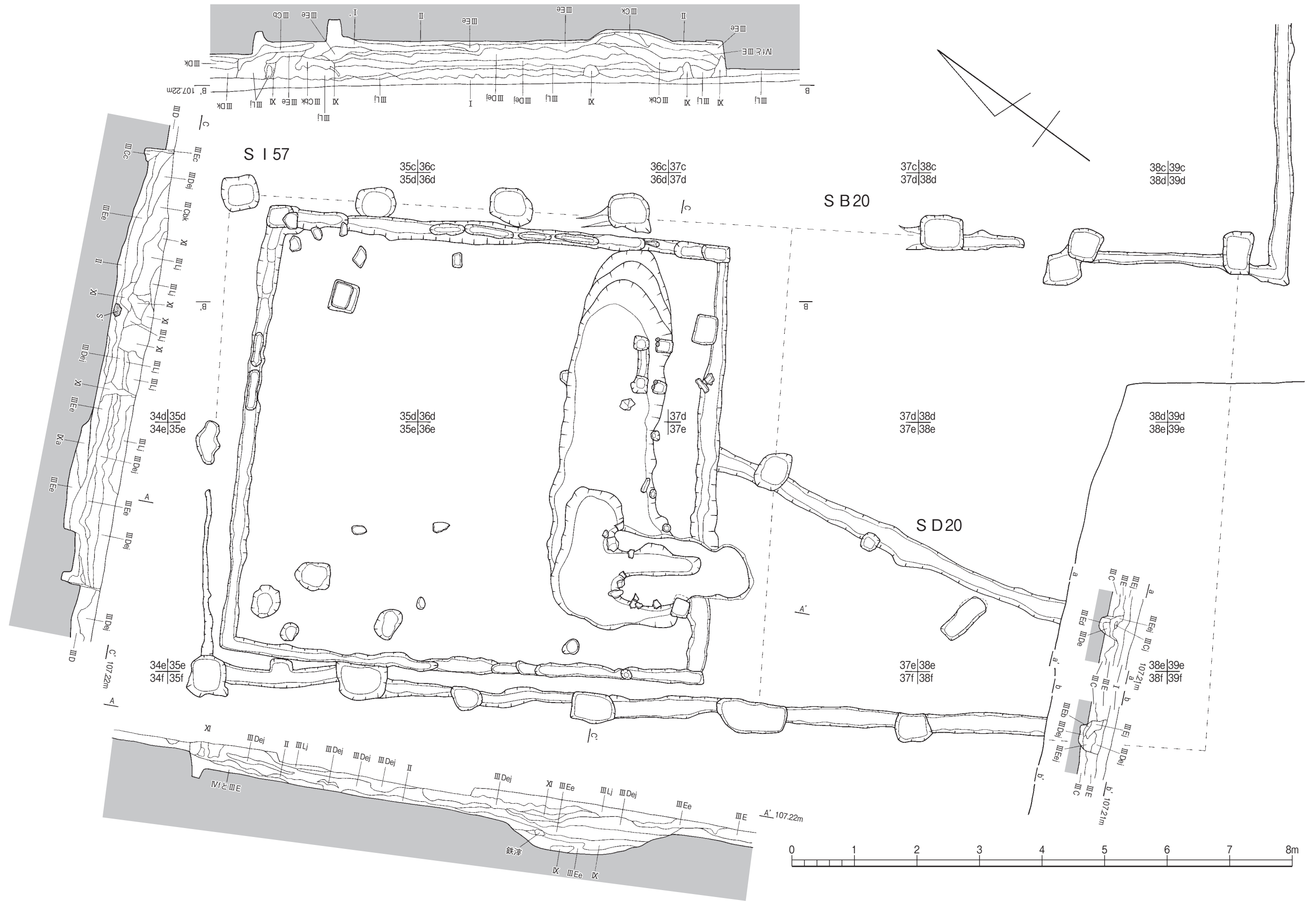


S I 56



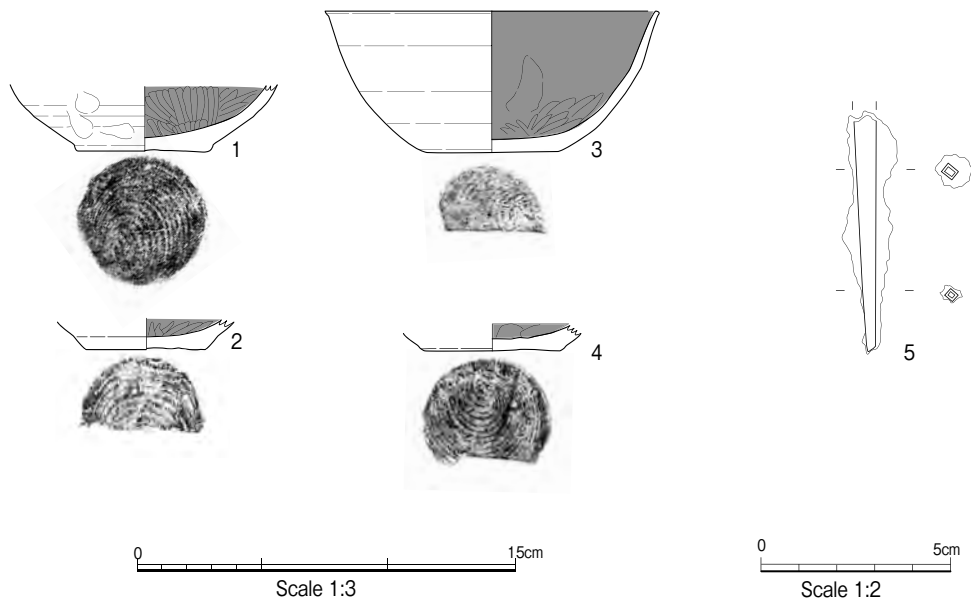
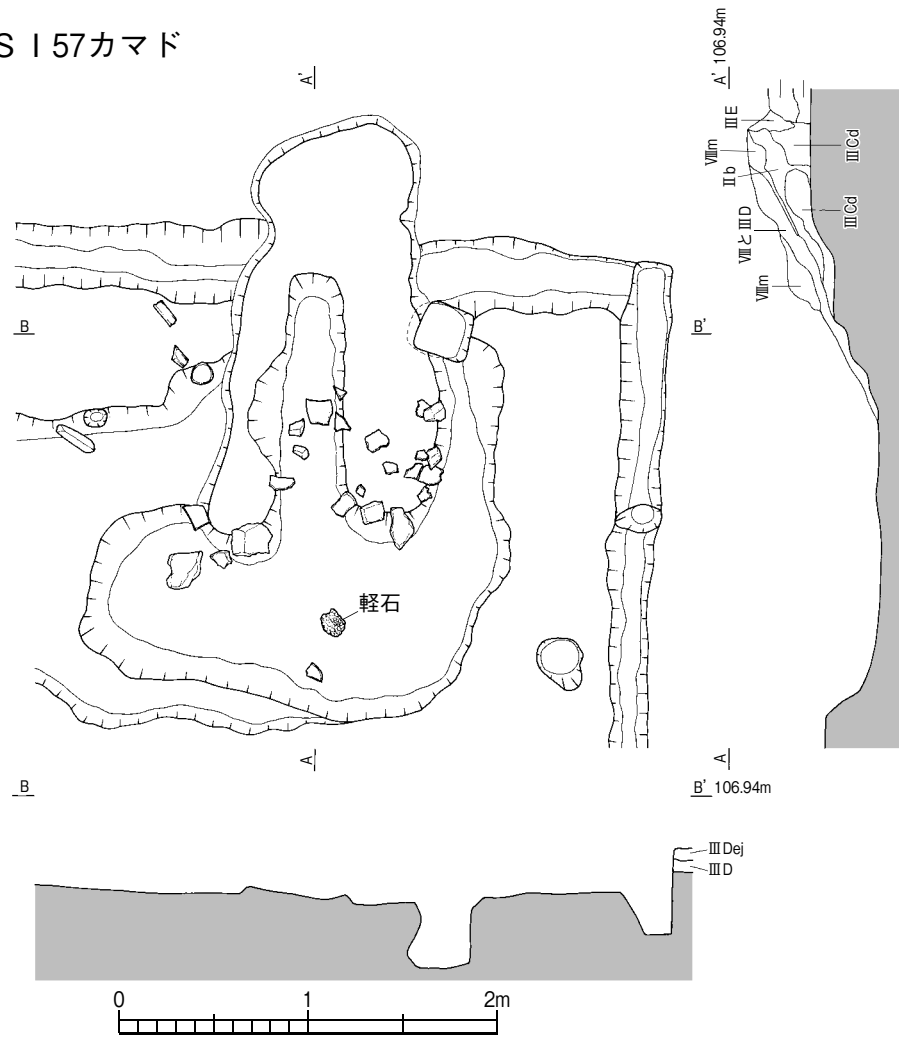
0 15cm
Scale 1:3

第119図 S I 55・56出土土器

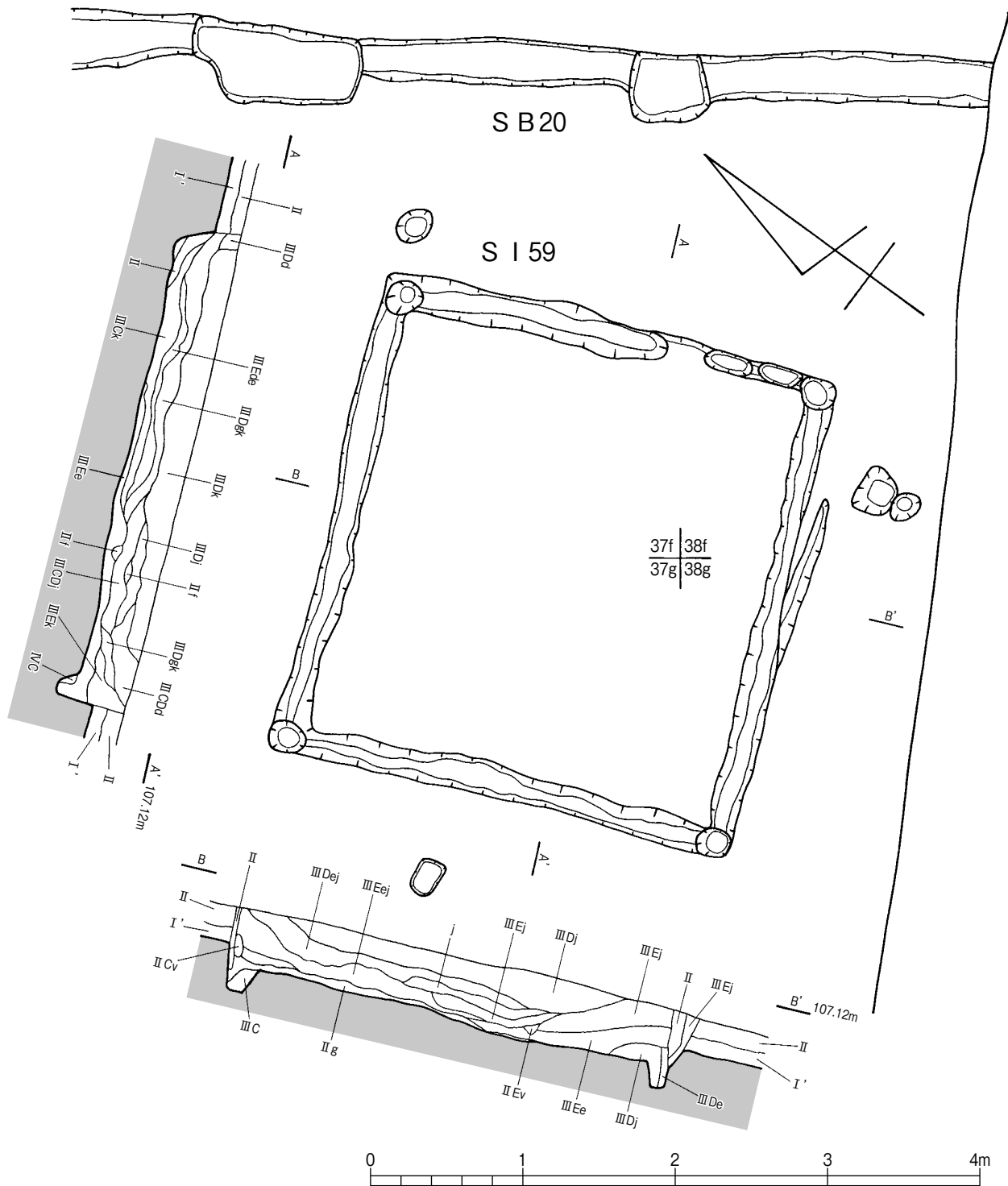


第120図 S I 57・S B 20・S D 20

S I 57カマド



第121図 S I 57カマドとS I 57出土遺物



第122図 S I 59

遺物 出土土器は少なく、個体数は10個体未満である。

第123図1は土師器小型甕底部で、底部器表面までヘラナデされるもので、胎土が赤っぽい。2は棒状の鉄製品。

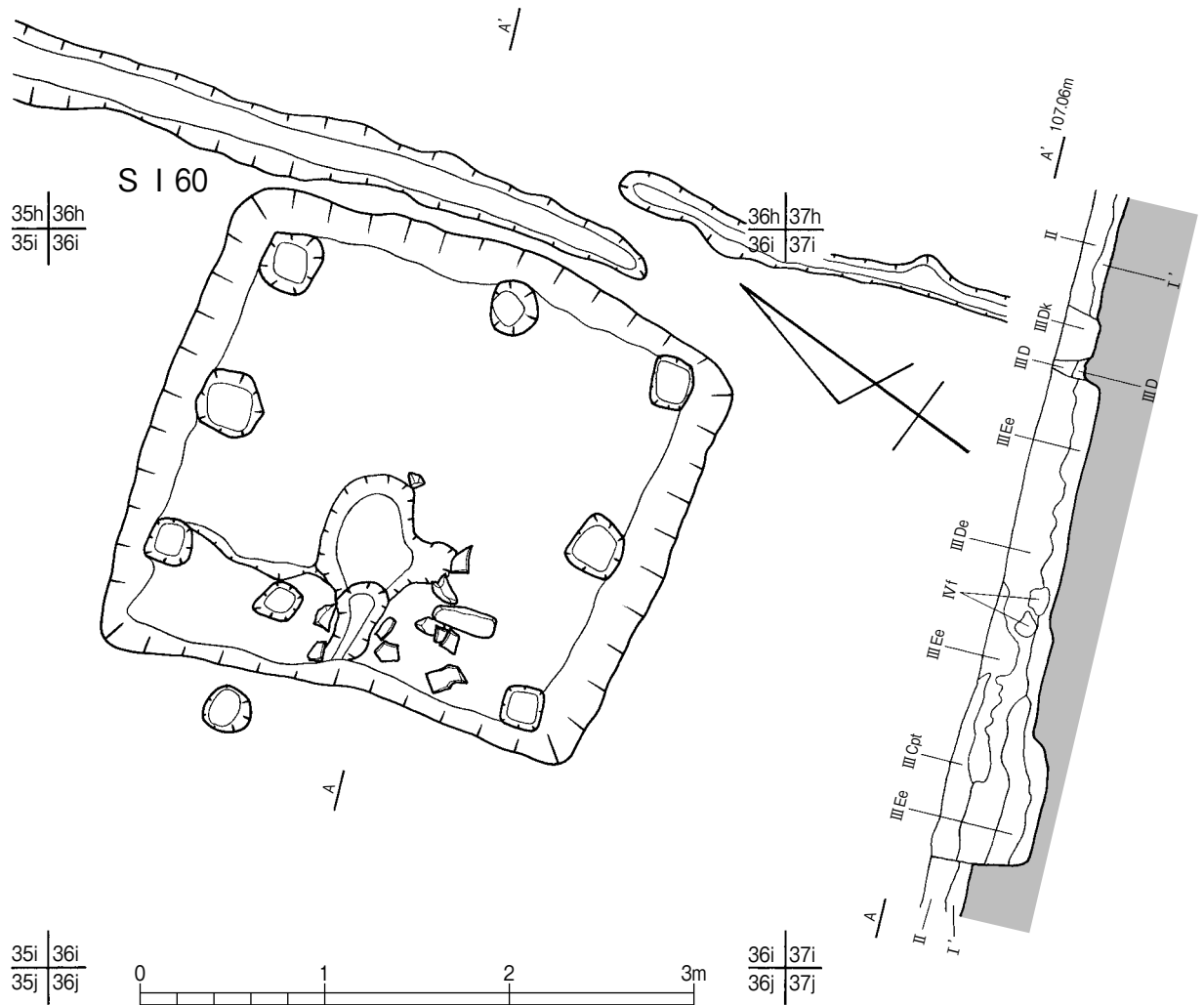
時期等 土器が少なく、時期ははっきりとしない。

S I 60 (第123図)

位置 36-h・i区に位置する平安時代の堅穴。

遺構 主軸はN-13°-Wである。南北にやや長いが、ほぼ正方形を呈する。カマドは存在しない。南北約2.9m、東西約2.5mで、深さは30~50cmである。埋積土は、上層は黄褐色系、下層は黒褐色土である。土師器片が少量出土した。

時期等 土器が少なく、時期ははっきりしない。



第123図 S I 60

S I 61 (第124・125図)

位置 34～36-k・1区に位置する平安時代の竪穴住居跡。大型で西半部は調査区外に延びる。

遺構 主軸はN-64°-Eで、カマドは北東辺にある。東辺は長さ6.1m、面積は34.4㎡で、やや大きい。深さは15cmと浅い。これはこの竪穴住居跡が学校校舎付近の位置にあり、かなり削平されていることによると考えられる。

北西辺の一部には周溝がある。壁際には径20～25cmのピットがあり、柱穴と考えられる。規模の大きい主柱穴をもたない住居の構造と考えられる。なお、周溝などに沿ってある柱穴は溝の埋積土を切っている。

カマドは北東部が溝に切られており、1.1×1.1mで、上部は削平されている。住居跡の埋積土は上層が黒褐色土層で、その下は黒褐色の土層である。

遺物 上部全体が削平を受けていることもあって、土器の出土量は10数個体と、比較的少ない。甕・小型甕がある(第125図)。

口縁部～体部上半部の3は口縁部が若干外反し、端部は丸い。体部内面に横位のナデがあり、横ナデは強い。4はややシャープなつくりであるが、そのほかはシャープさに欠ける。4はとくに器壁が薄く、体部がやや張る。5のように短胴甕にちかい器形の可能性もある。小型甕の6はもっとも小さいタイプで、S I 38(第80図2)と同じ形態である。小型甕(7・8)は6と同様、ともに内湾し、端部は尖る。5は全体の器形を知りうる。平底で体部中位にややふくらみをもち、口縁部は「く」の字状に外反する。端部は丸くおさまる。体部上半部は内外面ともナデで、下半部器表面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。底部内面のまわりが輪状にくぼむ。これは成形した際の名残りと考えられる。胎土に2～4mm大の長石粒を含み、全体的に粗く、相対的に精良な9とは明確にことなる。9は口縁部が若干内湾し、端部は尖り気味である。体部は内外面ともナデであるが、全面に及び、5と比し、その範囲は広い。10・11は器表面全面にヘラナデする。10は4と同一個体の可能性がなくはないが、内面の色調はかなりことなる。底部外面はいずれも砂底である(5・10・11)。

時期等 時期はⅡ期頃に比定されよう。

S I 62 (第126図)

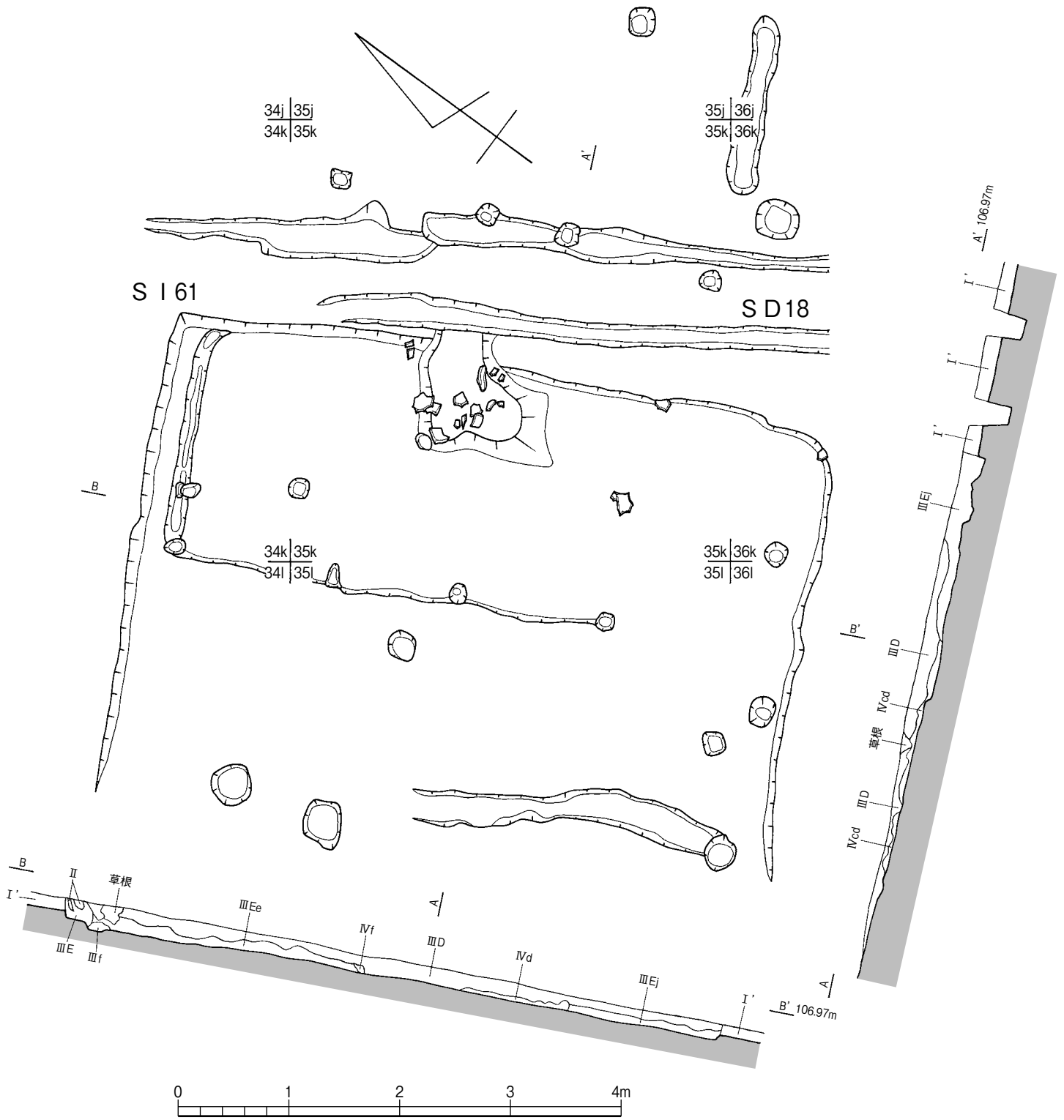
位置 31-i・k区に位置する平安時代の竪穴。調査区の関係から、中心部を発掘することができなかった。

遺構 主軸はN-28°-Wで、南辺のコーナー寄りの部分にカマドがある。全体の規模は明確ではないが、一辺約4.9mのほぼ正方形で、面積は約19.8㎡である。検出した範囲では、壁際に沿って整った形状の周溝が廻る。各コーナーのピットは柱穴と考えられる。カマドは袖の一部を1.5×0.5mの範囲で検出した。遺物は出土しなかった。

S I 63 (第127図)

位置 28-n区から30-q区のS I 64に隣接する平安時代の竪穴住居跡。南東側にはS E 2があり、新旧関係は本遺構の方が古い。

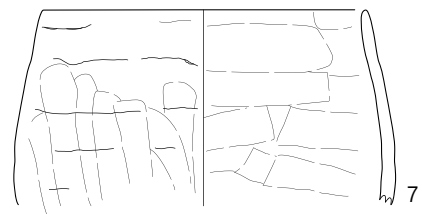
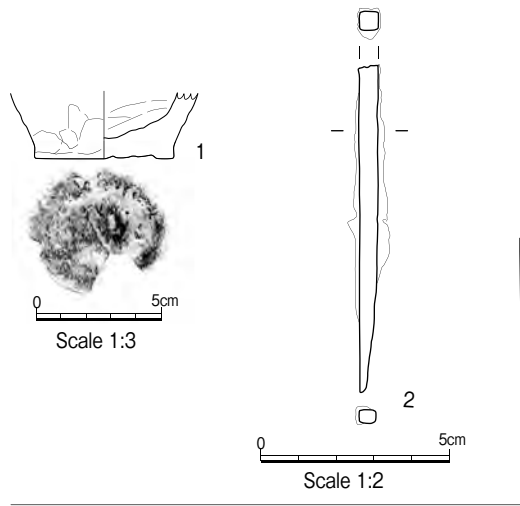
遺構 主軸はN-32°-Wで、南側コーナーにカマドがある。上部全体が広く攪乱を受ける。主軸方向がやや短くて、約10.2m、ほかは約10.6m、面積は約108.1㎡で、検出された平安時代の竪穴住居中最大規模である。深さは15cmである。床面にあるピットは深さ15～55cmで、柱穴と考えられる。配置は規則的である。南東辺沿いには周溝状の浅い(深さ約10cm)窪みがあるが、全体に廻るものではない。



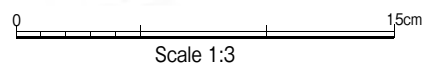
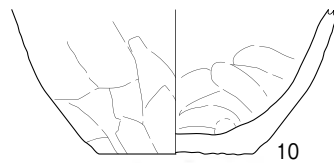
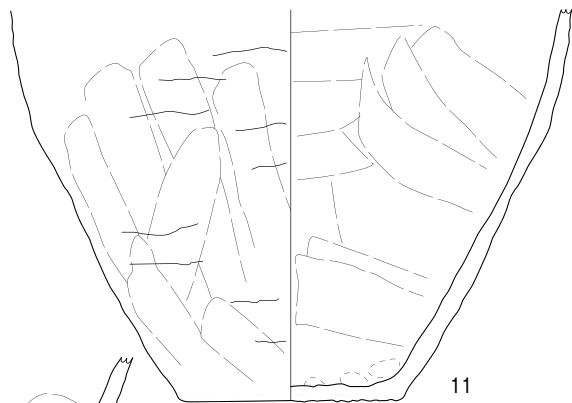
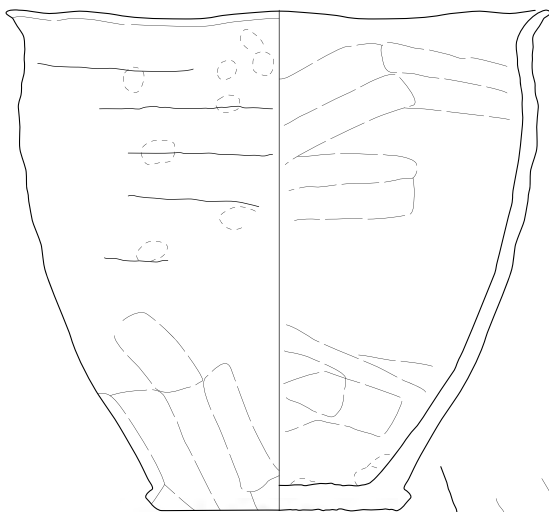
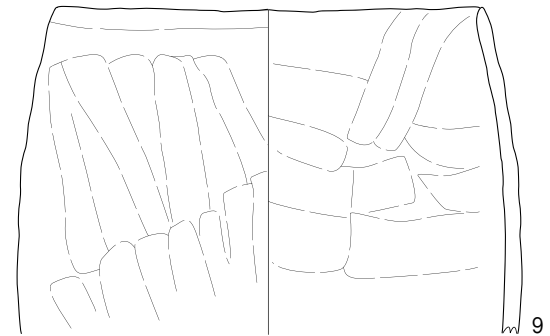
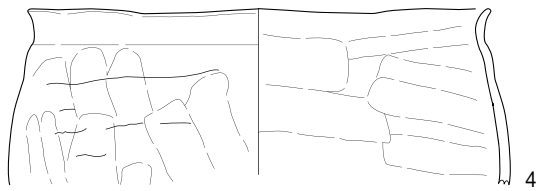
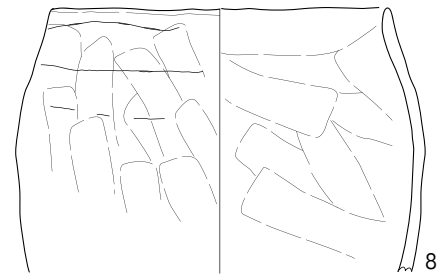
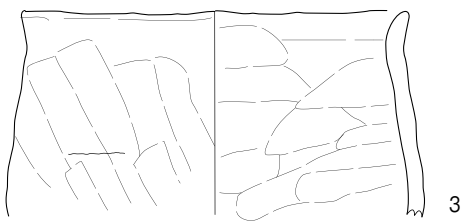
第124図 S I 61

IV 調査の記録

S I 59



S I 61



第125図 S I 59・61出土遺物

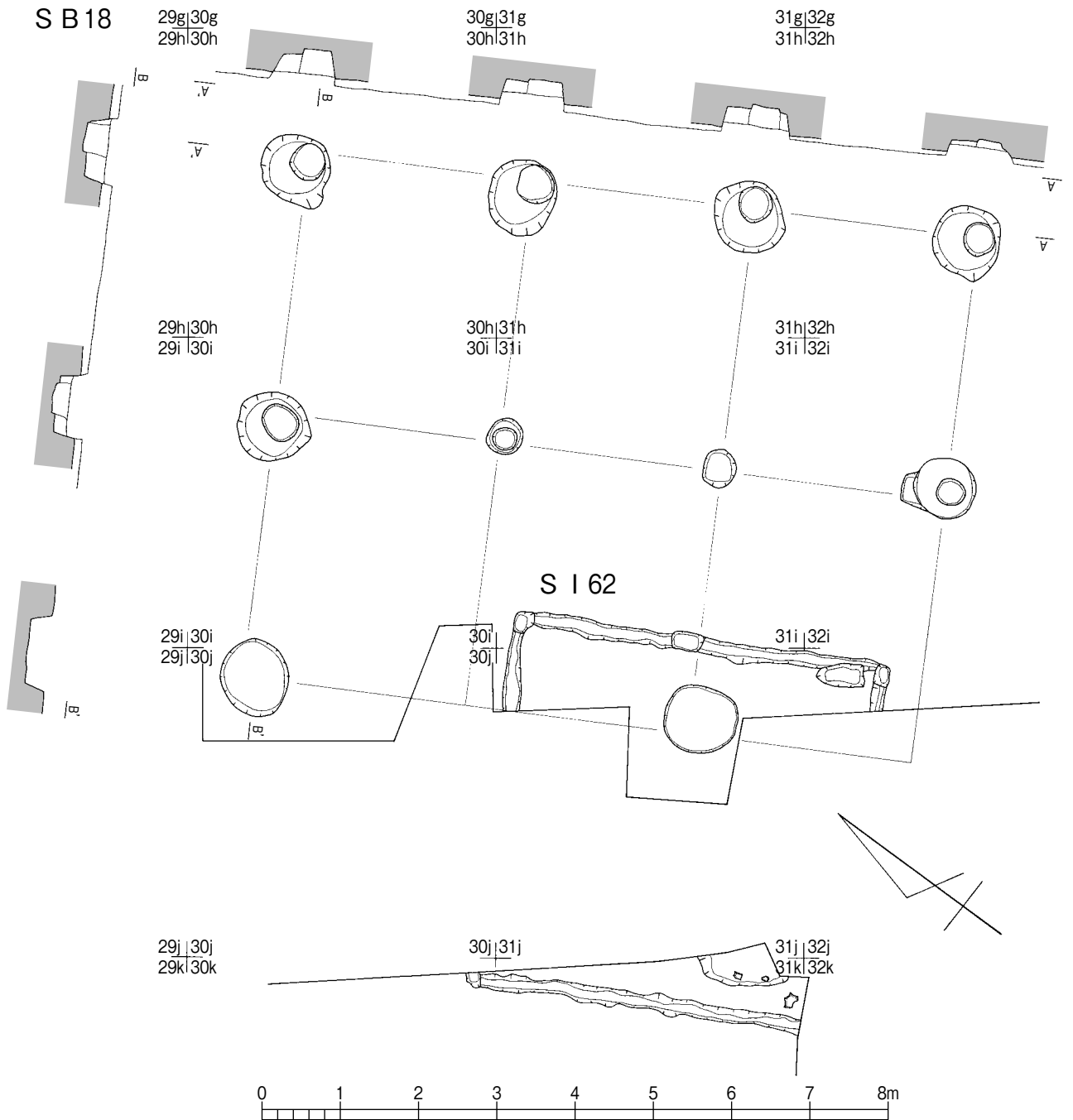
カマドは0.8×1.2mである。埋積土は単層である。南西部に作業場がある。

遺物 出土土器は比較的多く、須恵器片も出土した。

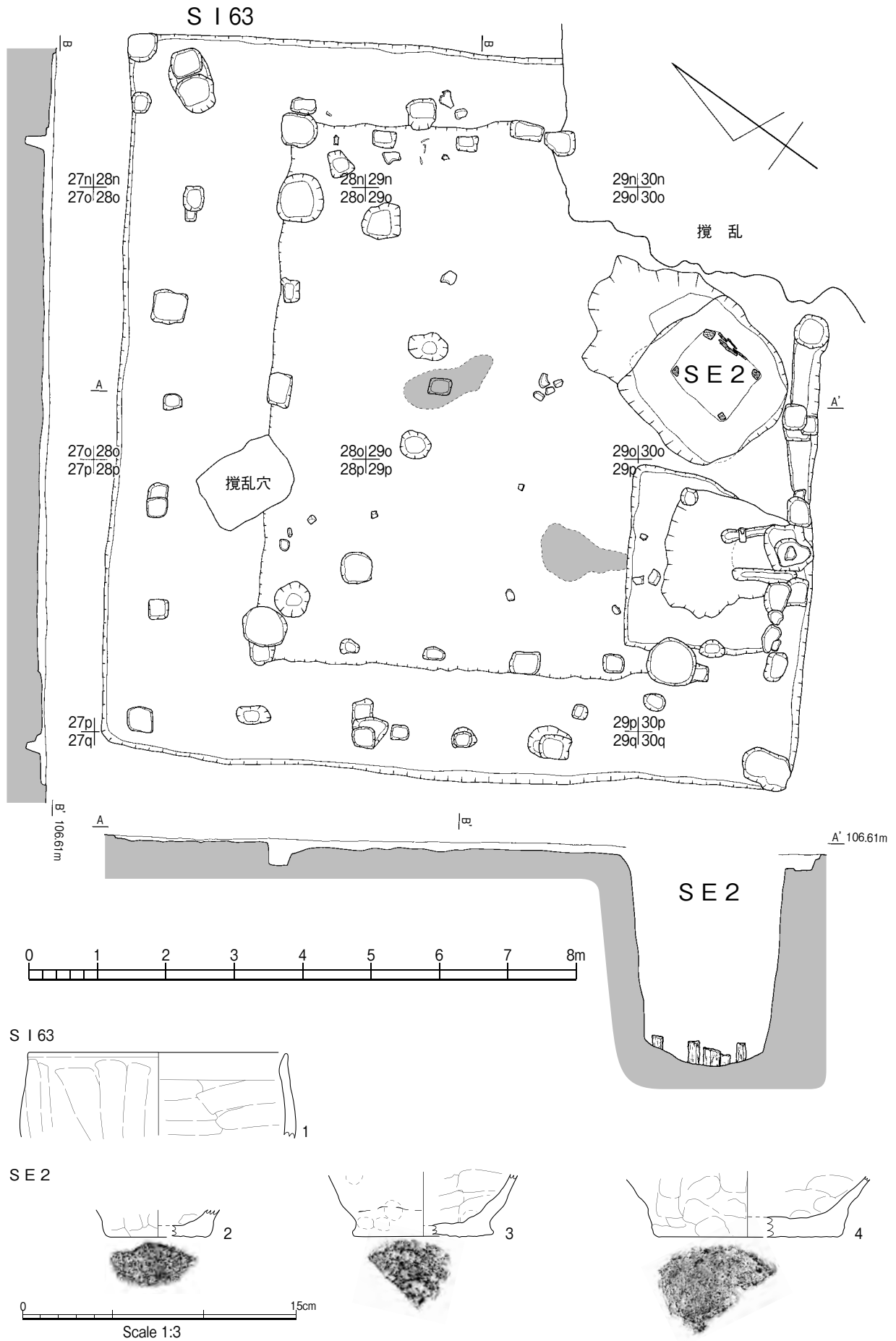
第127図1は小型甕で、復原口径約14cmである。器壁が厚く、緩く内湾し、端部は尖り気味である。

時期等 竪穴の南西部に作業場があり、椀形鍛冶滓が出土していることから鍛冶工房の可能性はある。

時期はI期頃と考えられる。



第126図 S I 62・S B 18



第127図 S I 63・SE 2と出土土器

S I 64 (第128・129図)

位置 28・29-q・r区に位置する平安時代の竪穴住居跡。東側にS I 63が近接する。

遺構 主軸はN-34°-Wで、南西辺にカマドがある。平面形は正方形で、5.5×5.5m、面積は30.4㎡である。比較的大きい。深さは12~24cmで、上部は削平を受けている。南東辺に比較的小さなピットがあるが、住居に伴うものであろう。このほかの小さなピットは住居の柱穴と考えられる。これらは各コーナーの壁際にあり、床面からの深さは約25~30cmである。主柱穴をもたないものである。周溝は壁際に全周する。カマドとその周辺の粘質土の分布は1.6×1.2mの範囲に広がる。カマドの構築土と考えられる。褐色粘質土はそのまま、住居中央付近まで延びる。カマド中より珠洲系陶器が出土したが、後世の混入の可能性が高いと考えられる。埋積土は最上層が黒っぽい土層である。土器の出土量は10個体未満で少なく、鉄製品が1点出土しているが、鍛冶作業をしていたかどうかは不明である。

遺物 第129図1は土師器甕で、体部内外面ナデである。器表面は粘土紐の巻き上げ痕が目立ち、ケズリ調整はなされていないと考えられる。口縁部は緩く外反し、端部は丸い。2はデイサイトの置き砥石・台石で作業面は正面のみである。3は静止糸切りで、中世陶器とみられる。内面に花卉状の刻印がある。カマド出土であるが、後世の混入であろう。

時期等 時期はⅡ~Ⅲ期に比定される。

S I 65 (第130図)

位置 30-s・t区に位置する平安時代の竪穴住居跡。

遺構 主軸はN-57°-Eで、かなり東偏するグループに属する。東辺にカマドと考えられる粘質土がある。平面形はほぼ正方形で、一辺2.8×3.2m、面積約8㎡である。比較的規模が小さい。上部は削平を受けている。柱穴は北をのぞく各コーナーにあり、床面からの深さは約10~35cmである。周溝は壁際を全周する。

遺物 土師器甕底部(第130図1)が出土したが、その他土師器は少ない。炉内滓もある。1は器表面にヘラケズリされるもので、胎土が黒っぽい。

時期等 時期はⅠ期頃に比定されよう。

S I 66 (第131図)

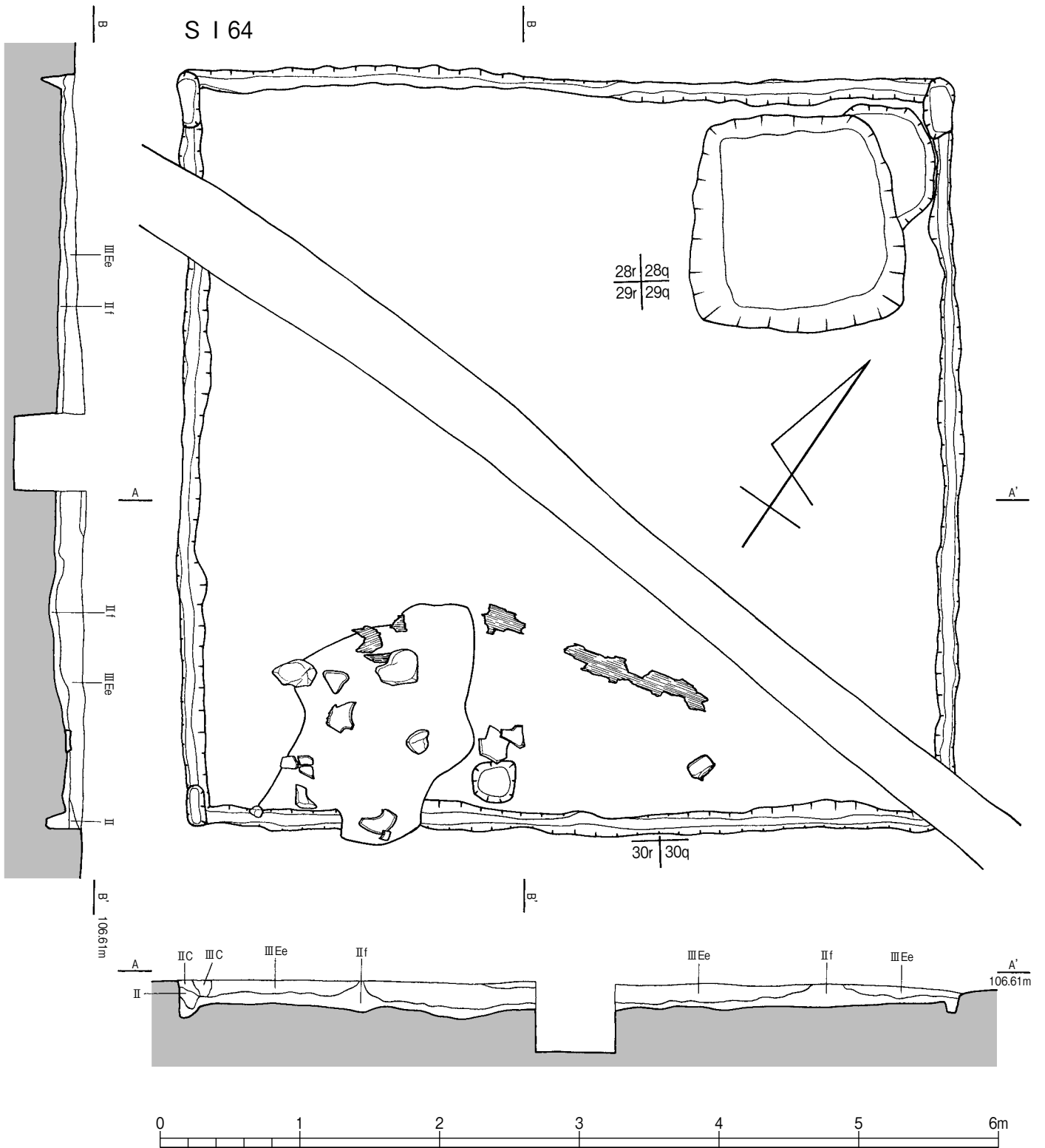
位置 33-k・l区に位置する平安時代の竪穴住居跡。

遺構 主軸はN-57°-Eで、カマドは南辺の東寄りにある。平面形はほぼ正方形で、一辺2.4mである。面積は約5㎡で、小型である。北西側は学校校舎基礎で攪乱を受けている。各コーナーに浅い窪みがあるが、柱穴と考えられる。周溝は北辺と西辺、南辺の一部にみられる。カマドは0.8×1mである。カマド前方部から土師器甕が一括出土した。

遺物 全体の出土土器量は約10個体である。小型甕・甕と鍋がある(第131図)。

1は小型甕で、口縁部は内湾し、端部は尖り気味である。体部のヘラナデは丁寧である。2の甕は器壁が相対的に厚く、体部内外面にナデがある。胎土は丸味をもつ礫を含む。3~6は底部。底部外面は4がヘラケズリであるほかは、砂底である。7は鍋で、直線的に外反する。

時期等 時期はⅠ期~Ⅱ期に比定されよう。



第128図 S 164



第129図 S I 64出土遺物

S B 18 (第126図)

位置 調査区の中央やや北寄り、30～32-h～j区に位置する。西側は調査区外へ広がる。

遺構 東西2間(7.8m)×南北3間(8.7m)の南北棟建物(N-29°-W)で、柱筋にすべて柱穴のある総柱建物である。桁行の柱間寸法は2.9m等間である。梁間の柱間寸法はやや長く、3.3m等間である。柱の掘り方は、柱列の中央柱穴が径40cmの円形であるほかは、すべて径40～45cmの円形で、深さ25～40cmで大きさは比較的よく揃っている。検出された柱穴の2/3に柱痕跡が認められ、その径は25～40cmほどで比較的よく揃っている。

なお、この建物の棟通りと南東10mにあるS D 18・19とは方向が一致している。本遺構から遺物は出土しなかった。

S K 10 (第132図)

位置 35-h区、S I 60の北側から3m隔たった位置にある土坑である。

遺構 東西1.1m×南北1.1mのほぼ円形で、深さ38cmである。埋積土は、地山ブロックを少量含む黒褐色土が一様に入っている。遺物は出土しなかった。

S X 15 (第132図)

位置 37・38-c・d区、S B 19付近に位置する。

遺構 図面等の記録がないため、詳細は不明である。

遺物 羽口や砥石など、鍛冶関連の遺物が出土している。

第132図1は・2は鍛冶の羽口とみられる。3は砥石で、スクリーントーンの部分に磨痕が認められる。石質は頁岩。

S D 18 (第10図)

位置 34～37-k区に位置する南北溝(N-35°-W)で、Ⅲ区建物群を画するものと考えられる。S I 61と重複し、S I 61を切っている。

遺構 幅20～30cmである。遺物は出土しなかった。

S D 19 (第10図)

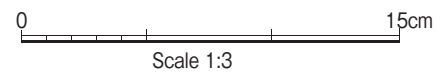
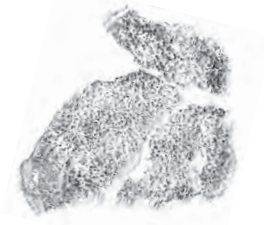
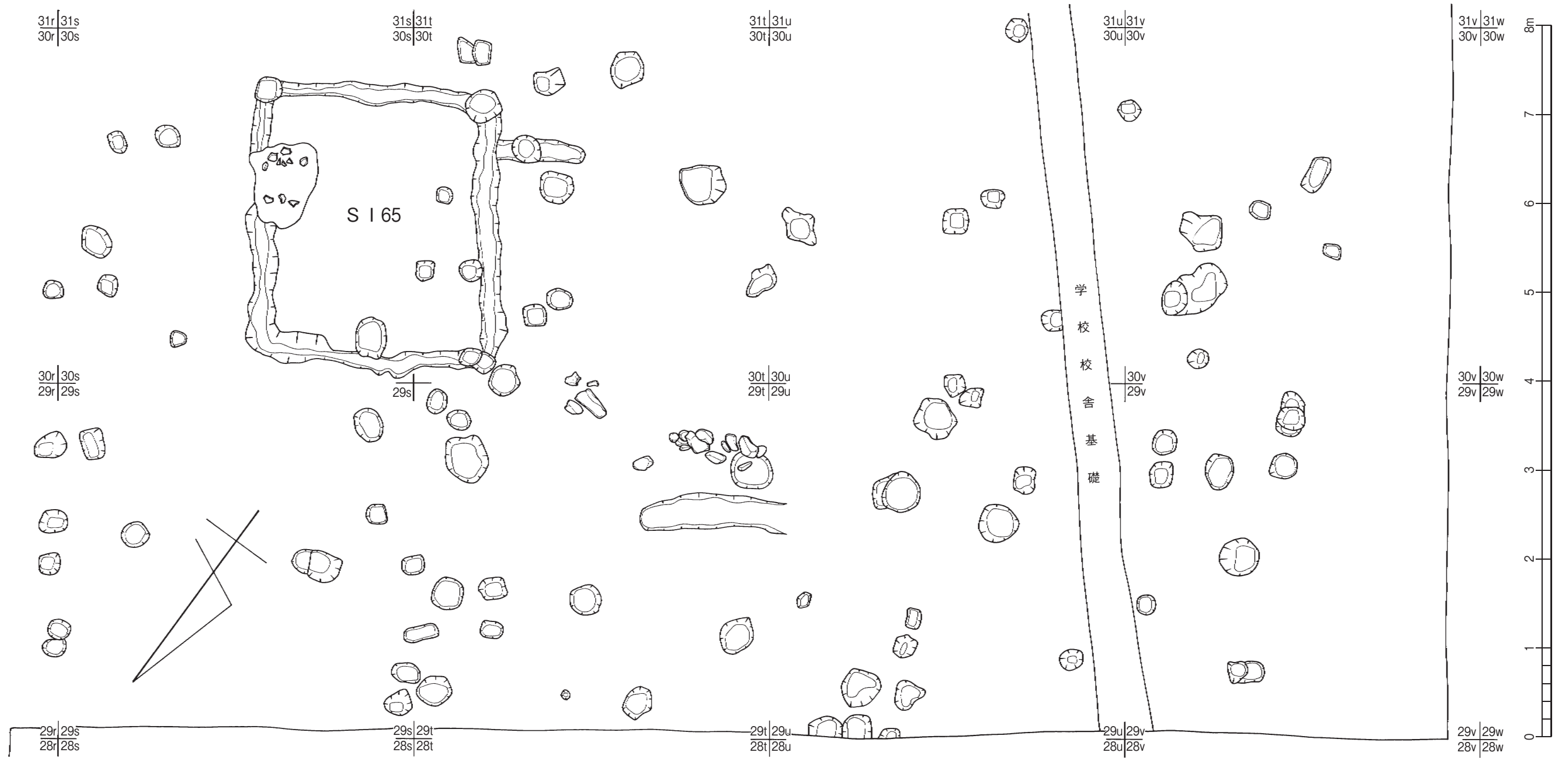
位置 34～38-i・j区に位置する南北溝で、調査区外へさらに延びる。

遺構 幅約30cmである。遺物は出土しなかった。

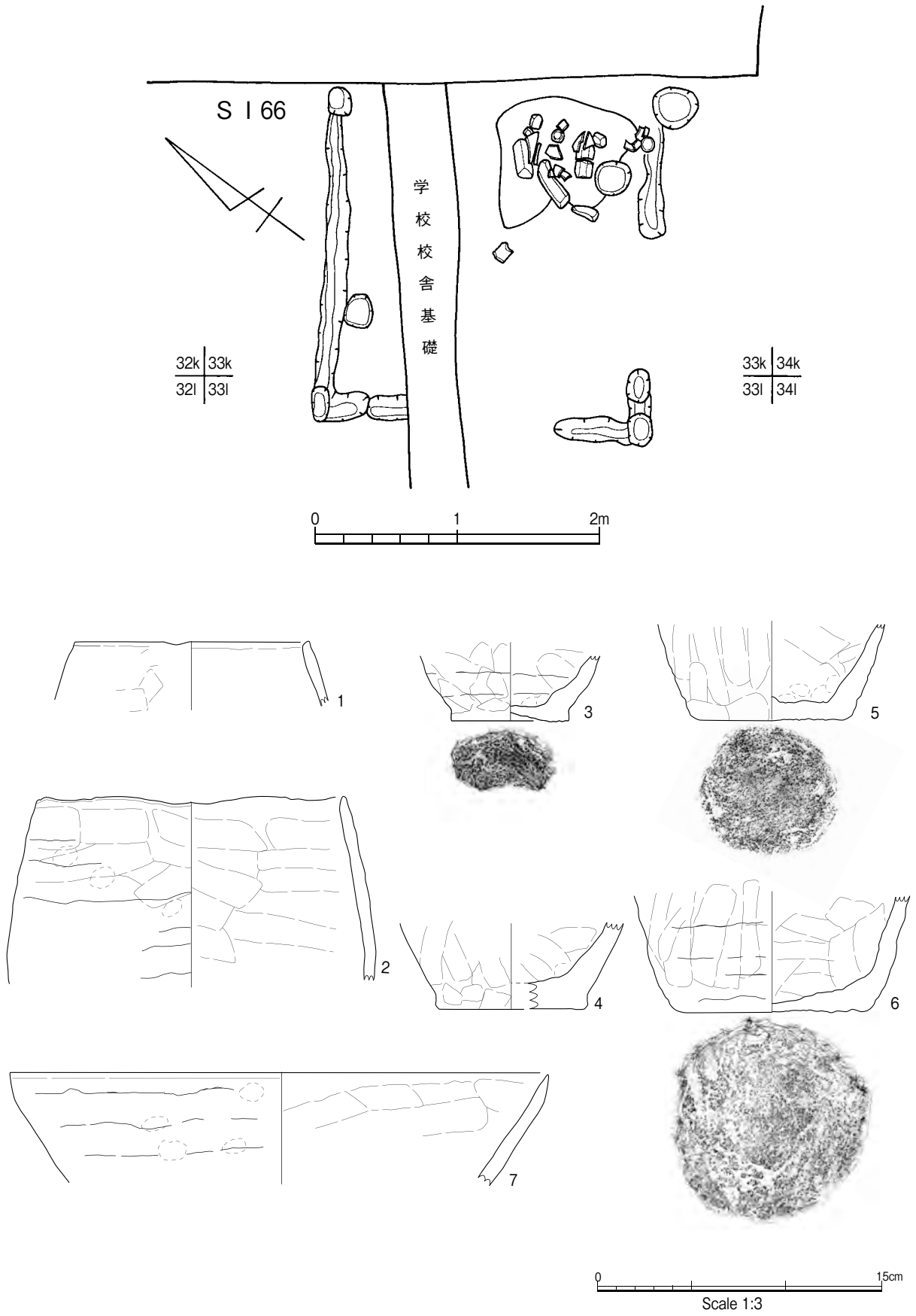
S D 20 (第10図)

位置 33-b区～37-e区に位置する南北方向の溝跡であり、S I 55・57と重複し、いずれも本溝跡の方が新しい。

遺構 S I 57の北端で曲がる溝跡である。北部はほぼ南北方向、南部は(N-14°-W)である。幅は約40cmであり、深さ60cm前後である。埋積土は黄褐色土と黒褐色土であり、下層には暗褐色土を含む。遺物は出土しなかった。



第130図 S I 65と出土土器



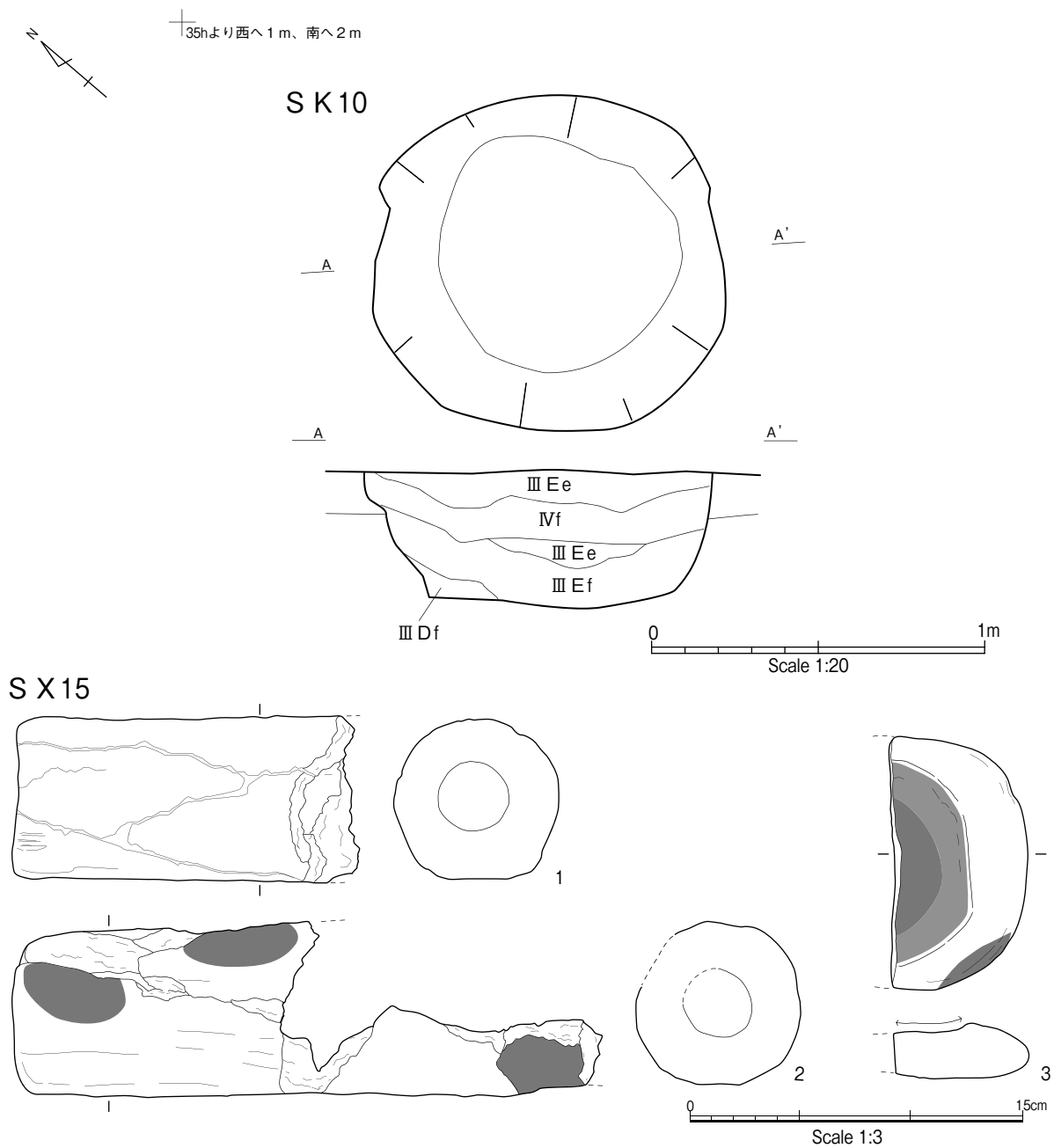
第131図 S 166と出土土器

4) 確認調査・包含層出土遺物 (第133~136図)

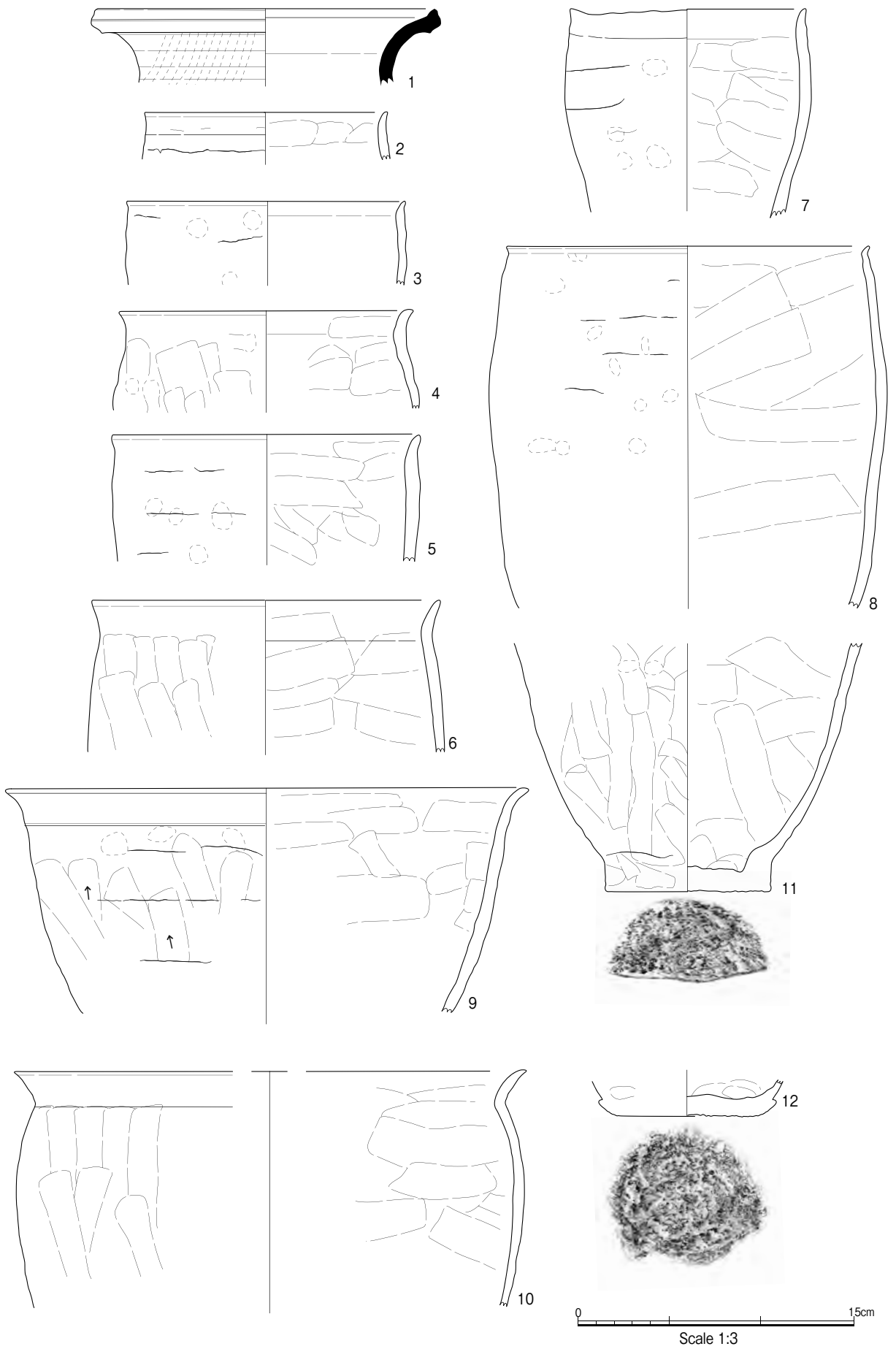
確認調査及び包含層出土土器は平安時代にはほぼ限られる。

確認調査出土土器 (第133・134図)

第133図1は須恵器甕で復原口径18cmである。緩く外反した口縁部端に面をもつもので、口縁部器表面には絞り痕が残る。10d出土。第133図2~12、第134図1・2はいずれも12dから出土したもので、注記には焼失住居とある。I区とII区の間位置し、本調査の対象からは外れた。器種は甕がほとんどであるが、黒色土師器がごく少量含まれる。第133図11・12、第134図1・2は平底である。甕は内面に横位のナデ、器表面に縦位のヘラケズリないしヘラナデを施し、口縁部は内外面とも横ナデである。9は体部器表面にヘラケズリ・ヘラナデを施す。図示したもの以外の甕で多くは、体部と口縁部が緩く屈曲し、口縁部は短く外反する。

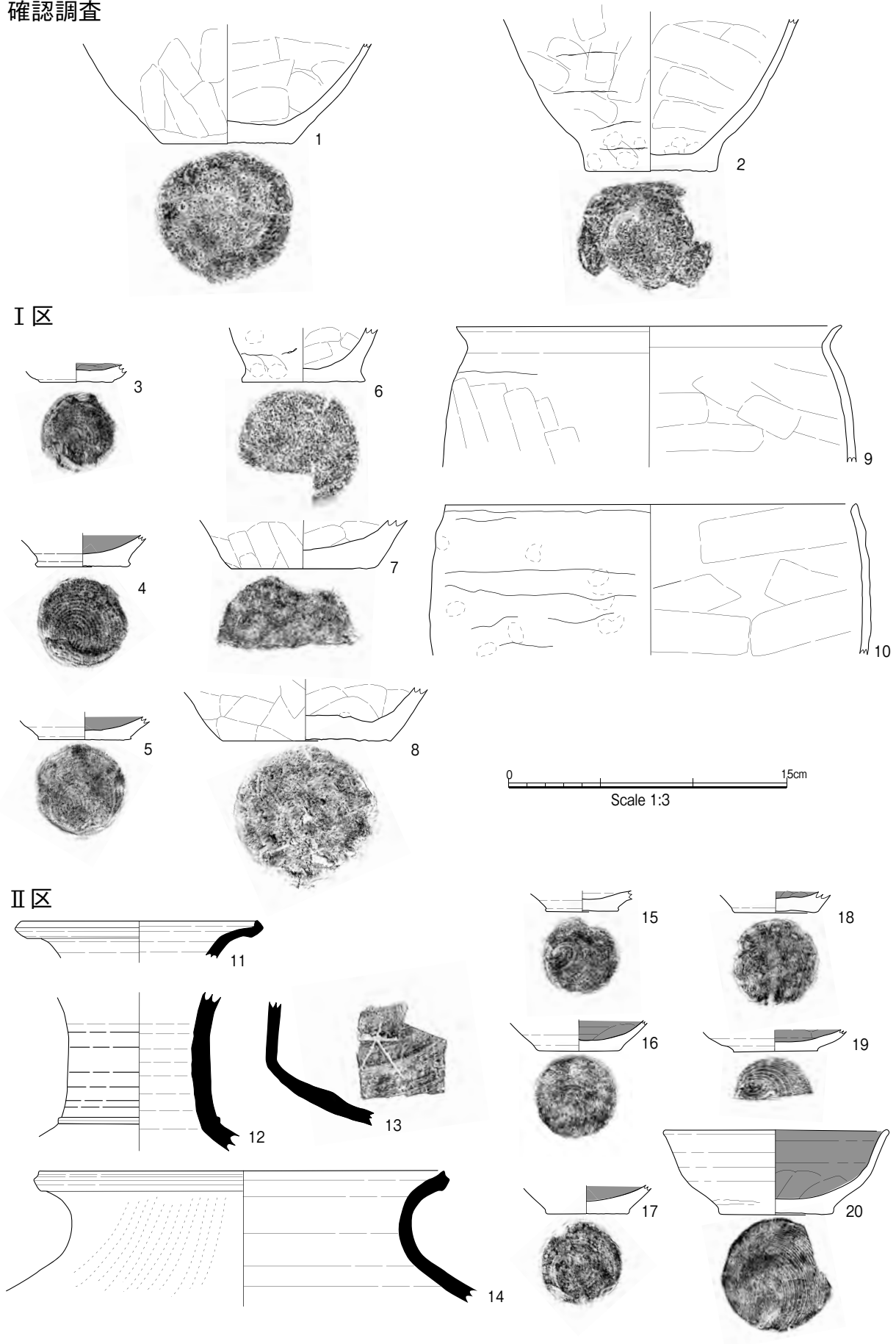


第132図 S K 10・S X 15出土遺物



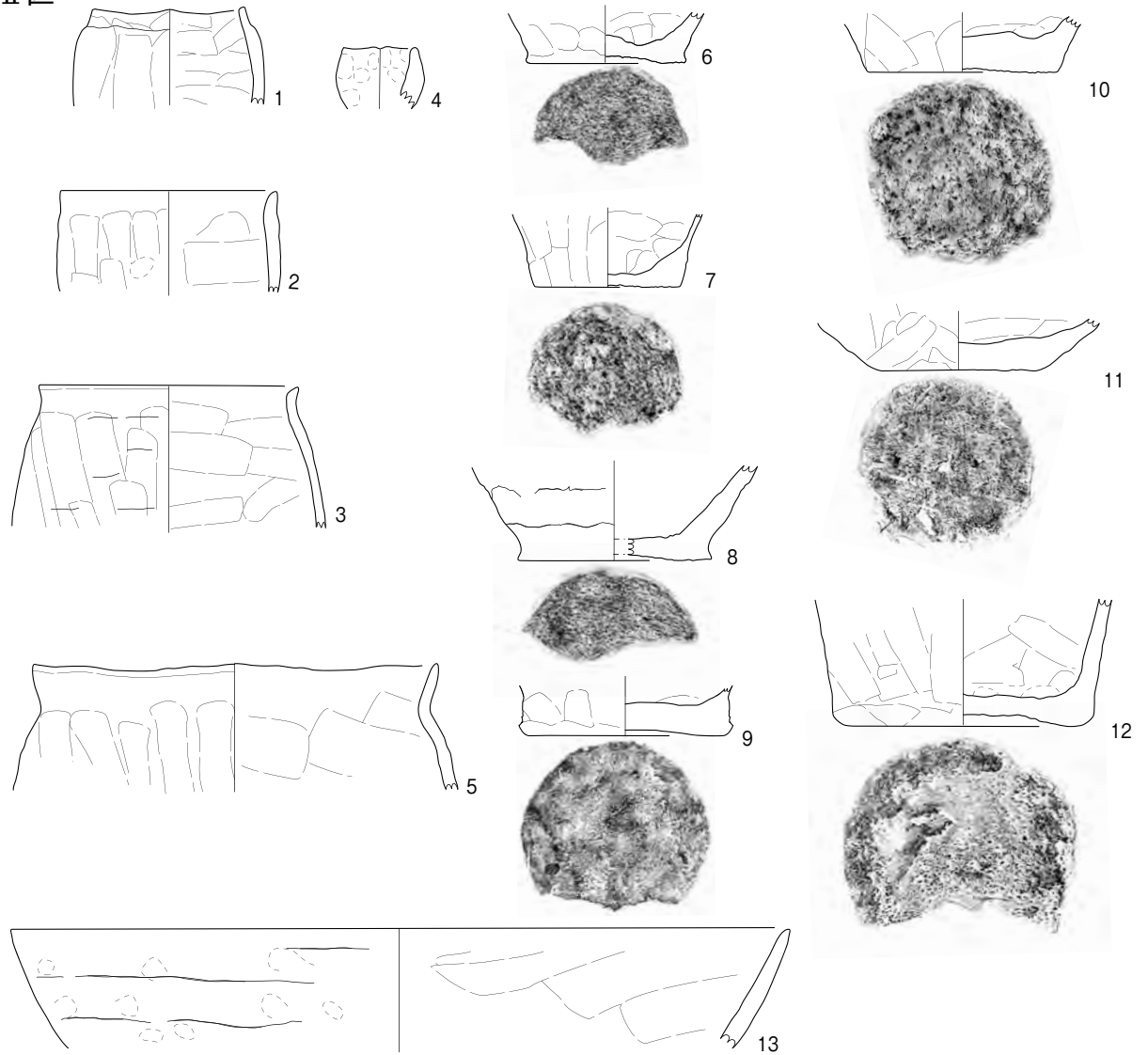
第133図 確認調査出土土器

確認調査

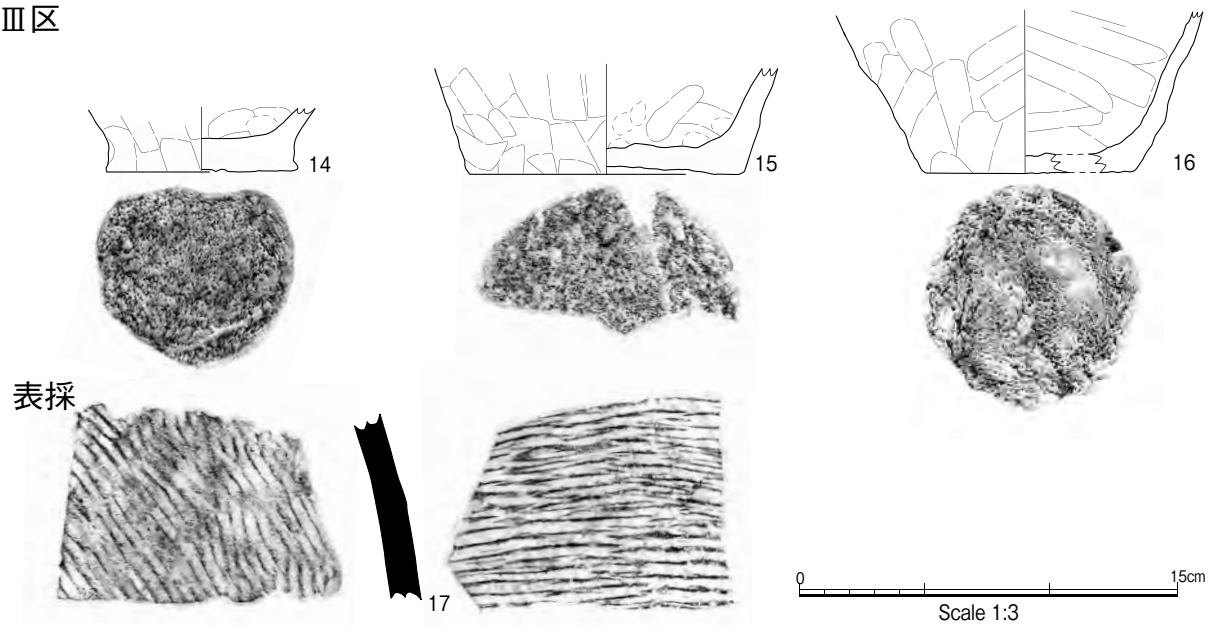


第134図 確認調査・I・II区包含層出土土器

Ⅱ区



Ⅲ区



第135図 Ⅱ・Ⅲ区包含層ほか出土土器

I 区包含層出土土器 (第134図)

3～5はいずれも黒色土師器である。6～8は平底で底部外面は砂底。9・10は甕の口縁～体部。

II 区包含層出土土器 (第134・135図)

11～14は須恵器である。11は小片であるが、長頸瓶と考えておく。12は口縁部と体部を欠く。頸部は太い筒状で、比較的短い。胎土は精良で、焼成堅緻である。15-j区出土。13は窠書土器で「大」の字が明瞭に読み取れる。「大」を窠書きした例は五所川原須恵器窯跡MD3号窯（五所川原市教育委員会2003）、鹿角市案内Ⅲ遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編1983）などにみられる。14は甕で、端部はつまみ上げられ、窪む。体部器表面は平行タタキ目、内面は不明瞭である。

15は糸切りの土師器碗である。13・14-h・i区出土。16～20は黒色土器の碗である。16は25-d区出土。底部内面にナデが施される。20の焼成はとくに堅緻であり、本遺跡通有の土師器と全く異なる。外面の色調は橙色である。第135図1～3・5～11は土師器甕。1は体部が丸味をもち、比較的小型のものであろう。24-i区出土。2は26・27-c・d区から出土した小型甕である。内外面ともにヘラナデを施す。3・8は粘土紐の巻き上げ痕が残る。5は25-e区から出土した土師器甕である。器表面はヘラナデが施される。全体の器形は不明である。6・7は器形が不明であるが、小型甕などの可能性がある。底面は砂底である。9～11は底部で、いずれも砂底。11は直立気味に立ち上がる器形で、やや特異である。12は鍋で、13・14-j・k区出土。体部器表面には指頭圧痕、内面にはヘラナデが施される。4は手づくね土器。

III 区包含層出土土器 (第135図)

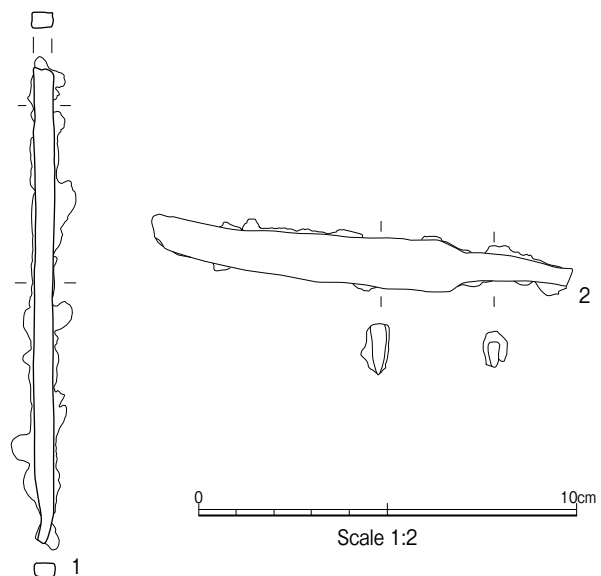
13は小型甕かあるいは甕である。ヘラナデ調整がなされている。底面は粗い砂底である。褐色を呈する。14～16は甕底部。

表面採集土器 (第135図)

17は須恵器甕体部破片である。器表面平行タタキ目、内面は凹凸の少ない平行タタキ目である。

包含層出土鉄製品 (第136図)

1は端部が尖った棒状を呈し、断面形はやや膨らみをもった方形である。釘または紡錘軸の一部と考えられる。2は平棟造り両関式の刀子で、刃部は外反しする。II区17-i区から出土した。



第136図 包含層出土鉄製品

(3) 中世以降

1) 竪穴建物跡

竪穴建物跡は4基検出された。平面形は、方形が3基、長方形が1基で、いずれも張り出し部をもつ。内部から焼土跡等は検出されず単純な構造である。重複関係は1箇所あり（S I 39・40）、S I 40の方が新しい。出土遺物は極めて少なく、土器の小破片等が散見される程度であった。そのような中で、S I 58の白磁は特筆される。12世紀頃のものと思われる。竪穴の造営年代が12世紀のものと断定できないが、大まかな年代を知る手がかりとして有効である。

S I 39 (第137図)

位置 19・20-m・n区に位置する。S I 40と重複し、新旧関係は本竪穴の方が古い。

遺構 規模は長径4.3m、短径2.9m、深さ40cmである。主軸はN-59°-Eと大きく東に傾く。平面形は長方形で、南東側を向いた舌状の張り出し部をもつ。張り出し部の規模は幅1.3m、長さ1.9mである。

断面形は逆台形で、底面はやや平坦である。埋積土は、上層は黒褐色土、中層は暗褐色土、最下層に黒褐色土層が厚さ約8cm検出された。支柱穴と考えられるピットは計22個である。壁から20cm内側に30~80cm間隔で並ぶ。大きさは直径15~20cmで床面からの深さは、深いもので40cm、浅いもので8cmほどである。張り出し部分は壁際に7本の小柱穴を検出した。規模は直径20cm内外、深いもので深さ20cmほどある。柱穴以外には、貼床・焼土跡・炭集中部などの内部構造物は検出されず、単純な構造の竪穴遺構である。

遺物 遺構内からは土師器片が出土した。

時期等 土師器以外の遺物は出土していないが、時期は遺構の構造から中世の遺構と考えられる。

S I 40 (第137図)

位置 19・20-n・o区に位置し、S I 39と重複する。新旧関係については、本竪穴の方が新しい。

遺構 規模は長径4.1m、短径3.6m、深さ32cmである。主軸はN-64°-Eとおおよそ東西方向を向く。平面形はほぼ正方形、断面形は逆台形である。ただ、S I 39内北西部に小ピットが東西方向に2列並ぶことから、本竪穴も張り出し部をもつ構造であったものと推測される。埋積土はS I 39と同様、上層は黒褐色土、中層は暗褐色土、最下層に黒褐色土であり、自然堆積と思われる。

柱穴として考えられるピットは壁際に30個ある。全体で8個ぐらいの支柱穴から構成されと考えられる。柱穴の大きさは直径20cm前後、深さ30cm前後である。その他に直径20cm以下で比較的浅いピットは副柱穴もしくは他の建物内の施設のための穴と考えられる。柱穴以外には、内部構造物は一切検出されなかった。

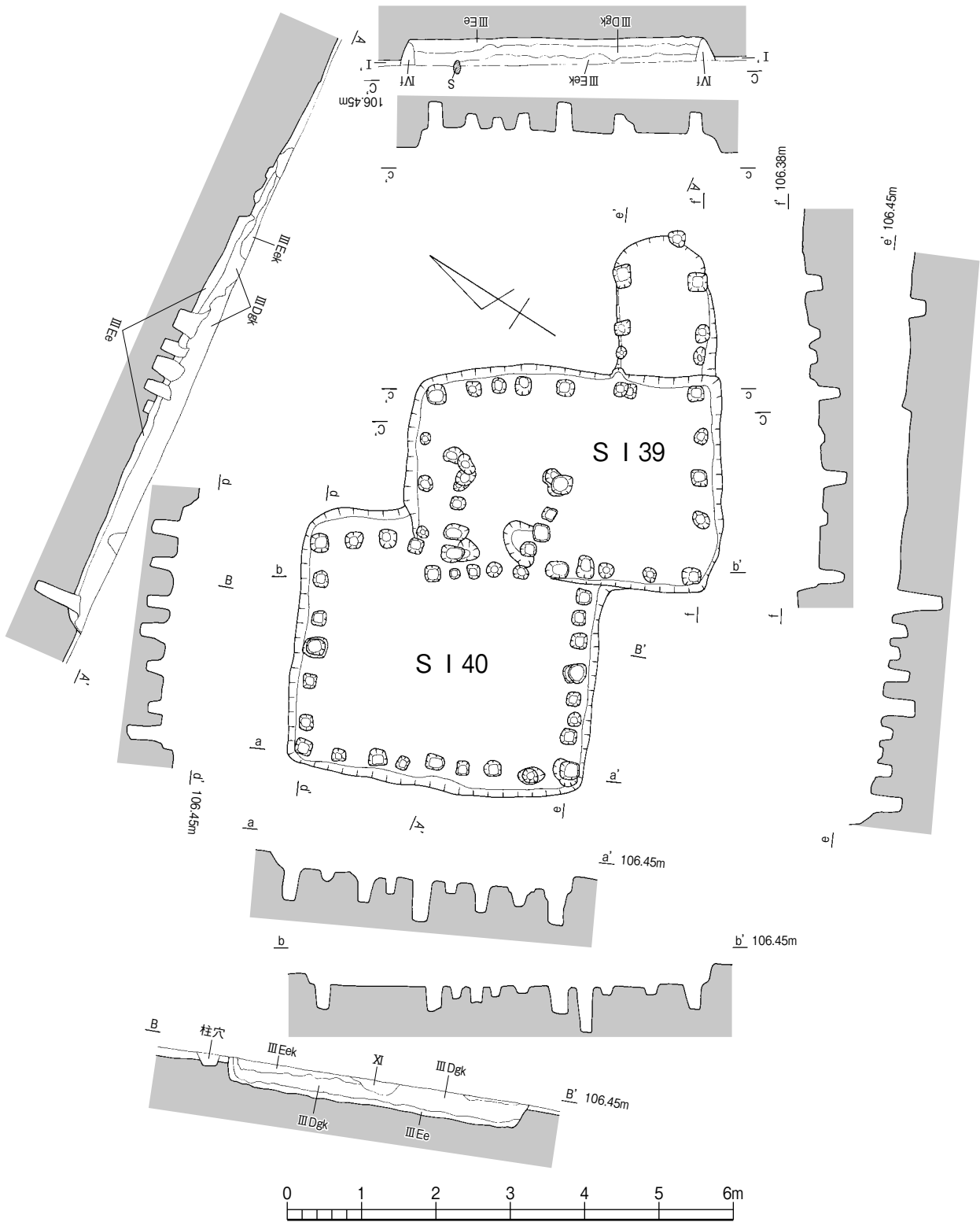
遺物 遺物は極めて少なく、土師器片が出土した。

時期等 土師器以外の遺物は出土していないが、時期は構造から中世の遺構と考えられる。

S I 58 (第138~140図)

位置 40~42-a~d区に位置する。

遺構 規模は長径11.8m、短径11.1m、深さ55cmで、本遺跡で検出された竪穴中最大規模である。主軸はN-30°-Wでやや西に傾く。平面形はほぼ正方形で、南東部に張り出し部をもつ。断面形状は弧状、立ち上がりは緩やかである。埋積土中に炭化材を検出し、下位に草本類とみられる炭化物の平面的な



第137図 S I 39・40

広がりを検出した。

主柱穴と考えられるピットは計7個である。壁から2.5～4 m内側に、東面をのぞき2.5m間隔で並ぶ。大きさは直径40～60cmである。また堅穴壁際に、53個のピットが検出された。

遺物 遺構内からは、床面から12世紀頃の白磁片、埋積土から陶器片、縄文土器片、鉄製品が出土した。

第140図1は白磁碗の底部。大宰府分類(太宰府市教育委員会2000)のⅣ類の碗で、C期(11世紀後半～12世紀前半)の標識である。1は高台内のケズリが浅いⅣ-1類である。2は珠洲系陶器播鉢。口縁部の形態からⅡ～Ⅲ期と考えられる。長石の混和量が多く、器面にざらつきが認められる。3は縄文晩期の壺形土器である。

4～7は鉄製品で、いずれも床面から出土した。4は平棟造りの刀子で刃部の関は鈍角で不明瞭である。重量は42 g。5は帯金具である。縦幅72mm、横幅57mm、厚さ8 mm、重量25 g。6は釣針である。軸長が93mmある超大型のもので、重量は25 gである。7は器種不明の鉄製品で、下部が環状になっている。重量は69 gである。

時期等 時期は出土遺物から11世紀後半以降の遺構と考えられる。

S I 67 (第138図)

位置 34-P～r区に位置する。建物西の一部は校舎基礎により壊されている。

遺構 規模は長径3.8m、短径3.4m、深さ14cmである。主軸はN-62°-Eとおおよそ東西方向に向いている。平面形は長方形で、東部に舌状の張り出し部をもつ。張り出し部は長さ2 m、幅約1 mの大きさをもつ。柱穴と考えられるピットは計21個である。柱穴の大きさは直径15～55cmで床面からの深さは、深いもので60cm、浅いもので15cmほどである。張り出し部の建物寄りのところには、壁に沿って両側にそれぞれ3個の柱穴を検出した。柱穴の規模は直径20cm内外、深さ20cmの小型のものである。

断面形状は台形状である。壁の立ち上がりはやや急角度である。柱穴以外には、内部構造物は一切検出されなかった。埋積土はⅣ'層由来する土が含まれており、埋め戻したとも考えられる。出土遺物はなかった。

2) 掘立柱建物跡

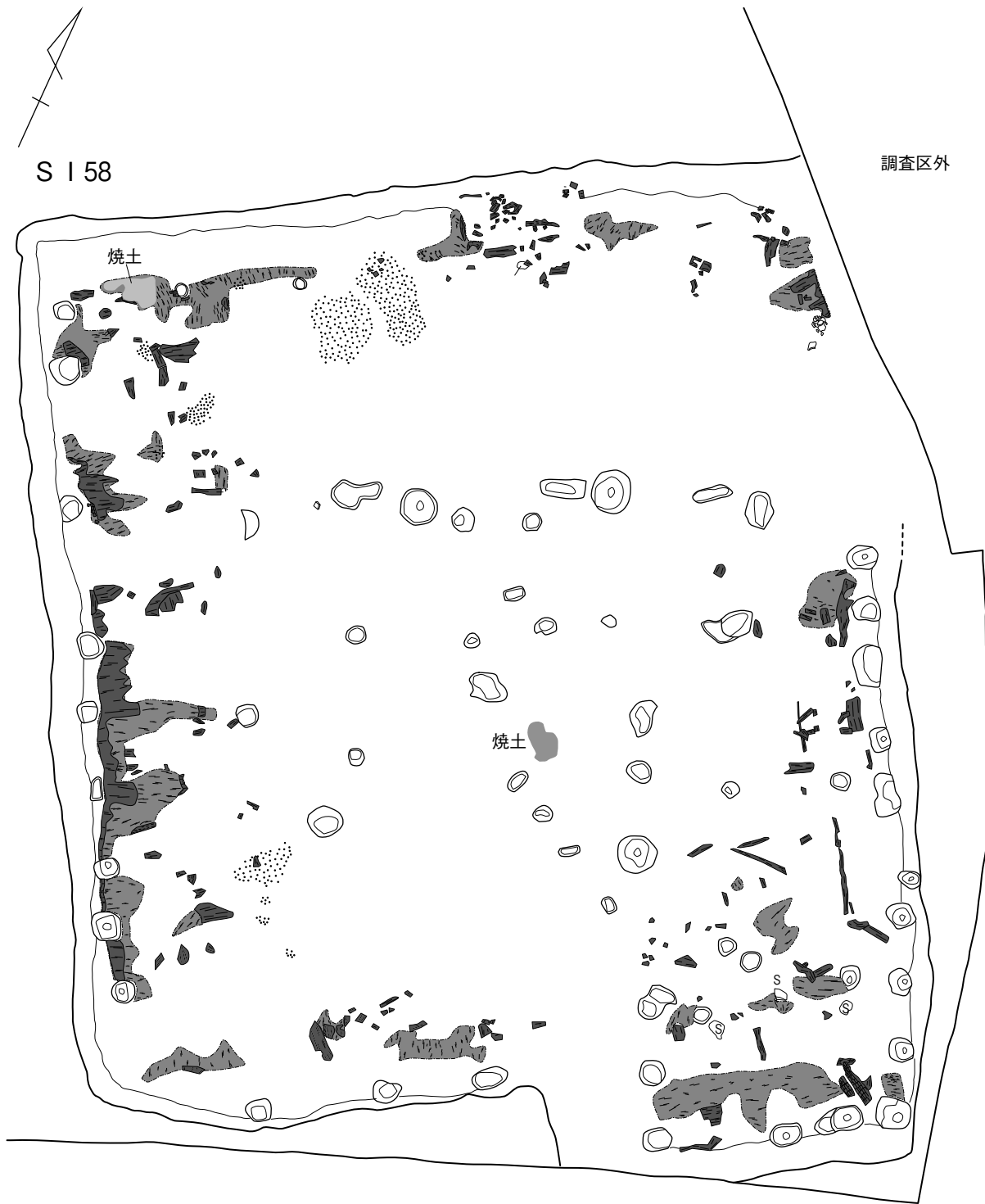
S B 17 (第143図)

位置 23～27-b～j区に位置し、東西・南に調査区外にさらに広がる。調査範囲内で重複するすべての遺構より新しい。




遺構 検出した範囲では、8間(25.5m)×4間(15m)の東西棟建物(N-57°-E)である。柱間寸法は桁行・梁間とも不揃いで、しかも東側柱列と南側柱列が直交しない。掘立柱建物とするには再度検討を要する。柱掘り方は径35～45cmの楕円形で、深さ8～35cmである。本遺構から遺物は出土しなかった。

遺物 遺物は須恵器片が出土した。第143図1は須恵器甕体部片である。タタキ目は内外面平行タタキ目である。

時期等 中世以降の遺物は出土していないが、重複するすべての遺構より新しいため、中世以降と考えられる。

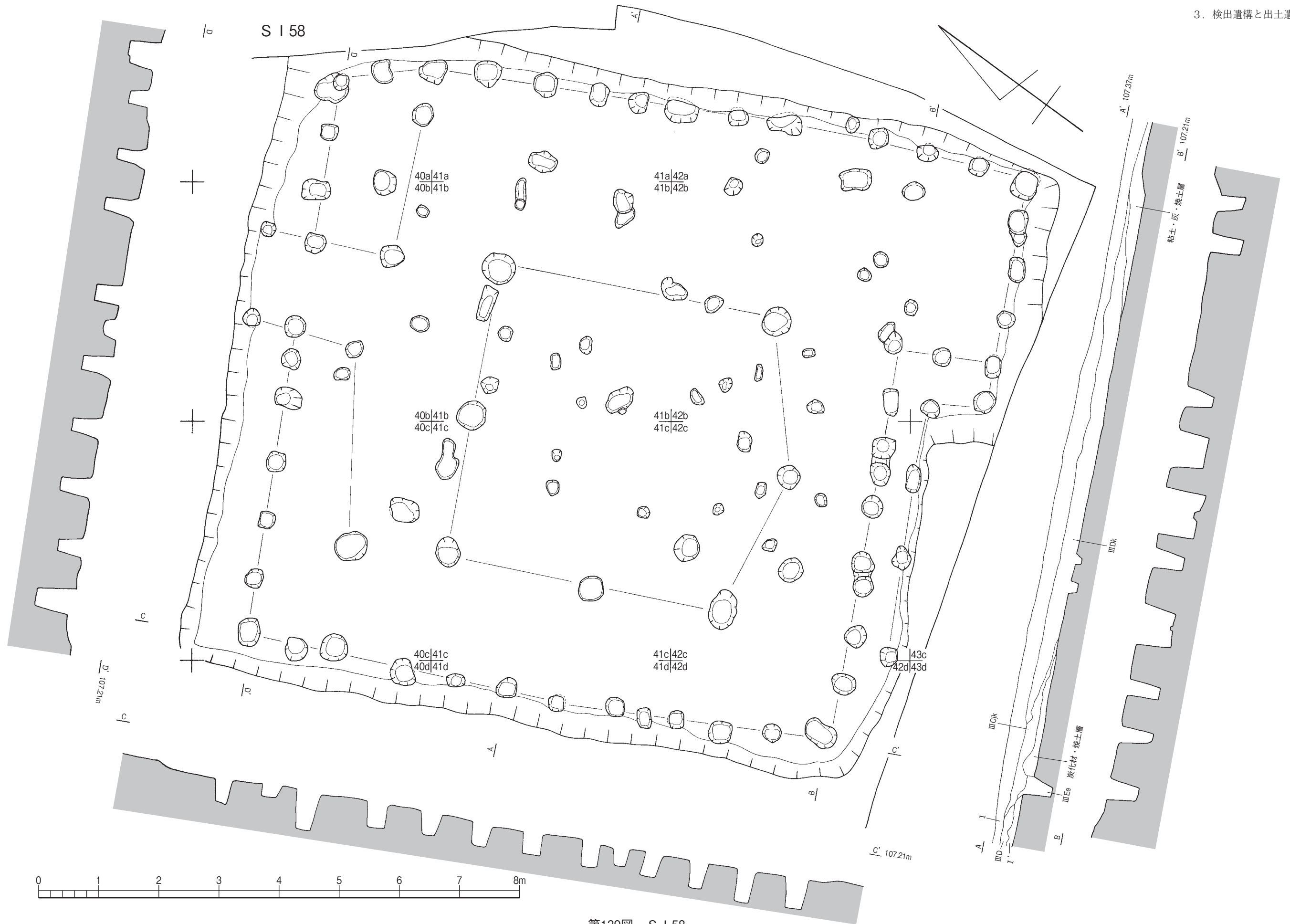


凡 例

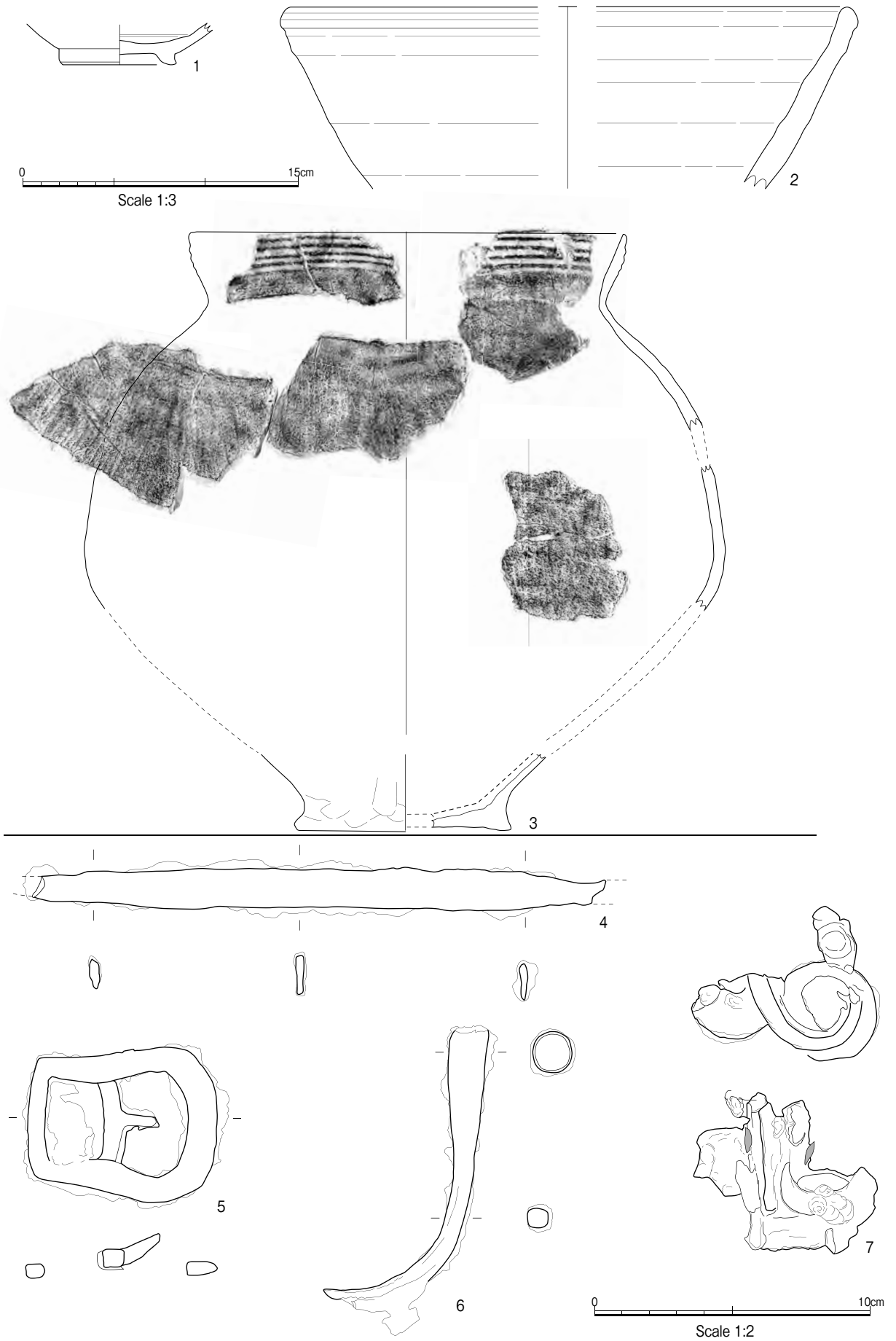
-  床面の敷物状炭化物
-  床面～床面上の炭化材
-  床面上の粉炭化物

0 2m

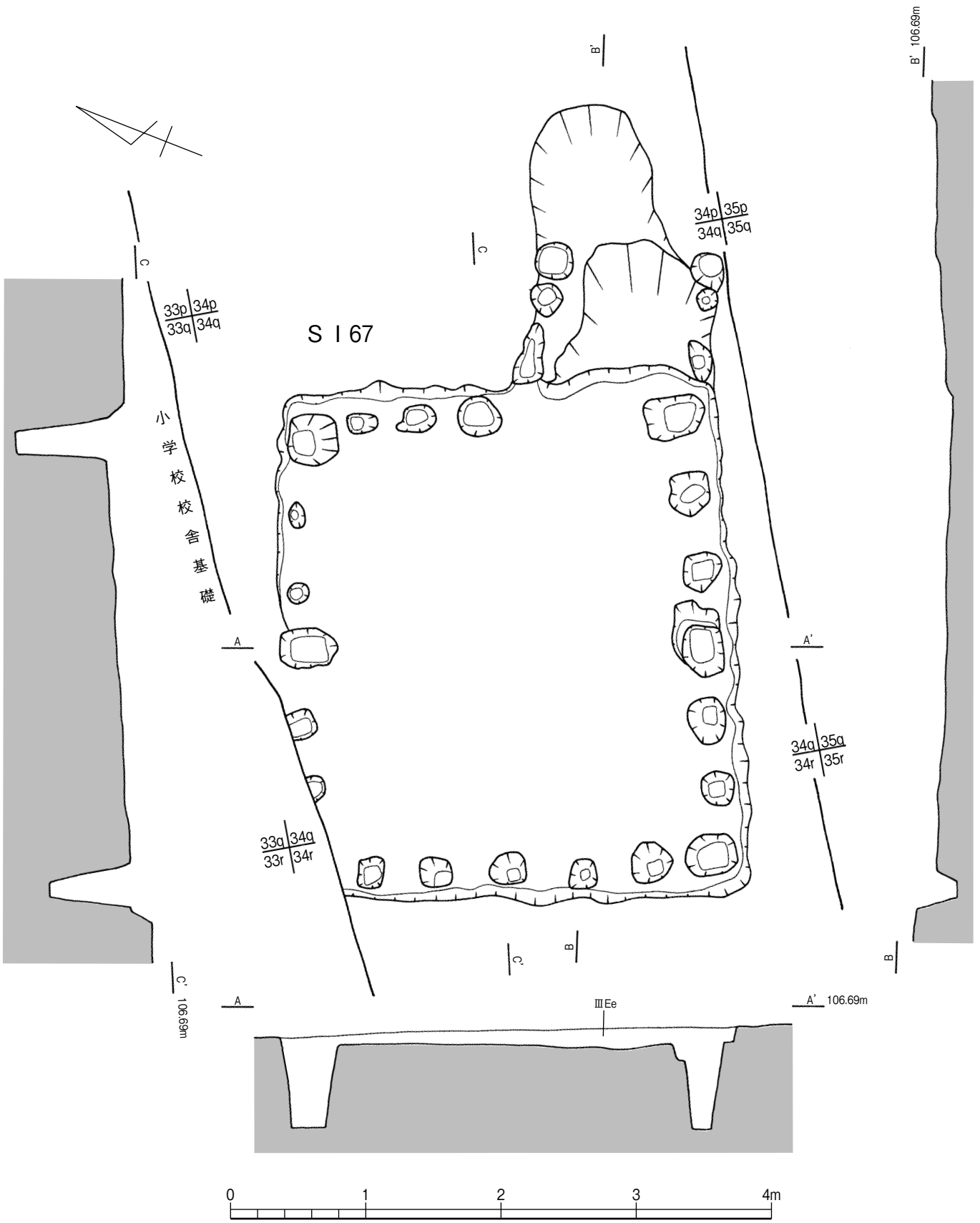
第138図 S I 58炭化材・炭化物出土状況



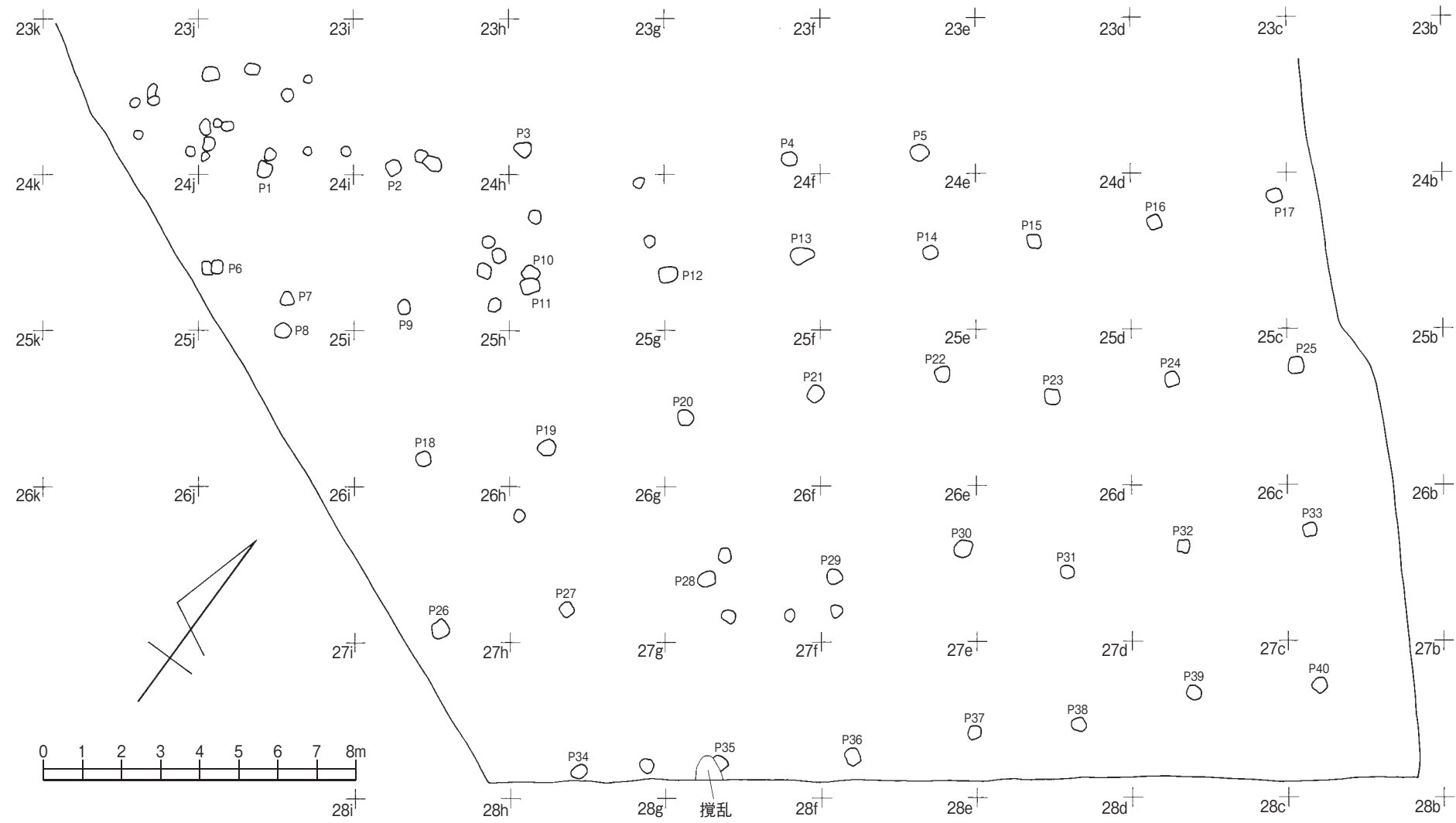
第139図 S I 58



第140図 S I 58出土遺物

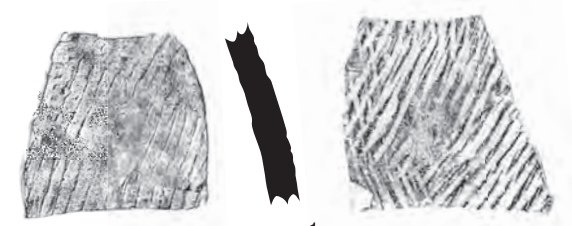
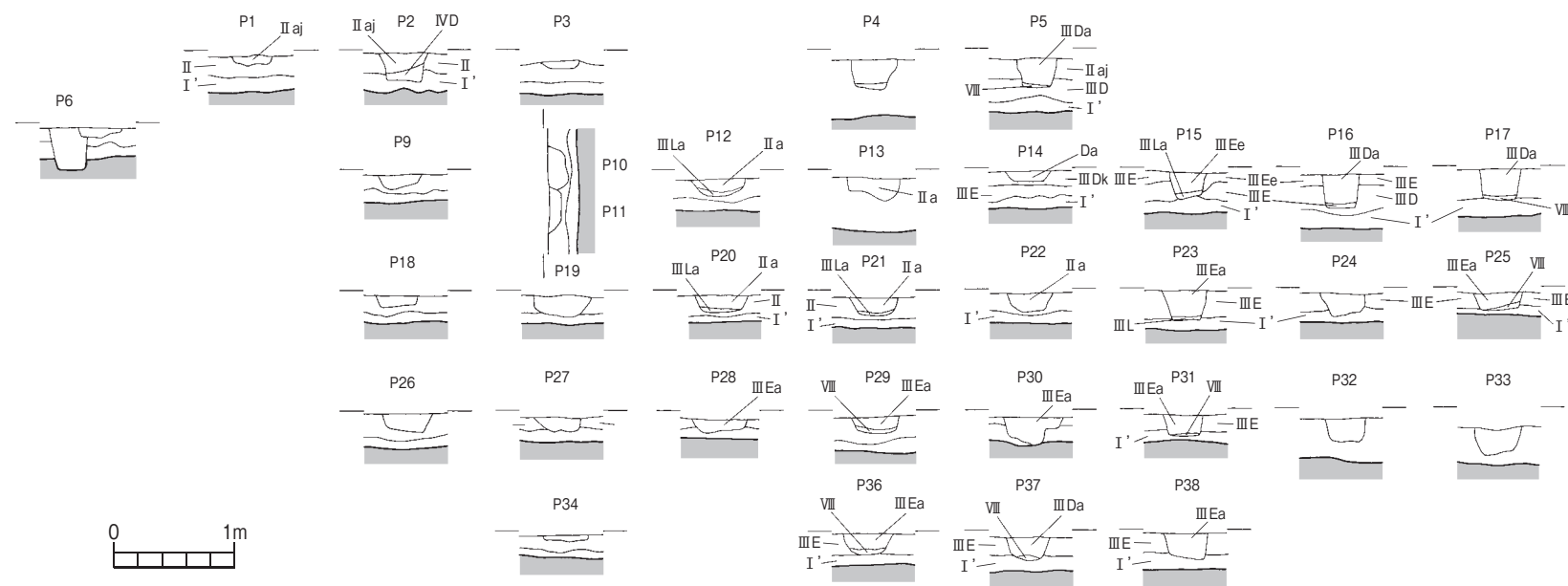


第141図 S I 67



※水系レベル

P1	106.53m	P21	106.64m
P2	106.62m	P22	106.59m
P3	106.71m	P23	106.63m
P4	106.72m	P24	106.60m
P5	106.76m	P25	106.57m
P6	106.54m	P26	106.68m
P9	106.54m	P27	106.68m
P10-11	106.65m	P28	106.65m
P12	106.68m	P29	106.64m
P13	106.64m	P30	106.72m
P14	106.61m	P31	106.63m
P15	106.59m	P32	106.65m
P16	106.71m	P34	106.61m
P17	106.65m	P36	106.68m
P18	106.65m	P37	106.71m
P19	106.67m	P38	106.71m
P20	106.64m		



0 15cm
Scale 1:3

第142図 SB17・SB群と出土土器

3) 組石土坑

S X 9 (第143図)

位置 II区中央北部の17-m区に位置する。表土S I 37と重複し、新旧関係は本遺構の方が新しい。

遺構 組石とその下部の土坑からなる一連の遺構である。表土下の黒色土層(II層)に、大小十数個の川原石からなる組石が、南北を長軸線として検出された。これらの組石(以下、上部組石と呼ぶ)は一ヶ所に重なりあっている。上部組石の写真、断面図の記録を作成した後、それらを除去し、遺構下部に7個の大きな石を検出した。これらは円形土坑の上位に置かれたものである。土坑は、平面形が南北方向を長軸とするやや歪んだ円である。規模は、確認面で長径1.1m、短径0.8mほどである。埋積土は黒色～黒褐色土が埋積している。

遺物 遺物は珠洲焼播鉢1点のほか、土師器片が少量出土した。

第143図1は珠洲焼の播鉢で、口縁形態は口縁の端部がほぼ水平で外側につまみだされたものである。内外面口ロナデで、すり目は存在しない。I期～II期と考えられる。2～5は土師器甕、6～8は小型甕である。甕・小型甕ともに全体を残すものはない。6は口縁部から体部上半を残す。口縁部は直線的に立ち上がり端部は丸くおさまる。体部上半はやや丸味をもつ。内外面ともヘラナデである。底部はおそらく、7・8のように平底であろう。器表面に煤が付着する。復原口径16cm。埋積土中出土。7・8は体部下半底部である。底面は砂底で、底径は8cm前後である。この大きさは壺より大きく、底面が糸切りのものはないこと、二次焼成を受けていること、内面に指ナデの凹凸が目立つことなどにより明瞭に識別される。7・8ともに埋積土中出土。

時期等 出土遺物や埋積土の埋積状態から用途を特定する手がかりは得られていない。時期は出土遺物からみて、13世紀頃に構築されたものと考えられる。

4) 井戸跡

S E 1 (第144図)

位置 18・19-1-m区に位置する井戸跡である。S I 35と重複し、新旧関係は本遺構の方が新しい。

遺構 掘り方は上面で径2.1～2.3mの円形を呈し、深さは1.9mを測る。この掘り方のほぼ中央に木製の井戸枠を据えている。井戸枠の上部は腐蝕して残存しないが、下部の30cmが残存していた。最下部は35cm四方に4本の柱を据え、木枠を組んでいる。井戸枠の外側の掘り方内には掘り上げた地山土を埋め土として使用して固める。

井戸内部の底面は直接地山層であり、この上に黒灰色の泥土があった。泥土内からは近現代の鉄製品が出土した。井戸内の埋積土については、写真等の記録をする前に崩落してしまったため、十分な観察はできなかった。

遺物 遺物は土師器を中心に土器が多量に出土したほか、志野焼皿1点、鉄製品が出土した。

第144図1は志野焼皿。重ね焼きの際の胎土目痕がみられる。2・3は土師器壺底部破片で、全体の器形がわかるものはない。底径は4～5cmである。2が中層出土である。4は壺または小型甕の底部破片で、中層出土である。5・10が小型甕、6～9・11・12が甕である。11・12が大型甕で口縁部を残すものであるが、全体の器形は短胴で平底と思われる。口縁部は丸くおさまるものである。いずれも横ナデである。11が下層、12が上層からの出土。

時期等 井戸は埋積土下層出土鉄製品数点が近現代のものであることから、近現代のものと考えられる。ただし、出土状況が不明であり、後世の混入の可能性もある。なお、志野焼皿が1点出土していることから、時期は古代以前には遡らない。

SE2 (第127図)

位置 29・30- o・p 区の S I 63の東部に位置する井戸跡である。S I 63と重複し、新旧関係は本遺構の方が新しい。

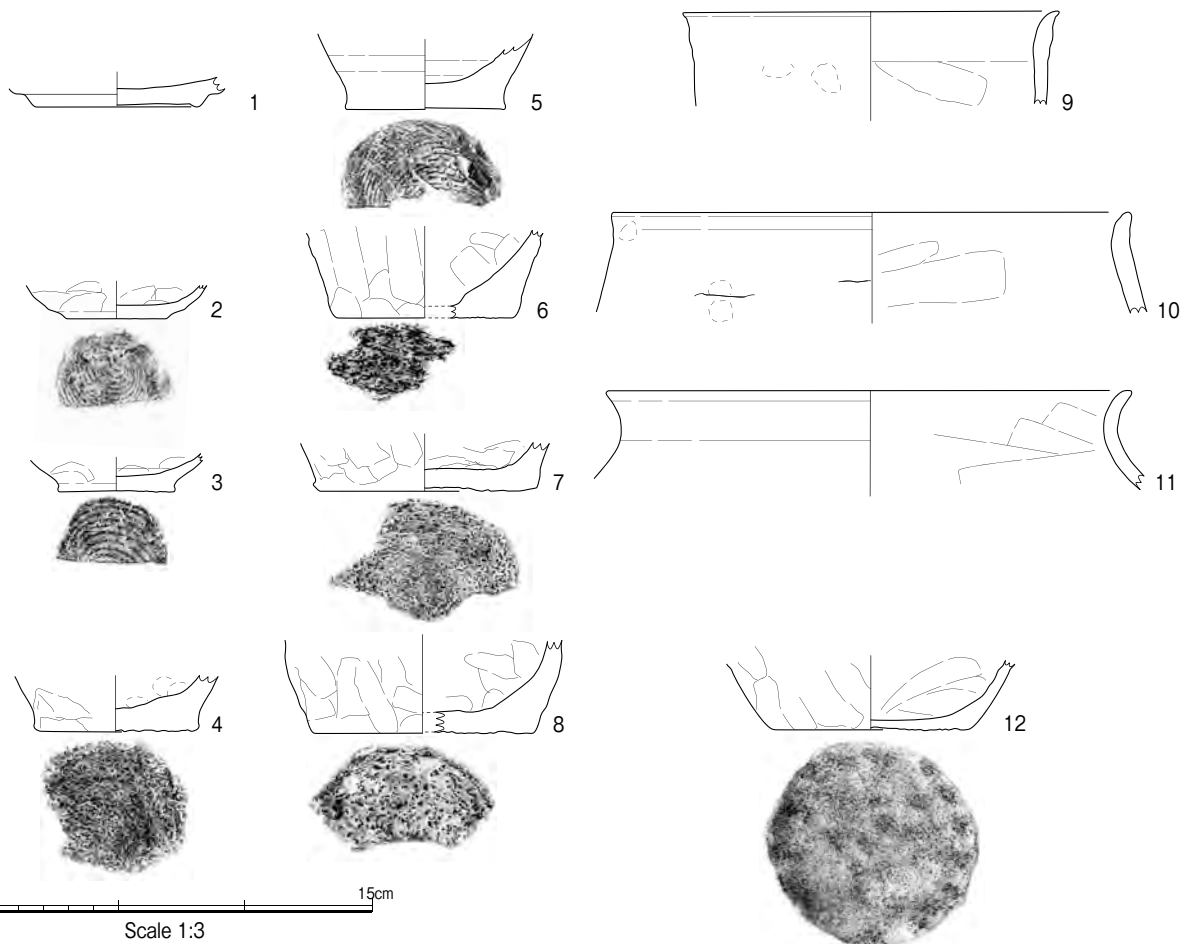
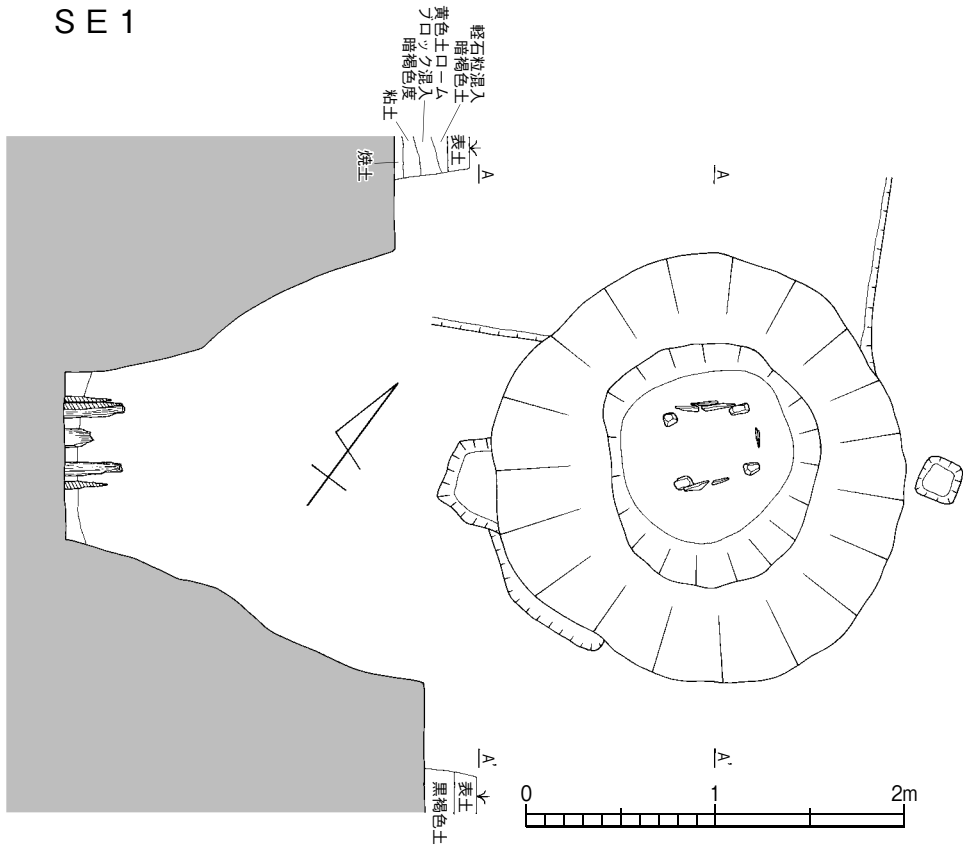
遺構 掘り方は一辺2.1mの方形で、深さは最深部で約3mである。この掘り方のほぼ中央に木製の井戸枠を据えている。井戸枠はほとんど残存していなかったが、掘り方断面の所見より0.8×1mの井戸枠が存在したものと推定される。

遺物 埋積土より須恵器壺・甕、土師器甕、近代陶器が出土している。S I 63の土器が混入したと考えられる。

第127図2・3は土師器小型甕、4は甕底部である。底面はいずれも砂底である。

時期等 井戸埋積土出土遺物に近現代のものが含まれることから、近現代のものと考えられる。ただし、出土状況が不明であり、後世の混入の可能性もある。

SE 1



第144図 SE 1と出土遺物